

# 提督と艦娘の日常（仮）

お芋侍

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

コレは、提督と艦娘の日常を描いた物語である。□□。

この作品には以下の成分が含まれます。

1. 駄文
2. 安易なパクリやネタ
3. キャラ崩壊
4. 亀更新

以上のことが大丈夫な方のみお願いいたします。(〃ゝω・人)

目次

16	③	120
16	②	114
16	①	107
15		101
14	水着回(多分)	96
13		90
12	シリーズ?回	85
11		80
10	紅茶回?	76
09		71
08		66
07	演習回 その四	61
07	演習回 その三	55
07	演習回 その二	50
07	演習回 その一	46
06	後編(仮)	40
06	中編(仮)	34
06	前篇(仮)	28
05	戦闘回	23
04		19
03		14
02	番外編 花見回	10
02	花見回	4
01		1

第49話	289
3 4. 墓参り編	278
3 3. 提督、ブチ切れる 後編	271
3 2. 提督、ブチ切れる。 前篇	263
“迅雷” & 「アル」 戦闘開始の巻	254
3 0. 提督、新たな力を手にしたでござるの巻	249
2 9. コラボ最終回	242
2 8. ショッピング回	235
2 8. 大丈夫かこれ？	230
2 7. どうしてこうなった!?	224
2 6. コラボ開始	218
後始末的な回	211
2 4. 様々なネタが多い回	202
2 3. 作者大・暴・走!!の回	194
2 2. クオリティが落ちたなあ的な回	187
2 1. 色々と暴走しちやつている回	181
2 0. なんか色々とお免なさいな回	174
1 9. ネタに走り気味の戦闘回	166
1 8. ケツコンカツコカリ編	161
1 7. カオス回	154
1 6. 番外編	148
⑦	142
⑥	136
⑤	131
④	125

	36.	秋刀魚回	297
	37.	お茶会(多分)	304
	38.	ケツコンカツコカリ第二弾(その一)	309
	39.	ケツコンカツコカリ第二弾(その二)	316
	40.	提督の強さ	323
	41.	カレー回	330
	42.	コロネハイカラ沖海戦(ショートランド?) あいつは消した	336
	!		
	43.	コロネハイカラ島東方沖海戦	343
	44.	鹿島着任	354
	45.	ちよつと深めの設定披露+α	361
	46.	トラック諸島防衛戦(前編)	366
	47.	トラック諸島防衛戦(後編)+提督の決断	373
	48.	第一波応援、現着!	385
	49.	第二波応援、緊急事態発生 前篇	393
第64話			403
第65話			411
第66話			417
第67話			428
第68話			438
第69話			446

ここはトラック諸島にある鎮守府のひとつ。

ここにある艦娘が着任しようとしていた。

「この提督室っていったいどこだったかなー？」

特型駆逐艦一番艦 吹雪。

第二次世界大戦で世界を驚かせた船の一つだ。

当時はあまりの性能にロンドン海軍軍縮会議で軍縮の対象に選ばれた程の艦だった。

∴最近では他の艦娘が人気で心の涙を流していたようだが。

しばらく歩いていると提督室と書かれたプレートに重厚な扉が見えてきた。

「あ、ここだここだ。うー、緊張してきた∴。」(ちよつと身だしなみを確認しよ)

(∴よし、髪型OK、艤装も確認、服のシワも無し！)

全ての確認を終え、吹雪はドアをノックした。

「特型駆逐艦一番艦 吹雪、入ります！」

ドアを開け、彼女が目にしたのは――

「ちよ、まっイカは卑怯だろオイ!？」

「フフーン、勝てばいいんだクマ」

「んなろ、これならどうよ!？」

「そんな赤甲羅に当たる球磨ではないクマ。お返しにバナナをプレゼントクマ」

「そんなものに当たる俺ではないよー!」

「隙ありニヤ」

「まさかのスターですとー!?!ちよ当てに来るな当てに来るなー!」

――マリ〇〇ートではかの艦娘と遊んでいる提

督の服を着た男の姿があった。

「えーと、あのー」

「ん？君は？」

「これからここの鎮守府に着任します吹雪です！吹雪と呼んでくださいー！」

「ああ、君が吹雪君だね。おれは吉川 春継（きつかわ はるつぐ）っていうんだ。宜しくね」

「はい、宜しくお願いします！」

「球磨は球磨型軽巡一番艦 球磨だクマー。宜しくクマよー」

「同じく球磨型軽巡二番艦 多摩ニャ。宜しくニャ」

それぞれ挨拶と握手を交わしていた。――球磨と多摩はゲームをしながらだった。

「…なんかグダグダでスマンな。後でしっかり注意しとく」

「あ、いえ。ただ――」

「ただ？」

「――変わった鎮守府だなー、と」

「ハハハ、確かにそうだな。他では中々無いだろうし。とりあえず、夕方になったら皆に紹介するからすまないが私物を駆逐艦寮に入れとくようにな」

「はい、了解です」

「後はそうだな…。よし、球磨」

呼ばれた球磨はゲームを一旦止めてこつちを向いた。

「何クマー？」

「吹雪に鎮守府の場所とか色々教えてやってくれ。どうせ今暇なんだしき」

「わかったクマー」

「すみません、何から何まで」

「良いの良いの気にしなくてもよ。家族なんだし」

「家族、ですか？」

「ああ、ウチでは所属している艦娘は全員家族として接しているんだ」

「ますます変わってますね」

今までの鎮守府では無いことに戸惑っている吹雪だったが、この空気は悪くないと思っていた。

「そうかね？まあとりあえず——これから宜しくな。吹雪」

これは提督と艦娘の日常の物語である。



## 02 花見回

「花見、ですか？」

歓迎パーティーが終わって数日経ったある日、提督が皆に「花見で  
もしないか？」と提案してきた。

「ああ、丁度日本では春だし、天気予報でも暫く晴れが続くそうだから  
な」

「でも大丈夫なんですか？もし花見中で襲撃にでも遭ったら」

「大丈夫だ吹雪。毎年やっているがそういうことは今まで無いしな。  
それに今は停戦協定を結んでいる。下手なことは出来んさ」

「初めて聞きましたよ、ソレ」

「まだ大本営にも言っていないしな。それに停戦と言ってもトラック周  
辺の攻撃を期間限定で止めると言うものだ。五月に入れば戦闘が始  
まるよ」

その間に資源を回復させにやいかんしな、と提督は言った。

「因みに花見は明後日だから宜しくねー」

「了解です。あの、質問があるんですが」

「ん？」

「桜の木ってトラックにありましたっけ」

「それは見てのお楽しみ、てね」

花見当日

「提督、一体どこに行くんですか？」

「鎮守府裏にある山の頂さ」

提督と吹雪、そして手伝ってくれている時雨と古鷹と一緒に山の頂  
を目指していた。

と言ってもそんなに高い山ではなく、10分歩けば山の頂が見え  
た。

そこにあつたのは

「わあ……」

—— 辺り一面のハイビスカスだった。

ハイビスカスだけではない。見たことの無い花たちがそこに咲き誇っていた。

頂から見える海の光景もあいまって非常に綺麗な風景となっている。

「——どうだ、綺麗だろう?」

気が付くと提督が横に立っていた。

「しかし、その様子だと気に入ったようだな」

「す、すいません!つい…」

「気にするな。初めてこの光景を見る人は大概そうなるしな」

「それにしても、こんな光景があるなんて…」

「ヤシの木だけだと思ってたかい?」

「:正直、そう思っていました」

「素直でよろしい」

提督と喋っていると遠くから、おーいと呼ぶ声が聞こえた。

聞こえた方向に目を向けると時雨がこっちに向かっていた。

「提督、こんなところに居たんだ」

「ああ、古鷹は?」

「もうちよつとしたら来るって」

「そうか」

「そんなことよりそろそろ皆がここに来るよ?」

「えっ!?!もうそんな時間なんですか!?!」

「うん、準備も終わったし皆が来るまでゆっくりしようかなと思って

たら提督たちが見えたからね」

「ごめんねしぐちゃん。そのまま任せちゃって」

「気にしてないさ」

吹雪と時雨は非常に仲が良く、あだ名で呼ぶこともあるぐらいの仲になっていた。

因みに時雨をしぐちゃん、吹雪をブッキーと呼んでいる。

「そろそろ皆が来る時間だね」

「そうだな、つと噂をすれば」

来た道を上から見てみると、皆がこっちに來ていた。

するとその中から小さい影が飛び出してきて――

「てついとつくさーん！」

「ん？なん――ごぶえツ!？」

――提督の腹に勢いよく突っ込んでいた。

「イテテ、勢いよすぎだろう、夕立？」

「てへへ、ごめんなさいっばい」

テヘペロしている夕立をこつんと軽いゲンコツを落とし、腹を押さえながらヨロヨロと立った。

「あら、大丈夫かしら？提督」

「…分かっていって無いかい、加賀」

「あら、何のことやら」

真顔でしらばっくれている加賀を横目で見つつ提督は咳払いをしてこう言った。

「…よし、では皆！本日は無礼講だ。人に迷惑をかけないようにするんだぞー！」

おー！という掛け声とともに花見が始まった。

「あ、ねえねえ君」

「あ、はーい。どうしました、北上さん？」

「北上でいーよー。ところでどう？楽しんでる？」

「はい、前所属していた鎮守府ではこういうことが無かったので新鮮です」

「そっかー。私も去年ここに来たんだけど、今ではここ以外には行きたくないと思うぐらい居心地がいーからねー、ココ」

「他の鎮守府とは違いますからね、この雰囲気は」

「大井つちも最初はツンツンしていたけど、ここにきてまーるくなつたぐらいだもんねー」

「そういうえば、大井さんはどこに？」

「提督の所に行ったよー。アタックを仕掛けに行くんだってさー」

「…大丈夫なんですか、ソレ」

「ダイジョブダイジョブー、危害を加えに行くんじゃないやなくて恋の方だからねー」

「……………え?」

クレイジーサイコレズというあだ名がついている大井が提督に恋しているという事実には驚きを隠せない吹雪。男性嫌いじゃなかったの!?!と思っているのが分かったのか北上はこう言った。

「別に男性が嫌いというわけでは無いよー。ただ同じ艦娘でも性格がちよつと違うんだし、大井レズというわけじゃないんだよー」

「す、すいません」

「ま、仕方ないと思うけどね。この私でも驚いたし」

なんだかんだで話が盛り上がり、こんな話が出て来た。

「そういえば吹雪ちゃん。一つ質問んだけどねー?」

「?。はい、何でしょう?」

ジュースを飲みながら聞いていると

「君、好きな人いるの?」

「ブホッ!」

驚いた拍子にジュースが気管に入り、ゲホゲホとむせていた。

「あーあー、大丈夫?」

「ゲホッ 大丈夫です——じゃなくて!」

「んー?別に深い意味はないんだけどなー?」

「そんなの訊かれたら驚きますよ。…今はいませんけど。北上さんは?」

「んー私?提督だよー」

「え」

「別に驚くようなことではないよー。提督の元にいる艦娘全員が提督に好意をもっているし」

「…提督は知っていますか?」

「もちろん。と言っても指輪が高いからねー。今のところケツコンしているのは5人ぐらいだし」

驚きの発言に困惑しまくっていたが、…まあ本人たちが良いと言っているなら問題ないかと思いはじめている吹雪であった。

「おーい皆ー、そろそろ時間だぞー」

夕暮れ時に差し掛かり、提督は皆にそう言った。

「各自、ゴミは拾うようになー。あと隼鷹。その酒瓶はちゃんと鎮守府まで持っていくんだぞー」

「…提督、手伝ってくれない?」

「悪いが、ブルーシートを回収したりゴミを持っていかにならんからなー」

「大丈夫よ隼鷹、手伝うわ」

「ありがとー千歳ー」

「しれえ!お花を摘んでもいいですか?」

「いいけど取りすぎないようにねー。あと一人で行動しないようにー」

「はーい!」

「あ、待ってよー雪風ちゃーん」

すべての作業を終わらせ、下山をしたときには既に夜になっていた。

「じゃ、各員よく手を洗っておくようになー」

「…あのー、すみません提督。ちよつと時間良いですか?」

「ん?何だ」

吹雪に呼び止められた提督は(一体何だ?)と思い吹雪に顔を向けていた。

「…今回は有難うございます」

「藪から棒にどうした一体」

「私、こういうのは初めてで、こんなに楽しい日は今まで無かったんです」

「…ならこれからずっと続くよ、こんな楽しい毎日が、さ」

「はい! では改めて——吹雪型一番艦、吹雪!これから宜しくお願ひします!!」

「ああ、こちらこそ」

「はい！」

その夜の吹雪の顔は、満面の笑顔であった。

## 02 番外編 花見回

提督が花見の開催を宣言した後、提督はというと――  
「てーいとーくさん、アーン」

――ものすごい羞恥プレイを味わっていた。

相手は大井。もう一度言おう。あの大井である。

(アレー、大井って北上のことが好きじゃなかったっけ…?)

事実、着任したての頃は北上に近づこうとするものなら魚雷片手に提督を追い回すほどであった。ではなぜこうなったか？

(やっぱあの時かなー、それ以外思い付かん)

以前、大井が提督の命令を無視し、轟沈一步寸前の大けがを負った事があったのだが、その時見舞いに来たらえらいかみつかれたのでガチ説教したことがあった。

それ以来無茶をすることも無くなり、態度も軟化していた。

しかし直接的な行動をしたのが今回が初めてだったせいか、混乱気味の提督であった。

「フフツ 味はどうですかー?」

「うん、美味しいぞ」

「そうですかー♪」

(…何だろう、すごく可愛く見えてきたんだが)

大井も今回の花見で提督の心の距離をつめようとしていた。

(しかし、こんなイベントがあったなんて…。去年出とけばよかったわ)

去年の一月頃、北上と一緒に着任した大井であったが、当時提督が嫌いで花見なんぞ行きたくない!と突っぱねた為、参加しなかったのである。

…因みに北上は花見に参加していたが。

(それにしても、私がこんな気持ちを抱くなんてね)

恋を自覚したのは7月頃。あの時は酷い大雨で傘を忘れた私はど

う帰ろうか迷っていた。

早く北上さんとイチヤイチャしたいなーと思っていた時だ。

「うっわ、こりゃ酷え雨だ。傘を持ってきて正解だったよ」

(ゲッ!?)

提督が近くにいたのだ。そしたら案の定見つかり…。

「ん？おお、大井じゃないか。どうしたんだ、こんなところで」

「傘を忘れたんですこっちこないでくださいさっさと消えてください」

「…相変わらず酷いなオイ」

そう言いながら提督は私に近づいてきたのだ。その時私は

(うわなんか来たキモいキモいこっちくんな)

みたいなことを心の中で言っていた。…危うく口に出しかけたけど。

そしたら提督が

「ほれ、これを使え」

と傘を投げてきたのだ。

あわててキャッチをした私は提督に

「…何のつもり？」

と言ってしまった。

「別に？ただこんな酷い雨だ。俺ア濡れても構わんがお前は困るんだろう？それを使うといい」

「情けのつもりですか？だとすればムカつきますが」

「なら相合傘のほうがいいか？」

「いいえとかやだですこっち来ないでください」

「だろ？ならこれでいいんだよ。戻ったら傘立てに入れとけよ」

そう言い、提督は大雨の中を走り去っていききました。

多分、あの時から恋が芽生えていたのだと思う。…あまりに安っぽいけど。

だけど私は、その感情を認めようとしなかった。提督の言葉がウザったく聞こえ、それでもって心が痛んだ。

そして一番決定打だったのは——北上さんが提督に恋をしてい



ることが分かった時だ。

苦しかった。どうして？なんで？と思った。

拳句の果てには提督の言葉を無視し、単独で進軍。轟沈一步寸前までいった。

北上さんや木曾、川内達がいなかったら沈んでいたかもしれない。

そして、提督の必至なへ声〱が聴こえ、意識を失ってしまった。

気が付くと医療室に私はいた。隣に北上さんもいなかった。

その時、ドアのノック音が聴こえた。相手は——提督だった。

「無事だったようだな。良かった、間に合わないかと思っただぜ」

目にクマが出来、顔色も悪かったがそこにはホツとした表情が見えた。

何故？どうして？私がいけない方が良かったんじゃないの？

似たような言葉で提督を怒鳴った。罵った。そしたら

「馬鹿か貴様は」

と本気で怒られた。

「沈んでほしい？いなくなつた方が良い？貴様、馬鹿だ馬鹿だと思つてたがここまで馬鹿だったとはな。：北上や球磨たちが可哀そうだ。」

「いいか？俺はそんなことは思いもしないし、望みもしない。なぜが分かるか？」

「それはな——楽しいからだ。俺自身、家族はいないし家族ってどういう者が分からない。でもな？俺が提督になり、ここに着任するときなんとなく思ったんだ。——家族ってこういうものなのかなって」

「新しい娘が着任する時、出来るだけ仲良くしようとするのは、家族だからだ。それはお前も、他の娘も一緒なんだ」

「苦しい時も、悲しい時も、楽しい時も、皆で分かち合いたいんだ」

「だから——二度とそんなことを言うな。いいな？」

気が付くと私は提督に泣きついていて泣きついていた。ワンワンと、ワンワンと泣き続けた。服には涙と涎と鼻水でグシャグシャに汚れていた。

それでも提督は、泣き続ける私の頭を撫で続けた。

その後私は北上さんや姉さん達にガツツリ怒られた。もう二度と  
こういうことはしないでくれと。

でも最後は皆泣いた。姉さんも

「無事でよかったクマ…。良かったクマよく。ううくく」

とうれし涙を流してくれた。

そして北上さんに提督に恋していることを告げた。怒るかなと  
思っていたけど北上さんは怒らず、むしろ一緒に提督に恋をしよう？  
と言ってきたほどだ。強いなあと思った。

今迄は恥ずかしいのもあり、中々アプローチが出来なかったが、今  
回の花見で提督に感謝していた。

(提督さん、今はこんなことしかできないけど——)

(いつか、この気持ちをあなたに告白します。だからその時まで、待つ  
ていてくださいね☆)

「うーん、あと少しで書類が終わるな…」

ある平日の昼過ぎ頃、書類を一人でガリガリ書いていた提督が残りの書類の数を見てそう言った。

本来ならばその日の担当秘書艦と一緒にやる仕事なのだが、その日はあまり緊急性の高い書類も無く、一人で終わらせることが出来る量だったので一人でやっていったのだ。

本日の秘書艦は加賀だが、現在この鎮守府は慢性的な航空隊の練度が不足している為、時々空母全体で練度を上げる訓練を実施している。

：まあ、航空機の種類も艦攻に偏っている為、雷撃をどれだけの(敵)にブチ当てる事が出来るか、そういう事を考える事がメインになりかけているが。

「それにしても、平和だなあ」

コンコン、とドアをノックする音が聞こえた。ドーぞー、と言うと入ってきたのは羽黒であった。

「あ、あのう提督さん…。ご飯食べてないって聞いてきたんですけど…」

「ああ、あと少ししたら全部終わるからその時に食べようかと思って  
いるが、どうした?」

「ええと、ですね…」

モジモジしながら顔を真っ赤にしていたのでなんとなく察した提督は

「…一緒に食べるかい?」

「! は、はい!」

「じゃあ、少し待ってくれ。直ぐに終わるから」

嬉しそうな笑みを浮かべた羽黒を見て、ほほえましいなあと思った提督であった。

「羽黒はどれを食べるかい?」

「あ、サバの南蛮漬け定食を頼もうかと…」

「オーケー、すまないけど羽黒は席を確保しといてくれ。君の分も一緒に持っていくから」

「分かりました」

一時半を過ぎた時間でも食堂では人が多く、空いている席はそんなに多くはなかった。

理由は二つあり、一つは鳳翔が経営している店に行く人が半分なのだが、最初のところに書いてある訓練の日はお店を閉じているのだ。結果、その半分が食堂に来ているのが一つ。

二つ目は食堂を一般開放しているので現地の人もよく来ているのだ。

それに、ここの食堂の味を好む現地の人も多い為、日本食レストランを経営したい人は此処の食堂で修行するという噂話もあるほどだ。

「よっと、おまたせ」

「あ、代金…」

「良いよ良いよ、女の子に支払わせるのは男としていかんのだし」

「あ、ありがとうございます」

羽黒と楽しくお喋りしながら食事をしていると、加賀達が食堂に入ってきた。

「おー皆、訓練は終わったのかい？」

「ええ、とりあえずこれで大丈夫だろうというところまで鍛えたわ」

「加賀さん、五航戦を可愛がってましたもんねー」

「人間きの悪いことを言わないでください赤城さん。光る原石を目にしたら磨き上げたいと思うでしょう？それと一緒にですよ」

「ああ、道理で瑞鶴がえらいへばっているんだな…」

赤城達の後ろを見てみると、魂が抜けかけた瑞鶴の姿が確認できた。…飛鷹が隣で支えているので、ゴリゴリにされたのだろう。

「そういうえば、他のメンバーは…?」

「隼鷹は酒屋に直行、なんか新しい酒が入ったとか言ってたけど。」

瑞鳳と翔鶴、鳳翔さんは自分の店に向かって行ったわ。夜の居酒屋の準備するためとか。瑞鳳と翔鶴はそのお手伝い。

龍驤は『新しい店を開拓するでー!』と言って町の方に出かけているわ。」

羽黒の質問に加賀が全部答えていた。というか隼鷹、この前酒を買ったばっか無かったっけ。

「もう全部飲んだそうよ」

「さりげなく心を読むのは止めてくれないかい？」

「あ、提督。ここにいたんだー」

「飛龍、蒼龍」

振り向くと料理を盆に乗つけた飛龍たちが横にいた。

「よかったら私たちも良いかな？」

「ああ、良いよ。赤城たちもどうだい？」

「では、お言葉に甘えて」

「なんか久しぶりですねー」

そう言い、飛龍たちは提督の右横に座り、赤城たちは左横に座っていた。

残った瑞鶴と飛鷹は羽黒の横に座った。

因みに羽黒はこの時、恥ずかしがりな性格が災いし提督の横ではなく真向かいにいたので、何の抵抗もなく提督の横に座った飛龍達を羨ましそうな目で見ていた。

「で、どうだ？今回開発された流星改と62型は？」

「ええ、かなりいい機体ね。彗星だと厳しかったのが62型だと成功率が上がったほどよ。流星改も流星の上位機だけあって効率よく的を沈ませる事が出来たわ」↑加賀

「あとは戦闘機、だな」

「烈風や紫電改二も良い機体だけど烈風改に比べるとね…」↑飛龍

「と言ってもボーキはそんなにないからな」。あと一週間待ってくれ」

「そんなに気にするほどでもないと思いますよー？」↑蒼龍

「危険性を出来るだけ排除するにこしたことはないさ。…ところで赤城よ」

「ふぁい？」モグモグ

「ケツコンしたはずなのに以前より食べる量が増えてないかい？」

「ほふでふか？（そうですか？）」

「飲み込んでから喋りなさい」

（あうあう、さつきまで提督と喋っていたのにく）グスン

さつきから提督と喋れない羽黒であった。

食べ終わった後、暫く赤城たちと喋っていた提督だったが、その後羽黒と一緒に食堂を出て海辺の散歩をしていた。

「…はあ」

しかし、羽黒の表情は暗かった。理由は

（どうして私って臆病なんだろう…）

というものだった。

「ん？どうした、ため息なんぞして」

「ご、ごめんなさい！」

「いや、謝らなくてもいいんだけど」

苦笑している提督の顔を見て羽黒は自分の顔が真っ赤になってるのが自覚できた。

「悩みがあるなら、俺でよかったら聞くよ？」

「…提督、どうして私は臆病なんでしょうか？」

「…どうして、そう思ったんだい？」

羽黒は提督に自分の悩みを告白した。

んー、と悩んだ後、提督はこう言った。

「君は臆病ではないと思うよ？」

「え…」

思いもしない答えにびっくりしているところに、提督はこう続けた。

「きみは周りをよく見ている。普通なら気付かないものでもよく気付くし。事実、君が旗艦の時は奇襲されてもすぐに気付いて対応してるしな」

「それに君は自分を臆病だと言っているが、それは違う。———優しすぎるんだ」

「君は誰かが傷つくことを嫌う娘だ。誰かが傷ついてたり泣いてたら助け出すでしょ、君は」

「その気持ちは非常に大切なものだ。そしてそれは君が臆病という事では無いんだよ」

そこまで言った後、提督は最後にこう言った。

「——あまり自分を卑下にするな。君は十分魅力的な女の子なんだから」

「…ありが、とう、ごごい、ます…」

泣いていた羽黒を提督は頭を胸に抱き寄せ、泣き止むまでじいつと待っていた。

「ご、ごめんなさい提督！ずっとしがみついてて…！」

「いや、別に気にしてないよ。——悩みは解決できたかい？」

「はい…！」

「うん、良い返事だ」

後日、青葉新聞にこのことが一面に出され、恥ずかしさのあまり布団に包まってゴロゴロと赤い顔で転がる羽黒の姿があったそうなの。

「うーむ、なあんかしつくりこないんだよなー。何がいけないんだ？」  
ある日の3時ごろ、厨房に入ってカレーを作っている提督だったが、納得のいくカレーが出来ず四苦八苦していた。

「タマネギはあめ色になるまで炒めているし、ターメリックは炒めすぎでないし、一体何故…？」

「あれ、提督どうしたの？」

「川内か。いや、中々美味いカレーが出来なくてな」

タマネギを炒める匂いに釣られた川内が厨房に入ってきた。

「んー、ちなみにどんなカレー？」

「インドカレーだ。ちなみに手羽元を使っている」

「その手羽元、ターメリックとか付けてる？」

「…あゝ」

「あー…、大丈夫？いつもならこんなへまうたないのに」

「…あんま大丈夫じゃないかも。徹夜なんぞするもんじゃないね」

「因みに徹夜した理由は？」

「夕張と一緒にモ〇〇ンしてた」

「同情できる内容じゃないね…」

川内の手伝いもあり、あつという間に煮込むだけとなり、出来上がるまで暇になった。

「いやー、ありがとうな川内。助かったよ」

「別に気にしてないよー。そ・の・か・わ・り」

「最初の味見ね。オーケーオーケー」

「にしても提督、何でカレーを作ろうと思ったの？」

「食堂にあるカレーは小麦粉を使っているせいかカロリーが高いからねー。最近お腹がでてきたから…」

「そういえば、ご飯も白米の匂いじゃないね。何の米？」

「玄米だよー。圧力鍋があったから作ってみたのさ」

「…体を鍛えたら？」

「真夜中の鎮守府&電気がついてない状態で体を動かせと？」



「…なんかゴメン」

※この提督、実は幽霊が苦手だったりする。

「一応靈感のある同僚からは『お前の体の周りには霊が寄り付かないんだが』とか言われたけどな。…それでも怖いが」

「ある意味羨ましい体質だと思うけどね。山城さんなら喜びそうだけど」

「あれは何でだろうね？あいつだけピンポイントに不幸が来るとかおかしいだろ」

「提督に近づいたらそれが全く起きないしねえ…。まるゆを使って運が上がっているのに全く関係ないみたいですし」

「…近いうちにあいつと一緒に日本に行ってお祓いを受けさせた方がいいな」

そんな感じに喋っているとカレーの灰汁が出て来たのでそれをせつせと除けていた。

「ちよ、やべえ。このままだと溢れそう！」

「火を弱火にしよう！」

「アツアツアツ!!ちよ、灰汁が手にかかったがな!」

「大丈夫、提督!」

ギャーギャー騒いでいる内に灰汁抜きも終わった。

「あつっー、よっしや、あとは一晩ほつとくだけだな」

「なんか一気に疲れたね…」

「これでも圧力鍋を使っている分、短いんだけどな。普通の鍋だと下手したら半日かかっちゃうし」

「米にカレーにスープに豚の角煮になんでもござれだもんね」

「圧力鍋の数も多いしな。使わないと意味ないし」

「…今度の夜戦飯も圧力鍋を使ったモノにしようかな」

「その時は俺も呼んでくれ。味見したい」

「もちろんだよー」

カレーが冷めたことを確認した後、そのカレーを鍋ごと業務用冷蔵庫庫に入れ、従業員に間違つて使われないようにメモ帳を破つて『この中にカレー有。気を付けよ。特に赤城。食べるなよ?』と書き、冷蔵

庫の壁にそれを貼った。

「あ——疲れた。あのまま一人でやってたら倍の時間はかかってたかもしれないな」

時間を見てみると5時半過ぎ。えらい時間がかかったようだ。

「お疲れ——。とりあえず明日だね——」

「そうだな。ふあああ、眠い……」

「眠そうだね——。——あ、そうだ。膝枕してあげる。近くに長椅子あるし」

「シー……ゴメン、お願いしていいかな」

「もちろん♪」

「ふふっ、良く寝てるね——」

川内はニコニコしながら太ももの上で爆睡している提督の頭を撫でながら幸せをかみしめていた。

「最近、新しく入ってきた娘にばかり構ってるから寂しかったんだぞ——。たまには私にも構ってよね——」

「おや、川内さんに提督さん。どうしたの？」

そこに青葉が通りかかってきた。いつも持ち歩いてる一眼レフは持っていないようだ。

「いやー、どうやら疲れたみたいでそのまま寝ちゃったのよ」

「……嫌そうな声の割には物凄い満面の笑みですねえ」

「いや、嫌そうな声をしているのは気のせいだよ？」

「冗談ですよ。でも、すっごい幸せそうな顔ですね——」

「まあね——。最近こんなことなかったし。一緒に料理するのも結構前だったもの」

「およ？料理を作ってたんですか。ちなみに何を作ってたの？」

「インドカレー——」

「あちゃー、その光景撮りたかったですね——。残念」

「そういえば、カメラはどうしたの？」

「ああ、今カメラ屋に行ってメンテしてもらってるんですよ。なんか

調子が悪かったので」

そう言った後、青葉は提督の顔に近づき、提督の顔をぷにぷにしました。

「…結構深く寝てますねー。一体昨日何をしてたんでしよう？」

「夕張と一緒にモ〇〇ンしてたって言ってたよ？」

「…バカですね」

「全くよねー」

呆れ顔の川内と青葉だったが、提督の顔を見てたら自分がいつの間にか笑みを浮かべていることに気が付いた。

「…ねえ、青葉？」

「なんででしょう？」

「ここにスマホがあるんだけど、写真撮らない？」

「良いですね。撮りましょ撮りましょ」

後日、提督の寝顔が鎮守府内の全艦娘に配信され、提督は暫くネタにされたそうなの。

## 05 戦闘回

「うーん、良い朝ですー」

五月に入ったとある日の早朝、吹雪は日課の早朝ランニングをする為、駆逐艦寮の前で準備運動をしていた。

吹雪が準備運動をしていると、後ろから声をかけられた。

「吹雪ちゃん、おはようっぽいっ」

「吹雪、おはよう。良い朝だね」

吹雪が後ろを振り向いてみると、そこには夕立と時雨が立っていた。

「あ、おはよう二人とも。もしかして付き合ってくれるの？」

「ううん、ただ単に早く起きただけっぽーい」

「今日は吹雪の初ローテの日だからね。今回は僕らも参加するから早く起きてアドバイスでもしようかなと思ったんだ。」

「そうなんだー。そういうえば夕立たち以外で参加する娘とか知ってる？」

「いや、流石にそこまでは知らないかな」

「でも、私たちもいるから大丈夫っぽい！大船に乗ったつもりで任せてっぽい！」

そういうと夕立はエツヘンと胸張った。気のせいかな犬耳みたいな髪の毛もピョコピョコ動いているように見える。

因みに夕立と時雨はこの鎮守府では古参組で、二人とも改二済みである。

「……………」

吹雪は夕立の胸と自分の胸を見比べ

「…………ハア〜」

ため息をついていた。

「では、会議を始める」

朝の九時、提督は食堂に皆を集めさせ、会議を開始した。

「今回皆に集合してもらったのは他でもない、深海棲艦のことだ。彼らとの停戦協定も今日から失効し、戦闘が開始される。」

我々の仕事はシーレーン（海上交通路）の防衛と、このトラック諸島の防衛である。彼らはあらゆる手を使って、この二つを攻撃するだろう。

今回の題材は、シーレーン防衛の班決めだ。空母2隻、戦艦か重巡一隻、軽巡以下三隻で構成する。なお、これは暫定的なものだから変えても問題ないが、ここトラック諸島の防衛も忘れないようにね」

「提督！。私たち雷巡組はー？」

雷巡組を代表した北上が質問した。

「出来ればトラック諸島の防衛に専念してほしいが、まあ君たちの意思に任せるよ。ヘタに手を出して痛い目を受けたくないからね」

「はいはい、わかったよー」

「他に質問はないかな？あ、あと今回はテストとして俺が構成した艦隊で出撃してほしい」

「？　なんで？」

「バランスよく構成したと思っているが、まだ分からないからね。まあ一発目からとんでもない敵が出てくるとは思わないし、新しく入ってきた娘に経験させるいい機会だ。実戦に勝る経験は無いってね」

提督がそう言うのと、皆納得したようだ。

「では、発表するぞ。旗艦、龍驤。二番、飛龍。三番、陸奥。四番、時雨。五番、夕立。六番、吹雪だ。呼ばれた娘はすぐに出撃準備するように。」

以上、解散！」

「じゃ、皆ー。出撃するよー」

「「「はーい」」」」

「は、はい」

「緊張せんでも大丈夫やでー。今回はウチらもいるんや。そう簡単に沈まんよ？」

「す、すいません」

「謝っちゃてるっぽい」

飛龍の掛け声に吹雪以外は気の抜ける声で返事していたが、初の実戦になるかもしれない吹雪は緊張のあまりカチコチになっていた。

(うゝ、緊張するうゝ)

「大丈夫だよ。吹雪」

カチコチになっている吹雪を時雨が背中をポンポンと叩いて吹雪を励ましていた。

「フフツ、大丈夫よ。このメンバーならもし襲撃されてもあなたを守りながら援軍を待つのは簡単だから、ネ?」

「陸奥さん…」

「ほらほら、飴でも食べなさい」

「あ、ありがとうございますいまびゆ」ガリツ

((((あ、噛んだ)))

「ッ!?!?」

緊張のあまり舌を噛んでいた吹雪であった。

「つと、彩雲から連絡がきたわ。十時の方向に敵艦隊接近。駆逐イ級が3、軽巡ホ級が2、戦艦ル級が1、全てエリートよ」

「おー、その程度の艦隊なら簡単やねー。経験値ウマウマや」

「でも、油断は禁物よ。最初っから全力で叩き潰すわよ」

「せやね、んじゃ、艦載機の皆ー!お仕事お仕事ー!!」

「第一次攻撃隊、発艦!龍驤の隊に続いて!」

空母の娘たちが式神を、弓を使って艦載機を発艦させた。今回は敵空母がいなかった為、大した被害も無く、イ級を二隻、ホ級を一隻沈ませた。

「うーん、あんま倒せんかったねー」

「いや、あれだけ沈ませたんだからむしろすごいことだと思うわよ?」

陸奥がそう言ったが龍驤は納得してないようだった。

「敵艦隊、こっちに向かってくるわ」

「相当おかんむりっぽい」

「ル級は私が相手するわ。夕立と時雨は吹雪と一緒にホ級とイ級をお願い」

「りよ、了解！」

「…あの調子だとテンパリそうだね。夕立、僕が援護するから君が最初に突っ込んでル級と他の敵艦を引っぺがすよ」

「了解っぽーい！」

夕立はそういうと全速力で敵艦に突撃していった。

「吹雪は僕の隣に」

「で、でも大丈夫なの？夕立ちちゃんが単身呐喊していったけど…？」

「夕立にとってはいつものことだよ。それに——」

そう言いつつ、時雨は腕についてる10cm高角砲（高射装置付き）を相手に向けてこう言った。

「——僕の中から逃げられないってね」

ドン！ドン！ドン！と撃ち、全てル級に命中させていた。

（す、すごい…！）

怒ったル級は時雨たちに向けて突撃したが、そこに陸奥が乱入した。

「貴女の相手は私よ」

41cm連装砲を相手めがけて撃ちながら陸奥もル級めがけて突撃した。

ル級も撃ち返してくるが陸奥はそれを避けたり弾いたりしながら間合いを詰めていき

「せえええええいッ!!」

ゴギヤアアアッ!!!と、遠くからも聞こえるほどのチョツピングライトをル級に喰らわせ——

「まだ終わってないわよッ！」

——そのままル級の顔をつかんでゼロ距離砲撃を当てた。

流石にこのダメージには耐えきれなかったのか、そのまま海にブクブクと沈んでいった。

一方夕立はというと

「その程度じゃ当たらないッポイー！」

と言いながらホ級の懐に飛び込み

「そおーい！」

とホ級を掴み、イ級めがけて投げたのだ。

ガゴオオオオン！と音と共にホ級とイ級が激突、体勢が崩れたところを時雨がスナイプ、ホ級を中破させた後、そこを夕立が魚雷パイルで爆殺させた。

残ったイ級はその場から逃げようとしていたが、その後吹雪の雷撃で沈んでいった。

戦闘が終了した後、敵が出て来なかった為、そのまま鎮守府に帰投した。

「お疲れッポイー」

「ようやくたやん、あれだけ出来れば上出来やで」

「有難うございますー！」

今回初めての戦闘でイ級を沈めることに成功した吹雪は心の中でガッツポーズをとっていた。まあ初めての戦闘で初めて戦果を取れたのだ。嬉しさもひとしおだろう。

「皆、ご苦労様」

気が付くと提督がこちらに向かっているのが確認できた。

「皆無事に帰還できたでー」

「知ってるよ。龍驤達なら吹雪を守りながら帰還できる技量があるのは分かっていたしね」

「提督さん、褒めて褒めて〜」

「おー、良し良し」

「えへへ〜」

夕立が提督に甘えている姿を見た吹雪は胸の奥がチリツと嫌なモノを感じていた。

「吹雪もよくやった。これからもその調子でな」

「はいー」

しかし提督に話しかけられたらそんなモノも感じなくなったので吹雪は大したものでは無いだろうと判断した。

のちにこの気持ちが分かったのは半年後のことである。



## 06 前篇(仮)

「あー、やっと書類が終わったー…」

「お疲れ様、お茶でもいかがですか？」

「あーい、いただきよ」

ある日の夕方、朝8時から書類の処理に追われていた提督と加賀だったが、午後6時になってようやく書類地獄から解放された。

「あー、まだ目がしょぼしょぼするぜ。てか何でこんなに今日は書類が多いんだ？」

「殆どが大本営に提出しなければならないものだったわね。…リミットがあまりにも短すぎるけど」

「三日前にきて厚さ5cm以上ある書類を全てチェックし、尚且つこれまでの戦績を報告せよ、だもんなあ。…普通こういうのってだいぶ前に届いていなければならぬものじゃねえのかねホント」

ぼやきながら提督はいそいそと外出する準備をした。

「あら、どこか出かけるの？」

「ああ、今日は友人が来ていてね。今日は鳳翔さんの所でご飯食べるから」

じゃーなー、と提督室を後にしたことを確認した加賀はさっきの会話にちよつと違和感を感じた。

(友人が来ている？提督の友人は舞鶴か横須賀にいるはず。トラックに居るはず無いのに…)

さらりと酷いことを考える加賀であった。そこに

「へーい、テート——てあれ？テートクは？」

金剛がやってきた。

「提督なら友人と会いに行くと言っていましたよ」

「エー!?そんなー!!」

ガーン!!という擬音と共に膝をつく金剛。しかし次の瞬間

「ならテートクを尾行するダケネー!」

「ちよつと待ちなさい」

即行止めに入った加賀であったが

「とか言っちゃってー、加賀も気になるんデシヨー」

「だからと言って尾行は…」

「ばれなきや問題ないデース！ほら加賀も付いてくる！」

「ちよ、ちよつと!？」

なし崩し的にあとを追うことになった加賀達であった。

「それにしても誰に会おうとしているんですかネー？」

「…何でこんなことに」

提督の姿は鎮守府出てすぐに見つける事が出来た。

海軍の制服と軍刀の存在感が凄まじいほど主張していた。というか浮いているといった方がしっくりきているほど目立っていた。

「鳳翔さんの店に入ったみたいですよネー」

「金剛、すぐに鎮守府に戻りましょう。ばれたら——」

「ばれなきやいいだけデース。ほら、行きますヨー」

「お願いだから手を引つ張らないで。お願いだからっ」

小声でギヤーギヤー言いながら店に入った金剛たち。入ると奥の

席に提督の姿が見えた。

「フッフッフー、誰が来るんでしょうネー」

「…提督の友人ですから男の人じゃないですか？」

「イイエ、ワタシの勘では女性ですよネー」

「勘って…そんなアホな話が」

(小声で喋っています (ry))

「吉川君久しぶりー。元気にしてた？」

「…相変わらずのアニメ声だな有馬(ありま)ちゃんや…」

「えー、良いジャン別にー」

そんなアホな話があったようです。

「ネー？合ってたデシヨ？」

「……………」(絶句)

提督の席に座ったのは同年代の女性提督。

彼女の名前は有馬 美咲（ありま みさき）身長は150ぐらいで顔は美人の分類に入る。

…胸はそんなに無いようだが。

「なんかケンカ売られた気がした」

「?何言ってるんだ?」

「いやいや、こっちの話しー」

「まさか女性だったとは…」

「私たちという彼女がいるのに外でも作ってたなんテ…」

「いや、ただ単に仲のいい友人じゃないですか?」

「ノン!あれは提督に恋している顔ネ!」

「だとしても、我々がどうこう言う資格は——」

「無いとしても嫌なものは嫌なんデス!」

「…さいですか」

(小声で (ry))

新たな敵の参戦に憤る金剛であつたが加賀はそこまで怒つてなかつた。

多少は思わないことも無いのだがみんなで仲良くしたいと考えているせいかそこまで怒る必要なくね?と思つていたりする。

因みに金剛が怒っている理由は所属している艦娘のハートを撃墜しているのにさらに増やしていることに怒っている。…この提督は恋愛原子核かなんかだろうか…。

「それにしても鬼の吉川と呼ばれた君がこんなところに居るなんてねー」

「昔の話だろそれ。第一お前は何でここにいるんだ?横須賀そんなに暇じゃないだろ?」

「私がやる分の仕事は全部終わったからねー。暇になったから来てみたんだー」

「…暇で来るって相変わらずの行動力だな。お前のトコに所属している艦娘も大変だろうなあ」

「ならコンビ再結成しちゃう？」

「御免こうむる。お前の手綱を握るのはもうヤダなんだよ」

「ちえー」

「うぎぎぎぎぎ…」

「…今の貴女の顔は乙女から大分かけ離れた顔しているからやめなさい」

「それでもこうなっちゃうんデスー！というか何ですかあの女は!？」

「提督が海軍学校に行つてた頃の同級生よ。写真に写つてたわ」

「…何で知っているんデスカ？」

「…青葉から」

「ああ…」

(※小 ( r y )

青葉の情報網の凄さが分かった金剛であつた。

「それにしても何でわざわざここトラックに来たんだ？呉や横須賀なら近いのに」

「君に会いに来たんだよー」

「ハハッ。嘘乙」

「…ホントナノニ」(ぼそつ)

「そういや、他の皆は元気なのか？最近会つてなくてな」

「ああうん、みんな元気だよー。君に会いたがつてた」

「…時間があれば行くんだがなー」

「それにしてももう一人来るはずの奴が来ないねー」

「あん？誰だ？」

「村上君」

「あいつがか!？」

「最近、ようやく休みが取れたらしくてねー。君に会いたがつてたし」

「…あいつなんか知らんが俺によく絡んでくるもんだから苦手なんだが…」

「そういや、薄い本のネタにもなつてたね」

「おいやめろ、それはホントにやめろ。トラウマになってんだから」  
暫くすると男の人がやってきた。

「いやあスマンスマン、こここの場所が分からなくてねー」

「それはいいんだが何故俺の横に座ろうとするんだ」

「?別に良いじゃないか?」

「:まあそうなんだが、な」

「変な奴だなー」

爽やかな笑顔をしているこのイケメンの名前は村上 竜乃助(むらかみ たつのすけ)。顔もよく爽やかなのだが、以前吉川と絡んだことがあったせいか、薄い本のネタにもされたことがある。

因みにこのことを知っているのは吉川と有馬、あとは極少数だったりする。

「それにしてもここのご飯は美味しいな。日本食のレパトリーも多かったし」

「おいおい、お前にはビスマルクという嫁さんがいるだろう」

「彼女のご飯もおいしいけど、たまには外食したくなるのさ」

「贅沢なこって」

「君が言えた義理は無いと思うけどねー」

と、ワイワイガヤガヤ騒ぎながら、過去の話に花が咲いたり、情報交換したりしていた。

一方金剛たちはというと:。

「:なんか面白くないですネー」

「:ならもう帰りません?これ以上は何も成果がないと思いますよ?」

「:もうちよつとダケ:」

まだ何かあるだろうと粘っていた。

「そーいや、吉川君?」

「んー?」

「もうみんなとケツコン出来たの?」

「:まだ出来てない」

「ほー、珍しいな。俺の知っている友人とか20人以上の艦娘とケツコンしているぜ」

「それもそれでおかしいがな?…お金が貯まらんのだよ」

「えっ?でも私たちの給料ってかなり良いはずだけど…」

「デートしたり飯をおごったり服を買ってあげたりと金が飛ぶんだよ…」

「…一旦ケツコン指輪が全員分届くまで止めたらどうだ?」

「そうしたいけど、彼女たちの嬉しそうな顔を見ると、ついね…」

「アホの極みだねー」

「全くだ」

提督がボロクソに言われている光景を見た金剛たちは

「…他の皆にも自重するように言っておきますか…」

「ですネー…」

自分たちの我儘で苦しませた事に気づいたのだった。

続く

06 中編(仮)

「そーいや、お前らの所はどうなんだ?」

「どうって?」

「深海棲艦の敵襲とか資源プラントの襲撃とかだ」

「あー…全くと言っつていいほど無いねー。寧ろ横須賀は平和だし」

「俺んトコも同じだ。ここはどうだ?」

「ここもそんなに襲撃されてないが、時々敵が来る程度だな。フラッグシップでも月一ぐらいだし」

「…フラッグシップ相手にどうやって戦うの?」

「あ、それ俺も気になるな」

「どう戦うって、敵の攻撃を避けたり弾いたりしながら間合いを詰め、ボコボコにするだけなんだが…」

「まさかの脳筋!?!」

「おう脳筋言うのヤメーや。ヘタに間合いを維持すると手も足も出ないことがよくあったんだよ。戦艦クラスの、あの長門型の装甲でも夜戦なら魚雷でやられかけるんだぞ」

「…そーいや魚雷って史実でも一発で戦艦を轟沈させる事が出来るんだったね…」

「日本の鎮守府だとフラッグシップは来ないからな。平和ではあるが別の戦い〈政治〉があるけど」

「それでも潜水艦は来るだろうに…。あいつらどこにでもいるんだぞ。気が付けば鎮守府の近くまで来てることもあったしな」

「…対潜水艦用の装備の充実、大本営に申告しようか?」

「何度もしてんだが、良い返事が出ないんだよ」

「いい感じに議論というかボヤキというか、話が白熱していた時だった。」

突然腹痛が来たのだ。

「…すまん、ちよつとトイレに行ってくる」

「大丈夫か?」

「…多分」

そう言い、提督は急いでトイレに駆け込んだのだ。

「…大丈夫かね、アイツ」

「大丈夫よー、出すもの出せばすぐ治る治る」

それよりー、と

「そこにいる三人、そろそろ出てきたらどうかかなー？」

(バレてるー!?)

(いや、三人と言ったはず。つまり私たちではない可能性が微レ存)

「もう一度言うよー。その金剛ちゃんと加賀さん、そして青葉ちゃん。

——そろそろ出てきたら？」

(やっぱりー!?)

「…あちゃー、ばれてましたかー」

(いつの間!?)

金剛たちより少し離れたところに青葉がいた。

…今の今まで分からなかったようで金剛たちは物凄く驚いているが。

「それにしても、どうして分かったんですかー？ 気配を完全に殺してたはずなんですが」

「気配を殺しても視線で分かるんだよー？ もうちよつと修行した方が良いかなー」

「青葉の存在が分かったのなら、私たちも直ぐバレるはずですね…」

「でも、何で私たちを呼んだのデスカー？」

「それはねー——一緒に仲良く飲みたいからだよー」

「………え？」

有馬の話にポカーンとなっている三人。気を悪くしたんじゃないかなかったの？と三人ともそう思っていたのだ。

「別に隠れてするのは良いんだよー。別に疾しいことはしてないんだしねー。むしろ彼を大事にしてくれていることが分かったからどっちかっていうと嬉しいかなー」

「俺もあまり気にしないしな。敵意があったら何かしらのリアクションを取るが、無い相手にどうこうするのは好きじゃないし」



そんなことを言っているとトイレからすつきりした顔で提督が戻ってきた。

「ふう、よく出たよく出た。…てあれ？三人ともどうしてここにいるんだ？」

（（ヤバい、バレタ時の言い訳、考えてなかった…！））

冷や汗を流す三人であったが、有馬が

「その子たちね、たまたまこの居酒屋に来てたんだよ？」

と助け舟を出してくれたのだ。

その言葉を聞いて納得した提督は三人と一緒に話をし始めた。

「そういえばテートク？有馬さんから聞いたんですけどネ？」

「ん？」

『鬼の吉川』って何なんですカ？」

「ブッフオツ！」

予想してたのより斜め上の質問に思わずビールを吹き出す提督。その先には

「ギャアアアアア!!目が、目がアアアアア!!」

真向かいに座っていたイケメンにぶっかけていた。

「ゲホ、ゴホ…何で教えた有馬ちゃんや！」

「その前に一つ言うべきじゃないかオイ!？」

「えー、別に教えてもいいじゃん」

「そうです、私も気になります」

「そうです！青葉、気になります！」

「えっ、スルー？スルーなのこれ？」

野郎の発言を出してもねえ…

「…あまり面白い話じゃないからね？」

「俺たち三人は、海軍学校でも頭のいい部類だったんだが、同時に厄介な人間だったらしくてな。他のメンバーと違い隔離されていたんだ。俗にいう『住み分け』だ。」

普通な人間と問題児を一緒にしたくなかったんだろう。ただの問題児なら退学できるが俺たちは頭が良かったからな。…その分やつかみも多かったが」

「そのお蔭というべきか、俺たちはすぐに仲良くできた。戦術や戦略を三人で考えて教官のメンツを潰したこともあったしな。」

「それに私って美人だから、寄ってくる男も多かったわー」

「その男共を振りまくってたもんな、お前」

「話を元に戻すが、この二つの要因が原因で起きた話なんだ」

「海軍学校の中にも、どうしようもない阿呆というのがいてね。そいつが有馬ちゃんにしつこく付きまとっててねえ。」

彼女も何回も付き合わないことを言ってたんだけど諦めなかったんだ」

「拳句の果てには俺たちを悪者みたいにしてたしな。お前らが彼女を洗脳したんだろーって言った時は爆笑したよ」

「でも、海軍学校から寮に帰る道に張り込んでね。流石に駄目だろうという事で注意しに行ったんだよ」

「そしたら、包丁を振り回すわ振り回すわ。危なかったから顔面に蹴り入れた後、腰のベルトを使って即行ぐるぐる巻きにした」

「もしかして、その時の行動が鬼のように見えたから？」

「そうじゃないんだ。まあ話を最後まで聞いてくれ」

「その後、憲兵が飛んできてそいつは退学になった。これで大丈夫だろうと思ってた時だ」

「——その馬鹿が逃げ出したという情報と有馬ちゃんがいなくなっただという情報が入ってきたのは」

「そいつは憲兵が持っていたテイザーガンと拳銃を持っててな、有馬ちゃんを気絶させた後、手足をしばって近くのレンガ倉庫に連れて行ったんだ」

「どうしてそんなことが分かったんですか？」

「もしもの為にビーコンをポケットの中に入れてたんだ。…まさか役に立つとは思ってなかったけど」

「本来なら二人で行動すべきだったんだろうけど、一人でそのレンガ倉庫に向かったんだ」

「そのレンガ倉庫を調べると、奥にその馬鹿が有馬ちゃんの口に拳銃を突っ込み、犯そうとしてやがったんだ」

「……………!!」

「俺は急いでその馬鹿を引きはがして、顎を殴った後彼女を助けたんだ」

「だが、彼女もパニックになってな。俺を認識してなかったんだ。暴れる彼女を縛っている縄を解いてすぐに外に出ようとした時だ」

「——馬鹿が拳銃をこっちに向け発砲しようとしたのは」

「「なッ!?!」」

「避けたら後ろにいる彼女にも当たってしまふ。だから俺は彼女に『伏せろッ!』と言ってド突く事しかできなかった」

「幸いにも弾は俺にしか当たってなくてな。彼女には当たってなかった」

「だけど倒れたら彼女にどんなことをされるか、分からなかったからな。必死に立ってたんだ。」

「その時馬鹿がこう言ったんだ。」

「——『どいつもこいつもボクのいう事を無視しやがって!お前から先に殺してやるッ!』てな。」

それを聞いた途端キレて視界が真っ赤になったと思ったら気が付けば病院のベッドの上。全身包帯だらけだったんだよ。彼女も俺の手を握って泣いてたし何が何だか分からなかったし」

「その後憲兵がやってきて、軽い取調べを受けた後、あのバカのことを

聞いたんだ。

そしたらこう言ったよ。

『来る…赤い鬼が…こつちに来る…!』と言いつづけてるよ」  
てな。だから『鬼の吉川』と呼ばれたんだ」

「どうやらその発言が海軍学校にも広まっててな。まあ相手が生徒からも先生からも被害に合ったことがあるせいかな、俺を褒めまくってたがな」

「むしろ良くやったという声が多かったね」

「でもだからと言って鬼は無いと思うんだけどね俺は」

「良いじゃないか、かつこいいし」

「…まあそういう話だ。納得してくれたかい？」

「…はい。では有馬さん、あなたに質問があるんですが」↑青葉

「んー？なにかなー？」

「貴女は何故、提督に恋しているのですか？」

続く

## 06 後編(仮)

「んー、言ってもいいけど…何で？」

「いえ、さっきの話があまりにもへビーだったので…」

青葉の質問に首をかしげながら聞き返していた有馬だったが、青葉の少し青ざめた顔を見て「まあ、良いかな」と言い、質問に答えた。「私が吉川君に恋をしたのは、さっき言ってたけど変態に付きまとわれたときかなー。それまでは仲のいい友達ぐらいにしか見てなかったし、恋心が芽生えるとは思ってなかったんだよね」

日本酒をチビチビ飲みながら、恥ずかしそうに言った。

「あの変態はしつこかった。何度も何度も。一度女性トイレにまで入ろうとしてたし」

「おい、それは初耳だぞ」

「言ってなかったからね。皆に心配をかけたくなかったし」

今考えてみれば相談すれば良かったね、と苦い顔で言った。

「でも、吉川君はそいつから何度も私を守ってくれた。私も武術には自信はあるけど、男性に比べると力も無かったし、何よりそいつ自身も海軍仕込みの格闘術を覚えていてね。何度か襲われそうになったけど、彼が睨みを利かせてくれたおかげで奴も手が出せなかったんだ」

「…別に大したことはしてないさ」

「そう言いながらあのバカの一挙手一投足、用心深く見てたのはどこの誰だったかねえ？」

「テメーは黙ってようか？」

「手をパキパキ言わせながら威圧するのはやめてください怖いです…」

「まったく雉も鳴かずに撃たれまいに…」

「話を元に戻していいかな？」

「イエス、マムー！」

顔は笑っているが目が笑っていないのを確認した二人はすぐに彼女に敬礼した。

：彼女の顔が真っ赤だったので効果は半減していたが。

「夜中に帰る道にもあの変態はいたからね。そのまま帰ったら危ないという事でこの二人が行ったんだよ」

「そしたら変態が包丁持って暴れまわっているのを見たよ」

「うん。あのまま帰ったらどうなっていたか、今考えてもぞつとする。村上君は今でこそ体術がそこら辺の軍人より強かったけど、当時はそこまで強くなかったから、吉川君一人で押さえられるのか心配だった」

「：当時じゃ俺が一番弱かったしなあ」

「今は違うんだろ？問題ないさ」

「そしたら、あつという間に押さええたらビックリ。でも、腕に血が付いてるのを見たとき、物凄い不安に襲われた。気が付いたら、彼の腕をつかみ、怪我がないかみてみたわ。：結果それが変態のだった時はほっとしたよ」

「あんな破れかぶれの攻撃、当たってたまるかっての」

「普通はそれが難しいのよ？破れかぶれの攻撃って見極めるの難しい」

お酒を飲みながらかのせい、三人の顔は真っ赤であった。

「まあ、そこからはさつき聞いた通り、憲兵が来てそいつを連行していったわ。でもこれで終わったわけじゃなかった」

「それがあの鬼の話に繋がる、ということか」

「背後から暴徒鎮圧用のテイザーガンでやられたからね。気が付いたら手足を縛られていた。それからは酷かったわ、無理やりキスするわ、殴りつけてくるわ、最後には私を犯そうとしてたもの」

「：そんなことまでされていたのか」

悲痛な顔で聞いていた提督であったが

「でも、その最後のギリギリで貴方は間に合ってくれた。私にはそれが嬉しかったわ」

とにっこり笑っていた。

「でも、そいつを殴り飛ばした後私を助けようとしてくれたけど、彼も私に危害を加えるんじゃないか、そういう風に考えてしまったの」

「だがそれは。」

「仕方の無い事かもしれない。でも助けてくれたのにそんなことを考えてしまったのも事実だよ。暴れてたりしてたしね」

「でも彼はそんな私を助けてくれた。落ち着くまで抱きしめて『大丈夫だ。もう大丈夫だから』と言ってね」

「落ち着いた後、急いで逃げようとしたけどそのとき彼が『伏せろッ！』と言ってド突いた。その時だった。銃声が聴こえたのは」

「彼を見てみたら地面に倒れかけてたわ。服もあつという間に血で真っ赤になり、地面にも血がポタポタと落ちていた」

「でも、彼は倒れなかった。彼が見ている先を見れば、地面に倒れていたはずのソイツが拳銃を彼に向けていた」

「彼に拳銃を向けながらソイツは言った」

「あの発言だな」

「あの時、私は彼を助けようとした。もしかしたら、不意をつけば奴が持っている拳銃を奪えるかもと。そうしようと行動に移す前に彼が動いた」

「獣のような叫び声をあげながら、拳銃を持っている腕をへし折り、その後膝を足で叩き折った」

「壁に叩きつけて、凄まじい殺気を出しながら拳を握ったのを見たとき、私は彼を止めたの」

「」

「彼に殺人を犯して欲しくなかったから。ただその一心で」

「その思いが届いたのか、そいつを地面に落として彼はそのまま倒れたわ。その時よ、村上君と憲兵、そして医師が入ってきたのは」

「失血が多くて助かるかどうか分からない、と医師から言われたとき、視界が一瞬で灰色になったわ。女性憲兵から色々聞かれたけど、全く覚えてない。気が付けば彼が寝ているベッドの横にいたわ」

「彼が意識を取り戻すまで五日掛かった。その間私は彼が意識を取り戻すまで、祈りもしない神に祈ったわ。彼をどうか助けて、と」

「意識を取り戻した時、私は泣いて喜んだわ。今思ったら恥ずかしく感じてドン引きするぐらいね」その時かな。私が彼に恋してるのを自覚

したのは。少し真面目に喋っちゃったねー」

「恥ずかしそうに、でも嬉しそうな顔をしながら彼女は言った。

「一方提督はと言うと

「」

「うっは、すげえ顔が真つ赤だブベラッ」

「余計な事は言わんでいいッ」

「ア”ダダダダッ!?”」

「村上の顔をアイアンクローのようにギリギリとかましていた。

「提督つてもしかしてタラシなんですかね?」

「もしかしなくてもタラシじゃないかな。あでも当時浮いた話も無かったし違うのかも?」

「今だつたら増えそうですね。無自覚みたいですし」

「ということは告白したんデスカー?」

「いや、してないんだー」

「「え?」」

「告白すると、そのまま彼に依存しそうだったからねー。告白するのは全てが終わった後にしようかなと」

「その問題って何ですか?」

「それはナイシヨってね」

その後は彼の話を肴にしながら六人で飲みあつてたのだった。

その後、夜明けが近くなったので「ここらでお開きにしようか?」と言って潰れている加賀と金剛を背中にしよつて店を出た。

「全く、酔いつぶれるまで飲んでどうすんだ」

「手伝いましょつか?」

「提督の横を歩いてきた青葉が聞いてきた。

「頼めるか?」

「頼まりましたー。では加賀さんはお任せください」

「頼む」

「加賀を青葉に任せて一緒に鎮守府まで歩いていると

「提督」



「何だい？」

「楽しかったですか？」

「？ああ、楽しかったが」

「次も参加していいですか？」

「あー、どうだろ。二人がオーケーしてればいいけど」

「あ、ソコんところは大丈夫です。アドレス交換しましたし」

「いつの間にしたんだ」

「因みに金剛さんや加賀さんもしましたよ？」

「早っ!? 本当いつの間にしたんだ!？」

誰もいない道を歩きながら青葉と喋っていると

「こういう時間って無かったですねー」

「いきなりどうした」

「いや、こういう風に提督と喋りながら歩くことが、ですよ」

「…そういう無かったな」

「…もし嫌じゃなければ、時々青葉と一緒に歩きますか？」

「そうだな。それもいいかもしれん」

気が付くと鎮守府に到着していた。

「じゃあ青葉は加賀を空母寮にお願いねー」

「はい、それではまた」

青葉と別れ、戦艦寮に向かっていると

「何だ、貴様か」

「那智か。どうした、この時間に」

「何、早く起きたからその周辺をブラブラしていただけさ」

「そうか」

「・貴様、酒臭いぞ」

「さっきまで飲んでいたしな。後ひとつ頼みたいことがあるんだが」

「背中にしよっている金剛を戦艦寮に連れて行って欲しい、だろう？」

「何故分かったし」

「伊達に貴様の艦隊に所属している訳じゃない、ということさ。では

私がやっておこう」

「頼む」

金剛を那智に頼み、夜明けの太陽を見ながら提督は思った。  
(この幸せな時間が、ずっと続くようにしないとな)  
提督は新たにそう思った。

## 07 演習回 その一

「演習の対戦表が来た?」

ある日の昼頃、提督は加賀にそう聞いた。

「ええ、つい今しがた大本営から来たわ」

「…まさか五連続やれという訳じゃないだろうな。前回それをやって酷い目にあつたんだぞ」

「大丈夫よ、今回は横須賀や佐世保からも演習に参加するそうだから、二日に分けて実施するそうよ」

「(ホツ) そうか」

安心してその対戦表を見て

「げっ」

「?。どうしたの?」

「…三戦目の相手がメンドクセエのがいるんだよ…」

「…まさか」

「そのまさかだ。あの悪名高い呉山提督だよ」

呉山はタウイタウイ所属の提督だが、その余りにも酷い戦法で有名になっている。

その戦略とは——捨て艦戦法だ。

捨て艦戦法とは、早い話が練度の低い艦娘を身代わりに行っている戦法だ。大破進撃は当たり前。疲労なんぞ知った事では無いと言わんばかりに出撃を繰り返す。ブラック鎮守府と呼ばれるのも納得の行為を繰り返しているのだ。

似たもので潜水艦を使ったデコイもあるのだが、少なくとも轟沈させるような事は滅多に起きない。…誤っての進撃か提督自身がかかった上で進撃を宣言しない限りではあるが。

更にこの呉山は、自分の失敗を相手のせいに行ったり、相手を陥れたりと黒い噂が絶えないのだ。

「嫌だなー。こいつはホントにめんどくさいんだよ」

「変更は?」

「大本営の決定だろ? 変更は効かないさ」

「…絶対逆恨みされますね」

「…この試合だけわざと負けようか本気で悩むわ」

因みにわざと負けるとペナルティが発生するが、ペナルティ喰らってもいいからコイツとだけは戦いたくない、という考えでいっぱいであつた。

「それ以外はちゃんとした提督が多いな。中にはエリート…てこいつらが横須賀と佐世保の提督か」

「構成も戦艦2、空母2、重巡1、雷巡1という構成ね」

「まあ、前日まで変更可能だしな。当てにはできんさ」

「中には潜水艦オンリーの構成もあるわね」

「そいつらには五十鈴の部隊に任せるさ。対潜水艦じゃあいつら以上の部隊はウチの鎮守府にはいないしな」

仕事をこなしつつ、演習当日の構成を考えていた提督と加賀であつた。

演習当日。

「なんかお祭りみたいですわねー」

「まあ、各国からいっぱい人が来るしな。お祭りにもなる。」

提督は吹雪と一緒に演習場近くの町で食事をとっていた。

「たしか、アメリカやイギリスも見に来るんですけどっけ？」

「ああ、アメリカもイギリスも激戦区だからな。現代兵器じゃ限界があるのを知ったのか艦娘計画を立ち上げているんだそうだ」

「確か現在成功しているのは…」

「日本とドイツだな。と言ってもほぼ日本だけと言っているのかもしれないが。アメリカとイギリスは日本の艦娘の戦闘データを欲しがっている。といってもわざわざスパイを送ってそれがばれた時、両国の関係を悪化させたくない。だから演習が時々出るのさ」

「そっか。演習ならスパイを送らずともそれ相応の立場・階級がある人なら見る事が出来る…」

「それに、この演習は提督や艦娘にもメリットはあるしな。」

提督は上層部の覚えが良くなる。艦娘は練度が上がる。win—  
winだ」

そんな感じに喋っていると、一人の男が近づいてきた。

「おい、おまえ」

「はい、何でしよう?」

吹雪が訊いてくると男は

「お前じゃない、邪魔だ」

と突っぱねた。

「…それが人に対して聞く態度かね?」

「けっ、そんなの知らんな。そんなことよりお前だお前」

「お前じゃない。俺には吉川という名前がある」

「ふん、おれは呉山だ。アンタに提案がある」

「提案だ?」

「ああ、そうさ——ここで死んでくれねえか?」

そういうと男——呉山は腕の袖に隠していたナイフを提督に突きつけようとした。だが

「莫迦か、貴様は」

腕でナイフを掴み、バキンッ!とナイフをへし折ったのだ。

「なっ!?!」

「…こんなするという事は、あれか?——死にたいのか?」

提督から発する身も凍えるような殺気に周りはそこから急いで離れた。

吹雪はあまりの出来事にフリーズ。対応できなかった。

「チッ!」

呉山は舌打ちをし、すぐにそこから離れた。

「フンッ、その程度の動きで殺せると思ったのかねえ」

「…ハッ!?!て、提督!大丈夫ですか!?!」

「ようやく再起動したんか…。まあ仕方ないけどさ」

「手、手から血が、血が出てます!?!」

「まず落ち着こうか?」

テンパっている吹雪を如何にか落ち着かせ、演習会場の施設に急い

で向かった。

「それにしても、まさか直接こういう行動に出るなんて…」

「普通はしないからな、こんなのは」

「急いで憲兵に知らせないと」

「知らせても無駄だよ。あいつの親は海軍中将だ。そんな事実を握りつぶすさ」

「そんな!？」

「だが、気分が変わった。吹雪、加賀と長門を呼んでくれ。大至急だ」

「は、はい!」

提督の命令を受けた吹雪は急いで加賀と長門を呼びに行った。

「…上等だ」

ぽつりと、

「こんなことをしてただで住むと思っっているなら——」

「それは大きな間違いだと、思い知らせてやる…!」

殺意と怒りをかき混ぜた大きな感情が、提督の胸を焦がした。

## 07 演習回 その二

「初めの相手は、潜水艦か…」

対戦表に書いてある相手のチームを見た提督がそう言った。

「潜水艦なら、五十鈴さん達の部隊が適役ですね。あと武装も」

「だな。しっかし何で潜水艦オンリーにしたんだこのチーム？」

吹雪と一緒に言いながら、確実に敵を叩きのめす部隊を演習用の海域に派遣した。

「さてと、相手はどうでるかな」

旗艦、五十鈴改二。

「気を付けて。酸素魚雷だと見つけにくいわ」

二番、夕張。

「それにしても、潜水艦狩りとはね」

「私たちの得意分野ではあるが、四対六か…」

三番、ヴェールヌイ

四番、朝霜改

以上の四名で潜水艦を撃破するのが、一戦目の戦いであった。

「確か、相手の旗艦は伊58よね？」

「ええ、運も高いですし、夜戦に持ち込まれたらかなり危険だと思う」

「伊58だけじゃなく、伊19や伊401もいる。いずれもほつとく訳にはいかない敵だ」

「まあ、いつも通りやるだけよ。最初の魚雷攻撃を避けきいたら後はこっちの物だしね」

「いずれにしても、最初の攻撃を避けないと話にならねえがな」

そう言っていると、三式水中探信義（三式ソナー）が進行方向から三時の方向に魚雷の音と潜水艦の潜水音を捉えた。

「おいでなすったわ。各員散開！。夕張は私と一緒に爆雷を撃ちこむわよ！。ヴェールと朝霜は突撃して！」

「了解っ！」

魚雷を回避した後、五十鈴と夕張は爆雷を遠くに撃ちこむための準

備をしている間、ヴェールヌイと朝霜は敵潜水艦にめがけて突撃していた。

「無駄だね」

「オラオラ、逃げ回りなア！」

三式ソナーの効果で敵の位置が分かり、二人は敵のいる位置を通りながら爆雷を投下、この攻撃で潜水艦三隻を大破、轟沈判定が出た。

「くそ、伊58と伊401には当たらなかったか！」

「あとはあの二人に任せよう。伊19は仕留めたんだから」

悔しがる朝霜を宥めるヴェールであった。

一方、敵旗艦の伊58はというと…

(でちーっ!?!。何で対潜能力の高いのぼっかでちかーっ!?!)

爆雷の爆発から如何にか逃げつつ、生き残った伊401と伊8と共に雷撃準備をしていた。：目から滝のように涙を流しているが。

しかし、彼女の不幸はまだ終わっていないかった。

「よし、準備完了!。そっちは!?!」

「こちらも出来た!」

「なら、生き残った敵に撃ち込むわよ!」

「了解!」

五十鈴は20cm連装砲とは別の、グレネードランチャーのような形をした銃を二丁使い、山なりに爆雷を撃ち込んでいた。

夕張はというと、主砲を積んでいるところに同じグレネードランチャーのような物を四つ使い、五十鈴と一緒に爆雷を撃ち込んでいた。

結果、馬鹿みたいな数の爆雷が、伊58達を襲っていた。

((あ、これ終わった)) / ((お、)) /

次の瞬間、凄まじい轟音と共に水柱が立ち、伊58達三隻は大破、轟沈判定が出た。



「相変わらずの対潜能力だなあ」

「確か、五十鈴さん達って鎮守府周辺にいる潜水艦を…」

「まあな。結果、対潜水艦ならお手の物だ。…それ以外となると厳しくなるが」

そう言い、提督は次の対戦相手の戦力を確認した。

「次は正規空母と重巡で構成されている艦隊か」

「相手は横須賀から来たエリートです。どうしますか？」

「二航戦と川内、那智、羽黒、鳥海を使う」

「…わざわざ相手と同じ構成にしなくてもいいんじゃないですか？」

「なるべく次に戦う相手に手の内を見せたくないからね」

「…次は確か」

「ああ、あの糞ツたれだ」

少し口調が荒くなつて答えてしまった提督。吹雪は少し気になつて聞いてみた。

「あの、提督…？」

「あ、ああ。すまない、思い出すと軽く殺意が…」

「気持ちは分かりますけど駄目ですからね!?!——じゃなくて」

「長門と加賀に言つた事か？」

どきりとしたが提督は全く気にしてなかったようであつたが

「ごめんけど、その時まで待つてくれないかな？」

「…信用、出来ないんですか？」

「違う違う、そうじゃない。君に我が艦隊の本気の力を見せた方が良いと思つてね」

「…本気？」

「そう。——本気の、ね」

そう言い、提督は次の試合の映像を見始めた。

「敵空母つてあれ…」

「雲龍さんに天城さんです、ねえ…」

飛龍と蒼龍は彩雲を使って、敵の艦隊を確認していた。

「正規空母が相手とはな。ふっ、腕が鳴るな」

「と言っても、重巡もいるみたいですから、気を付けないとこつちがやられますよ」

指をポキポキ鳴らしながら笑っていた那智であったが、鳥海がそれを窘めた。

「み、皆さん、戦闘準備を。飛龍さん、蒼龍さん。お願いします！」

「分かったわ。第一次攻撃隊、発艦！永友隊、頼んだわよ！」

「攻撃隊、発艦始め！江草隊、永友隊に負けないようにね！」

二人はそう言うのと、弓を使って戦闘機を発艦させた。

しかし、相手もさることながら、中々制空権が取れないでいた。

すると何機かこちらに向かってきた。

「機銃掃射、始めてください！」

旗艦の羽黒が号令し、機銃掃射で敵の艦爆や艦攻をある程度撃ち落とせたが、それでも打ち落とし切れなかった機体が、那智や鳥海に牙をむいた。

鳥海は回避できたが、那智が避けきれず被弾。しかし幸いなことに服の一部が破れただけですんでいた。

一方相手の損害はというと、雲龍が中破、旗艦の加古が大破、轟沈判定であった。

「さつきはよくもやってくれたな！」

那智は天城めがけて砲撃を開始、あらかじめ飛ばしていた零式水上偵察機による着弾観測を使い、初弾で大破にさせた後、雲龍を守っていた衣笠に砲撃した。

鳥海は、プリンツ・オイゲンを合流させないように砲撃を開始、如何にか分断に成功したが、さすがドイツの船というべきか、オイゲンの必至の攻撃が当たり相討ちになった。

羽黒と川内は、飛龍達を守りつつ那智の援護をしていたが、衣笠が一枚上手だったのか、那智を大破させた後、羽黒めがけて突撃したのだ。

「私を、甘く見ないでよね！」

川内が衣笠の前に出るが、

「邪魔よ！」

「なあっ!？」

川内を一撃で大破、轟沈判定がでた。

しかし、羽黒はその攻撃によって生じた隙を見逃さなかった。

「当たってえ!!」

羽黒の攻撃で衣笠は大破、轟沈判定であった。

その後も飛龍達の攻撃で古鷹、筑摩を大破させた。

「ギリギリのA勝利、かな？」

「演習が終わった後の那智さん、物凄く悔しがってましたね」

「三対一で追い詰めたかと思ったら、自分が轟沈判定喰らってるんだからなあ…。相当悔しいだろうよ」

「しかし羽黒さん、立派に指揮出来たんですね」

「…さりげなく先輩を貶めるような発言はしない方が良いでしょう」

「す、すみません」

次はあの呉山戦。どのような結果になるのか？

## 07 演習回 その三

「提督、準備できたぞ」

「長門か」

「あ、長門さん」

三戦目の呉山戦を前に、全ての準備が終わったことを知らせに来た長門。

装備も46cm三連装砲と試製40cm三連装砲を装備している。

「それにしても、提督を怒らせる奴がいるとはな…。阿呆の極みだ」

「まさかナイフで刺そうとは思いませんでした…」

「それはしようがない。普通の神経ならそのような行動はしないからな。…阿呆でもない限り」

「…もしかして長門さん、怒ってます?」

「当たり前だ。提督を傷つける輩はこの手でぶちのめしたい気分だしな。提督の命令で我慢しているだけだ」

「だが、奴の艦隊は本気を出すに値する娘がいる。…まさか大和や武蔵、大鳳迄いるとはな…」

「どちらにせよ、本気を出していいのなら遠慮無く叩きのめすだけさ」

その時、ドアをバンツ!と音を立てて開けた者がいた。呉山だ。

「よお、そいつらが手前の最高の戦力か?」

「貴様、無礼だぞ!!」

「ああ?手前に聞いてねえんだよ」

「貴様…!!」

「落ち着け、長門。それからさっきの答えだが答える義理は無いが?」

「ふん、まあ?手前がどんな艦娘を使おうが?俺の大和に勝てる訳やあねえんだがなあ!けひやひやひやひや!!」

「…言いたいことはそれだけか」

「…あん?」

「ならばごつちも言わせてもらおう——とつとと失せろ、親の七光りに頼ることしかできねえド三流風情が」

「…手前、いい度胸だ…!そんなこと言って無事で済むと思うなよ…!」

呉山はそう吐き捨て、ドアをまたバンツ！と閉めた。

「…親の程度が知れるな。上層部は腐ってんのか」

「しかもマナーがなっていないとはな…。あんなのでよく提督が出来る」

「ででも、大丈夫なんですか!?あの呉山って親が中将って…!」

「そこん所は問題ない。そろそろ来るだろうしな」

「?」

吹雪と長門が頭の上に?マークを浮かべていると、ドアをノックする音がした。

「入れ」

「失礼しまーす」

「どうだった?」

「真つ黒でしたねー。叩けば叩くほど埃がバンバン出ますよ」

「…まさか提督、青葉に仕事を…?」

「まあな。情報収集能力は極めて高い上に、隠密行動もできるしな」

「大変でしたよー。分かっていると幸いですけど…」

「ほら、間宮のアイスクリーム券だ」

「いやったつ。中々手に入らないんですよねーこれ」

「さて、これで奴の心臓部分をがちり握った」

「あとは、私たちが勝てばいいんだな?」

「ああ、——全力で叩きのめせ。いいな?」

「了解だ。世界のビッグセブンの名前は伊達ではないことを思い知らせてやる」

長門は口元を上げ、部屋から出た。

「吉川提督の第一艦隊か…」

「どうした大和?そんなことを言い出すとは」

呉山艦隊の旗艦、大和と二番、武蔵は演習用の海域に向かっている最中のこと。

「いや、確かトラック諸島奪還作戦とその防衛戦に活躍した艦隊が確

か吉川提督の第一艦隊つて言う話を聞いたことがあったからね…」  
「だとしても、我ら大和型二隻、大鳳迄いるのだ。敵ではないよ」  
「…だと、良いのだけれど」

大和の胸には、嫌な予感が渦巻いていた。

「総員、準備できたか」

旗艦、長門

「いつでも」

二番、伊勢

「こつちもだよー」

三番、北上

「準備完了です！」

四番、秋月

「とつくに完了してます」

五番、加賀

「同じくよ」

六番、瑞鶴

「では、——提督に勝利を、敵には恐怖を。総員、最大船速！いくぞオ!!」

「」「応!!」「」「」

長門の号令を皮切りに、敵めがけて突撃した。

「来たわね…」

「ふん、ただ突撃すればいいというものでは無い。大鳳！」

「了解！攻撃隊、発艦せよ！」

大鳳の右手に握っているクロスボウから攻撃隊が発艦、長門たちにめがけていった。

しかし、ただ漠然と敵めがけて突撃したのでは無い。

「——加賀！。瑞鶴！」

「分かってるわ。——行きなさい、烈風改」

「行って、虎鉄隊！」

加賀の最大スロットから烈風改が、瑞鶴からは零戦52型——撃墜数を示す桜がびつしりとペイントされた零戦——が発艦した。

「撃ち漏らした敵機は私に任せてください！」

「私もやるよー！」

秋月と伊勢の対空攻撃により敵の艦爆、艦攻は手を出せず、大したダメージを負わせることが出来なかった。

しかし、こちらも相手にダメージを負わせる事が出来ず、状況は変わらなかった。

「まだ私のターンが残ってるよー！」

航空戦が終わり、雷巡の攻撃により高雄が大破、轟沈判定が出た。

「たかが一隻の差、大和型二隻でカバーできるー！」

大和と武蔵が旗艦の長門を押さえようと動き出した時、加賀と瑞鶴の艦爆攻撃で分断された。

「しまっ!?!」

「ちよーつと待った。貴女の相手は私よ」

武蔵の相手を伊勢が

「一対一で勝負だ、大和！」

「一対一で私に勝てるんでも!?!」

大和の相手を長門が

「あの二人の邪魔だけはさせないよー」

「艦爆だろうと艦攻だろうと、私が全て打ち落とします！」

「いい的ね、貴女」

「特訓の成果、アンタ達に見せてやるわ！」

残りの敵を加賀達4隻が相手をする。

一対一のタイマン勝負で勝ち、相手の気力を下げ、有利な状況に持ち込む。これが吉川艦隊お得意の戦い方であった。

「くそっ、どけえええっ!!」

武蔵が伊勢に砲撃するが

「へいへいどうしたの!?!。そんなへっぴり腰じゃ当たらないわよ!?!」

「くそ、なぜ当たらない!?!当たれば必殺の威力なのに！」

「そらそらそらあー！」

武蔵の攻撃が全く当たらず、伊勢の攻撃が全弾命中という事態に武蔵は混乱していた。

(何故、なぜ当たらない!?性能はこちらが上なのに、何故!?)  
混乱している武蔵だが、攻撃を続けると隙が見えた。

「もらったあー!」

武蔵は伊勢に砲撃し、その弾が命中した、かに思えた。が、

「——無駄よ」

キーンツ!、と

武蔵の砲弾を刀で縦に切ったのだ。

「——何イ!?!」

「隙あり!」

驚きの余り砲撃を止めた武蔵だったが、その隙を伊勢は見過ごさなかつた。

そのまま懐に飛び込み、ゼロ距離による砲撃と刀による斬撃で武蔵は大破、轟沈判定がでた。

「武蔵さんが!?!」

「そんな!?!」

武蔵がやられた知らせを受けた敵は、まさかと思った。あの武蔵がやられる訳がないと。しかし——

ドオンツ!!

「きゃあー!」

伊勢の長距離砲撃で愛宕が大破、轟沈判定とまではいかなかったが、事実上轟沈であった。

「あんな距離をどうやって…!?!——まさか」

大鳳が空を見上げると、雲の隙間に瑞雲を確認した。

(着弾観測…!?!でもそれでも当てることは難しいはずなのに!?!)  
「しま——」

そう思っている間に長良が回避に失敗し大破、轟沈判定が出た。

(くっ、大和が長門に勝てばギリギリ波はこちらに来るはず!それまでに耐えるだけです!)



大鳳は大和が勝ってくれんことを、願っていた。

## 07 演習回 その四

「どうやら武蔵はやられたようだな」

「でも、貴女を落とせば勝ち目はある！」

長門と大和、両者の主砲が火を噴きながら応戦するも、両者とも決定的なダメージを与え切れずにいた。

しかし、大和は冷静に長門の行動を見、避けていた。

（流石は帝国海軍旗艦、ビッグセブンの称号を得た船の化身……！。でも——）

ガアンツ！と、長門の砲撃を主砲の一番固い部分で受け流しつつ、（こちらも帝国海軍最強の、世界一の戦艦の船！。その誇りに賭けて負けられない！）

お返しと言わんばかりの、46cm三連装砲の砲撃を撃ち返した。

しかし、長門は余裕の顔でその砲撃を回避、大和の足元めがけて撃った。

（成程、流石大和だな。装甲も私以上の硬さだ）

だがな、と

（それでも、私には届かない！）

慢心でもなく、油断でもない。経験が、その戦いを物語っていた。

「くっ!?足元が……！」

長門の砲撃で足元が安定せず、狙った通りの所に当たらず焦っていた。

そして、その心の焦りを見過ごす長門ではなかった。

「どうした!?その程度じゃ私には当たらないし効かんぞ！」

「黙りなさい！」

「そんなへっぴり腰で撃つとはな！そんなんじゃ重巡どころか駆逐艦すら倒せんない！」

「黙りなさいと言っているでしよう!？」

長門の挑発に冷静さをなくす大和。その砲撃が徐々に単純化してきていることに全く気付いてない。

「その程度の事しかできないのなら、とつとと負けを認めるんだな！」

「…なんで、何で当たらないの!? 私達大和型の攻撃は一撃必殺! それなのに数発耐える貴女は、一体…!」

「決まっているだろう? —— 貴様の攻撃はスキルであつて、アートのではないからだ!」

「意味が分からないわ!」

「それが分からないから、貴様はそこで止まっているんだ! 攻撃を当てるなら——」

長門は右横に装着している試製40cm三連装砲を構え、

「——これぐらいのことはしなければな!」

ドオンツ!!と、大和の左の主砲を支えているジョイント部分に命中させた。

その余りの衝撃に一瞬ではあつたが気絶した大和だったが、すぐに目が覚め、

「この、程度でえええええつ!!」

——雄叫びをあげながら、残った右の主砲を撃ちながら長門めがけて突撃した。

「くっ!」

この大和の行動で、長門は右横の試製40cm三連装砲、左前の46cm三連装砲が使用不能、中破になった。

しかし——

「この長門を——」

こちらも大和めがけて突撃し、

「——悔るなアアアア!!」

残った右前に装着している46cm三連装砲を、大和の腹に当て、そのまま砲撃した。

「がはあつ…!!」

「まだ終わつてないぞ!」

そのまま大和の左腕と胸倉を掴み、

「ぜえええい!!」

ダパアアアン!!、とそのまま海に叩きつけた。

その衝撃により脳ミソが揺れ、大和は気絶。轟沈判定となった。

「そんな、あの大和まで…!?!」

大和の轟沈判定に信じられない大鳳。彼女の勝利を信じ限界まで粘ったが、体力も矢も尽き、限界を迎えていた。

「どうするー?。ここで負けを認めるー?」

北上の一言に心が負けそうになった大鳳だったが、

「…ごめんなさい、ここで負けを認める訳にはいかないの」

サレンダーを認めず、最後まで粘ろうとした。

「…そっか。なら、恨みっこ無しだよ」

最後は北上の五連装酸素魚雷で大鳳が大破。轟沈判定となった。

「くそ、あの役立たずの糞共が!!」

呉山は、目の前にあるテーブルを蹴倒し、その上に積んでいた資料をぶちまけていた。

「せつかく俺 t u e e e !!な事が出来ると思ったのに、親父を騙して資料をちよろまかしたというのに、何で長門ごときに負けるんだ! くそ、くそ、くそ!」

棚の上にあった花瓶を地面にたたき落とし、椅子を破壊するその姿は哀れであった。

しかし、彼の不幸は終わらない。

「そこまでにしてもらおうか」

男達が呉山に近づき、声をかけてきた

「あゝ あ?! 誰だ手前ら!」

「私達かね? 私達はこういう者だ」

男は、腕についている腕章を見せた。そこに書かれていたのは、

M P

の文字が書かれていた。

「手前、憲兵か!？」

「そうだ。貴様には数々の容疑がかかっている。ご同行願おうか？」

「けっ、俺は中将の息子だぜ？そんなことはできや——」

「その中将から伝言を預かっています」

「…あ？」

「『貴様とは、親子の縁を切る』だそうです」

「……………」

あまりのショックに口をパクパクさせる呉山。その横に屈強な男二人がその横に立ち、ガツチリと身柄を確保。連行されていった。

一週間後。

「おーおー、新聞に載っちゃってるねー」

「…この中将、可哀そうですね。ドラ息子が原因で辞めさせられる羽目になるなんて」

「まー可哀そうではあるが、この責任は親の責任。それに続けたとしてもこのことでまた槍玉にあげられる。ここらで辞めた方が傷は浅く済むさ」

今朝の新聞の見出しに中将の引退、及びその息子の悪行がデカデカと載っていた。

実は演習が始まる前に、青葉が調べた情報を憲兵隊に知らせただ。

結果、呉山は逮捕され、その後のキツイ取り調べにあっさりゲロしたことにより、多くのブラック鎮守府を運営した提督が逮捕、又は指導を受ける事態になった。

だが、そのせいで翌日行はずだった二日目の演習が取りやめになり、多くの提督がブツクサ文句を言いながら自分たちの鎮守府に戻っていった。

「それにしても、憲兵隊の行動が早かったな。翌日あたりになると思ってたんだが」

「前々からブラックリストに載ってたみたいで、監視を付けてたみた

いでしたよ？青葉が言っていました」

「…アイツのネットワーク一体どうなってんだ…」

因みに、あの戦いがネット上に流れ、一部の人から護国の鬼艦隊と呼ばれたそうなの。

「臭ッ!? な、何だこの臭い!？」

ある日の朝のこと、提督がグーグーと眠っていたら突然筆舌し難い物凄い臭いが提督の鼻をおそった。

その臭いの破壊力は、涙が止まらず鼻血が出るほど。一瞬BC兵器か催涙ガスかと思ったが、BC兵器なら臭い何ぞしないし催涙ガスなら探知機が作動するはずと思いだし、取り敢えず事態を把握すべく、鼻にティッシュを突っ込み、ガスマスクを取りに向かおうと行動したその時だった。

コンコンとドアをノックする音が聞こえ、提督が返事をする前に部屋に入ってきた者がいた。

「提督、大丈夫ですか!？」

「吹雪か!？」

「はい！取り敢えずコレを届けに」

そう言つて渡されたのはガスマスク。どうやらわざわざ届けに来てくれたようだ。

「ああ、済まない。助かった!」

提督はそう言い、ガスマスクを装着。ホツとしたが、新たな疑問が浮上した。それは、

「何で吹雪はこんなのを配っているんだ?」

「あ、それはですね、私、時雨と清霜と一緒に朝練してるんですがいつも通り早く起きたら変な臭いがしたんですよ。気になってその臭いの元を探してみたら厨房からしたんです。そしたら臭いが急に強まっつて」

「今の事態になった、と」

「はい、そして直ぐにその場から離れて窓を開けたんですが、臭いはどんどん強くなってきたのでどうしようと思つたら時雨が『ガスマスクを持ってきた！吹雪と清霜は皆に配つてきて!』と言われたので配つてきたんです」

「成る程ね」

ここまで聞いた提督だが、ふと思った。

「…犯人の姿は？」

「…比叡さんでした…」

「納得した」

高速戦艦、金剛型の2番艦。戦場では非常に頼りになる娘なのだが、物凄い弱点があった。

それは料理ベタ、俗に言うメシマズな料理を作るのだ。以前あったのはご飯を石鹸で洗ったり、塩と砂糖を間違えて偉い塩辛いホイップクリームを作ったり、昔のカレーって蛙を使ってたんですねと言い、鎮守府の近くに生息した色がヤバげな蛙を入れようとしたりと料理のセンスが全く無かったのだ。

それに加え味見も全くせず、自信満々で出してくるのだから恐ろしい。そして自信満々に出すものだから大丈夫なのだろうと手を出し、轟沈する娘までいた。

因みに提督は何回もその地雷を踏んでいたりする。

「なーんで一人で作ろうとしたんだ？」

「さあ？」

「…どちらにせよ食堂は数日閉鎖だな。まずは臭いの元を断ち切りに行かないと」

「食堂のどうします？」

「あー、…一人でやっとくわ。吹雪は皆に『各自朝御飯は自由にとること。あと比叡、オハナシがあるので来るように』と伝えてくれ」

「了解です」

提督が吹雪に用事を伝えたときだった。

「ヒエーーーーーッ!!」

と、比叡の悲鳴が聞こえたのだ。

「……………」

「ちよ、待って！榛名ちよつと待って!!コンクリートで正座は勘弁して!!」

「……………」

「霧島ちゃん!?ちよつと手をばきばき鳴らすの止めてー!?ちよつ拳骨



は止め——ミッヤ——!?!」

「……………」

「うゝ、痛い…。ン? ちょっと待って!?! 空母の皆さん殺意全開で詰め寄らないで!?! ちょっと首の襟を掴まないで——」

姉の威厳ゼロの情けない悲鳴を上げ、そのまま比叡の声がフェードアウトしていった。

「…大丈夫ですかアレ?」

「自業自得だし、それに手加減はするでしょ。…多分」

吹雪は比叡の無事を祈りながら、提督の部屋から出て行った。

「さて、ガスマスクを付けたとはいえ衣服に臭いがついたら不味いから、使い捨ての服を着たのは良いんだが…」

「うゝ、怖かったあ…」

(…比叡を呼び出したけど、コイツ大丈夫かな?)

「…よし、比叡行くぞ」

「…へ?」

「へじゃねえよ君がやらかしたことなんだから君も手伝わにや」

「ヒエー!?!」

「ほーれ行くぞー」

比叡の襟をがっしり掴み、ズルズル引っ張りながら食堂のキッチンホールの中に入っていった。

「あれだな。よし、中身を確認するぞ」

ガスコンロの上に有った鍋を見、確認しようとして中身を見てみると、

「……………なんだこれ?」

中身が青いナニカが入っていた。

火は入っていないのに泡がブクブク膨れ上がり、その泡が弾けると中から青い煙が。

トドメはそのナニカの具材。何かデカイ個体が入っている。

「…比叡、何を作ろうとした?」

「えーと…味噌汁?」

「何を入れた?」

「色々」

「取り敢えず突っ込むと味噌汁はワカメと味噌だけでも良いのよ?」

「えー、それだと面白くないですよ」

「味噌汁に面白さを入れようとするな!お前がその境地に至るのに50年早いわ!」

ギヤーギヤー言いながら鍋ごとビニール袋に入れ、そのビニール袋を土嚢用の袋に入れ、そしてその袋を大きい黒いビニール袋の中に入れ、それを外に持ち出し、地面に深く大きな穴を掘り、その穴にソレを入れ、埋めるといふ徹底的封印をしたのであった。

「ふう、封印完了」

「疲れたですー」

「……………反省してる?」

「反省してるんでジト目は勘弁してください」

そう言いながら、地面を掘ったスコップを元の場所に戻し、キッチンホールに置くだけの消臭剤を山ほど置き、

ふと時間を見てみればもう10時を過ぎていた。

「もうこんな時間か。朝飯食い損ねたな」

「ふえー、汗だくだしお腹すいたですー」

「…もうちつと姉としての威厳さをだな」

「え?威厳たつぷりじゃないですか?」

「威厳という言葉を百回調べなおしてこい。ほら、飯食いに行くぞ」

「お仕事は?」

「午後からやる。シャワーを浴びた後鳳翔さんのトコに行くぞ」

「わーい」

(…なんだかんだで可愛いと思ってしまう俺も俺だよなあ…)

軽くシャワーを浴びた後、提督と一緒にご飯を食べに行った比叡だったが、その後鳳翔さんからもガツツリ叱られ、スパルタ式に料理を覚えさせられたのであった。

「ヒエー!?!後何回包丁でジャガイモの皮むき終わるんですかー!?!」

「あと30個です」

「ビエーーーーー!!!」

「あら、提督さん。いらっしやい」

「おう、鳳翔のおすすめ一つな」

「はい」

食堂が封鎖されて昼飯が食べれなくなった提督は、鎮守府から少し離れた鳳翔の店に行っていた。

提督自身、夜はお酒を飲みに来るが、昼飯を食べたことがあまり無い。理由は鎮守府の食堂の方が近い上に将校クラスになると飯代が物凄く安くなるのだ。

しかし、前回の比叡の失態で暫く食堂が使えなくなった。町にあるレストランは遠い上に値段が高い。夜になれば屋台が出て安くて美味しい店も知っているが、生憎今は昼である。あとは消去法で鳳翔の店になったのだ。

「はい、鯛の煮付け定食ですねー」

「お、美味そうだな」

「と言っても、最近中々取れなくて…」

「本土でも滅多に出来ないもんなんー。ここではたまに捕れるが」

「最近では養殖でもして、海外にでも売りつけようとしてるらしいですからね」

喋りながら食べていると、翔鶴や瑞鳳がやってきた。

「提督、何でここに…てああ、そういえば食堂が…」

「そういう事。二人は何故ここに？」

「えへへー、私達ねー、ここで料理を学んでいるんだー」

「ほー、上手くいってるのか？」

「それがなかなかね…。卵料理は鳳翔さんに負けないぐらいなんだけど」

「私も煮付が少し…」

「たった一カ月でそこまでできたら上出来ですよ。普通はそこまで出来ないんですから」

「でも、川内さんは…」

「あれは生まれ持ったセンスね。掃除が難しい揚げ物でも苦としない性格だし」

「呼ばれた気がして」

「うわあっ!?!」

横から現れた川内に驚く翔鶴に瑞鳳。提督と鳳翔は店に入ってきているのを気付いてたのであまり驚かなかつたが。

「もう、驚いたじゃない」

「ゴメンゴメン」

「あら、いらつしやい川内さん。貴女は何にします?」

「アジの南蛮揚げで!」

「はいはい。ほら、そこの二人もやりますよ」

「はい」

鳳翔達三人はすぐに厨房に入り、調理を開始した。

「いやー、ここに来る前に食堂入ったけど玄関前でキブしたわー。アレ臭い取った後大変だよ?」

「その分ネズミも臭いで死滅するから問題ない…と良いねえ」

「ああ、そういえばその問題もあったね」

「猫のおかげでネズミの被害は減ったとはいえ、あいつら凄い勢いで増えるもんな。…そういや、本土では新しい猫もいるそうだが」

「へー、どんな猫なんだろう…」

「いや、どっちかってーとあまり良い方じゃなくなてな。水平の服を着た小さい女の子とその横を歩く猫を鎮守府内で見かけたらその日は良くないことが起きる…という話」

「ホラー系の話かあ…。あまり好きじゃないな」

「おい夜戦大好き」

「だって実体がないから仕留めないじゃん」

そんなことを喋っていると川内が頼んだ料理が運び込まれた。

「はい、お待ちどうさま」

「お、来たねー。おいしそー」

「確かに美味しそうだな。一口取り替えてみないか?」

「いいよー」

(まーたイチャイチャしてるよ…)

提督と川内の周りにいた住民が思わずため息をついた。彼らは日本語が分からないが周りの雰囲気ですぐに分かったのだ。

すると時雨がやってきて、

「やあ提督、ここに座っても良いかな?」

「時雨じゃないか。良いぞ座っても」

「ありがとう。鳳翔さん、いつものお願い」

(いつもの!?!え、時雨もしかしてかなりの頻度できてんのここに!?!)

提督の横に座り、まさかのいつもの宣言で内心驚く提督。それが分かったのか、

「別に昼だけならここに来てても問題ないでしょ?」

「あーうん、そうなんだけど…隼鷹もここに來るって話があったから大丈夫かなって」

「ふふっ、残念ながら一度困ったことになりましたよー」

「鳳翔さん!」

「そこんとこ詳しく」

「提督!?!何聞こうとしてるの!?!」

鳳翔の発言に慌てた時雨。気になったので聞いてみると更に慌てた。

「いや実はねー、隼鷹さんが酒瓶を持ったまま店に入ってきてねー」

「よし、隼鷹は後でオハナシ決定だ」

「ぶえつくし!むー、誰かが噂してんのかなー?」

「どうやらその酒瓶の中身を間違って飲んじやったみたいだね。その時の時雨が可愛く——」

「ワーワー!!ストップ!お願いだからストップ!お願い!」

「時雨、店の中で騒ぐのはいけないよ?」

「誰の所為だと思ってるの!?!」

ギャーギャー騒ぐ時雨を落ち着かせ、冷静になったところで時雨の料理も来た。

「はい、おまたせ」

「はあ、はあ、ノドが…ノドが痛い…」

「そらあんなにギャーギャー言ったらそうもなイテテツツ!？」

提督の二の腕をギリギリと力一杯、全力でつまんでいた時雨であった。

「全く、女性にそんなことを聞くななんて酷いよ」

「悪かったって。ほら、後で間宮のアイスクリーム奢るから」

「…約束だよ?」

(可愛いなあ…)

時雨の反応を楽しんだ提督と川内であった。

「よし、んじや、ここは俺が払っとくよ」

「えっ良いの?」

「そうだよ、悪いよ」

「良いの良いの、ここで女に払わせたら男が廃るからね。という事で鳳翔さん、会計宜しくー」

そう言つて提督は二人の伝票をパパッと奪い取り、そのまま会計に行った。

「…大丈夫かな?」

「…どうだろう、副収入でもあったのかも」

「どちらにせよ、こういう事はホイホイしてはいけないんだけどねー」

「川内さん、顔がにやけてますよ?」

「そういう時雨だって」

「おーい、会計終わったぞー」

「終わったみたいだね」

「だね。じゃ、いこっか」

「まいどねー」

鳳翔の店を出て、喋りながら間宮の店に向かう三人。

「そーいや、吹雪たちに的確な指示を出してくれてありがとな」  
「どうしたの」

「いや、あの臭い所でよくやってくれたねと思っただけ」

「別に大したことはしてないさ。吹雪も清霜も直ぐに行動できたからね」

「そーいや食堂っていつまで閉鎖なの？」

「臭いが完全にとれるまでだな。せめてガスマスクが要らなくなるまで」

「どうやって確認するの」

「キッチンホールの中でガスマスクを取って思いつきり吸う」

「……………」

「…うん、言いたいことは分かるけど、これしかないんだよね。有毒ガスなら探知機を使って出来るけど、アレは臭いだけだから…」

「もう比叡にやらせたらどう？」

「今でさえ鳳翔さんのところでスパルタに教え込まれてるから流石にな…」

「優しいねえ…」

そんなこんなで喋っていると、間宮の店に到着した。

時雨は抹茶、川内はソーダ、提督はオレンジのアイスを注文し、食べながら鎮守府に向かっていった。

「うーん、やっぱりアイスは美味しいわ」

「たまにはこういうのも悪くないねー」

「うん、そうだね」

そして、三人は鎮守府に着き、午後からの仕事に精を出した。

余談ではあるが、川内と時雨がキラキラ状態だったのに気付いた球磨と多摩と清霜が提督にアイスをおごってほしいと直談判をしたのは、また別の話である。



## 10 紅茶回？

「テイトクー、ティータイムにしませんカー？」

「…まだ三時だぞ」

食堂が解放されて数日たった日の事。提督室で金剛と一緒にせつせと書類仕事をしていたが、飽きたのか本当に紅茶が飲みたくなったのか、金剛が提案してきた。

「エー、大丈夫ですヨー」

「…この前の食堂封鎖で、中の食材が一部ダメになってそのための補給物資の要請を書いているんだぞ？なるべき早く終わらせにや」

「ソー、でもあまり根を詰めると良くないデスヨ」

そう言い合っていると、時雨と綾波が提督室に入ってきた。

「提督、3―2攻略完了。海域解放出来たよ」

「お疲れ、被害は？」

「響が大破、夕立と秋月が小破だね。それにしても戦艦の装甲は厚いね。夜戦以外じゃ歯が立たない」

「改二でも油断できないですからね。新人には残心が出来るように訓練カリキュラムに組み込んだ方が良くいかもですね」

「ん、分かった」

「お二人ともー、紅茶はいかがデース？」

「…いいいの？（いいんですか？）」

「良いのデース。提督も休憩させなきやですし、お二人もティータイムデース」

「…ハア、やれやれ」

ボヤキながらも、嬉しそうに話す三人を見て（…まあ大丈夫だろ）と思っただけであった。

「テートクー、アッサムとダーズリン、ドッチが良いですカー」

「アッサムで」

「OK、時雨達はディンブラですネー」

時雨達は金剛の言っていることが分からず、頭に？マークを浮かべていた。

それを見た提督がこう言った。

「紅茶の名前だよ。緑茶にも色々あるように、紅茶にもいろんなのがある。」

例えば、アッサムだとクセが少なく芳醇な匂いがする。

デインブラだと、バラの匂いに似たのと、マイルドな味わいだ」

「色も違いますからネー。アッサムだと澄んだ濃いめの紅。デインブラだとオレンジにナリマース」

「へー、そうなんだ」

「一口にお茶と言っても種類が多いからな。烏龍茶でもピンからキリまである」

「…えーと、思ったんですが…」

「何だ？」

「緑茶と紅茶の違いって何ですか？」

「緑茶は茶葉を積んだ直後に加熱させたもの、紅茶は完全に発酵させた後、乾燥させたものだな」

「因みに紅茶は便秘に良いのデース——あ、そうデース！」

そう言うやいなや、金剛は提督室から出て行った。

「…一体どうしたの？」

「スコーンでも取りに行ったんだろ」

「スコーン？」

「ビスケットみたいなお菓子さ。美味しいぞ？」

しばらくすると、金剛がスコーンとジャム、クリームチーズをトレイに入れてやってきた。が

「…金剛」

「何ですカー？」

「気のせいじゃなければスコーンの量が多すぎる気がするんだが」

「……………ア」

「…もうすぐ晩御飯なんだからそんなに持ってこなくても良かったのに…」

「ア、アハハハ」

苦笑いを浮かべる金剛を見て、やれやれとため息をつく提督であった。

「ま、後で榛名や霧島にあげればいいか」

「デスネー」

「提督、これどうやって食べるの？」

「クリームチーズを付けて食べてもよし、ジャムを付けてもよし、ダブルでもよし、だ。だがあまり食べると晩御飯が食べなくなるぞ」

「はい」

時雨はクリームチーズを、綾波はジャムを付けて食べてみた。

「…あ、意外と美味しいです」

「紅茶と一緒に食べると更に美味しいぞ」

「あまりつけすぎると手が汚れますから気をつけてネー」

そう言って、暫くすると陸奥がやって来た。

「あら、時雨ちゃん達ここにいたのね」

「どうした？今日は陸奥は非番だったはずだが…」

「間宮さんのケーキを買ってきたから、提督と一緒に食べようかなと思っただけけど…」

「いいんじゃないか？」

提督はそう言ったが陸奥は首を横に振る。

「そう言うけど、スコーンってカロリー高いのよ？」

「その分体を動かせばいい。頭でも良いぞ？」

「そういう問題じゃないの」

「アー、確かにちよつとキツイデスネー」

別に食っても大丈夫な気もするが…と思った提督だが

「女の子は好きな人の前でみつともない姿を見せたくないのよ」

という陸奥の言葉に、納得したのであった。

「んじや、これは冷蔵庫に保管するわね」

「分かった、赤城に食われないようにね」

「フツ、分かっているわ」

そう言うと、陸奥は提督室から出て行った。

「このお菓子美味しいですー」

「意外と食べれるね。僕、気に入ったかも」

綾波と時雨が両手で美味しそうにスコーンをモグモグ食べている光景を見て、癒される提督であった。

「そういえば、提督」

「ん？」

「紅茶ってどこで栽培されてるの？」

「ああ、それはな——」

「色んな所デース！」

時雨の質問に提督が答える前に金剛が答えた。

「インドやマレーシア、スリランカにグルジア、日本にもあるのデース」

「今挙げられた国以外にもあるぞ。∴覚えてないが」

「日本では静岡や福岡、沖縄にもアリマース。流石に飲んだことは無いですが」

そう答えていると、5時を知らせるチャイムが鳴った。

「もうこんな時間か」

「もうそろそろご飯の時間ですネー」

「じゃあ、僕たちは食堂に行ってるね」

「お茶、有難う御座いました」

「どういたしましてデース」

その後、金剛達と一緒に晩御飯を食べた提督だったが、夜中に何回もトイレに行き、寝不足になったのは、また別の話である。

ガンツガンツガンツガンツ!

「よーし、こんだけ打ち込んだけば落ちないだろ」

「提督、次の板持つてきたよー」

「そこに置いといてくれー」

ある日の昼頃、鎮守府の整備小屋の屋根に提督はいた。提督はランニングシャツにニツカポツカ、頭にタオルを鉢巻のように巻き、口には釘、手にはトンカチ、足には地下足袋。その周りには電動鋸が置いてあった。

なぜこの格好かというと、

「ひー、もーきつーい」

「なー提督ー。まだ終わらないのー?」

「あと半分だ」

「もつと早く終わらないのー?」

「:そもそも君達が誤って天井に砲撃をブチかましたのが原因だったでしょうが」

「〜♪」

「口笛吹いてねえでこつち見ろ」

鈴谷と加古が整備中に誤って天井に砲撃、大きな穴が開いたのだ。しかも20・3cm砲で。

本人達は弾が入ってないと思ったからだそうだが、「確認せずにトリガーを引いてしまったのはイカンでしょ」という明石のセリフが出て、罰として休日返上で修理することになったのだ。しかし本人たちはそんな修理をしたことは無い。どうしようか迷い、提督に相談したところ、

「あなたも一緒にやればいいのでは?」

という加賀の提案に鈴谷と加古が賛成し、そのまま提督の意見をねじ伏せたのだった。

「まったく、やったことが無いとはいえ何で俺がこんなことを…」

「まーいーじゃん。美少女の鈴谷と一緒になんだから喜んでもいいのよ

？」

「美少女なのは認めるが、苦勞してるのが殆ど俺じゃ…どうした、顔が真っ赤だが？」

(…さらりとこういうことが言えるって、厄介だよね…) ボソツ「？」

「提督！。私もう眠いんだけどー」

「もうチョイ気張ろうか。ほれ、鈴谷も頑張れ」

「う、ああ、うん…」

そう言い、作業を再開した。木の板を丁度良い長さにする為に電動鋸を使って切り、砲撃で穴が開いたところの周辺の板を切る。そこに木の板を置き加古と鈴谷がそれを支え、提督が釘とトンカチを使って木の板を固定。これを穴が塞がるまでやるだけなのだが…

「…これが終わっても、あと一つ残ってるんだよなあ…」

「…ZZZZ」

「て、おおおお!?危ねえええ!」

「加古!?早く起きて!」

「んあ?」

加古が眠いのか、支えていると寝てしまうのだ。普通なら頭がコックリコックリ船漕いでいるだけなら微笑ましいだけなのだが、屋上で、しかもビル4階建てと同じくらいの高さを頭から落ちようものならいくら艦娘といえど無事では済まない。

だったら眠気が無くなるまでほっとけばいいんじゃないか?と思う人もいるだろうが、加古曰く眠気が来るタイミングが朝だったり戦闘中だったりバラバラなのだ。

眠気しか来ない日があれば、まったく眠気が来ない日もある。なので判断が難しいのだ。

「加古はここから降りなさい。このままだとほんと危ない」

「んー、分かった…」

「大丈夫?」

「大丈夫大丈夫」

加古はそう言い、そのまま下に降りる階段に向かった。…若干足が

ふらついていたが。

「…あとで加古には別の奴を用意しよう」

「あ、結局逃げられないのね」

「ぜー、ぜー、お、重おい…！」

「艀装に比べりや軽いもんだろ」

「艀装は装着すれば力が出てくるけど、普段はか弱い乙女なんだけど…」

「…以前ナンパしようとした馬鹿をあしらったのは？」

「ノーコメントで」

雨漏り防止用の板を打ち付け終わったあと、下に置いてあつた新しい瓦を屋上に運んでいた。

量自体は大した量ではないのだが、炎天下の中やったせいか、バテ気味であつた鈴谷。服が汗でビショビショになっているせいか、どうやらそれが不快に感じているようだ。

流石に水分補給を挟まないとまずいと思つた提督は、瓦を運び終わった後、そのまま食堂に向かい、冷蔵庫の中にあつた冷たい麦茶が入つたペットボトルを鈴谷に投げ渡した。

「あ、あんがとー」

そう言いそのまま麦茶をカブ飲みしだした。

「んくっんくっんくっ…ぶはあーおいしー!!」

「お疲れー、それにしても暑かつた…」

「提督はこの後どうすんのー」

「時間が時間だから速攻瓦を敷いてくる。あと落ちないように針金もつてこにゃ…」

鈴谷が時計を確認すると、もう4時であつた。

「もうすぐご飯だよ？」

「屋上に瓦をおきっぱにしたら拙いからな。一応天気では強風は吹かないといつてたけど、なるべく早く敷くことに越したことは無いしな」

「ふーん」

「お前も早く風呂に入るといい。汗でブラジャーが見えてるぞ」  
「んなあつ!?!」

提督の発言に顔を真っ赤にし、胸を腕で覆うようにし、提督を睨めつけるように見た。

「…スケベ」

「いや、他意はないぞ?ていうかこんだけ暑かったらそうなるだろうし」

「だからと言ってそこは見逃してもよかつたんじゃないの?」

「お前はジロジロ見られるのが好きなのか?」

「……………あ」

「気付かなかつたんかい!?!」

「し、仕方ないじゃん!日頃提督しかいないんだから!」

「…その言葉だけ聞くとエロく聞こえて」

「だらつしやあ!」

「ぶへっ!?!」

セクハラ紛いの失言を言い、鈴谷に思いつきりぶん殴られた提督であった。

「まったく、提督は失言多いし!」

「まあまあ、落ち着くんですの」

「落ち着いてるし!」

(どこかですの…)

ぶんぶん怒っている鈴谷を熊野がたしなめているが、怒りのボルテージが一向に下がらないでいた。

「元はフツメンのくせに生意気言ってますー」

「行動自体は紳士そのものではありませんか」

「紳士はあんな発言はしませんー。第一セクハラだよあの発言!?!」

「あの程度軽いものですわよ。第一悪意は感じなかったのでしょうか?」



「う…」

「普通ならそんなことは言わずに目の保養にしますわよ」

話しているうちに落ち着きだした鈴谷だったが、今度は不安そうな顔をしだした。

「…怒ってないかなあ」

「あの提督がその程度で怒りませんわよ。気になるんだったら明日になったら謝ればいいんですし」

「うん…」

「…はあ」

熊野が深いため息をつき、こう言った。

「そう不安そうな顔をしない。さっき言ったけど殴っただけでは提督は怒りませんわよ。提督が怒る時は自分を大切にしない時や家族を傷つけられた時だけ。今回の件はそうじゃないのですから、明日謝ればいいのです。」

私も一緒に謝りますから、ね？」

「…ありがと」

「どういたしまして」

後日、提督に謝ったが提督自身は全く気にしていなかったようで、頭をナデナデしていたところを皆に見られ、私も私もと軽いパニックになったのは、別の話である。

## 12 シリアス？ 回

「傷害事件だあ？」

昼過ぎ頃に提督室に陸軍から訪れたあきつ丸が、提督に協力を求めてきた。

「ええ、今回はちょっと特殊すぎる例でして…」

「いやいや、警察や君たち陸軍の仕事だろ？ 何故海軍の俺に協力してほしいと言うんだよ」

「ええと…今回の事件は先ほど言いました通り特殊な事件なのであります。」

被害者は若い女性。被害は髪を切られたことによる傷害です」

「…金剛や長門らが聞いたらえらいことになってるな…」

「そしてこの事件…。今回が初めてではないのであります」

「……………はあ!？」

あまりのビックリな発言に声を荒げる提督。

「ちよつと待てや！ 今回が初めてではないってどういう意味だ!？」

「お、落ち着くのであります!」

「落ち着けるか！ へタすればウチの娘達にも被害が来たかもしれんだぞ!？」

「調査した結果、被害届を出していない女性がいたのです。今回発覚して、もしかやと思って聞き込み調査をしたところ」

「…被害者が一人ではなかったという事か」

「しかも、犯人は豚の顔を被っていたようなのであります」

「……………は?？」

「信じられない気持ちもわかりますが、被害者の証言をまとめると、

身長は160cmほど

服装は黒っぽいジャージ

体格は中肉中背

顔には豚の顔を被っていたので判らない

以上の四点であります」

「…最後の豚の顔で変質者確定だな。そのままブタ箱に直行させにや

な」

「そして被害者なのですが、ロングヘアで、その…」

「?何だ、言いくいのか?」

「ええと、男性の人曰く美人だそうで…」

「…おい、まさか」

「…はい、囿捜査で捕まえよう」と

「ふざけんな!」

提督は大声で怒鳴った。それはそうだろう。誰が好き好んでそんな危険なことをさせにやなんのか。

「第一、何故海軍が手伝わにやなんのだ!それなら陸軍にもいるだろ!」

「今回の事件は、陸軍は手伝うことは出来ないからであります」

「何故!」

「…ヲ級ファンクラブの暴動があつたせいで、警備が嚴重化したのを覚えていてありますか?」

「ああ、覚えている。こつちにも来たからな」

「警備を嚴重にしたのは良いのですが、結果人手が足りなくなつてしまったのです」

「そんなの言い訳にならん!それならスケジュールを組んでやれば」

「スケジュールを組んでも足りないのです!予備の補充人員は再来月!どうやっても無理なのであります!」

「なら地元の警察は!」

「…今回の事件は特殊すぎる上に、犯人は凶器を持っています。地元の警察はそれに対応できないのであります」

「……………」

陸軍や警察には頼れないことが分かつた提督はそのまま黙って考えていた。確かに長門や足柄達を囿にすれば来るだろう。だが、同時に危険でもある。もし彼女たちが傷ついたら犯人を8割殺しているだろう。

あきつ丸も、断腸の思いで助けを求めてきたのだろう。彼女の顔には悔しそうな顔がうかがえた。

いや、だが、しかしと思考がループしかけたその時であった。

「話は全部聞かせてもらった」

「…長門」

長門が提督室のドアを開けて開口一番言った。

「隠れて聞くのはいかんと言ったはず」

「提督、私たちを侮ってないか？」

「……………」

「いや、侮っているというより心配だったな。だが——深海棲艦を相手取っている私たちが、たかが人間独りに負けると思っているのか？」

「……………」

「それに、私たちの役割は人々を護ることだ。困っている、泣いている人がいるなら、助け出すのが貴方の——いや、私達の仕事だろう？」

「……………はあ、分かったよ」

深いため息を出した後、提督はそれを許可した。

「では……」

「但し！条件がある。

一つは今回の事件で発生した費用は陸軍持ちだという事。

二つ目は犯人がどうなっても知らないという事だ」

「…二つ目は厳しいと思うのでありますが？」

「安心しろ。命まではとらないし、彼女たちが無事なら何もしない」

（つまり何かあったらフルボッコということでもありますか…）

その後は、今日から囿捜査が開始する旨と、捕まえる段取りをし、後のことは現場で考えるという事になった。

その日の夜

「α、聞こえるか？」

『ああ、よく聞こえる』

「よし、作戦開始。豚野郎を誘きだすぞ」

『了解だ』

長門は耳に引っ掛けるタイプの小型レシーバー、胸元にはコロンに出ているようなバッジタイプの小型のマイクを付けて、夜の道を歩いていた。

服装はスーツで、頭に着けているレーダー機能付きのカチューシャを外している。

「β、そっちはどうだ？」

『こちらβ、怪しい人影は無し』

「了解した、引き続き頼むぞ」

今彼らがいる場所は、犯人が襲ってきたルートから少し離れた、視認しにくい暗い場所にいる。

α（アルファ）——長門が動き出すのと同時に、陰に紛れて動く姿は、どこか忍のような光景であった。

因みに、β（ベータ）——あきつ丸とC（チャーリー）——提督の格好は全身真っ黒の服装という、闇夜に紛れる気満々の恰好であった。

変化があったのは作戦開始から数時間たった時だ。

『こちらβ、怪しい人物を発見。C、応答願います』

「こちらでも確認した。どうやらαに向かっているようだ」

『こちらα。位置は？』

『αの方向から12時の方向であります』

『例の豚野郎だったら全力でいいか？』

「許可する」

『：死なない程度にお願いしますであります』

『了解だ』

暫くすると、長門の前に豚の顔を被った男が現れた。

「フヒ、フヒヒ、フヒヒヒヒ」

ちゃんとした呼吸が出来てないのか、物凄くキモいのが聴こえた。

「ああ、綺麗な髪だなあ。いい匂いなんだろうなあ——ちよつと切らせてよお！フヒヒヒヒイ!!」

言うやいなや、勢いよく駆け出し、長門の髪を切ろうとした変態で

あつたが、

「フンッ！」

グチュツ、と

長門のつま先蹴りが変態の股間にクリティカルヒットした。

豚のような悲鳴を上げ、そのまま倒れ泡をブクブク吹き出した変態。それを見た提督はこう言った。

「よし、良くやった」

『良くないであります』

その後、変態はあきつ丸が憲兵隊に連行、変態の家宅搜索の結果、おびただしい量の髪の毛が発見された。担当した捜査官曰く「ホントに怖い」だそうだ。

動機は、「女性の髪って良い匂いがしたから」という意味不明を通り越してマ〇〇チの臭いしかしないものだった。

この後、提督は陸軍から感謝状と謝礼金を貰ったが、「二度とこんな仕事をさせんな」とクギをさしたのだった。

ゴロゴロゴロ……

「ウーム、雷が出て来たな…」

「流石に今回は出撃は無理ですね。敵を見つける前に中破でもしたらことですし」

提督室で早朝から加賀と一緒に書類にポンポン判子を押ししていた提督は、横の窓から天気を窺っていた。雨は降っていなかったが雷雲がでて、海も少し時化していた。

「必要ないかもしれないが、一応窓ガラスにガムテ貼っておくように知らせとくか」

「そもそもガムテを貼る意味ってあるんですかね？」

「あれは破片が飛び散らないようにするものだからな。足の裏でも切ったら痛いぞ」

等と喋りながら書類と格闘していると、天龍が入ってきた。

「提督、今日の出撃ないってホントか？」

「ああ、今回は天気も良くないし、海も時化しているしな。でも何で知っているんだ？まだ知らせてないのに」

「あん？龍田がそう言っていたんだが」

「…相変わらずの地獄耳だな」

「あまり口に出して言わない方がよいぜ。いずれそれが本人の前でも言っちゃまうからな」

「肝に命じとく。で、どうしてそんなことを聞いてきたんだ？」

「あ、いやな？一応、待機命令出しているんだが、午前中三人、午後三人の休憩が欲しいんだ」

「？そりゃ出してもいいが、何故？」

「神通と那珂の授業を受けたい奴がいるんだ。どうせこんな荒れた日に敵さんは来ないだろうと思うが、上司に伺いをたてないとな」

「成程。分かった、許可する」

「おお、ありが——」

ビツシャアアアアアアンツ!!!!

「うおっ!？」

「きゃ!？」

突然の轟音。音の大きさからいってかなり近い距離に落ちたのだらう。

さらにフツと電気が落ち、消火器のベルが鳴ったのだ。

電気は予備の自家発電機に切り替わったのか、すぐに電気が付いた。

「…電気が落ちたという事は電柱にでも当たったのか？」

「分からないけど、どうやら火事が起きたようね」

「……………」

「…?どうした、だんまりして」

「うえっ!?!いいやななんでもないぜぜ」

「…おもつきし声が震えているんだが」

「きききのせせ所為じゃねね——」

ゴガツシャアアアアン…………!!

「ピイ!？」

「…………お前、もしかして雷苦手なのか？」

「ハア!?!べべ別にここに怖くなんてねえ——」

ゴロゴロゴロゴロ……………!

「……………」

「…怖いんだな」

「ううううう、そんな目で俺を見るなア——!!」

トマトより真つ赤な顔を手で隠しながら、天龍は提督室から走って逃げていった。

「…ハア、何やっているのですか？」

「ちよつとからかいすぎた」

「あとで痛いしっぺ返しを喰らう羽目になりますよ。」

あと出火場所ですが、鎮守府内に設置している電柱の一つが小火で発生してました。一応そのあたりの電気も供給停止させたので大丈夫だと思います」

「修理は出来ないか？」



『晴れた日だったら出来るけど大雨が降っているし、ちよつと無理』と明石が」

「あいつが無理なら仕方ない。今日は自家発電機で過ごすでしょう」「燃料が消えていきますね…」

「まあ燃料もまだあるしな。一日二日でどうこうなつちやう量じゃない」

正確には、一か月以上の貯蓄があるのだが必要以上の消費はしたくはなかった。本来は原住民や鎮守府で働いている従業員を避難、助けが来るまで閉じこもっておく為の物だったからだ。

「それよりも書類を終わらせよう。神通たちが先生をやっている授業が気になるしな」

「なんか授業参観に来た父親みたいですねそれ」

そんなこんなで午前中のうちに全ての書類を終わらせた提督たちであった。

「では、軽巡・駆逐艦達用の授業を始めます」

今回、授業に参加しているのは今年に入って新しく着任した軽巡・駆逐艦の子らだった。ここの鎮守府では時間と余裕があれば先輩たちに教えてもらうのだが、人によって教え方が違う上に、間違った考え方になったりとあまりに効率が悪かったので「まとめてやった方が良くない？」という事で、時々ではあるがこういう授業があつたりする。

駆逐艦や軽巡だけでなく、重巡や戦艦、空母など、それぞれのクラスに合わせて行っている。

因みに、余裕があれば他の鎮守府の子もやっていたりと割と評価が良かったりする。

「神通先生、私でも戦艦になれますか!？」

「いや、流石に無理なんじゃないかな…?」

でもその代わり、私達には強力な武器があります。それは何だと思

いますか?」

「うーん……。愛と勇氣?」

「精神論ではありませんよ。一応必要ではあるけどね」

「…はい」

1週間前に着任した弥生が手を挙げた。

「はい、どうぞ」

「魚雷、特に酸素魚雷だと思います」

「正解です。一応言うと旧式の魚雷でも当たれば敵は倒せます。要は当てればいいだけですからね」

「でも、魚雷って中々当たらないが…」

同じく位週間前に着任した浦風が反論した。

「確かに、魚雷を当てるのは難しいです。でも、戦艦の砲撃も注意すれば中々当たらないものです」

「さらに言うと、私達軽巡と駆逐艦は、戦艦や空母の攻撃を避けつつ駆逐や軽巡を狩り、その後の野戦で大物を狩る、というのが仕事なんですよ。あとは露払いとかねー」

神通の後に那珂がそう言った。

「魚雷ってどれ程の威力なんか知らんし、酸素魚雷と旧式の魚雷の違いって何か?」

「魚雷の威力は戦艦相手だと一発で相手を戦闘不能に、二発当たれば撃沈、三発当たれば真つ二つ…だったかな?」

「でも、武蔵さんや大和さんは何ともなかったらしいですけど…」

「あれは例外中の例外です。本来なら下剋上出来るのに大和さんたちはあまり効いてないっておかしいですし」

「やっぱり、武蔵さんはすごいな…!」

清霜がすごい目をキラッキラさせながらうっとりとしていた。

「つくし。誰だ、私の噂をしているのは」

「酸素魚雷と旧式の魚雷の違いは、何と言っても隠密性かな。酸素魚雷は酸素を使ってエンジン燃料を燃やして動かすの。と言っても私

たちがいつも吸っている酸素濃度ではないけど、今回は関係ないから飛ばすね」

「旧式の魚雷は発射するとその後が残るけど、酸素魚雷は二酸化炭素を放出するからそのまま海水に溶け込んだりちゃうの。視認できないわけだから長距離スナイプもやろうと思えばできたんだよー」

（※史実では偶然とはいえ、伊19が遠くの敵艦を沈めてます。）

「そしてその射程も旧式の魚雷が10とするなら酸素魚雷が30から40くらいの力があつたんです。威力の方も極めて高く、魚雷自体の速度も速いので相手が気付く前に仕留める事が出来ます」

因みにあまり関係ないが、アメリカの魚雷はなかなか当たらず、現場からは「こんな使えるかヴォケエ!!」と泣きつかれることもあつたそうなの。

「だからと言って旧式が全く使えないという訳ではありません。要は使い方しだいで宝にもゴミにもなります。そのことをよく覚えてください」

はーい、と元気のいい返事が返ってきた。

「お疲れ、大変だったろ?」

「あ、提督」

「提督もお疲れ様です」

授業が終わった後、提督は神通たちに羊羹を持って労った。

「ほれ、羊羹だ。あとで二人仲良く食べなさい」

「いやったー。那珂ちゃん好きなんだよねーコレ」

「すいません、わざわざこんな物まで…」

「別に良いさ。で、どうなんだ今回は?」

「大井や天龍に比べればいい子たちですよ」

「今はあの二人も落ち着いたけどねー。特に大井は問題児だったし」

「ずいぶん丸くなっているからな」

「恋する乙女は変わるものですよ」

この後、神通たちと喋っていたが、加賀に「新しい仕事が出て来たので戻ってください」と言われ、急いで戻っていった提督であった。

## 14 水着回（多分）

「プールニャー！」

「ウォータースライダークマ！」

「波のあるプールっぽいー！」

「その前に準備運動ちゃんとしような？三人とも」

今提督たちがいるのは、トラック諸島に新しくできた大型ウォーターパーク。なぜそんな場所にいいのかというと、ウォーターパークの経営者が以前救助したことがある人物でお礼としてオープン前のこのウォーターパークをタダで貸してくれたのだ。

ならせつかくだし、プールにでも行ってみるかということで、奇数番号と偶数番号に分れ、ここにいる。

因みに今提督と一緒に来ているのは奇数組で、多摩・球磨・夕立・時雨・吹雪・五十鈴らの子たちである。その他にもたくさん艦娘はいるのだが流石に処理ができないので勘弁してください。（土下座）

さて、メメタアな話は置いて。

「さて、じゃあ皆気をつけて遊ぶようにー」

『はーい』

「よーし、ウォータースライダーに行くっぽいー！」

「あ、ちよつと準備運動しないと危ないよー！」

「しぐちゃん先に夕立を捕まえた方がいい気が…」

「ハア…、大丈夫、いつものことだし」

「いつものこと!?!」

「とりあえず色々あるから全部遊び倒すクマー！」

「球磨には負けないニャー」

「もう皆好き勝手やってるわねー…」

早速各々で遊びだす皆さん。一方提督はというと…

「うーん、本読みながらココナッツ飲むのいいなあー」

全力でだらけきっていった。まあ最近まで書類仕事や出撃の指揮をしてたりと忙しい日々が続いてたから仕方無い。

え、そんな描写無いって？…さあ？（目逸らし）

因みに皆さんの水着は、球磨がパンツタイプのビキニ、多摩がタンキニ、夕立に時雨がホルダーネックタイプのビキニ、吹雪が競泳水着みたいな水着、五十鈴はワンピースタイプの水着、提督はショートスパッツ（水泳選手が履いているやつ）である。

「…少し体を動かしたらどう？」

「提督服に計15キロの錘を入れてるから体を動かす分は大丈夫だ」

「でも水の中で動かした方がいいわよ。水中を歩くだけでもかなり鍛えられるわ」

「だが断る。こんな時はゆっくり過ごしたいのだよ」

「因みに夕立たちが遊ぼうと行ってきたら？」

「全力で遊びに参加する」

「ふーん…。じゃ、私とあそ——」

「提督さーん！、一緒に遊びましょっぽーい！」

そこに夕立が話しかけてきた。

「ん、ああ。いいぞ」

「やったっぽーい！あ、五十鈴さんも一緒に遊ぼっぽい」

「あら、いいのかしら？」

「もちっぽーい」

「夕立もこう言ってるんだ。一緒に行こうや」

「そうね。じゃ、お願いね」

「はーいっぽい」

そう言って、提督と五十鈴は夕立についていった。

「あ、提督。五十鈴さんも」

「よーす」

「あら、何やってるの？」

「色々ですねー。水を掛け合ったり浮き輪でプカプカ浮いたり」

「フーム、ビーチバレーは人数が少ないからできないし、俺が知ってる遊びはどっちかっていうと遊びに入らねえし…ていうかほかに何があったっけ？」

「うーん…。思いつかないわね」

「とうかさっきの遊びに入らないって、どういう遊びだったんです

か?」

「徳島から兵庫の泳ぎの横断」

「それ遊びって言いませんよ!」

「まあ、海軍の訓練みたいなものだったからな。最悪の状況を考えてそう言ったらしいがな」

「因みに泳ぎ切った人はいるんですか?」

「…俺を含んで5人ぐらい?」

「ですよー…」

尚この訓練は別に横断失敗してもいいのだが、調子に乗った提督と有馬、村上が泳ぎきったのだった。…まあ上官からは「泳ぎ切る奴がいるか!」と叱られていたが。

残りの二人は出る予定はないのでスルー。

「お、提督ー。何しているクマー」

「球磨に多摩か」

水鉄砲二丁もってやってきた球磨と多摩。

「ビーチバレーでもやろうかなと思ってたんだが、人数が足りなくてな」

「なら多摩たちも参加していいかニヤ?」

「夕立たちがOK出してくれればな」

「私たちはOKっぽい」

「僕も」

「私もです」

「五十鈴はいいのかニヤ?」

「彼女たちがいいなら」

「よし、じゃあビーチバレーをやるクマよー!!」

球磨と多摩が参加してくれたのでビーチバレーができたのであった。

チームとしては、

1チーム、多摩・夕立・吹雪

2チーム、球磨・時雨・五十鈴

ジャッジ、提督

という構成になった。

「じゃ、最初は多摩チームからな」

「よし、やってやるニャー!!」

多摩が放ったサーブが右のポールギリギリのところにと落ちてした。  
が

「甘いクマよー!!」

と後ろに多摩がボールをパス。時雨がそれを繋ぎ、五十鈴がスパイクを仕掛け、ボールが多摩のコーナーに落ちた。

「…やるニャ」

「…負けないクマよ」

「私たちって…いるっぽい?」

「まあ、サポートする人がいなきやね。僕も負けないよ?」

「私も負けないっぽーい!!」

「やれやれ、私たちも頑張らなきやね」

「はい、よろしくお願いします!」

「ふふ、さあ来なさい吹雪ちゃん!」

なんだかんだでそこから良い勝負になり、3―2で球磨たちの勝利に終わった。

「ああ、楽しかったクマ」

「いい勝負だったニャー」

「また戦いたいっぽーい」

「ははは、僕は暫くいいかな」

「いい汗かいたわね。それにしても吹雪もいい動きするじゃない」

「あはは、と言っても多摩さんや夕立の足を引っ張った感があります

けどね…」

「いや、別にそう思っていないニャ」

「最初の頃と比べたら動きはすごく良くなってるっぽい」

みんな仲良くしゃべっているのを遠くから見ている提督であったが、時間を見てみると、

「…あと1時間ぐらいだな」



もう終わりの時間が迫っていた。

『あと30分で帰るので、みんなそろそろ帰る準備をするように』

「あ、もう終わりっぽーい…」

「楽しかったね」

「時間があつたらまたここに来たいニャー」

「その時は私も呼ぶクマー。決着を着けたいクマー」

「もう決着ついてるニャ」

「まだ負けてないクマー!!」

「はあ、バカばっかね…」

「ハハハ…」

こうして、楽しい楽しいプールの時間が過ぎて行ったのだった…。

翌日、非番組がプールに遊びに行こうとしているところを提督に見つかれ、強制的に提督を連れて行こうとした艦娘がいたそうなの…。

「へっくし！ムー、誰が噂してるネー」

ミヤ〜…

「あ、子猫ちゃんだ」

早朝マラソン（鎮守府周回）から帰ってきた吹雪は、駆逐艦寮の前に子猫を見かけた。

その子猫は長い間食べ物を食べていなかったのか、やせ細ってて、鳴き声も小さいものだった。

「可哀想…。ちよつとごめんね」

吹雪は子猫を慎重に抱き抱えると、そのまま寮内に持ち込み、自室に運んだ。

「あ、ぶつきー。おか——って子猫だー♪」

「ちよ、静かに!？」

同室の秋雲に触らせる触らせるというが、子猫の元気のない鳴き声にあれ?と思ったのか、

「…この子猫、もしかして…かなりヤバイ？」

「うん…どうやら長い間食べてなかったみたいで」

「アチャー、なら食べさせたほうが良いね。でもミルクって人間用ので大丈夫なのかな？」

「うーん…、乳糖の高いのは駄目って聞いたことはあるけど、ちよつと分からないね。とりあえず今からコンビニに行って脂肪分の少ないをミルク買ってくる」

「じゃ私はお湯を沸かして準備してるねー」

「嬉しいけど、大丈夫なの？目の下の隈が凄いけど…」

「大丈夫ー、ちよつと期限が間に合わないから徹夜しただけだよー」

「…無理しないでね？」

ちよつと不安が残るが、とりあえず子猫を秋雲に任せて、吹雪は鎮守府内にあるコンビニに向かった。

「おはよう、吹雪ちゃん。相変わらず早いね」

「時雨ちゃん、おはよー」

「コンビニで乳糖の低いミルクを購入。その帰り道に時雨と出会った。」

「ところで、そのミルクはなんだい？ 食堂に行けば普通のがあるけど…」

「ちよつと、ね…」

「…何か隠してないかな？」

「(ギクツ) な、何がかな〜？」

「もうそのリアクションでバレバレだよ…」

「うう…」

「ほら、何を隠してるの？ 白状したほうが楽になるよ？」

「わ、分かったから！ 分かったからジリジリ来るのやめて！ ちよつと怖いー！」

そのあと時雨に子猫を助けようとしていることを伝えた吹雪だったが、

「うん、なるほどね。哺乳瓶は？」

「無いです…」

「牛乳もこんなんじゃないや駄目だよ。おなか壊して最悪死んでしまうんだから。特に弱っているこの子なら尚更だよ」

「はい…」

「それに何でこそこそするの？ 別に育てても問題ないし、素直に助けを求めたほうが良いよっ…」

「返す言葉もございません…」

「それに秋雲も何で寝てないの？ 期限が迫っていた？ 知らないよそんなの」

「い、いやー中々ネタが決まらなくてねー」

「二週間前に巻雲にネタが決まった云々言ってたって聞いたけど？」

「あ、あは、あはははは…」

「…二人とも、言うべきことは？」

「すみませんでしたー！」

時雨に徹底的に叩かれ、精神的にベコベコに凹まされていた二人であった。

「はあ、まったく。二人とも、こういうときはさつきも言ったけどちゃんと調べたほうが良いよ？」

「といっても、子猫用のミルクなんてコンビニにおいて無かったけど…」

「僕、そのエキスパート知ってるからすぐに行こうか」

「…もしかして、やけに詳しかったのは…」

「以前捕まって延々聞かされたからね…」

物凄く時雨に同情した吹雪と秋雲であった。

「で、私のところに来た訳ですね？」

「大淀さん、お願いします」

以外にも猫が大好きな娘というのは大淀のことであった。

「とりあえず、ミルクと哺乳瓶を準備しておくわね。ちゃんと責任を持って育てるのよ？」

「ありがとうございます！すぐに戻るよ秋雲ちゃん！」

「あ、ちよつと引つ張らないでぶつきー——」

その二つをゲットするや否や、全速力で自室に戻っていった。

「…まったく、すみません大淀さん」

「構わないわ。かなり衰弱しているのでしょうか？」

時雨が謝ると、大淀はまったく気にしてないようで笑いながら言った。

「元気になったら見せてね、肉球もみもみしてみたいし」

「伝えますね」

そういうと、時雨も吹雪の後を追った。

「ミルクは人肌ぐらいにあったまったら見たいだね」

「元気に飲んでるねー。それにしても可愛いわー」

「…秋雲、そろそろ寝たら？なんか顔色悪いけど…」

「はっはっはー大丈夫ーなんかハイになってきたーははははー」

「寝なさい、良いね？」

「アツハイ」

ヤバイ具合にハイになつてきていた秋雲を強引に寝かした吹雪と時雨。まあ顔が青から真つ白になつていたらそりや寝かしもします。

「それにしても、この後どうするの？」

「？どうするって…？」

「この子だよ。駆逐艦のみんなで育てるの？」

「…そこまで考えてなかった」

「……………もう一回説教しようか？」

「御免なさい勘弁してくださいお願いいたします」

「まったく、まあ子猫を買うのは問題ないかも知れないけど、一応皆に聞くんだよ？僕も手伝うからさ」

「有難う」

その後子猫も元気になり、ニャーニャーと元気に鳴くようになって。…むしろ元気がすぎてちよつとうるさかったが。

駆逐艦の皆にも子猫を飼うことを伝えたところ、皆賛成したが一つ問題が発生した。それは、

「子猫の名前はタマがいいと思うわ」

「いや、チビでしょ」

「ミイがいい！」

「クロ！」

「毛皮が黒くないじゃない。サクラよ、サクラが良いわ！」

「この子男の子だよ？」

「ならコタロウだよ！カッコいいじゃない！」

…といった感じに名前を決めるのに一波乱があつたのだ。ああだこうだと言いついていたら時雨の、

「吹雪に決めさせたら？」

という発言に皆が「こつち選べこつち選べ…！」といった風に吹雪にプレッシャーを与え、吹雪は生きた心地がしなかったそうだ。

尚、名前は数々の海戦を生き残ったアンシンカブル・サムからとつて「サム」と名付けられた。：提督からは物凄く微妙な顔をされたが。

「サムー、どこにいるのー」

「ニヤー」

「あ、いたいた。ほーらおいでー」

「へえ、この子が…」

子猫を飼って一週間たった日、吹雪は大淀にサムを見せていた。

「はい、この子がサムです。ほーらサムー、この人が大淀さんですよー」

「ふふっ。こんにちは、サム」

「ニイー…」

「あー、やっぱり子猫は可愛いなあー」

大淀の顔が物凄いニヤケ顔になっていた。気のせいかサムも少し引いているように見えた。

「：猫、好きなんですネー」

「猫といわず動物全般好きですよ。特に子供が」

「まあ、子供は可愛いものですからね。人でも、動物でも」

「ところでこの子は室内飼いなのか？」

「ええ、サムも外に出たがらない感じなので」

「そっかー…。まあ子猫のうちに室内飼いにすると、大人になっても外に出たがらないみたいだから、大丈夫かな？」

「そうなんですかー」

「うん、それにしても…サム、か…」

「？」

「いや、イギリス辺りが聞くと拒否反応出しそうね、と」

(※アンシンカブル・サムを日本語にすると不沈のサム。何度も沈没した船から生還したことからこの名前がついたそう。因みにビスマルクにも縁がある模様)

「サイモンやフレッドよりはいいかな、と思ったんですが…」

「何故そのセンスなのかいろいろ聞きたいわ……。フレッドは違うでしょうに」

（※気になる人は調べてみよう。割と軍艦に猫を連れてきている人は多いのです。）

「ニャー……」

「ああ、やっぱり可愛い可愛い可愛い可愛い」

その後も大淀はサムに頬すりしたり写真を撮ったりしていたが、それが原因だったのか大淀が近づくと全力で逃げ出すサムの姿があったそうだ。

Pr r r . . . Pr r r . . . ガチャツ

「やあ吉川、プレゼントは気に入ったかい？」

「取り敢えず火計か火刑、どっちがいい？」

「お前は呉の軍師か何かか!？」

ある日のこと、提督が人員補充の書類に目を通していたらおかしな文があった。それは、

『葛城、リットリオ、大和、武蔵、大鳳の着任』

である。発行者を調べてみたら村上だったので電話をし、冒頭のような会話になったのだ。

「いやいや、大和に武蔵に大鳳だぞ?!普通なら喜んでるところだぞ!」  
「どう見ても厄介事の臭いしかしねえわアホ!てかなんで俺んここに  
来るんだ!」

「チツバレてたか」ボソツ

「聞 こ え て ん ぞ」

リットリオに葛城は良い。前回の作戦の報奨なのだから。しかし、大和と武蔵、大鳳はそうじゃない。

この三名は、希少性がずば抜けて高い。大型建造を1000回回しても出てこない事がさらにあるからだ。普通なら他人にあげたりしない。それなのに何故ウチに来るのか。

「いやな、その三名はちよつと訳ありだな」

「ならその訳を話せ。出なきやオマエの嫁にセロリと小松菜のサラダのレシピを送るぞ」

「止めろ、それだけは本当に止めろ!話すから、な!？」

話を聞くと、この三名は前回逮捕された呉山提督の艦娘で、逮捕されたあと艦娘達は他の鎮守府、又は艦娘を辞め、日常に溶け込んでいった。

この三名も本来なら艦娘を辞めるつもりだったが、海軍上層部がコレに待ったをかけ、強制的に続けさせたのだ。何故待ったをかけたのか、それは先ほと言った希少性の高さ、そして戦闘力の高さである。



大和と武蔵は速度を除けば戦艦一のスペックを持ち、大鳳は中破でも発着可能の装甲空母である。

これ程の戦闘力のある艦娘を放逐するのは不味い、上層部はそう判断した。

だが艦娘にとっては傍迷惑な話でしかない。せつかく軍を辞める機会を、潰されたのだから。

それからは上層部の判断に従い、各鎮守府を巡ったがそこで待っていたのは、大和と武蔵、大鳳のネームバリューしか興味のない提督。そして、そこにいる艦娘のいじめであった。

配属された鎮守府は、提督が「大和達がいるならウチの鎮守府は大丈夫だね」と発言しちゃうほどのノウタリンであった。

確かに大和達は他の艦娘と比べたらまず抜けたものだが、それを生かすのは我々提督の仕事なのだ。戦艦と空母だけでは戦闘は出来ない。この提督はそれを分かっていたいなかった。

そして何よりも彼女たちにとってキツイのは、所属している艦娘からの虐めであった。

最初は無視程度のもものが、時が経つにつれ本人の前で陰口や嫌味、コップの水をぶっかけたり、極めつけは、大和の艤装に罵詈雑言の悪戯書きが、それも全体的にびっしりと描かれていた。

流石にこれは提督が直ぐに気付き、対処したがこの段階でもうすでに三人とも提督達を信用できなくなっていた。

その後は上層部の調査で判明し、別の鎮守府に飛ばされた大和たちだったが、此処が最初の鎮守府より質が悪かった。

その鎮守府の提督は何よりも戦果を求めている。戦果の為ならありとあらゆる手段を使って勲章を、上層部のパイプを太くしようとした。

潜水艦を使ったデコイ、相手の戦力を削るために低レベル艦による片道切符作戦、疲労が限界でも出撃させる等、ブラック鎮守府より酷いことをやっていた。

思った以上の戦果を挙げなければ暴行された。最悪提督の暴行で死ぬ艦娘もいた。素手ではなく道具を使った、万力や鞭、ナイフや焼

き印等、拷問といつても良いぐらいの事を、その鎮守府は、提督はやっていた。

何故、それが今の今まで気づかなかったのか？それは高速修復剤で傷を直していたからだ。築き上げたパイプを使い、高速修復剤を安く、大量に購入。遠征でもかき集め、暴力で傷ついた艦娘をバケツでぶっかけていたのだ。高速修復剤は有りとあらゆる傷、怪我を直す。その効果を使った、悪質なものであった。

最初は手厚い歓迎を受けた大和たちだったが、出撃で中破する回数が増えると提督の反応が180度変わった。最初は手足を縛られ、吊るされた状態で艦娘の暴行シーンを目の前で見せられ、「これ以上失態を繰り返すようなら、判ってるな？」と釘を刺された。

それでも中破してしまうと、暴行を加えられた。時には仲間に暴力を加えるよう強要した・されたことも。

そして極めつけは、性的暴行であった。

「俺たちが奴の鎮守府を強硬捜査したとき、どうやらその最中だったみたいだな。・悲惨な光景だったよ」

「……………」

「その後は、そこに所属していた艦娘を救出、提督はその場で抵抗、射殺された。最後は俺達に怨み言を言いながら撃ち殺されたよ」

「……………そうか…」

「救出された艦娘は彼女達を除いて全員軍籍から除外、今は施設で日常に復帰できるように訓練中だ」

「…まさか、彼女達というのは」

「そう、大和たち三人だ」

三人とも見つかつたときは憔悴状態で、直ぐにちゃんとした施設で治癒しないと危険な状態であった。特に大和は怪我が酷く、時間との勝負であった。

「彼女たちは治療が終わった後、精神チェックしようとしたんだ。だが、大和が精神が非常に不安定だったんだ」

「……………」

「武蔵と大鳳のお陰で落ち着けさせることに成功したが、彼女達の目

を見て分かったよ。

「……ああ、俺の事を信用どころか、ヒトを敵として見ているな、とな」

それはそうだろう。今の今まで虐待を受けていたのだ。信用、信頼等できるはずが無い。

「武蔵と大鳳は、どうにか信頼関係を結ぶことができた。だが大和は二人以外の話を聞かない」

「……本来なら、軍籍除外し、日常復帰を目指すはずなのに、それをしていない。つまり、上層部は未だに彼女らに拘っているのか」

「連中は艦娘をヒトではなく、道具としか見てないからな。それでもブラ鎮に比べたら遥かにマシな思考ではあるが」

「……だがよ、お前の所でも良かったんじゃないか？」

「ちよつとマズツてな……。ちよつとウチの娘達と仲が悪くなつてな……」

「何でだよ？」

「……大和の服に糸屑が付いてたから、除けようとしたら思つきしブツ飛ばされた」

(恨みというかなんとか、……根が深いぞ)

「それが原因でビス子達と対立してね。これ以上は無理だと判断したんだ」

「んで、俺に寄越したわけか……」

「それに、お前は虐められたことのある経験者だしな。そこんところのフォローもできると思つて」

「そんな理由でかよ……。一応言わせてもらうが、多分意味ねえぞ」

「それでもだ。……頼む」

「……やれやれ、分かったよ」

溜息を深く吐き出し、村上の願いを聞いた。

「やれやれ、上層部の汚いケツを拭く羽目になるとはな……」

「面倒だが、奴らに嫌われるのもバカバカしいがな」

「ハア……」

数日後

「雲龍型正規空母、葛城 着任します！」

「ヴィットーリオ・ヴェネト級二番艦、リットリオです。よろしく願いますね」

「ああ、ようこそ。わが鎮守府に」

鎮守府にやってきた葛城にリットリオに挨拶し、笑顔で対応していた。

大和達は午後から来るとのこと、午前中にやってきた二人を相手していた。

「ところで、雲龍姉さんと天城姉さんいるの？」

「残念ながらウチの鎮守府にはいないな。まあまた近いうちにやってくるさ」

「提督、ローマは…？」

「弾薬が足りんでな…」

そんなこんなで二人の着任式が終わり、昼飯を食べ終わり、運命の午後の着任式が始まった。

「戦艦、武蔵だ」

「空母、大鳳です」

「……………」

「…大和」

「…戦艦、大和」

本人達を目にした提督は絶句した。演習に見た覇気、やる気が全く無くなっていったのだ。やられたことを考えると仕方のないことなのかもしれないが、これは骨が折れるな…と思った提督であった。

提督自身は、艦娘としての活躍はしなくてもいいと考えていたが、上層部は戦果を出してほしいとやたらしつこく打診してくる。もういっそ上層部に乗り込んでシバキあげようか考えてしまうほどだった。

軍人としては活躍してほしいと思うのは確かだが、この光景を見るとそう思わなくなる。

「…ようこそ、わが鎮守府に」

「…もういいかしら？もう自分の部屋に戻りたいのだけど」

「あ、ああ…構わないよ」

「では失礼します」

そのまま自分の部屋に帰っていく大和。しかし武蔵と大鳳はその場に残った。

「君たちは戻らないのか？」

「…提督、貴方は信頼に足る人物ですか？」

「あん？」

「貴方の友人の、村上少将が言っていました。——吉川は俺が知る中で最も信頼に足る人物だ、と」

「…あいつめ」

「私達は村上少将の人柄を知っているし、信用できる」

「ですが、必ずしもその人が言った通りの人物とは限りません」

「まあ、私は大丈夫だと思っているがな。ここの艦娘は感じが非常に良い。今まで回って酷い所は、艦娘の感じも非常に悪かったしな」

「…私は、貴方のこれからを見て判断させていただきます。宜しいでしょうか？」

「ああ、構わんよ。初めて会って信用してくれ言っても無理な話だしな」

「ありがとうございます」

「では、私達も部屋に戻ることにしよう。では提督、また明日な」

そう言って武蔵達は提督室から出て行った。

「…さて、先ずは何の仕事をやらせるべきかねえ…」

先ず大和に必要なのは、自分の誇りを取り戻すこと。俺たち人間側が糞を塗り付けた誇りを、綺麗にする。そうすれば、武蔵達も立派になるだろうと思っている。

だが、彼女の心はガツチリと閉じきってしまった。この序の心を開けることができるのは、

「長門、だろうなあ…」

演習の時に相手をした長門以外に提督は思いつかなかった。

そして、心を閉ざした大和と長門が、再会する。  
さあ、これからどうなるのだろうか…。

続  
く

く大鳳サイドく

「さて、村上少将の言うとおりの人物か、調査しますかね…」

私、大鳳は今、吉川少将の鎮守府に着任しています。ですが私は正直な話、こここの提督を信用していません。

理由、というより根拠は無いけど、気に入らないのです。

村上少将は、彼のことを高く評価し、私たち艦娘を大事にすると言っていました。本当にいるとは思ってません。本当にいるのなら、何故…何故、今頃になってそんな人がいる鎮守府に配属させたのか。もっと早ければ大和さんは、あんな…あんなことには、ならなかったのに…。

ですが、懇意にしてくれた村上少将の信頼している人物。もし、もし本当に、そのような人物だったら、大和さんを復活させることが出来るかもしれない…。

それを見極めるために、先ずは彼と仲の良い艦娘を探し、調査しないといけない。そう思って最初に秘書艦回数が多い加賀と話していたのですが…

「提督のことを知りたい？」

「ええ、私は新参者ですので、できれば提督のことを知っておきたいのです」

「ふむ…」

何か怪しいと思ったのか、加賀は少し考えていましたが、

「まあ、いいでしょう。別にやましい事はしてないですし、知ることは大事ですしね」

「ありがとうございます」

「…あと、敬語はいらわないわ」

その後、提督のことを調べたが…弱点や弱みといったものが少なかった。あってもどっちかというところと惚気のようなものばかりであった。

これでは話にならないと判断し、こここの最古の艦娘を聞き出した。

「電なのです！よろしくなのです！」

「大鳳よ、よろしく」

提督の最初の艦娘、電。

「この鎮守府では、一番の先輩なのだが、電自身そういうのを嫌うのか、先輩後輩関係なく接してほしいという人物であった。」

「でも、提督のことを知りたいなんて…ちよつと驚きなのです」

「ええ、やはり背中を任せるに値するかどうか、人柄を知っておいたほうがいいので」

「…本当なのですか？」

「ええ」

「…その言葉、信じるのです」

その後は提督のことを調べたが、気になる話が出てきた。

「え…、提督は虐められっ子だったんですか？」

「なのです。といっても、小学生卒業までで、中学からはそんなのが無くなった、という話なのです」

「あの提督が…」

「以外な話であった。あの提督が虐められる光景が浮かばないのだ。」

「気になるのなら、提督に聞くといいのです」

「しかし、話すのでしうか？」

「今では笑い飛ばす程度に収まっているのです。別に問題ないのです」

「…わかりました。提督に聞いてみます」

「頑張るのです」

真偽を確かめるために、私は提督の元へ向かった。

～大鳳サイド O U T～

～提督サイド～

「で、俺んどこに来た、と」

「すみません、どうも信じられなかったもので」

「いや、別に喋ってもいいんだが…面白くねえぞ」

その後、ポツリポツリと喋った。今では笑い飛ばせるが、感性の強



い奴だと泣き出すことがあるからなあ…。

「俺が小学生低学年の時、両親が事故で死んじゃったんだ。その後は叔父が引き取ってくれたんだが、二か月ぐらい引きこもっていたらしくてなあ」

「らしい？」

「その間の記憶が全くないんだよ。医者曰く、脳が防衛反応したんじゃないかと言われてるがな。」

まあ、どうにか両親の死から立ち直ったのはよかったが、子どもというのは残酷だよな、どうして学校に来れなかったのとか、お前いたの？みたいな発言が飛ぶわ飛ぶわ。後者は別に無視すればよかったが、前者は答えることができねえし、その親も何か悪かったんだろうなあ、次の日から親無し呼ばわりだぜ？仲の良かった友人は言わなかったけどな」

「……………」

「まだ聞かない？」

「…はい、お願いします」

若干顔色が悪かったが、本人も大丈夫と言ってるみたいだし、引き続き話すことにした。

「そこからはまあ、小学生卒業まで大変だったよ。一番きつかったのは靴箱の中にカマキリの卵があった時だな。しかも最悪なことに孵化しててな、カマキリの子がわんさかと」

「……………」

「まあ、中学校からは無視される程度になったけどな。こんなのはじめの内に入らん」

「……………」

「カマキリ付近で顔が蒼くなっているが、大丈夫か？」

「……………まだ、大丈夫です」

顔色も悪くなっていたが、まあ一番酷かった小学生時代は過ぎたから、大丈夫だろう。

「中学であったのは、制服の背中をチョークで落書き程度だったし、海軍学校はそんなんしてる暇があったら自分を鍛えなきゃ海軍注入棒

でしごかれる。…まあ、海軍学校はばれたらばれたで上官からのありがたい”お仕置き”があつただろうがな」

普通の人なら「十二分に虐めです」と突つ込まれそうな内容だったが、まあ今では笑い飛ばせる話になつたなあ…。あ、やべ。ちよつと涙が…。

「……………何故」

「あん？」

「何故、提督はそんなに強いんですか？」

「…強くはないさ。今でも両親が出る夢にうなされるしな」

「でも、貴方はそれでも、前へ進んでいる。虐められても、大切な人が死んでも、それでも前へ進もうとしている」

「……………」

「貴方と大和の差は一体、一体何なんですか？」

——教えてください、提督……！——

悔しさのあまり口から血が流れ、睨みつけるような視線を、俺に送っていた。

「…何故、と言われても…ただただ舐められたままが嫌いだった。まあ、小学生の俺は大人しめだったしな」

「なら……」

「これは、本人が変わらなければ意味が無いんだ。

誰かが引つ張るんじゃない、本人が意識して頑張らなきゃいけない。

下手に手を出して、悪化するパターンもあるんだ」

「……………」

「——だが、何もできないというわけじゃない」

「…え？」

「信じてやれ。——お前の信じる大和は、こんなところで腐るような奴か？」

「……！」

目から鱗が落ちたような表情をした大鳳。

「…まさか、信じてなかった、訳じゃないよな……？」

「あ、当たり前です！」

「うむ、なら良し」

「なにが良しd——」

ズガアアアッ!!

「——!?!」

いきなりの轟音に思わず反射的に懐にある拳銃に手を寄せたが、

「——!」

「——!?!」

長門と大和の怒鳴り声が聞こえた。

「チッ!大鳳!」

「は、はい!」

「陸奥と武蔵を呼べ!急げ!」

「了解!」

急いで音の発生源である大和の部屋に向かった。そこに広がっていたのは、

「いつまで腐っている!こんなんでへこたれるのかお前は!」

「私の、私のことを知らないくせに!今まで何があつたか知らないくせに!」

「何だと!」

喧嘩していた。

ドアは跡形も無くなり、部屋は一部ブスブスと煙を上げて、机は粉々になっていた。

これはヤバいと思つてやめるよう間に入ったが

「すつこんでろ(て)!!」

ゴキイッ!!

「ガアアッ!」

…思いつきりぶつ飛ばされた。しかも壁にめり込むという事態に。しかも胸を殴られたせいか骨が折れたようだ。息をすると凄まじい痛みが襲う。

失神寸前で陸奥と武蔵が止めに入って、大鳳が俺を見て悲鳴を上げたところで、意識が消える直前にこう思った。

(これ、関係が悪化するじゃねえか…。目が覚めた時どうなっているかなあ)

そして、そのまま意識がブラックアウトした。

「……こ、は」

目を開けてみれば、見知らぬ天井……ではなく、鎮守府にある医務室であった。どうやらあの後壁にめり込んだのを引つ張り出してくれたようである。

「痛てて、こりやあ本気でやってくれたようだな。……骨まで逝った訳じゃないみたいだが、ひびは確実に入ってるな」

「そりやあ壁にめり込む威力で何ともなかったら人じゃないですよ……」

「……いつからそこに？」

「骨まで逝った、付近ですね」

そこにいたのは、花瓶を持っていた大鳳が立っていた。

「驚きましたよ。陸奥さんと武蔵を呼んで大和の部屋に行ってみれば提督が壁にめり込んでいるんですから……」

「ちよつと油断した。いつもなら踏ん張ってるんだがなあ……」

「人間ですか貴方は……」

提督の発言に呆れながらもベッドの横にある冷蔵庫の上に花瓶を置きつつ、あの子のことを話してくれた。

「あの後、陸奥さんと武蔵の手で鎮圧させ、加賀さんが提督代理を引き受けました」

「……鎮圧？」

「提督が伸びているのに引き続き喧嘩を続行してましたからね。当たり前じゃないですか？ ああ、長門は二日間の謹慎処分を食らっているわ。……大和は別の部屋に引越し、武蔵と私が真っ黒になった部屋を掃除しました。もう畳が一部焦げてたりテレビやエアコンが壊れて大変でしたよ」

「……後でアイスクリーム券を二人にあげよう」

「本当ですか!?!……あ」

あまりの食いつきに自分でも恥ずかしかったのか、顔を真っ赤にして咳ばらいをした後続きを言った。

「オホンッ。で、提督がここで横になっている間、沢山の艦娘が心配して来てましたよ。流石に大淀さんと加賀さん、謹慎中の長門さんと任務中の艦娘は来てませんでしたね」

「…愛されてるね、俺」

「…どうやら、私の判断が間違っていたようでしたね」

「あん？」

思いがけない言葉に、？と頭の上に出ていたのが分かったのか、

「村上少将の言う通りの人物だった、ということですよ」

「…イチイチそういうの面倒くさくないか？村上だけでいいぞ。そのほうがあいつも喜ぶ」

「覚えておきます」

クスツと笑った大鳳と夕日の色も相まって、見惚れるほどに非常に綺麗な光景となっていた。しかし、提督はふと違和感を感じた。

「ところで俺、どれほど寝ていた？」

「丸二日ぐらいですね」

「やべえ、実務が、書類がががが…！」

「…加賀さんがいい笑顔で『全てやっておきますので、期待してますよ？』と」

「…：さすれば、懐のお金よ…」

さめざめと泣く提督が面白いのか、お腹を押さえて笑っている大鳳であった。そこに、

「どうやら、起きたようだな」

「武蔵か」

「武蔵、大和は…？」

「どうにか落ち着いた。さっきまで大変だったぞ」

「？何でだ？」

「二日前、提督をぶん殴っていたら？どうやらそれが原因みたいだな」

「ますますわからん」

「…簡単に言うとは、提督が怒って暴力をしてくれないか、怯えているらしい」

「…下手したら並みの提督をボコボコにできる程のスペック持っているのにか？いやまあ、暴力なんぞせんけどな」

「…いくら艦娘でも、女の子だということを忘れてないか？」

「忘れてないが…、大の男を壁にめり込んでしまう程の一撃を放ってしまうのをただの女の子とは言わんだろ…」

正確には、長門の攻撃も入っているのです、大和単体の攻撃なら、一瞬意識が途絶える程度だったりする。

「…まあ、今回はいい収穫もあつたがな」

「収穫？」

「ああ、いつもなら無視するのに今回は反応があつた。これは喜ばしいことだ」

「…その代償が、壁にめり込む俺というね」

「あー、まあ…それはすまない」

「…まあ、金剛のバーニング☆タックルで耐性がついているけどな。だが壁にめり込むのは霧島のガチパンチぐらいだと思つてたぞ」

「……本当に人間か？」

「失礼すぎるぞ!」

なんだかんだ喋っていると、武蔵がこんなことを聞いてきた。

「…なあ提督」

「ん？」

「もし、次回の特殊海域で、最深部までいったら上層部の仲間入り、という話が出てきたらどうする？」

「どうした？藪から棒に」

「いいから、聞かせてくれ」

そう聞いてくる武蔵の顔は、真面目な顔をしていた。

「ふむ…。まあ別に上層部に入れなくてもいいなあ」

「ほう？何故だ？上層部に入るということは金や名誉、女にも困らないのこ？」

詳しく言うなら、上層部は、最初は「国民を守り、私利私欲の戦いをしない」という方針のもとに結成された組織だったが、今では権力や賄賂、暗殺や事故に見せかけた他殺等、もう腐りに腐りきっている。

唯一まともなのは地方の、ほんの一握りの支部だけである。といって、だからと言ってほかの組織も完全にグズグズに腐っているというわけではなく、ほんの一部がそんなことをやっている、というだけだ  
が。

幸いにも、〃上層部〃には監査権はなく、別に上層部に反抗しても即首というわけにはならない。：ただし、燃料や弾薬、ボーキの支給量が減らされてたりするが。

因みに監査権があるのは陸軍の憲兵隊、海軍の督戦隊である。

「別に金がほしい訳でもないし、名誉もそんなにほしくないしなあ。女？こんな女の子ばかりの鎮守府にそんなことを思うバカはいるのか？むしろあまり考えんぞそんなの」

「：残念ながら存在するんだ。直接会ったわけじゃないが、そういう噂は舞鶴や横須賀あたりにならそんな黒い噂はよく聞く」

「ぶっちゃけ、俺は彼女達と、日本、そしてここに住む住民の為に戦うだけさ。そんなことを考えている暇なんぞあつたら防衛ラインの構築や新兵器の開発に勤しんだ方が百倍マシだし、それに：」

「それに？」

「：彼女達を愛しているからな。そんなことは死んでもやらん。下手にやって沈んでしまつたら二週間引き籠る自信があるしな」

堂々と、こつぱずかしい&情けないことを言った提督。しかし、  
「：プツ」

武蔵が肩を震わせていると、

「アツハハハハハハハハハハハ!!成程、村上少将のいう通りだったな！こんな人物があくどいことを考えるはずない、か。確かにその通りだ！ハハハハハハハハハハハハ!!」

突然、大きな笑い声をあげた。何がおかしいのか分からないのが分かったのか、大鳳がフォローした。

「私たちは最初、あなたのことを信じてない、と言いましたよね？」

「ああ、言っていたな」

「私たちは一緒だと思っていたのです。：今まであつた提督と同じだろうと」



「あー…、それはしようがないだろ。今までのことを考えていたら当然のことだ」

「…優しいのですね」

「優しいはないさ、これがおれのやり方故な」

そんなことを言い始めると、笑い終わった武蔵がこんなことを言った。

「あー、笑った笑った。こんなに笑ったのはいつ以来だろうな」

「随分と笑ってましたね…」

「しかし、君の元でなら大和も心が開くかもしれんな」

「本人が頑張らなきゃいかんけどな」

「…提督、これからもよろしく頼むぞ」

「私も、よろしくお願いいたします」

「…ハア、もう既に仲間になつているのだから、そんなこと言わんでもいいのに」

「それでも、さ。我が力、提督に預けるぞ」

「同じく」

「おう」

こうして、武蔵と大鳳が仲間になりました。しかし、

「あとは大和が残っているな」

「…妹の私が言うのはなんだが、割と大変だぞ」

「その割には苦にしてないようだが…」

「まあ、私自身こういうのは好きだしな」

（…ダメンススキー、では無いんだよな…？）

「…非常に不名誉なことを考えてないか？」

「気のせいだ」

まだまだ、提督の受難は続くのであった。

続 く

「全然進展しないなあ……」

「一ヶ月しか経ってないんだ。まだまだ先ではないか」

「それはそうなんだがな、上層部の打診がウゼエんだよ……」

「しつこいですね……」

大和達の着任から一か月たった日の事、提督は頭を抱えていた。理由は上層部の突き上げ&しつこいほどの打診である。

長門の謹慎が解いた後、大和達の事情を教え、どうにか長門を味方につけることに成功。今はドア越しに一方的に喋らせている。もちろん一方的な訳だから、返事が返ってくる訳がない。ではなぜこんなことをしているか？

『私たちはあなたに手を出さない』ということをお教えること。『私は貴方の味方である』ということをお教えるためである。いきなり味方ダヨーと言っても信用なんかするわけない。なのでゆっくりやっているのである。

しかし、上層部のしつこさが提督の我慢の緒が少しずつ、少しずつ切れ目を入れるような感じに切れかけていた。このままだと上層部に突っ込んで血祭りヒヤツハーしかねないほどであった。……まあ、夜中の二時でも打診なんぞ送ってきて、しかもほぼ毎日送ってきたらそりや頭に来る。

「……どうにか武蔵達を出撃させる程の強敵が現れば、どうにかなるんだが……」ピコーン

「……なんか音が鳴ったぞ」

「え、気のせいじゃ」

「ビー！、ビー！、ビー！」

「……………」

「気のせいじゃなかったな？」

「ま、まだ敵の構成が分かってないし、もしかしたら駆逐艦達でどうにか……」

突然の警報に嫌な予感が止まらない提督だったが、気のせい気のか

い…と必死に嫌な予感を払っていたが、

「あー…残念なお知らせだ、提督」

「…敵構成は？」

「レ級2、ル級改1、ヲ級改2、全てフラッグシップだ」

「何そのキツイの…。いや待てよ？」

「どうした？」

「…武蔵、大鳳。すまないが出番だ」

提督はそう言うと、今回参加する艦娘を呼び、作戦を練り始めた。

一時間後、作戦を練り終わった提督がブリーフィングを始めた。

「今回の作戦は、無人島周辺にいるレ級の艦隊を撃滅する作戦だ。なので今回は連合艦隊で出撃する」

「打撃か機動、どちらにするんですか？」

「今回は打撃で出撃する。」

第一艦隊には旗艦武蔵、金剛、霧島、イタリア、那智、大鳳。

第二艦隊は吹雪、時雨、大淀、榛名、北上、大井

以上の構成で撃滅する。といっても今回はかなり本来の戦いから離れている

まず第二艦隊が先行し、レ級達を誘い出す。その後は第一艦隊が待機している島に誘い出す。その後、第二艦隊は第一艦隊に合流せず挟み撃ちを行う。武蔵とイタリアは第一艦隊から一時離れ、島の反対側から砲撃を行う」

説明が終わった後、質問が出た。

「しかし、それだと第二艦隊の被害が大きいのと思いますが」

「それに、挟み撃ちだと最悪フレンドリーファイアしかねないですよ？特に重雷ですと悲惨なことに…」

「そこはこの前完成した接触機雷とバルジを使う。そして挟み撃ちと言ったが正確には十字砲火だったな、スマン」

「ところで、私たちが何故今の反対側に回る理由は？」

「単に射程が長い&接近戦不得意でしょ君たちは」

「そういう理由か…」

ただ単に接近戦が不得意という理由で島の反対側で砲撃することになった武蔵とイタリア。少し背中がさみしく見えた。

「今回は戦艦には三式と九一式、一式を使用する。間違えて一式しか積んでないという間抜けなことにはならないように。特に霧島な？」

「あの、私は三式だけだったんですが…」

「尚悪いわ。てか三式でノーマルとはいえル級フルボッコっておかしいわ」

「普通ですよ？」

「普通じゃねえ」

緊張をほぐす為か、他愛ない話をしながらブリーフィングを終わらせた後、提督はイタリアを呼び出した。

「提督、イタリアにご用でしょうか？」

「ああ、君にこれを渡そうと思ってね…」

提督の手には何故か眼鏡があった。

「…えつと…？」

「ああ、これはな？標準機能と弾道が見える機能が入っている眼鏡だ。因みに作ったのは明石と夕張だ。安全性、信頼性も高いから安心していいぞ」

標準機能はロックオン機能、弾道は文字通りメ〇ギアのグレの投下の奴である。

「あ、ありがとうございます！」

「君は比較的火力も高いし、珍しく三連装砲持ちだからな。せつかくなら全力でやりたいだろ？」

「はい、本気で叩きますよー!!」

その眼鏡を受け取ったイタリアは、すぐに眼鏡をかけ、出撃準備を始めた。

「旗艦が私って…不安しか無いですよー…」

「大丈夫さ。僕もいるし、君も旗艦経験が無かったからね。これを機に覚えるのもいいよ?」

「私、大淀もいるんですし、大丈夫大丈夫」

「榛名も補佐しますよ」

「私たちはその命令を聞くだけだよ」

「同じくですね。大丈夫、いつも通りの事をやるだけよ」

「は、はいっ!」

旗艦吹雪で先行している第二艦隊がレ級達のいる場所を一撃離脱で予定の場所に誘導、逃げている間に接触機雷を投下、相手にダメージを与えたが総ダメージが凄くしょぼかった。全体的に5から10ほどのダメージしか入ってない。

しかし、それが良かったのか、馬鹿にされたと思った敵が頭に血が上り、さらに追い掛け回していた。

どうにか大きなダメージを負わずに所定の場所におびき寄せたあと、第一艦隊が三式弾でヲ級改を砲撃、艦載機を使用不能にした。その後大鳳の艦載機が発進された。

「これが、ここの提督の戦い方なのね…」

「どつちかという私たちの戦い方が基本的に《ぐうの音も言わさない、むしろ相手の大将首を黙らせる》というやり方なので、提督がそれに合わせて戦略を練っているだけですよ?」

「…提督に同情します」

戦闘しながらこんなことを喋っている大鳳も相当のものなのだが、大鳳自身もそれに気付いていない。十二分に素質のある娘である。

「と、とりあえず、私も行きますかね」

「?この距離のほうに当たるんじゃない?」

「いえ、私の戦い方は——」

そう言うと、レ級に突っ込む霧島。あまりの行動に驚く大鳳だったが次の光景でさらに驚いた。それは、

「そん首、置いてけよやああああッ!!」

ゴギヤッ!!とレ級の首をつかんだ途端、そのまま首をへし折った。

「……………」

あまりの光景にポカーンとなった大鳳だったが、目の前に水柱が立ったことに気付き、慌てて回避行動をとっていた。

尚、金剛、那智は普通に砲撃でボコボコにしていた。

取り敢えず、大鳳が思ったことは、

「…もしかして、ここの艦娘が異常なの？」

というものであったそうなの。

「零式水上観測機の発行信号を確認…。ポイント入力、完了！」

「こちらポイント入力中…完了しました！」

島の反対側に待機していた武蔵とイタリアが、零式水上観測機からの信号を受け取り、砲撃準備をしていた。

「ん？さらに信号を確認…。霧島がレ級を仕留めたか。凄まじいな…」

「私達も負けられませんね。提督がくれた眼鏡の効果、ここで使わずしていつ使う」

「…途中の喋り方がおかしかったが」

「えへへ、提督が持っていた時代劇の映像に映ってたんです」

「そうか…。よし、砲撃準備完了。イタリア、いけるか!？」

「大丈夫です！」

「よし、砲撃開始！」

次の瞬間、凄まじい砲撃音が、あたり一面に響いた。46cm三連装砲と381mm/50 三連装砲改が放った攻撃は、生き残ったレ級たちに万遍なく降り注ぎ、生き残ったのは瀕死のレ級とヲ級改であった。

どうにか海域から逃げようとした二隻だったが、武蔵はそれを逃がさなかった。

「残念だが、そこは私の射程圏内だ」

次弾の装填準備が終わり、零式水上観測機の信号を受け取りながら最後はこういった。

「——可能な限り撃ち込む!!」

そして、再びレ級達の頭上に、武蔵の弾丸が降り注いだ。

「作戦完了、これより帰投する」

『了解、気をつけて帰るんだぞ』

提督に連絡した後、武蔵達は大鳳と合流、大鳳が若干げっそりしていたが、大した被害がなく、無事帰投した。

因みに、霧島がレ級の首を取ってきたのを見た提督はすごく驚いたが、その後、山の上にある所（花見回をやった場所）に埋め、供養し、墓を建てたそうなの。

続  
く

「……………」

ある日の早朝、大和は鎮守府周辺を歩いていた。ここに着任して一カ月半。大和は武蔵と大鳳以外、誰とも喋っていないかった。長門は話してくれるが返事をしない。そもそも武蔵たち以外には会ってもないので着任したことを知らない、とまでは言わないが、鎮守府内では認知度では最下位であった。

しかし、むしろ大和にとつては幸運であった。武蔵たち以外信用できないし、嫌味や虐め何ぞ受けなくて済むのだから。

「……………」

そのまま歩いていくと、向こう側から何か走ってきた。一人ではなく、複数の足音だ。近くに建物の陰に隠れ、その足音の主を待った。しばらくすると吹雪と葛城が来た。

「ぜえ、ぜえ…」

「えーと…大丈夫ですか？」

「吹雪ちゃん、いつもこんなに走り込みしているの…?」

「ええ、といつてもまだ半分程度ですが」

「鎮守府周辺二周して半分なの!?!」

（※鎮守府1周辺り四キロあります。鍛えてない人が走ったら死ぬます）

吹雪は葛城の体力が限界なのを見ると、走るのをやめ、海沿いの堤防に腰掛けた。

「私って、夕立やしぐちゃんと比べても弱いですからね。最近では睦月や如月も改二になってますからね。私ももうすぐ改二だけど、それでもスペック的には二人に負けますし」

「いや、夕立と時雨は比べるほうがおかしいよ…。夕立は夜戦火力ならトップよ?時雨も幸運持ちで夜戦でも姫普通に爆散させるし」

「それでも、ですよ。それに…」

「それに?」

「…いや、なんでもありません」



「?変な子だね」

そういうと吹雪は走り出す準備をした。

「葛城さんは戻っても大丈夫ですよ。その感じだとリバーズする一歩前な感じに見えますし」

「:やつぱり、そう見える?」

「顔色が悪いですからね。今はだいたいぶ落ち着いてますが、だからと言つて無理に走らせたなら見るに耐えない光景が:」

「あはは。じゃあごめんけど、先戻っているね」

そういうと、二人はそこから離れていった。

「:.....」

大和は先ほどの光景を見て、少し懐かしいように、同時に眩しく見えた。今の大和には、無いものだったから。

だが、仲よくする前に虐められるかもしれない。陰で悪口を言っているのかもしれない。そう思うと、一歩先が踏めないのだ。

それに、提督に暴力を働いてしまったのも拍車をかけている。今更謝つて、許してもらえないと、そう思っているからだ。そう思いに耽つていると、

「お、大和やん。こんな時間にどうしたん?」

背後から声を掛けられた。大和が驚いて後ろを見ると、両手にパン屋の袋を持った龍驤の姿があった。

「:.....」

「:いや、ちよう喋てくれたかてええんとちやう?」

そういうと、龍驤は大和の手を引っ張り、先程吹雪たちが座った堤防に腰掛けた。

「ほら、これでも食べーや。これはな、ここでも有名なパン屋のパンなんや。なかなか手に入らんからついようけ買うてしまつてなあ」

そういうと、メロンパンを大和に手渡した。しかし、大和は受け取ろうとしない。

「?もしかして、このパン好きやなかつたん?ほかにおいしいパンもあるんやけど:」

そういうと、袋の中にあるパンをゴソゴソ探し出した。すると、

「……なんで？」

「ん？」

「何で、私にそれを渡してくれるの？」

「別に理由なんてへんけど……そもそも何でそないなことを聞くんや？」

「だって、私、提督傷つけたし……」

「別に気にしてへんし、提督は怒ってへんよ？いつものことだし」

そう言うと、龍驤は肩をすくめた。

「セクハラでもされたん？だとしたらウチがメておくけど」

大和は首を横に振った。

「……提督は、ああ見えて優しい人や。ウチラが問題起こしてもある程度許してくれるしな」

「……」

「信じられへんかもしれへんけど、いつまでもほんで足踏みしてたら……いつか後悔するで？」

そう言うと、龍驤はメロンパン一個を大和に渡し、そのまま鎮守府に帰って行った。

大和は手渡されたメロンパンを一口齧り、

「……美味しい……」

その美味しさに、その優しさに、一筋の涙が流れた。

「さて、いつまでそこに隠れてるんや？」

「……ばれてたか」

鎮守府の正面門に隠れるように、武蔵がいた。

「まったく、心配なら君が行けばええんかったのに……」

「いつまでも私がいるわけにはいかないからな」

「……ほれ、君も」

そう言うと、武蔵にもメロンパン一個を手渡してきた。

「?何で私にも?」

「別に、ただのウチの気まぐれや」

「…:そうか。なら、有難くいただきます」

そう言い、メロンパンを一個いただいた。

「:美味しいな」

「せやろ? いやーなかなか手に入らんから大変だったわー」

「なるほど、確かに手に入りにくいだろうな」

「せやろせやろ♪」

龍驤と武蔵はそのままパンを食べながら食堂室に向かった。

そのまま食堂室に向かった武蔵たちであったが、食堂室には先客がいた。

「グテーン」

「:伸びてるな」

「伸びとるなー」

食堂室の奥に、葛城がへばっていた。どうやら鎮守府周辺のマラソンは相当きつかったようである。

「まるつきし情けへんなー。ウチが直々に鍛えようか?」

「もう、勘弁してください…:」

「そもそも、龍驤は式神式だろ。この子はボウガン式だ」

「:なら大鳳にやらせんのもいいかもしれんなー」

「ああ、あいつならやってくれるだろう。面倒見もいいしな」

「クシユンツ、:誰か私のことを噂してるんでしょうか?」

「そーいや、改になったら式神と弓道のハイブリットになるんやっ  
たっけ?」

「らしいな。まあそれは改になってからでも教えればいい」

「あの一、なにそこで私の訓練メニューを作ってるんですか…?」

「お前が一番弱いからだ」  
「そんない!？」

翌日から、大鳳のトレーニングに朝から晩まで付き合う葛城の姿があつたそう。

さあて、酒飲みパーティーだー!!」

「イエーイ!」

「…こうなつたんですか」

「さあな。まあ、酒が飲めるのならいいんじゃないか?」

ある日の夜のこと、夜の食堂に酒飲みパーティーが行われていた。といつても、他の艦娘達との交流を目的としている。今回は武蔵や大鳳、イタリアが参加してなかった為、急遽やることになったのだ。酒が入ると、何故か仲良くなることが多いここの鎮守府ならではのパーティーである。

といつても、提督自身酒は飲めるがあまり酒は飲まない為、飲兵衛の隼鷹・千歳が酒の準備、霧島・翔鳳・瑞鳳が酒のツマミ&おかずを作り、提督とお手伝い志願者の艦娘がパーティー会場の飾り付けをする、といった感じである。

無論、駆逐艦及び軽巡組は参加不可である。未成年が飲んだらいけないのです。

「ヒヤッハー!二人ともー!酒飲んでるー!」

「…ハイテンションですね」

「イタリアは?」

「向こうでワインラツパ飲みしてるよーい」

「何ですと!?!」

見てみると、顔を真っ赤にしてワインをラツパ飲みしているイタリアがいた。しかもかなり飛ばしている。

「止めましょうよ!」

「いやー、中々いい飲みっぷりだったし、イタリア、結構飲兵衛って聞いてたからねえ」

「…見ると足下とか全くブレてないな。ワイン、結構アルコール度数高いはずなんだが」

「まあ、ザルなんじゃないの?アタシもなんだけどね!」

「お前はザルを通り越して粹だろ…」

「あ、提督」

「何だ、そんなに飲んでないのか」

今提督が持っているのはウーロン茶と焼き鳥である。

「そりゃあ、そんなに酒ガバガバ飲まんしな」

「なるほど」

「ならアタシがお酌しましょうかねえ？」

「お前が次いだらコップからこぼれるからいいわ」

そうだべつっていると、千歳がやって来た。

「提督、飲んで…せんね」

「いや、そんなに酒飲まんし、下手に飲み過ぎて醜態晒したらイカンだろ」

「あら、私は気にしませんよ？」

「俺が気にするんだよ…」

嫌な記憶でも思い出したのか、凄い遠い目になっていた。

「まあそんなことより、随分と酒を解放したな。これ、全部隼鷹と千歳の酒だろ？」

「あーそれ？いやー最近酒が安く手に入ってたなー」

「それで、今回特別に酒を解放したんです」

「それでも凄いだろ。山崎とか入ってたぞ」

※日本のウイスキーで最高12万以上する酒です。

「二人で飲むより大人数で飲んだ方が美味しいさね。というか提督、その焼き鳥どこにあった？」

「霧島が作っていたから探したら食えるんじやね？」

「よし、ちよつくら取ってくるわ。千歳、ごめんけど」

「分かっているわ。お酒のキープはしておくわ」

「サンキュ、んじやなー」

そう言うと、隼鷹はそこから離れていった。

「…元気な方ですね」

「あれは元気とっていいのか…。まあ、酒さえ無ければいいやつだけどな」

「というかまだ酒を飲むのか…」

「あれでもまだまだ飲んでねえぞ。以前樽二個分飲んでたし」「化け物!?!」

「あら? 私なんて三つですよ?」「上がいた!?!」

二人の肝臓の強さに恐怖する二人であった。

「しかし、大鳳も武蔵もそんなに飲んでないな。苦手なのか?」「いえ、苦手じゃないのですが…」

「そもそも酒を飲まなかったせいかな、楽しみ方が分からなくなてな…。とりあえず、飲み過ぎは拙いことは知っているが」

「うん、その判断は正しいな。その考え本当に大事だぞ」「凄い必死ですね」

「うん、一回酔っぱらいの世話をしたことがあってな? そいつ、俺の服にやらかしやがってな…」

「……同情します」

「どうか…提督、割と苦労人なのだな」

「まあ、楽しいし良いんだけどな。こんな世界、楽しむように人生を謳歌しなきゃ損というもんだ」

笑顔を浮かべながら、そんなことを言っていると、

「イタリアが樽一個飲み干したぞー!」

「隼鷹も参加しようとししないで! むしろ止める側でしょ!?!」

「負けられないからさ!」

「そんなところで負けず嫌い発揮しないでよおおおおお!!」

……………

「誰か水持ってきて! どうせ酒と水の区別なんかつかないわ!」

「酒持ってこーい!!」

『誰がやるかあッ!!』

「てかどんだけ呑んでるんや!?! アンタはええんかもやけど、イタリアはアカンて!」

「まはまは飲めるのれすよー!」

「もう舌がまわってないやないかい!?!」

「あははく体が熱くなってきましたく」

「うわああああ!?!だ、誰か止めさせてー!?!」

.....

「.....」

「.....止めないのですか?」

「...あんなところで止めに入ったらやばいだろう」

「本音は?」

「間に入ったら金剛らに吹っ飛ばされる」

尚、榛名がO☆H A☆N A☆S H Iで静かにさせました。

「ZZZZ」

「寝ているな」

「そのようだな。大鳳もそんなに飲んでなかったようだが...疲れていたのか」

「あの一、提督?そろそろ許してほしいなーって」

「却下」

「酷い!?!武蔵、君はアタシの味方だよね!?!」

「もう少しそうした方が良くないんじやないか?」

「味方がいない!?!」

やらかした酔っぱらいの戯言を無視しつつ、寝ている大鳳を武蔵に任せ、さっさと部屋の片づけを行った。幸いにもやらかした様子はなく、皿も殆ど無くなっていた為、掃除も非常に早く終わった。

解放コールを言う隼鷹を無視し、提督室に向かい、柵の中からごそごそと何かを引っ張り出した。

その中身は——山盛りの月見餅&カップサイズのお酒であった。

「こんなサイズのお酒があるんだな...。まあ、あんま酒飲まない俺とかはちちょうど良いサイズだが」

「...やれやれ、こんなところで何をやっているんだ?」

「武蔵か。大鳳はどうした?」

「同室の娘に任せたよ。...私もいいか?」



「酒が無いがいいか？」

「構わんよ」

「素晴らしい、提督室から月を肴……というより、月を見ながら餅を食べ  
ていた。」

「月を見ながら餅を食べるのもいいものだな」

「本来は酒なのだがな。しかし、そんな安い酒でいいのか？」

「？何か拙いのか？」

「……いや、分からないのならいい」

「？」

※安物のお酒は弱い人だと悪酔いします。気を付けてね。（ただし  
未成年、テメーはだめだ）

「しかし……」

「あん？」

「……提督の鎮守府は騒がしいな。ここに着任してから静かな時があま  
り無いぞ」

「そりゃここ前線だし……」

「前線の割には戦闘が少ないがな。そして何より——」

武蔵は月を見ながらこう言った。

「皆、よく笑うんだよ。それも、心からのな」

「よく笑う、か」

「私が着任した鎮守府は、笑うことがあまり無かったしな。横須賀や  
舞鶴でも心から笑う艦娘もいない」

「……………」

「私達や大和が経験したのは、割とよくあることなのだ。人間の欲望  
の捌け口にされることかな」

艦娘達は美少女といっても過言ではない。中にはケツコン（ガチ）  
する程の人もいる。しかし、己の醜い欲望をぶちまける人もいるのも  
確かなのだ。

「でも……はよく笑う。楽しく、前を向いて、あらゆる強敵を排除する  
強い意志を持ってな」

「……」

「大和は、強い意志というものが無かった。正確にはあるが、強すぎる心は折れやすい。柔軟性のないカチカチのものは一定の力を入れると突然へし折れるようにな」

「自分の強さが唯一絶対の信念だった、ということか？」

「まあ、多分な。私もそうだったしな。伊勢の攻撃にフルボッコされてようやく気付いたが、大和は自分の負けを認めてなかった」

戦艦最強のはずが格下に負けたと思ったらプライドの高い奴なら認めないだろう。自分の敗因は認めがらない。

真の強さを認めるなら、己の負けを認め、次に戦うときは相手の首を取ったるぐらいの気持ちでなければ強くはならない。

「自分の信念を否定され、虐めに遭い、虐待に遭った。心が閉じてしまふのは当然、と思ってしまうのは妹だからかな？」

「…いや、そうは思わんな」

「そうか」

さっきの空気と違ってしんみりとした空気になった。すると、

「…提督」

「何だ」

「大和のことを、助けてやってくれないか？」

「…前にも言ったが、本人が進む覚悟をしないとダメだ。覚悟ができたら、全力で助けてやる」

「分かった」

「ま、そもそも俺を信用してくれなきや、意味ないがな」

そう言いながら、餅を食べる提督であった。

続 く

「……どうしてこうなった」

「……そんなこと、分かりませんよ」

ある昼の、暑い日のこと。大和たちが着任して二カ月半。最初は全く話してくれなかった大和であったが、武蔵達の協力のおかげで、今ではどうにか話してくれるほどに回復してくれた。

尚、初めて話してくれた時の反応はあまりのことに口がポカーンになったそうなの。

「とりあえず、昼はどうする?」

「……適当で」

と言っても、まだまだ壁を感じる、というより心の壁がまだまだ厚い。まだ完全に信用してないのだろう。

それでも話してくれる分、まだマシだろう。……まあ、艦娘達と話していることが多いが。

さて、なぜ冒頭のような会話になっているのかというと、

(武蔵めえ……。なんでこんなものをプレゼントするんだよ……)

と言って提督は手に持っているある物を見た。それは——映画のチケットである。

夕張がネットでタダでチケットをゲットし、それを夕張が武蔵にあげ、武蔵が提督にあげた……というのが真相なのだが、これとは別に武蔵が「大和と仲良くしてほしい」という考えがあつてプレゼントしている。まあ9割善意、1割計算といった感じだろうか。

尚、映画のチケットの中身は恋愛系の映画であった。これを見た提督は物凄く嫌な顔をしていた。

「あー、大和。恋愛系の映画が好きなのか?」

「……はい、好きですよ」

「そうか」

「はい」

「……………」

「……………」

(…会話が続かねえええええ！ってか俺じゃなくて武蔵と一緒に行けばいいのに何で俺に渡すんだよおおお！)

最早キャラが崩壊しまくっているが、それぐらいにテンパっていた。そもそも恋愛系の映画は超苦手な上に会話が全く続かないのだ。基本的に静かなのを嫌がる提督はコミュニケーションを取ろうとしてもそこから続かない。テンパってもしようがないと思いたい。

「…そろそろ始まりますよ」

「お、おう」

話が續かない状態でそのまま映画館の中に入っていった。

「ふう、なかなか面白かったでしたね」

「…そうか」ゲツソリ

若干頬が緩んでいる大和とゲツソリしている提督が映画館から出てきた。

尚、映画の中身は甘々の恋愛映画だった。提督が恋愛系の映画の中で最も苦手なタイプの映画である。提督が好きなのは時代劇や戦記物だったりする。

「…では、そろそろお昼にしましょうか」

「ああ、一応龍驤から周辺のレストラン情報を貰ってるが、そこに行ってみるか?」

「お任せします」

そう言い、提督達は龍驤から貰った情報を元に探索に行った。

「で、ここに選んだんですね?」

「まあな。てか鳳翔、二号店出していたのか」

「ええ。中々評判が良かったので資金が貯まったんですよ」

「……………」

「…で、この方が？」

「ああ、自己紹介しておこう。」

大和、こちらが居酒屋鳳翔の鳳翔だ。

鳳翔、こちらが二か月半前に着任した大和だ」

「よろしく願いますね、大和さん」

「…こちらも、よろしく願います」

大和と鳳翔の挨拶が終わり、日替わり定食を注文し、奥にある大きな窓がある二人用の座席に座った。

「……………」

大和は黙って外の景色を見ていた。提督も大和の邪魔をせず、目を瞑って料理が来るのを待っていた。すると、大和が提督に話しかけていた。

「…提督」

「何だ？」

「…あの時は、ごめんなさい」

「ん？…ああ、あの時か」

長門と喧嘩した時のことを思い出した提督は、苦笑いを浮かべながら「気にするな」と言った。

「別に気にしてないし、お前以上の問題児を見たこともあるしな」  
「でも…」

「気にしてねえって。アバラにひびが入ったことと拳銃が木端微塵になっただぐらいだしな」

普通の人間なら思わず「!?」となる発言が飛んだが、大和は全く気付いていなかった。

「話が変わるが、皆と仲良くしているか？」

「はい、龍驤さんや長門に仲良くしてもらってます」

「そうかそうか」

みんなと仲良くしているという話を聞いてほっとした提督。むしろ先ほど言った怪我のことが原因で仲が悪くなったりしたら悔やむに悔やみきれない。

「武蔵と大鳳も提督と仲がいいですね」

「ああ、まあ頼りになるしな。色々お願いすることもあるしな」

「武蔵は自分の時間を持つようになり、大鳳は葛城の特訓で忙しいですすし」

「ああ、確か龍驤と武蔵が提案したんだっけ？」

因みに、正式に大鳳の特訓に付き合うことが決まったことを聞いた葛城は、顔を真っ青にしたそう。

「でも、これを言うのはおかしいことなのかも知れませんが「？」」

「嬉しさが半分、恐怖が半分、私の心に渦巻いているんです」  
「……………」

大和の話に黙った提督。大和の独白は続く。

「武蔵が私のことばかり構う時間が無くなり、大鳳も葛城の特訓に嬉しそうに教えている。そのことは非常に嬉しいんです。ようやく自分の時間が得られるようになったということですから。

でも：私は、一步も先に出てない。：。それどころか武蔵達のことをどこか恨めしいと思っている私がいるんです。

恨めしく思う理由など、あるはずなのに。あつてはならないのに。

おかしいですよ、こんなことを思うのも、あなたに言ってしまうことも」

提督は黙って大和の話を聞いていた。彼女の心の助けを、聞くために。

「そして、一番怖いのは、武蔵達が私から離れることなんです。

彼女達の自由な時間を奪っておいて、こんなことを言うのはおかしいのは分つてます。でも、彼女達が私のことを忘れてしまうのが、彼女たちが私のことを愛想尽かしてしまつたらと思うと、怖いです。そして一番怖いのは、このまま変わらない自分が怖いんです。

：提督。私は——私は、どうすれば、変わるんですか？」

途中から涙をポタポタ流し始めた大和。提督はポケットの中に入っていたハンカチを渡した。

「ほら、これで拭け」

大和はそのハンカチを受け取って涙を拭った。そして、提督はこう言った。

「——人は、そう簡単に変わらないよ」

その言葉を聞いた大和は、少し悲しそうな顔をした。

「だが、変わり続けるという心を持ち続ければ、変わるだろうな」

「……………」

「でも、それは茨の道と変わらない。もしかしたら変わらなければよかったと思うことがたくさん出てくることかもしれない。

——それでも、お前は変わりたいか？」

「…はい、彼女達の隣に立つ為に、私が私である為に。」

提督、お願いします。——助けてください」

「承知した。全力で助けてやる。だから——今は泣いておけ」

「えっ?」

「泣いていないんだろう? 武蔵からそう聞いている」

「……………」

「今は泣いておけ。そして、心の靄を、凝り固まった悲しみを吐き出しておけ。」

それが、新しい自分に生まれ変わる、最初の産声だ」

そして、提督は大和に向かい、背中を見せた。

「…泣き顔は見せたくないだろうからな。俺はこつちを向いているから、思う存分泣いておけ」

「…ふふっ、変わってますね。——では、お言葉に甘えて」

そう言い、大和は提督の背中で泣き始めた。

提督は鳳翔に向けてごめんのサインを送っていたが、全く気にしていないのか、ニコニコ笑って提督達を見つめていた。

尚、提督が大和を泣かしたという噂が流れ、武蔵や大鳳に詰め寄ら

れた提督であつたが、大和が二人の説得に成功し、事なきを得たのであつた。

因みに噂を流した奴に賞金首（提督非公認、つまり全く知らない）がかかつたそうなの。

続く



## 16 番外編

とある早朝の事。吹雪はいつもの鎮守府周辺マラソンを終え、シャワーを浴びようと駆逐艦寮に向かっていた。

「うーん、あともう少しで改二に届く、かあ…」

そう言った吹雪の顔は若干曇っていた。

理由は簡単。時雨と夕立、そして提督の事である。

大の親友の二人は物凄く強い。最近では空母姫を爆殺したり、ヲ級改を夜戦で沈めたりと物凄い戦果を挙げている。

しかし、吹雪はというと主に輸送艦護衛任務に就くことが多かった。もちろん輸送艦の護衛は兵站上重要であるという認識はある。しかし、二人を見るとどうしても劣等感を持ってしまうのだ。

そして最近悩みだしているのは、最後に出た提督の事である。

こんな気持ち芽生えたのは、最初の戦闘が終わり、鎮守府に帰投した頃だった。提督が夕立の頭を撫でている光景を見た時、何故か胸がチリツと痛み出したのだ。

最初は、気のせいだと思った。しかし、時間が経つにつれ、痛みは徐々に増してきた。

提督が声をかけてくれると嬉しく思うワタシがいた。提督が他の娘と喋っているのを見るとムカムカくるワタシがいた。それも大の親友でさえも。

「…私、どうしちゃったんだろう…」

自分の気持ちに整理できていないことに、不安がムクムクと膨れ上がってきた。

取り敢えずシャワーでも浴びてすっきりしようと考えなおした時、食堂の明かりがついていた。

「あれ？まだ朝食には早いのに…」

不思議に思った吹雪は、明かりを点けた人物を見つけようと、食堂の中に入っていった。

食堂に入った吹雪は、取り敢えず皆が集まるダイニングに行ったが、そこには誰も居なかった。

「ここにはいないとなると…キッチンホール？」

そう思った吹雪はとある悪夢を思い出した。比叡がやらかしたあの事件（本当は事故扱いだがアレは事件ものだ）と吹雪は思っている）である。もう立派なトラウマである。

急いでキッチンホールに向かった吹雪だが、そこにいたのは意外な人物であった。

「えと、卵を溶いたら砂糖を入れるんだったかな？」

「いや、提督は出汁派だから砂糖はマズイ。粉末出汁があつたはずだ。それを使おう」

「味噌汁は…味噌を多めに入れるのが好きという話だったよね？」

「ああ、でも味噌にも種類があるからなあ…。赤と白、ドッチが良いと思おう？」

「ここはオーソドックスに白にしましょう。時間は大丈夫？」

「ああ、未だこの時間なら提督は寝ている。…魚は大丈夫か？」

「大丈夫、うまく出来た」

「よし」

そこにいたのは大和と武蔵であった。武蔵は兎も角（？）、何故大和がこんなところに居るのか、不思議に思っていると、

「そこにいるのは吹雪か？隠れきれてないぞ？」

あつさりとバレ、顔を出していた。

「えつと…二人は何を？」

「何をつて…提督の朝食を作っているんだが…？」

「…パードウン？」

「何で英語になった…？いや、姉さんがお礼と謝罪の意味を込めた贈り物をしたと言つてな。一人では心配だから手伝っているんだ」

「武蔵つ、余計なことは——」

「言わなくていい、か？別に言っても問題は無いし、むしろ私は嬉しく思うぞ？」

あんなに怯えていた姉さんが立派に」

「わーわーわー!?!余計なことはいわなくていいからっ!?!」

大和が顔を真っ赤にしながらか武蔵の口を手で押さえた。その顔には羞恥の他にも別の感情が入っているようにも見えた。

その顔を見た吹雪は、心がモヤモヤしだした。それが顔に出ていたのか、武蔵が吹雪にこう言った。

「何だ、嫉妬しているのか?」

「…?嫉、妬…?」

「ん?違うのか?いや、顔に気に入らない的な感じの嫉妬顔が出ていたからな」

「……………」

吹雪は武蔵の言葉に言葉をなくした。

「…何故」

「ん?」

「何故、そう、思ったんですか?」

「え?むしろなぜわからないと思っただんだ?」

どうやら顔に即出やすかつたらしい。その後、武蔵はこう続けた。

「まあ、私個人としては、提督と仲良く、良い関係が構築できればいいなど思っている。提督自身も非常に艦娘にも優しいしな。ああいう人間と出会えてなければ、私達は心が死んでいただろう。最悪、深海棲艦になつていたかもな」

「…武蔵さんは、どう思っているんですか?」

「私か?ウーム…」

武蔵はしばし悩んでいたが、

「そうだな。私も、好意を持っていない、と言えば嘘になるな」

その言葉に意外だと吹雪は感じた。それが分かったのか、

「私が恋愛に興味がないと思っただか?これでも人並みにあるつもりなんだがな…」

「…ゴメン、私も興味がないと思つてた」

「…姉さん、酷い」

シヨボンな顔をした武蔵（レア顔）であつたが、気を取り直してこう続けた。

「お前が嫉妬する気持ちも分かる。こういうのは何だが、私達はかなり美人の内に入るからな。だが、あまり気持ちに囚われ過ぎるなよ？ そうなったら一步を踏み出すのにその感情が邪魔するからな」

「…私もそうだったからね。提督のおかげで、ようやく一步踏み出せたけど」

武蔵の言葉に苦笑する大和。どうやら落ち着いたようだ。

「…この感情が、嫉妬、なんですか」

「…どうやら今しがた知ったという顔だな？」

「…そう、ですね。今の今まで分からなかったのが、ようやく分かった気持ちです」

吹雪の言葉に武蔵は「そうか」と締めくくった。

しかし、後ろから何やら声が聞こえた。

「うぎぎぎ、また提督Loveな娘が増えたネ…！」

「…もう諦めたらどうでしょう姉さま。別に増えても問題ないですし、人数が増えても提督は愛してくれますよ？」

「それでも！嫌なものは！嫌なのデース！」

「…ハア」

後ろを振り向くと、金剛と霧島がコソコソ隠れてこちらを見ていた。どうやらいつもより早く起きて来たらしい。

「…えっと、何しているんですか？あとおはようございます」

「なんか嫌な予感がしたからこちらに来たのデース。あとgood morningネー」

「私は姉さまに付き添っただけです。あと吹雪さん、おはよう」

その後、大和達にも挨拶し、金剛が味噌汁の味見をしたり、霧島が料理を手伝ったりし、気が付けば時間が8時に回ろうとしていた。

「それにしても、また増えるとはネ…。提督も自重ほしいネ」

「多分無理と思いますよ？提督はああいう性格なの知っているじゃないですか」

「ムウー、ままならないネ…」

途中、金剛のボヤキも入ったが、どうやら吹雪たち三人には聞こえていなかったようで、急いで提督の朝食の準備をした。

「さて、完成したな」

完成した朝食は以下の通りである。

ご飯・味噌汁・卵焼き（出汁）・鮭の塩焼きである。

「…初めて作った割には、うまく出来たんじゃないか？」

「そう、かなあ。ちよつと自信がない」

「大丈夫です。提督は喜んで食べますよ」

「何がだ？」

『うえっ!?!』

横から提督がぬつと出てきたのに驚いた皆であった。今の今まで近づいてきたのに気付いてなかったらしい。

「お、こりや見事な朝ごはんだな。だれが作ったんだ？」

提督の質問に恐る恐るといった感じに手を挙げた大和。

「ほほう、大和が作ったんだな。美味しそうじゃないか」

「い、いや、わたしだけ」

「うむ、ほとんど大和が作ったんだぞ」

（ちよつと武蔵!?!）

（ここはこう言ったほうが好印象が出てくるだろう？ 実際私が手伝ったのは三割ぐらいだしな）

（でも私はこういうの好きじゃないの!）

「……とりあえず、君たち二人が作ったんだな？」

「…聞こえてました？」

「ばつちりな」

ある意味墓穴を掘ってしまった武蔵であった。…まあ、提督自身は一人でこんなに立派なものを作れないと何となく察していたので、やれやれ顔で大和と武蔵の頭を撫でた。

しかし、

「きい」

「きい」

「——キャアアアア!!」

ズドムツ!!

「ゴッフオウツ!?!」

大和の頭を撫でた瞬間、強烈なキドニーブローが飛んできた。挨拶や話すぐらいなら問題ないようだが、体に触れると強烈な拳が飛んでくるらしい。

「あ、綺麗に入りましたねー。あれかなりきついですよ」

「…朝からまたとんでもないのが……」

「あああああああ！御免なさい！御免なさい！」

「……………（ちよつと残念そうな顔をしている武蔵）」

「ハツハツハ、カオスですネー」

「…………ツ!!…ツ!?!」（あまりの激痛に言葉が出ない提督）

「……………これ、どうなってるの?」

「知らないっぽーい」

朝ごはんの時間になったら、目の前にカオスな光景が広がってて困惑する時雨と夕立であった。

## 17 カオス回

「うーむ…」

「?どうした?ウンウン唸って」

「ああ、ちよつとな…」

大和が着任して三か月、今ではすっかり鎮守府に馴染んだ大和たち。もう悩みの種が全部無くなったと思っていたと思っていた提督だったが、新たな問題が浮上した。

「最近、ヲ級ファンクラブの行動が目には余るだろう?そのことでな…」  
ヲ級ファンクラブとは、簡単に言うとなヲ級至上主義の集まりである。具体的にはこんな感じだ。

「ああ、ヲ級たんペロペロしたいんじやあ、」

「海軍?安全?そんなことよりヲ級様じゃ!ヲ級様を讃えるんじや!」

「ヲ級を攻撃スンナ!海軍はとつととおつ死ね!」

…これだけ聞けばどんな感じの連中か分かるだろう。しかもこんなこと言っておいて非常時は自分たちの安全をちゃんとしろと言う奴もいるのだから頭が痛い。

しかも過激派というのはどの組織にもいるようで、テロリストと手を組んだり、わざと襲われたりと正直「撃ち抜くぞオイクラア!」と言いたくなることを起こすのだ。

だからと言ってそのままほつとくと人権団体が文句言ったりするのでいやいや、本当にいやいや救助、ないしは鎮圧しているのだ。大事なことなので二回言いました。

まあ、テロリスト相手なら指揮官以外ジェノサイドしても問題ないのである意味そこだけがマシといえる部分だろう。

「ああ…最近出てくるようになったしな…」

「ああ、もう個人的にはほつとききたいがな。流石に軍人である以上、ほつとくわけにもいかないしなあ」

「榛名が『もうっ本当につしつこいです!』と言いなながら艦装のビツグハンドを使って船ごとブン投げたと聞いたぞ…」

「あれはなあ…。『うるせえこの（ピーーツ！）が！』とやってたしなあ…。まあ、キツチリメといたが」

「ああうん、榛名よく切れなかったな…」

正確には切れていたが、周りの艦娘が青筋立てていたので逆に冷静になったのだ。因みに鎮守府に連行している間、ガチの殺気を食らいすぎたせいか、ズボンからアンモニア臭がしたそう。

「だから、この問題をせめて軽くしておきたいんだが…」

「その解決策が全く分からないんだな…」

武蔵の言葉にうなづく提督。まあ、どうこうできる問題ではないのでしようがないが。

「まあ、それだけじゃないけどな」

「それ以外に問題があったのか？」

「ああ、まあこれなんだけどな…」

そういうと、A4の紙を三枚引つ張り出してきた。

「なんだそれは？」

「ああ、初めて見るのか。」

——ケツコンカツコカリの申請用紙だ」

ガタっ！

バタンっ！

…あちこちから物音が聞こえた。どうやらバカが釣れまくったようである。

「ほう…これがそうか。ほうほうほう…」

「興味深く見ているなあ…」

「で、誰に出すつもりだ」

「いやいや、ここでは言わんよ。…壁に耳あり障子に目あり、だ。なあ？」

気のせいかな、気まずい空気が流れたが提督はニヤニヤ笑っていた。若干Sに目覚めかけている提督である。

「まあ、どのタイミングで渡そうか悩んでいるだけだから、あまり気にしなくていい」

「……………」



「…なんだ」

「いや、…無自覚で落としてそうだなあ、と」

「…何をとは言わんが、一応これでも大切にするぞ？色々」と

「ああ、まあ、うん…それは分かっているんだが…あ」

「あ？」

「…後ろをってみろ」

後ろをしてみると、青葉がハンディカム片手に外でこちらを撮っていた。…気のせいかな、テヘペロな顔をしているように見える。

因みに、提督室は二階にある。…どうやら片手でよじ登ってそのまま片手で録画していたらしい。

「……………」

提督が無言で窓を開け、青葉を片手で持ち上げ、こう言った。

「危ねえこととしてんじゃねえ!!大怪我するだろうが!アホか貴様!」

ガチの怒声が聞こえ、思わずビクウツ!と首をすくめる青葉であった。

「……一応言い訳を聞いておくぞ」

「あ、あはは…ちよつと特ダネの匂いが」

「そんなもんここで俺がしゃべると思ったのか？」

「うっ」

「第一、これが原因で大怪我したらどうすんだ?俺が何も思わないと思っただの?」

「ぐふっ!」

「…言い訳まだあるか？」

「ごめんなさいほんともう反省しているのでいやほんとごめんなさい」

「…つたく」

やれやれとした後、あとで反省文五枚書くように言い、青葉を解放した。

「提督もあんな声も出るのだな?」

「海軍でも提督自ら出張らなきやいけないこともあるしな。声が大きくないと困ることも多いし。やれやれ、問題は全く解決してないのが

なあ…

「時間が解決してくれることもある。それよりお前はそれだけを考えたらどうだ?」

武蔵は机の上にある書類三枚を見て言った。

「ああ、そうだな（ビーッビーッビーッ!!）……………」

「…今度は敵でも来たのか?」

そう言っていると、大淀が提督室に入ってきた。

「…今度は何だ」

「ヲ級ファンクラブのメンバーが重火器を持って銀行を占領しています」

「よっしや全員ジエノサイドな」

「落ち着きなさい。続きますよ?」

どうやら同時にやったようで、あちこちの銀行、学校が占領されています。陸軍が対処しているようですが、どうやら全部を抑えようとすると三日ぐらいかかるそうです。

なので、陸軍が海軍にも応援要請を出したようです」

「敵の武装は?」

武蔵の質問に大淀はこう続けた。

「陸軍からばくったパワードスーツ二つに突撃銃がテロリスト全員に配られたようです。今回は弾薬等は陸軍が負担してくれるようですよ?」

「…今回は俺も出る」

「分かりましたが…大丈夫ですか?」

「ちよつとストレス解消にな…因みに指揮官らしい奴はひっ捕らえればいいのか?」

「はい、今回もそうなっているようです」

「よし、重巡達に口式弾を持ってくるように言っておけ」

そういうと、提督は提督室から出て行った。

「…何があったの?」

「色々な」

「さて、あそこが占領された銀行か…」

提督は明石が運転しているトラックに乗って銀行の前の通りに乗ってきた。

「さて、装備を装着しようか」

「あ、大丈夫ですか？結構改造しているので」

「大丈夫だ、この程度なら問題はなし、と」

そういうと、パワードスーツを着込んだ提督が動作チェックをしていた。

因みにどんなパワードスーツかというと、COD:Advance d Warfareに出てくるアサルトである。工学迷彩付の、が付くが。

テロリストが付け入るのはフルプレートアーマーに電子機器を突っ込んでみた感じの奴になっている。

「よし、テルミットにRPG、アサルトアイフルにブレード装備つと…」

「…いつも思うのだけど、なんでそんな装備で制圧できるのですか…」  
「訓練」

「シモ・ヘイへですか貴方は」

そう言って、提督は光学迷彩を起動、そのまま銀行の横の建物に上り、天井から侵入した。

結果から言おう。圧勝である。

パワードスーツ二体は出会いがしらにテルミットを投げつけ装甲を溶かした後、RPGで後ろに倒し、そのまま操縦者が焼け付くのを待つて勝利。尚、周辺は肉の焦げた匂いがした模様。

引き続き歩兵は隠れながら背後に回って首をへし折ったり、死体から手榴弾を盗ってテロリストに投げ込んだり、人質たちのいる部屋を

マスターキー（蹴り）で開けたりと日頃の鬱憤を晴らすかのごとく、暴れまわっていた。

「オラオラア！銀行なんぞ襲ってんじやねえよ屑どもオ！」

「ちよ、こつちには人質がいr」バム！

「うわあああ!?あいつ手榴弾を俺たちの仲間の体で手榴弾を覆ってふせぎやがった!?!」

「ハツハツハー！死にたい奴から前に出るやオラアアア！毎度毎度面倒おこしやがってえええ！お前ら全員ブタ箱じゃあああ!!」

「分かったから、投降するからこつちにRPGをこつち向けんn」ド  
ゴーン！

「H A H H A ! G O T O H E E E E E L L L L ! !」

「だ、誰か助けてくれー!?!」

∴ 比喩表現なしの死屍累々となったのは言うまでもなしである。しかし提督もただ暴れていたわけでもないらしく、ちゃんと施設の被害は最小限に抑え、お金にも被害は無かった。指揮官も捕まえていたが、もう心がへし折れかけていたようで、提督を見た瞬間、ズボンのシミが広がったような。

そんなこんなで彼らは提督のストレス発散の犠牲になったのであった。

尚、陸軍の陸戦隊はこの手の戦いはガチ最強（この部分超重要）である。∴今でいう海兵隊なのだが、その海兵隊より強い部隊なのだった。

「やれやれ、ようやく終わったか∴」

「とりあえず血を落としてください。小さい子が見たら泣きますよ?」

暁が見たら失禁しそうな光景が広がっていた。

「トラックに乗るまで誰にも見つからず来れたが∴これ、臭いがきついな」

「分かったのでとりあえず落としておいてください。正直、吐きそう

です」

とりあえず、服装を脱いで濡れたタオルで体を拭いていたが、完全には落ちず、鎮守府に帰った後こそこそ隠れてシャワーを浴びたのは言うまでもない。

## 18 ケツコンカツコカリ編

テロリストをジェノサイドした日から三日後、提督はまだまだウンウン唸っていた。どのタイミングでケツコンカツコカリの紙を渡そうか悩んでいたのだ。

流石にロマンチックに渡したいと思ってるのか、タイミングを計っているものの、ちょうど良いタイミングに恵まれない。…もうタイミングなんぞ捨てて行つたほうが早いことに全く気付いてない提督であつた。

「何かタイミングが悪いなあ…。前回のテロリストの事件から不運というレベルじゃないんだが…」

どうしたもんかと思つて再び思考の海に潜つた提督だつた。

艦娘の間では、ある噂が話題になつていた。それはへ提督が新たにケツコンカツコカリを受ける子は誰だ？〜というものであつた。今現時点でケツコンカツコカリしているのは、長門・金剛・赤城・加賀・伊勢、以下の五名である。

ケツコン可能な娘は北上・大井・木曾・川内・古鷹、以下五名である。この中から三名選ばれるんだが、…まあ、いつ来るのかワクワクしながら待っている。受け身な娘が多い鎮守府であつた。

といつてもいつまで待つても来ないせいか、もしかして噂は嘘では？と思ひ始めていた。

しかし、それでも信じている娘がいた。北上・大井コンビである。

「…ねえ、大井っちー」

「…なんかしら？北上さん」

「もうこれワタシ達から聞きに行つたほうが早くない？」

「確かに。でも…」

大井の心は期待半分、不安半分といった感じか。期待のほうは言わずもがな。不安なほうはもし噂が嘘だつたら…である。まあ勝手に期待した挙句、「そんなのないよ？」と言われたら恥ずかしさのあまり

一週間は顔を合わせることはできないだろう。

尚、北上は「遅れてもいいよー。恋する乙女は強いものだしねー」である。心が実にダイヤモンドレベルに強固に硬い娘であった。

「もし違ったなら違ったで聞いてみればいいんじゃない？」

「…北上さんは強いなあ…」

「強いと思うのならそれは恋の力かなー。以前のワタシなら心がへし折れてかもだし」

「恋の力かあ…」

『恋の力なんぞ北上さんだけで発揮できるしそれだけで十分なよーツ!!』と言っていたころを思い出して顔が真っ赤になる大井であった。…尚、原作では若干ヤン成分が入ってる模様。

「そういうえば昔の大井っちは色々酷かったしねー。提督にも噛みついていたし、デレるまでもう…ねえ？」

「思い出させないでえー！色々恥ずかしいからあー!？」

どうやら黒歴史扱いになっている記憶が多かったようである。…

まあ、命令違反や上官侮辱までしていたらこうもなるか。

「ほらほら、一緒に行くよー」

「あ、ちよつと引つ張らないでえー…」

そして北上は大井をそのまま引つ張って提督室に向かった。

しかし、皆さんは忘れていないだろうか？あともう一人いることを…。

そう、今回の回のヒロインがもう一人いるのである。その人物とは…川内である。

「むうー、青葉の情報だから当たりと思っただけどねー」

実はこの娘も提督LOVEな娘であった。…以前からその予兆はあったが。

しかし、いくら待っても何かしらのアクションが無い。どうしようか悩んだ結果、

「…よし、一人でウジウジ悩んでも仕方ない！いっちょ行ってみよう

！」

そう言い、川内は提督室に向かった。

「あ」

「あら？」

「え？」

まあ、三人がほぼ同時に提督室に向かったら会いますよね。

「えつと、川内さんは何故ここに？」

「ちよ、ちよつと提督に用があつてねー。お二人は？」

「私たちもちよつとねー」

「へーそーなんだー」

「………」

…物凄く気まずい空気が流れた。さらに言うところ『…もうこれ、お察しされてない？』という感じの空気である。

「…もう、正直に言わない？」

「…そうね」

「そうだねー。…じゃあもう一緒に入らない？」

「…異議なし」

三人はそう言い、一緒に提督室に入った。

「提督ー、失礼するよー」

「ん？なんだお前ら…か…」

「?どしたの？」

(…何で渡すはずの娘全員ここにいるんだあー!?)

※仕様です。

「提督？」

「あ、ああ…大丈夫だ。——ところでどうした？」

「えつとねー、」

「——提督、あの噂は本当なんですか？」



北上が発言する前に大井がぶっこんだ。それを聞いた提督は、

「え？噂って何のことだ？」

「「知らなかったの!？」」

どうやら噂のことは知らなかったようだった。大井の覚悟らがズルつとこけかけた。

「提督が！新しく！ケツコンカツコカリをするという話よ！」

「何故そんな噂がまわってんだ…。青葉か？まさかあの時隠れていた奴か？」

「本人が『秘密にしてて?』といったから言わないわよ？そんなことより本当なの？」

「ああ、本当だぞ?…:…というかここに全員来ているしなあ」

「「…:…え?」」

提督はそう言うのと、机の棚から書類三枚を取り出し、机の上に出した。

「…これが、」

「ああ、これがケツコンカツコカリの申請書類だ」

川内の言葉に肯定し、提督は三人に書類を渡した。

「一応言っておくが、これにサインすると君たちはケツコンカツコカリが成立し、ケツコン指輪が支給される。まあ、強くなるし、嫌いでもそこらへん割り切って「提督!これでいいですか!？」迷いねえな才イ!？」

「提督ー、ワタシもいいかなー」

「私もー」

「お前らもか!？」

提督が説明している間、速攻書類に書いていた三人であった。尚、大井が物凄い勢いで書いていた模様。

「いやいや!?!もうちよつと悩まないのか!?!」

「悩む必要がないので!」

「ここにいるワタシを含む三人とも、提督好きだからねー」

「という訳で、よろしくね♪」

「…:何で俺の鎮守府はこうも男らしい行動をとるのが多いんだ…:」

尚、過去にケツコンした艦娘は全員三人と同じリアクションだった模様。

「あ、後さらに言うとな俺はケツコンしたら逃がす気はないからな？」

「むしろ上等です！（だねー）」

「…まあ、私もってことで」

「……左様か」

「話はおわかりましたネー！」ズバーン！

「うおおおい!?いつからそこに張り付いてやがった金剛!？」

「やだなー張り付いてなんかいませんヨー」

「…目が横を見ているんだが？」

「さて、三人とも書類にサインして提督にわたしましたネー？」

「?はい？」

「なら、三人にはこれにサインしていただきマース！」

そう言つて金剛が引つ張り出してきたのは、

〈提督婦人の会〉

であつた。

「という訳でサインお願いしマース」

「えっと…提督はこれを了承済みなの？」

「…さらに増えるから作ったほうがいいと言われてな…」

「因みに入ったら提督のブロマイドが手に入りマース」

「…サインします!」

「ちよつと待てえええい!?ブロマイドって知らないぞ!」

「青葉が『提督に許可貰つてますよー』と言つてましたヨー?」

「青葉アアアアア!!」

まさかの告白に絶叫する提督であつた。因みに、正確には秋雲が悪戯で言つて、青葉がそれを本気にし、それを配つたという事実が後日判明された。…青葉は説教コース一直線（三時間）でグツタリしていた模様。

## 19 ネタに走り気味の戦闘回

「提督、これを見てください!」

「どうした?そんなに慌てて?」

「いいからこれを!」

大淀が大慌てで持つてきた電文を受け取った提督はその電文を見た。

「…これはマジか」

「ええ、アメリカ軍がハワイ諸島に向かってきている敵艦隊を発見、撃滅しようとしたらしいですが、全滅したようです…」

「ハワイ諸島の管轄はアメリカ最強の第七艦隊だ。それが全滅とは…」

「映像もあります。…ご覧になりますか?」

「頼む」

提督は第七艦隊が遺した映像を見た。そこに映っていたのは――  
―青い海を覆うほどの、深海棲艦の群れであった。

「…こいつは…!?!」

「この映像だけでも、ヲ級クラスが15隻以上、ル級クラスが20隻以上、姫と思われる敵が五体います。それ以下は数えきれないほどの数です」

「…今、アメリカはどうしている?」

「日本に協力体制を要請しつつ、第一艦隊・第二艦隊・第三艦隊・第八艦隊を編成中だと思われまます」

「アメリカが得意とするのは圧倒的な物量を使った物量作戦だったな。だが…」

「おそらく無理でしょう。ICBMクラスの攻撃力でも姫は倒せ切れません。装甲が紙であるイージスに勝ち目は…」

「無い、か」

イージス艦でも深海棲艦は倒せるが、それでもフラッグシップになると倒しきれないことが多く、むしろ敵の攻撃で沈んでしまう。

「さらに最悪な情報があります」

「…聞きたくないなあ」

「——その敵艦隊の一部がこちらに来ています。ヲ級フラッグシップが8、ヌ級が30隻以上、イ級らが20隻以上です」

「多すぎるわアツ!!」

提督の魂の叫びが、提督室にこだました。

「諸君、残念だが、アメリカの第七艦隊を全滅させた敵の一部が、ここ、トラック諸島に近づいてきている」

数時間後、皆を地下にあるブリーフィングルームに集合させ、作戦を説明していた。

「今回は敵空母が多いので正規空母を囷とした作戦をとる。第三艦隊に一航戦、二航戦、五航戦が囷となり、第二艦隊が敵本陣の周辺にいる敵を撃破。第一艦隊が第二艦隊が作った穴から突撃、敵本陣にいるヲ級改フラッグシップを討ち取る。

囷となる空母艦隊は烈風改、烈風、紫電改二を積んでおけ。艦爆隊、艦攻隊は必要ない。

第二艦隊は川内、神通、妙高、霧島、イタリア、陸奥。

第一艦隊は長門、武蔵、大和、北上、大井、秋月で出撃せよ。

尚、この作戦は俺も参加する」

提督の発言にざわざわと騒ぎ出す艦娘たち。それはそうだろう、イージス艦は装甲が非常に紙なのだ。雷撃や艦爆でも十二分に撃沈するし、特攻されたらそれで沈むこともあるのだ。

「提督、それは非常に不味くないか？」

「大丈夫だ、アウトレンジからのミサイルで援護するだけ…じゃないが、それでも艦載機を落とすなら十二分に役に立つ

それに、イージスシステムを艦娘たちにも使えるように明石たちが改造したらいいしな。テストも兼ねてやる」

一回もやったこともない、ぶっつけ本番のテストである。まあこのシステムを完成したのが二日前だったのもあっただろうが。

「おっと、忘れるところだった。」

第四艦隊は第二艦隊と第一艦隊の援護、遊撃だ。

旗艦榛名、比叡、千歳、千代田、吹雪、島風で出撃せよ。

残った艦娘は市民を避難させよ。たぶん無いだろうが、念には念を置いてな。

この戦いは後ろに市民がいる防衛戦であることを忘れるな。一人残らずぶち殺せ!!」

最後に提督はこう締めくくり、明石から特殊なバイザーを受け取るように言い、提督が乗るイージス艦に向かった。

「提督が自ら出撃って…かなり危険なんじゃあ…?」

「危険どころか普通しないんだがな。わざわざ死に行くようなものだ」

吹雪と武蔵が話しながら、明石から貰ったバイザーを頭につけながら出撃準備を行っていた。尚、武蔵はメガネを少々改造するだけであったのでバイザーはつけてない。…というかメガネをかけている艦娘はメガネを改造している。

「それにしても…遊撃ですかあ…」

「どうした? 自信がないのか?」

「ええ、まあ…」

吹雪自身、大規模な作戦に参加したことも無く、緊張でガチガチになっていた。更に遊撃といったフリーなポジションについたことも無い為、頭の中の吹雪は右往左往していた。

「まあ旗艦は榛名だ。あいつの指揮に従っておけば大丈夫だ」

「そうなんですけど、むうー…」

「ハツハツハ、まあ最初はそういうものだ。貴重な経験と思っておけば良いさ」

武蔵は吹雪の肩をバンバン叩きながら笑った。

「武蔵さんは大和さんと一緒に第一艦隊なんですよね?」

「ああ、敵が空母なのが残念だが、それでも叩きがいのある敵だしな。フラフラ級改なんてここに着任してから初めて見た」

「え？もしかして日本ではあまり出ないんですか？」

「出ないどころかいないに等しいな。出るとしたら潜水艦だから駆逐艦や軽巡のレベリングは向いているが、それ以上になるとなあ……」

「どうやら戦艦組にとってここはかなり良い所なのだろう。…忘れがちだがここは激戦地なのだが、どうやらそれがいいらしい。」

「さて、そろそろ時間になる。頑張れよ」

「はいっ、ありがとうございますっ！」

武蔵は吹雪に激励を送った後、第一艦隊に戻っていった。

——イージス艦「するが」CIC内——

「全艦隊、準備できたな？」

『こちら、第一艦隊。準備完了』

『第二艦隊、いつでも行けるよー？』

『第三艦隊、準備完了。タイミングはお任せします』

『第四艦隊、準備よしです！』

「了解した。では——作戦開始！皆の武運を祈る！」

作戦名「ホームストレッチ・フィッシング」が発令された。

第三艦隊が離れ、陽動作戦を開始。第一・第二・第四・「するが」がその場から速やかに離れ遠回りに敵の本陣から5キロ離れた孤島に隠れた。

しばらくすると、敵の一部が離れていった。敵構成は空母をメインにした艦隊のようである。

「どうやら情報は正しかったようだな」

ブリーフィングが始まる前、ある情報が来ていた。それは戦艦クラス敵が全くいないというものだった。本来ならば有り得ないので、話半分程度だったが、まさか本当だったとは思わなかった提督であった。

「あの数なら加賀たちでも問題なからう。一応、20cm連装砲も持たせているしな」

「提督、我々はどうしますか？」

横にいた副長が聞いてきた。

「我々は第一・第二艦隊の援護をしつつ、イージスシステムで敵の場所を丸裸にするぞ」

「アイ・サー！」

「第二艦隊、作戦を開始せよ。穴を開けてやれ！」

「了解！あと女の子にそんなこと言っちゃだめよ？」

川内は提督にそう言い、敵に攻撃を開始した。

「よし、イージスシステムの情報を艦娘に送れ！」

敵データが艦娘のバイザーに敵の場所が映った。

「南西の方向に雷巡子級がいる！陸奥さん、お願い！」

「分かったわ！」

「神通、そのまま正面に魚雷を発射！そのあとイタリアの援護に向かって！あの子接近戦に弱い！」

「了解！」

「妙高さんはそのまま！霧島さんは前に出てください！私が裏に回ります！」

「了解よ」

「了解です！」

川内が命令を送り、他のメンバーが敵を効率よく殲滅した結果、敵本陣に続く“道”が見えた。

「提督！」

「了解した。ハーブーン、リコメンドファイア！」

「アイ、ハーブーン、発射準備完了！サルヴォー！」

「するが」から発射されたミサイルは、“道”周辺の軽母又級二隻を轟沈させ、川内たちの援護をした。

「行け、長門ッ！」

「了解だ！——皆、行くぞオ!!」

そして、そのできた“道”から、長門たちが突撃していった。

「長門たちの突撃を確認！」

「我々は引き続き、第二艦隊の援護を続ける。第四艦隊は第三艦隊の援護に行ってくれ！」

『了解』

『こちら加賀、私たちは大丈夫よ。むしろ提督のほうが』

「こっちの心配はしなくていい。むしろ艦爆や艦攻がない君たちのほうが危険だ」

『ですが…』

「こっちでは君たちのバイタルがわかってるんだ。赤城と蒼龍が中破しているんだろ？」

『……………』

「安心しろ、明石と夕張が改造してるんだ。これだけで安心できるだろ？」

『あなるほど、それだけで安心しますね…』

安心と安全の明石&夕張クオリティである。いい意味でね！

「そういうわけで、こっちは気にすんな」

『…分かりました。敵を殲滅次第、中破した娘は鎮守府に戻した後、合流します』

「分かった」

そう言い、加賀との交信を切った。

「提督、こちらに接近する敵艦載機を確認」

「シースパロー発射用意！艦砲も使え！」

「アイ！艦砲射撃準備完了！トラックナンバー2036、主砲、撃ちかた始め！」

「アイ、撃ちかた始め！」

76mmコンパクト砲から、敵艦載機めがけて発射された。そして  
——  
パアンツ！と砲弾が弾け、艦載機があつという間に落ちて行った。

「新型砲弾の威力を確認！効果あり！」

「第二陣、来ます！」

「シースパロー、発射始め！サルヴオー！」

「するが」の奮闘のお蔭か、敵艦載機が「するが」に集中しだした。

「川内、君がいるところから南南東に軽母又級がいる！すまんが沈めに行つてくれ！」



『提督は!?!その数は危険だよ!』

「しばらくは持つが、長くは続かん!だから急いでくれ!」

『了解ッ!』

川内たちが又級を仕留めに行っている間、「するが」ではヤバいことになっていた。

「フアランクス、冷却開始します!発射可能まで一分!」

「シースパロー装填完了!」

「一番から三番、発射始め!サルヴオー!」

「敵、三時の方向と十時の方向から艦攻隊が接近!」

「三時の方向、3020、登録!」

十字の方向、3021、登録!」

「敵機、魚雷投下しました!」

「機雷を投下しろ!機雷を自爆させ、衝撃波で魚雷も自爆させるんだ!」

「長門の援護を開始する!トマホーク、発射始め!」

CIC内では、凄まじい勢いで出てくる敵を捌くため、あつちこつちから叫び声が聞こえた。しかし、今のところ被弾はゼロ。明石&夕立のクオリティと、乗組員の練度の高さが、被弾無しという奇跡に繋がっていた。

その後、被弾無しの状態で川内が軽母又級を沈め、事なきを得たが、まだ戦いは終わってなかった。

「敵、ヲ級改フラを確認!」

「大和、武蔵!装填しろ!北上、大井!頼む!」

「はいはい、ケツコンしたてのワタシから逃げられると思うなよ!」

「北上さん、私も忘れずにね!」

酸素魚雷40門+40門の魚雷が、ヲ級改目がけて襲った。が、

「沈めたのはイ級か…かばったな」

「ちえっ、残念」

「何、後は私たちの仕事だ。秋月！艦載機を頼むぞ！」  
「了か——」

秋月が言い切る前に、「するが」から発射されたトマホークがヲ級改に直撃。体が真つ二つになって沈んだ。

「援護射撃か!?有難い！」

「敵は後三つ!とつとと沈めるぞツ！」

敵は後三つになり、敵はどうか一矢報いようとしたが、艦載機は秋月の対空で叩き落され、距離を取ろうとしても長門たちのほうが足が速い。

(※戦艦は足が遅いというイメージがあるが、ぶっちゃけそんなに遅くはないのだ。金剛型やイタリアと比べたら遅く感じるというだけ。)

なす術も無く、ヲ級改は沈んでいった。

「敵、全滅を確認しました」

「どうにか終わったか…。「するが」はどうだ」

「被弾はないですが…機関部が焼け付く一歩寸前ですね。ドックについたらオーバーホールです」

「…無事に帰ってきたことを喜んでくれるか、大事な船が壊されて帰ったらボコボコにされるか、どっちだと思う?」

「俺らにしたら、羨ましいので爆ぜてほしいですね」

「遠慮がねえなオイ…」

軽口を叩きながら、提督は次のことを考えていた。

(恐らく上からハワイ諸島奪還作戦を打ち出すだろうな。しかし、アメリカがここまでやられる事態とは…凄い嫌な予感がするなあ、やれやれ…)

提督は、ハア、とため息をつきながら、長門たちに曳航されたまま、鎮守府に帰った。

## 20 なんかに色々とお免なさいな回

提督が鎮守府に帰投した後、明石が「するが」の状況を確認する為、夕張と一緒にイージス艦の点検を始めた。

「するが」の状態だけど、エンジンの他にコンパクト砲の砲身部分が熱で歪んでる。VLSの自動装填装置も点検した方がいいね。あとフアランクスがもう完全におシャカになっている。新しいのと交換しないと」

「戦果を確認したけど、むしろ何故被弾がなかったのか不思議でならないわ……」

艦載機のうち艦爆機が20機、艦攻機が30機、戦闘機が40機。

又級が10、ヲ級改が1……。普通ならとつくに沈んでるわ……」  
「皆必死だったからなあ。後フアランクスが逝かれた理由は？」

「グリーングリーン砲塔を回したのと、敵の破片が原因ね。試作品とはいえ、脆すぎたわ」

「まあ、君たちがこの船を改造してくれなかったら死んでいただろうし、有り難うな。あんまり寝てないのだから？」

「まあ、寝る時間があんまりないですが、私は戦闘に参加できないですから」

「私は戦うことより、機械をいじるのが好きですからね。むしろ工作艦として活躍したいぐらいに」

「平和になったらそれもいいんじゃないか？……まあその前に」  
「ハワイですね……」

提督はこれからのことを考えて、嫌な予感がひしひしと、ひしひしと感じた。

「上層部が、恐らくだが何名かトラック諸島に派遣してくれるだろう。そいつらが少将以上であることを祈ろう」

「もし大佐あたりがきたらかなりヤバイですね……」

少将以上の場合、70%の艦娘が70以上であることが最低条件となっている。もちろん条件の一つなのだが、中々これが難しいのだ。「高レベルじゃないと袋叩きにされるからなあ。……ウチは秋月がい

るおかげで艦載機はどうか封じているが」

「あの子は全艦娘中、トップですからねー。長門や伊勢も高いんですけど、秋月ちゃんには負けますし」

色々二人と喋っていたが、その後、提督は提督室に戻っていった。

『さて、吉川提督。貴官には申し訳ないが、アメリカ軍の指揮下に入つてほしい』

「・・・理由は？」

『アメリカ軍が「今回はアメリカが主体で行うので日本は提督をこちらに寄越してほしい」とな・・・。残念だがな』

(嘘付け！顔がにやけまくってんで糞つタレが!!)

数時間後、上層部から命令がきたが、上記の通りアメリカが何故か暴君を発動。上層部はアメリカの暴君っぷりに戸惑いつつも、厄介払いに提督をアメリカ軍に編入させたのだ。

『何、安心したまえ。無論、後四名ほど編入させる。その者らと協力してハワイ諸島の敵を、アメリカ軍と一緒に奪還してくれたまえ』

最後にそう言い、映像が途切れたことを確認した提督は、

「——ふざけんな糞つタレエエツ!!厄介払いしてんじやねえよ俺含め五名は少なすぎんだろうがよおおおお!!しかも追加情報で鬼クラスが3隻いるんだぞあと5名追加しとけやアホどもおおおツ!!頭ん中蛆でも湧いてんのかあああツ!!」

大声で文句(批判&愚痴混じり)を言いまくっていた。

後日

「どうも、貴方が吉川提督ですね。こちらアメリカ海軍第7混成艦隊、代表のジョシユア・バーグです」

「こちら日本海軍トラック諸島第五鎮守府所属、吉川春継(キツカワハルツグ)だ。こちらもよろしく頼む」

今回共同作戦ということなので、アメリカ軍代表のものと会談をし

ていた。因みにまだ今回参加するメンバーはまだ来ていない。

「今回の作戦は、ハワイ諸島に居座っている敵の排除です。吉川提督はどうお思いでしょうか」

「・・・その前に皆がそろってからにしませんか？」

「時間がもつたいたいのです。まずは吉川提督のお話を聞きたいのですよ」

(あ、こいつ駄目だ。こういうことの大事さを知らねえタイプだ)

早速、先行きが不安になる提督だったが顔に出さずとりあえずこう言った。

「まずは補給艦を狙うべきでしょうね。馬鹿正直に決戦に挑んでも無駄でしょう。とりあえずちまちまと補給艦を沈め、餓島状態にしてやりましょう」

「・・・そうですか」

ものすごい不満顔をしていたが、不承不承といった感じに口を閉ざした。

(こいつ、本当に大丈夫なのか・・・？真つ正面から戦うだけが戦争ではない。相手が嫌がることをしまくって消耗させるのも戦いの一つ。・・・まさか英雄思考じゃないだろうな？だとしたら最悪だぞ)

補給が途絶えたら弾薬や燃料の補充もできない。さらに食料や日用品も補給しなければならぬ。深海棲艦はどういう生体かわからないが、少なくとも燃料や弾薬が無くなれば戦うことはできないだろう。

後は弾薬庫を燃やしたり燃料庫を爆破したりするのがいいんだろうが、どうしたもんかなーと思っていたところ、ようやく来なかったメンバー全員が来た。

「お待たせした」

「遅かったですね。どつかで道草食ってたんですか」

(早速喧嘩吹っかけやがった・・・!?)

「いやはやすまない。天候が悪かったせい、海が時化ててな。遅れた分はしっかり働くぞい」

紳士的な対応で返事をしたこの老人は、沖田 平蔵(オキタ ハイ

ゾウ)。大和をいち早くゲットし、数々の海域を渡り歩いた猛者である。尚階級は大將であり、最も元帥に近い人物と評されている。

その後ろに続いたのは、女性提督で実力で中将まで上り詰めた若き女傑、十河 美雪(ソゴウ ミユキ)。主に空母をメインとして戦略をたてている。尚、艦娘との信賴関係はかなり高い。

後二人は以前登場した有馬 美咲(アリマ ミサキ)と村上 竜之助(ムラカミ タツノスケ)である。

「さて、皆さんが来たところで作戦会議といたしましょう」

失礼すぎる対応をしながら、作戦会議が進められた。尚、その場の空気は冷房をつけてなかったのに若干冷えていた模様。

「あのメリケン、いくら何でも失礼すぎるでしょ!?!なによ嫌味ったらしく言ってる!」

「気持ちわかるが俺にそのストレスをぶつけるなよ・・・」

有馬の愚痴を村上と一緒に聞いていた提督。確かにあのアメリカ人の対応は酷かったが、逆に言えばもの凄く慌てていたのだろう。・・・だからといって許される問題ではないが。

「第一、本来はアメリカ軍じゃなくて私たちが主導してやるはずなのにかっさらったアメリカがあんなに傲慢な態度を取っていいと思っ  
ているの?馬鹿じゃないの?」

「そろそろ黙っておけ。聞かれてたら悲惨だぞ」

「そんなの知らないわよ、第一そんなことがないように私たち二人が吉川君の部屋に来ているんじゃない」

「そうだな、俺の許可をもらわずにな!」

「まあ落ち着こうや。紅茶でも飲もうぜ」

「勝手に人の許可とらずに飲んでんじゃないやねえ!」

ギャーギャー騒ぎながら日本の現状を教えてもらった。すると、コンコンツとドアをノックした音が聞こえた。返事をしたところ、沖田・十河氏が訪ねてきた。

「すまないな、旧友と喋っていたのだろう?」

「いえ、お気になさらず。して、用件は？」

「ふむ、実は貴官のヲ級改の交戦データを見せてほしいのだ」

「？それぐらいでしたらすぐに持つてこさせますが・・・？」

「では頼む。もしかしたら敵の法針がわかるかもしれない」

「そんなことがわかるのですか!？」

提督が驚いていると、十河氏がこう言った。

「敵の親玉の方針は下に必ず反映されることが分かったの。それも対象がある程度限定できるぐらいにね。例えば同じ艦娘でも駆逐艦や軽巡と言った感じに区別されているわね？」

「ええ」

「敵はそれを区別できるのは当然知っているわね？」

「ええ、そんなことは知ってます」

「・・・最近はその中でも青葉型や睦月型、天龍型と言った感じにそれぞれの船のクラスの中の区別ができることが分かったの」

「・・・それって」

「もしかしたらピンポイントで集中攻撃、ということがあり得るでしょうね。もしかしたら近いうちに長門型を持っていないと積んでしまう可能性だってあるわ。極端な例だけどね」

「といつても、姫か鬼を倒せたらその海域周辺は弱体化する。できれば強くなる前に敵行動を調べ上げ、敵がこれ以上強くなる前に倒さねばならん」

「成る程・・・。了解しました、すぐにお渡しします」

「うむ、すまない・・・。後一つ聞きたいのだが」

「はい？」

「・・・この甘味所を教えてほしいのだ。大和が甘いのが好きでな」

「私もいいかしら？日向も羊羹が好きでねえ・・・」

て、

「了解しました。後で一緒に持つてきます」

ついでに甘味所だけじゃなくて喫茶「伊良湖」や居酒屋「鳳翔」も書いておこうかね、と思った提督であった。

「よし、その二人。ちよつと手伝え」

「えー？」

「えーじゃねえよ。どうせ暇だろ？」

「・・・俺に聞かないのは？」

「お前は強制だこの野郎。強引にあの辞令を送ってきたこと、忘れてねえぞ」

「デスヨネー」

その後、二人を引き連れて該当の書類を探し、コピーして沖田氏の所まで持つていったのであった。無論、沖田氏と十河女史に渡すこの甘味所・喫茶店・居酒屋が書かれた紙でもある。

「お待たせしました、こちらです」

「おお、すまないな」

「いえ、後これを」

提督は二人に頼まれた甘味所+αの情報が書かれた紙を渡した。

「ぬ？おお、これは・・・有り難い」

「あら、こんなにあるのね。有り難う」

「では、私はこの辺で」

「うむ。すまなかつたな」

「有り難う、助かつたわ」

提督はその場から離れ、明石たちのいるドックに向かった。

「むう、いつそのことコンパクト砲も取っ払ってレールガンでも入れてみますよ・・・」

「それだと重心が上になりすぎてトップヘビーどころの問題じゃなくなるわ。・・・個人的には入れてみたいけどね」

「ならこのままがいいですかね・・・」

「提督が乗る船だからね。そんな物乗せてそれが原因で死んでしまつたら自刃するわ」

その光景を想像したのか、ブルブルつと体が震えた。

「うぐっ、確かにそれは困るわ・・・。エンジンはどうしたの？」



「ガスタービンの燃料効率を弄ってパワーが出るようにしたわ。あとそれに伴ってバウスラストターボも強力にしたわ。・・・その分ピーキーになったけどね」

「どのぐらいピーキーになった？」

「あ、提督」

「話は終わったの？」

「ああ。ところで話を元に戻すがどのぐらいになった？」

「・・・史実の伊勢ぐらいかな？」

「操舵が非常に敏感ということだな。そこんところは大淀と相談しながら機械化できるか？」

「できますけど、それでもかなり難しいと思いますよ？」

「今回の作戦はイージス艦の力が必要になるだろう。できれば早く修理してテストをしておきたい」

「ぶっつけ本番のテストは危険ですからね・・・。分かりました、やってみます」

「すまない、後で間宮製の羊羹持ってください」

「三つでお願い」

提督は二人に「するが」の修理を早めるようお願いし、提督室に戻った。遠征を回さなきゃいけないからだ。

「さて、後は二人の調査が終わってからだな・・・。補給用の燃料と弾薬、ボーキを集めておこう。念のためにな」

反撃の日は、まだまだ先である。

## 21 色々と暴走しちやっっている回

「まだハワイ諸島を奪還しないのですか!？」

「敵はまだ疲弊していない。補給艦5、6隻沈めただけで連中が疲弊するわけないだろう?。」

「しかし、こうしている間敵がこちらに向かってきている可能性も!。」

「だとしたらハワイ諸島を占拠せず、こちらに真っ直ぐ来ておるよ。連中はハワイを前線基地として使う気じゃ。基地は時間がかかるからの。補給艦を調べてみたら燃料・弾薬のほかに建設用の資材もあった。完成するまではまだ安心じゃよ。」

作戦会議で、開口一番アメリカ軍のジョシユアが文句を言い始めたが、吉川と沖田大将が理由を話し、まだまだ反撃すべきではないと諭したが、

「だからと言って一週間以上経つてます! そろそろ攻撃しなければこちらが舐められてしまいます!。」

等と言いだめた。

(むしろ油断してくれたほうが有難いんだけどなあ。プライド? そんなもん勝つのに必要か? そんなもんイギリスにくれてやったよ。)

(※この時代のイギリスは騎士道精神で深海棲艦と戦います。結果? 察しろ。)

「だからと言って我々の戦力はそこまで使えるという訳ではない。貴方達アメリカも双胴空母一隻とイージス艦10隻、強襲艦20隻。これだけで鬼クラス3隻、姫クラス5隻、そして増え続ける敵…。戦えると思っっているのかしら?。」

「正々堂々の精神とアメリカンスピリッツがあれば行ける筈だ!。」

(馬鹿だ)

(馬鹿じゃな)

(馬鹿ね)

(馬鹿じゃん…)

(馬鹿だこいつ)

5人全員の心の声がシンクロした瞬間であった。尚、アメスピはたばこの名前じやありません。文字どおりの意味です。あしからず。「補給が途絶えれば使える船も少なくなる。数と戦意を減らすにはこうするしかないのが現状です。」

この作戦の有効性は、貴方達アメリカがよく知っているはずだ」第二次世界大戦の餓島のことを言外に言ってる吉川だったが、納得していないようだ。過去のことを学んでいない悪い意味での例の凶である。

「まあもう少しすれば、敵も苦しくなるだろうしそつちだつて戦力増強できるはずです。ここはただ待つだけです」

気に入らない顔をしたまま会議が終わり、わざと靴をカツカツ鳴らしながらジョシユアは会議室から出て行った。

「…申し訳ない。ああいう馬鹿でも、成績は優秀なのだ」

「アレで優秀というのなら、我々海軍の3分の2が優秀になるな」

「…本当に申し訳ない」

ジョシユアの横にいた補佐官、アンドリユー・ハルゼーとアーネスト・ミニッツが謝罪した。

アンドリユーとアーネストは同期で戦果も凄まじいのだが、新米のお守りとして来ているのだが、…結果はお察しである。

と言つても、ここにいる五人は、この二人のことは信頼に足る人物と判断している。…まあ、今回の作戦のトップがアレだったらねえ…。

「サイレント・ブルと言われた貴方でも、あんなアホの下につかなければならないとはな」

「ハハハ…」

「レディ・レックスを沈めた男とサイレント・ブル…むしろこっちのほうがいいんじゃないかの？」

※レディ・レックスとはアメリカで登場した空母鬼姫のこと。尚史実ではレキシントンを指す。

「我々にも色々あるのですよ…。私たち軍人は市民を守らねばなりませんから」

「それについては同意見じゃな。しかし、ただ闇雲に突撃すればいいというものではない。我々は市民の血と汗で作られているといつても過言ではない。それを無用な作戦で犠牲を出すわけにはいかんだよ」

「ごもつともです。しかし、彼はそのことが分からないようです。…最近の若い者はこういうのが多いようでしてな」

「そこはワシらのところも同じじゃな」

作戦会議が終わったせい、沖田大将とアンドリユー、アーネストが喋り始めた。何だかんだでやはり腹が立っていたのだろう。次第に愚痴が混じり始めた。

「そもそもあんな若いのを指揮官にすること自体が間違っているというのに、上の連中はそれをわかっておらんのですよ」

「第一、ハワイ諸島奪還という重要なミッションに若い奴に任せてどうするんだという話なんですよ。なんなの上の連中は馬鹿なの？死ぬの？」

「お、おう。取りあえず落ち着こうかの？」

「あ、あとのことは宜しくですー」

「ちよつと待てえい!?この空気にしたのは謝るからもうちよつと居てくれんのかの!?!」

「こつちも仕事が入りましたな。「するが」の動作チェックや艀装チェックもしなくてはなりませんからな」

「あ、私も「するが」を見てみたいので」

「俺も同じく」

「私はまだまだ調べなきやいけないので、この辺で」

その場から速やかに離れ、沖田大将の恨み言をバックで聞きながら、ドックに向かった。

「…まさか本当に来るとはな…」

「だって本当のことですし」

「というか「するが」って何がベースだ？」

「こんごう型がベースだな。というかお前らも持っているだろうか？」

「ああ、俺は「こまごめ」というイージス艦を持っている」

「私は「つるみ」という名前だねー。…というか全部こんごう型だねー」

尚、今回参加するアメリカのメンバーもイージス艦を所有している。ジョシユアは「ビンセンス」、アンドリユーが「サウスダコタ」、アーネストが「ノーザンプトン」である。因みに双胴空母の名前は「タアイコンデロガ」である。

「あ、提督。もう修理は終わってるよ」

「では早速で悪いがテストするぞ」

「言うだろうと思つてとつくに準備してます」

提督のことが手に取るように分かる艦娘であった。

「ところで何を積んでいるんだこれ？」

「基本的には変わらんよ。強いて言うならフアランクスのほかにアヴエンジンジャーを積んでるだけだしな」

「なぜそれを積んだ？」

「ばらまき用」

「ダイナミックばらまきだねー」

何だかんだで、仲の良い三人組である。

艦装テストも終わり、やる事が無くなった三人であったが、そこに沖田大將がヨロヨロしながらやってきた。

「お主等、薄情すぎないかの…?」

「「自業自得です」」

追い打ちをかける三人であった。

「まったく、大和はもうチヨイ優しかったぞい」

「大和に癒してもらったんですからいいじゃないですか」

「…お主もじやろうに」

「そもそも、相手をノせてどうするんですか？ あんなことを言ったらあんなことになるのは目に見えて明らかじゃないですか」

「何、アメリカの内情も知れるだろうと思つてな」

「あんな人物が喋るとは思わないのですが」

「ところが人間というのは不思議なものでな？　ぶつ切りの情報を統合すると全体像がわかるもんじゃ」

「結果、どうになりました？」

「アメリカも第七艦隊が全滅したことで戦力が落ちすぎたようだな。更に大将二人がその戦いで死んでしまったんじゃ。

この人選もその影響じゃな。若い者に大規模作戦の経験を詰め込みさせたいのじゃろうな。そしてアメリカが主体となつて世界にまだまだ力があることを知らしめたいのじゃろう。：我々にしたらいい迷惑なのだがな」

「はあく、政治問題に軍を絡ませるなよ…。ろくな結果にならんというに」

「我々は過去にそんなことが分かったから分かるだけじゃ」

「それにしても、なんであんな問題児をよこしたんだろうねー？」

「：軍上層部の強引な割り込みで入れたらしいぞい」

「：：心から同情するわあ」

アメリカ軍の内情を知った三人は、その内容にドン引きしたのだった。

「いずれにせよ、あのバカの言うとおり、近いうちに始めようと思うと思うのじゃが…」

「：確かにこれ以上は限界でしょうね。戦意も下がりがねないですし」

「いつ始めますか？」

「四日後じゃ。明日このことをアメリカに言うから、フオローを頼むぞい」

「了解」

「んじゃ、俺は嫁のところに行ってパインスラダでも…」

「おいバカやめろ」

「おい馬鹿やめて」

「おいバカやめるんじゃ」

「シンクロしただと!？」

…大将相手に若干失礼なことを言っている三人であったが、すぐに仲良くなっている人たちであった。

…戦争の時間はもうすぐ始まる。

## 22 クオリティが落ちたなあの回

「総員、点呼開始せよ」

『こちら、吉川艦隊第一艦隊旗艦長門。準備完了』

『第二艦隊旗艦、金剛。準備完了デース』

『第三艦隊旗艦、比叡。いつでも大丈夫ですよ』

『第四艦隊旗艦、川内。皆、こっちは空母の警備しなければいけないから私の分まで思いっきりやっちゃってねー』

『ハハハ、任せておけ』

「よし、後は作戦開始まで待機」

『『『了解』』』』

作戦決行の当日、吉川達アメリカ・日本大規模混合艦隊は、ハワイ諸島から20キロ離れた海域に待機していた。

今回の作戦は、簡単に言うなら19で書いた機動部隊を囿とした一点突破である。但し、規模としては史上稀にみる大規模であるが。

沖田大將が働きかけてくれたおかげで、ハワイに向かう途中のミッドウエーでイージス艦が十隻から十五隻、日本も含め計20隻のイージス艦。そして双胴空母も新たに「エンタープライズ」が合流してくれた。

しかし、肝心の艦娘達の増援はなかった。どうやら、インド洋方面でも深海棲艦の大規模な艦隊が発見されたようで、そっちに向かったとのこと。

恐らく、敵の陽動作戦だろう。敵がこちらのこと分かっている可能性は低くない。——何せ、ハワイにはアメリカ軍の大規模な海軍基地があるのだから。

姫以上になると知能も下手すると人間と染色ない。もしかしたら基地の通信機能を利用して聞いている可能性だってある。深海棲艦にしか分からない通信コードがあったらそれで連絡し合っているだろう。

「こちら吉川艦隊、準備完了」

『こちら村上艦隊、準備が終わった。作戦開始時間が楽しみだ』



『こちら有馬艦隊、同じく終わったよー。後はしやぎ過ぎないようにねー?』

『十河艦隊、いつでも。それにしても、作戦前だというのに、ピリピリしてないのね?』

『ピリピリしても良いことないですから。リラックスしてやったほうがいい結果が出ますよ』

『それができない奴が多いんじゃない?。沖田艦隊、終わったぞい』  
日本艦隊は準備完了していたが、アメリカ艦隊は未だに準備が出来てなかった。：正確にはジョシユアの艦隊が所定の位置についておらず、補佐官のアンドリユーたちがサポートしていた。

「：あいつはミッドウエーで下したほうがよかつたんじゃない?」

『儂もそういつたんじゃない。本人が『私に相応しい武勲を奪われてたまるか!』といって首を横に振つたんじゃない』

「：害悪以外のなんでもないな」

『むしろ自覚してない分、好き勝手やる可能性が非常に高いな』

『勝手な行動したら“誤射”でもする?』

『問題になるからやめなさい。どうせやるなら敵にやらせたほうが心が痛まないわ』

『お主等、もうチョイ過激なこと言うのやめんか…』

割と苦労性な沖田大将であった。

『申し訳ありません。準備に手こずってしまいましたね』

『いえ、お気になさらず。——では、十河中将、有馬少将。頼みます』

『任されました』

『んじや、二人も沖田大将の足を引っ張らないようにね』

『お前もな』

『ハモられた!?!』

十河中将率いる機動艦隊と有馬少将率いる護衛艦隊が離れ、アメリカ軍の一部のイーヅス艦も護衛の為、離れていった。

『では、私たちは彼女たちが暴れまわったのを確認した後、第一陣の壁

を吹き飛ばしましょう』

「了解」（お前が指示すんじゃないよ…）

今回の作戦指揮官であるジョシユアの命令だったが、心の中では沖田大将の命令のほうがマシだと思っていたが、顔に出さずに命令をこなしていた。最早ジョシユアの信頼度はゼロを通り越してマイナスである。

「トマホーク、ハーブーン、装填」

「アイ。トマホーク、ハーブーン、装填！」

「ジャミングは？」

「効いています。…それにしても、昼に攻めるとは…」

「本来なら、夜戦で攻撃すると思っっているんだろがな。相手が「有り得ない」と思わせるのが、奇襲の常識だ」

「それでも、戦艦相手にするなら夜のほうがいいんですけどね」

「そこは第一艦隊と第二艦隊が相手する。俺たちはレーダーと第一陣・第二陣の相手さえすれば問題ない」

因みに、第一陣はノーマル、第二陣はエリート、第三陣は姫と姫が率いる親衛隊（全てフラッグシップ。レ級フラ付き）、最終陣には鬼（湾港）三隻&フラレ級やフラル級、フラヲ級改等、強敵揃いである。「十二分に危険ですけどね、それだけ聞くと」

「だからアメリカの双胴空母二隻来てくれたじゃねえか。一隻だけだったらキャパオーバーしてただろうし」

そんなこんなで副官と喋っていると、十河艦隊の連絡が入った。敵と交戦を始めたとのこと。

「よし。では、始めるとしますかね？」

『うむ』

『全艦、ハーブーン、トマホーク、発射開始！』

「了解！」

「ハーブーン、トマホーク、発射！ サルヴオー！」

日本のイージス艦3隻とアメリカのイージス艦12隻、計十五隻から放たれた矢が、敵に向かって飛んで行った。

「…ヌ？ナンダアレハ？」

「ナニカコツチニ来テイナイカ？」

「ア、コレミサ——」

知能が低いのか、飛んできたものがミサイルと判断される前に、敵をガンガン沈めていく。もしここで手こずったら後のフェーズに支障をきたす可能性があるからだ。

『“穴”が出来るまで、打ち続けてください。その後、突っ込みますよ』

「ちよ、ちよっと待て!? 作戦では突っ込まずにアウトレンジで攻撃するだけのはず！」

『わざわざ突撃する必要はない。死にたいのかお主は!?』

『君たちの言うことを聞いておけば消極的な意見ばかりのくせに、偉そうなことを言うな！』

『『はあ!?』』

『私には武勲が必要なのだ！武勲を立てなければ、私の理想とする国は作れない！』

『それと何が関係あるんだ!? 命あつての物種なんだぞ!』

『私は英雄になりたいのだよ！ 私の曾祖父がそうであったように！』

英雄は私にふさわしいのだ!』

『ビンセンス、通信カットしました！連絡できません!』

『ビンセンス、アトランタ、ニューオリンズ、先行しました！ レーダーに穴が!』

『レーダーの出力を上げろ！ 後方の「エンタープライス」に哨戒機を出させる!』

最悪とまではいかないが、非常に厳しい状態に陥った。

「あんの野郎…！土壇場で何やってる!？」

『提督！ イージス艦が三隻先行している！ 作戦と違うぞ!』

『テイトクー！ ちよっとこれどういうコト!』

「その三隻は無視して構わん！ そいつらは無視して進撃しろ!」

『し、しかし…!』

「こちらで対処する！ お前らは本陣に真つ直ぐ行ってこい!!」

『…了解ッ!』

『了解ネー!』

そういうと、二人は提督を信じ、本陣に突撃していった。

『吉川！ 今そちらにビス子を援軍に送った！ そちらに戦艦姫が接近している!』

「そっちは!?!」

『沖田大将が戦艦姫と空母姫を相手にしている！ てか何であの強敵相手に普通に渡り合っているんだ?!』

「でなきやミッドウエーで生き残ってねえよ！ そんなことよりあと二体は!?!」

『確認できてない！ 多分だが一番後ろにいる!』

「くそっ、副長！ 第三艦隊は近くにいるか!?!」

「確認します！ …いきました！ 繋がります!」

『提督、どうしました!?!』

「戦艦姫がこちらに来ている！ すまないが、こっちに来れないか!?!」

『そうしたいのは山々なんですが…!?!クツ!?!』

「おい、どうした!?!」

『…戦艦姫がこっちにもいたみたいです。速攻潰すので待ってください!?!』

「無理すんなよ!?!」

『こちら第四艦隊！ 提督の援護に向かいます!』

「空母の警備は!?!」

『沖田大将の第四艦隊が任に就いてくれたよ！ なので今から向かうから!』

通信を切るや否や、レーダーの情報から第四艦隊が此方にすごい勢いで向かってきていた。

「…沖田大将には頭が上がりんなあ!」

『もっと褒めてもいいんじゃない?!』

「それがなかったらもつと良かったんだけどなあ!!」

「糞ッ、多すぎるぞ!？」

「だあああもう!邪魔ですッ!」

霧島がル級の首をつかんでその首をもいだ後、全力で敵に投げつけた。

「千切っては投げ千切っては投げ! 何回やったか覚えてないですよ!」

「霧島ッ、後ろだ!」

「え——キャアッ!？」

武蔵が霧島を下突き、戦艦姫の馬鹿でかい艀装を独立させ、深海化させたような化け物のような敵が、その場所目掛けてグーパンを放った。そう、たったそれだけのことだった。

「うおおおおあああああ!？」

——グーパンを放ったその場所が、爆ぜたのだ。まるで爆発物を使ったように。

「しまった!？」

「武蔵!？」

そこで体勢を崩した武蔵を化け物が、武蔵を沈めんと頭を握りつぶそうとしたが、

「——かかったなアホが!!」

武蔵が化け物の口に砲身を突っ込み、トリガーを引いた。

轟音と共に、化け物の頭上半分が消し飛んだ。

「よし、これで敵は戦闘能力が格段に下がっただろう」

「無茶しないで! もしあなたが沈んだら!」

「姉さん!？」

「私も大和に賛成だ。——間違っても命と引き換えにしようとするなよ。あの戦い方はそう見える」

「:そのつもりはなかったんだが、分かった。気を付ける」

「三人とも!?! いい加減こっちに来てくれへんかなー!? ウチだけではちよつと厳しいわー!?!」

龍驤が艦載機を放って敵を抑えていたが、艦載数の少なさが仇と

なったのか、敵が強すぎるのか、そろそろ限界を迎えていた。

「つか敵多すぎやない!? ちよつちこれ突破すんの難しいで!」

無理ではなく難しいと言っているところを見ると、突破すること事態は可能らしい。

「今提督から連絡があつた。村上提督のビスマルクがこつちに来てい  
る! 合流次第鬼退治に向かうぞ!」

『了解ッ!』

まだ勝機はある: そう思っていた矢先であつた。

ツツツパアアアアン!!と、突如海面が爆発したのだ。

「なあっ!」

「きやあ!」

彼女たちが悲鳴を上げ、海水の雨が止んで前を見たら——戦艦水  
鬼が、三隻いた。

「チイッ!」

長門たちは即座に対応したが、分の悪い戦いであることが分かつて  
いた。

(クツ、ヤバイ。ヤバすぎる! 相手は戦艦水鬼! 大和達が相手で  
も分は悪すぎる! ビスマルクが来るまでに耐えきれるか!?)

絶望の戦いは、まだ、始まったばかりである。

## 23 作者大・暴・走!!の回

「第一艦隊付近に戦艦水鬼三隻が出現しました!」

「第二艦隊は!?!」

「第二艦隊は同時に出てきたヲ級五体に足止めされています!」

新たに登場した戦艦水鬼三隻に焦りだした吉川。第二艦隊も足止めを食らっており、ビスマルクの救援もまだ来ないのだ。幾ら長門とはいえ、戦艦水鬼三隻を沈めるのはかなり、いや無理だろう。何せ鬼クラスになると装甲が大和以上の個体が一体いたからだ。それに加え攻撃力も鬼クラスだから非常に高い。

「長門!・聞こえるか!?! そいつと交戦するな、いったん下がれ!」

『無理だ!・ここで下がればあいつらが遠距離砲撃を始める!・ここで足止めをするほかない!』

『こちら村上艦隊第一艦隊、ビスマルク!・あと三分で到着するわ!』

それまで持っていて!』

『ミーも忘れたらダメですヨー!・チャチャツとテストロイするの、待っててくださいいネー!!』

二人が長門に激励を送り、長門は有難いと思いつつも、目の前に現れた水鬼と自分たちの現状を鑑みた。

(被弾は無いとはいえ、あいつらの攻撃は当たれば即大破だ。バルジ召喚の防御札があるとはいえ、港湾水鬼用に取っておきたい。しかし、ここで足止めないしは撃破しないと、提督たちが危険…。くそ、敵増援がこいつらだけと祈る他ないか…!!)

しかし、敵はそんな長門を黙って見ている訳がなかった。

「長門オツ!・横に飛べええええツ!!」

「ツ!?!」

武蔵の言葉に反射的に横に飛んだ。そしたら———今までたっていた場所に砲弾十発が、着弾した。

着弾した衝撃波で前後不覚に陥った長門だったが、武蔵が長門をフオローし、どうにか追撃は避けられた。

「姉さんツ!」

「任せて！」

大和が46cm三連装砲を全門、一体のみに限定し――

「吹き飛びなさい!!」

――轟音と共に撃ち、戦艦水鬼のありとあらゆる場所に当たり、爆発した。

「これで…!」

「まだまだ、あれでは沈まん！」

長門が大和に警告を發した途端、戦艦水鬼が煙の中から飛び出し、大和を殴り飛ばした。

ミシイツと鈍い音が聞こえ、大和は吹っ飛ばされた。

「姉さん!」

「武蔵、バルジを展開しろ！ 大和を助けるぞ！」

出来ればとっておきたかったが、ここで大和を失う訳にはいかなないと判断し、バルジの使用を許可した。

胸から札を取り出し、敵に向けた瞬間、厚さ40センチ、横10メートル、高さ4メートルの壁が登場した。

その壁を吹き飛ばさんと戦艦水鬼が砲撃で吹き飛ばそうとしたが、壁には傷もつかない程の硬さであった。

今のうちに大和の場所まで行ったが、思った以上にやばかった。

「姉さん、大丈夫か!」

「…あんまり、大、丈夫じゃ、無い、かな。グツ…!」

「姉さん!」

「内臓と肋骨がやられている。命に別状は無いが、戦闘はできんぞ！」  
「しかも、敵に後ろを見せたら即撃たれてしまいますね。結構ヘイト集めてしまいましたから…」

「前進は無理、後ろに下がらば弾が飛んでくる…これ積みかけてへんか?」

龍驤が言い終えた瞬間、分厚い何かの頭上を通りすぎた。その正体は――先ほど召喚したバルジであった。

「ええい、あいつらこれを投げ込むとかどんなパワーだ!」

「私を…私を置いて」





h h———!!」

凄まじい絶叫とともに、残った腕を長門に向け、もう一度攻撃しようとしたが、

「私を忘れてませんかね？」

霧島が戦艦水鬼の膝をベギイツと言う音と共に叩き折り、そのまま倒れたところを、

「セイイ！」

顔面目掛けてストーンピングをブチかまし、相手の首を折り、敵一体を仕留めた。

「大丈夫!?」

「大丈夫ネー!?!」

「私は大丈夫だ、だが大和が…」

「死んでないのでしょ？ なら十二分よ！ プリンツ！」

「はい！」

「貴女が旗艦となって大和を護衛して！ 私はこのまま長門たちと行動を共にするわ！」

「了解です！」

「ご免なさい、こんなことで…」

「大丈夫ですよ。じゃ、肩を貸しますね」

こうしてプリンツ率いる艦隊と大和が前線から退避した。

「大和の代わりに私が入るわ。よろしくね」

「すまない、感謝する」

「そこは感謝だけでいいわよ。こちらも多少打算が入ってるんだから」

「それでもだ」

そして、残った戦艦水鬼2体を殲滅せんと、前に出た。

「第一艦隊、ビスマルクと合流。大和が負傷！ 前線から退避します！」

「第二・第三艦隊、第一艦隊と合流！ 戦艦水鬼に攻撃を開始しました！」

「十河艦隊・有馬艦隊から連絡！ 敵を殲滅、合流するとのこと！」  
「どうにか態勢を立て直し、殲滅率も上がっていた。」

「これならいける…そう思っていた矢先であった。」

「ピンセンスから救援反応！ アトランタ、ニューオリンズ、大破！」

「た、助けてくれ！ 悪かった、私が間違っていた！ だから！」

「通信を切れ。わざわざ聞かんでもいい」

「了解」

『待ってくれ!? 私が死ねばアメリカとの関係も冷え切ってしまう可能性もあるんだぞ!』

「その為に部下に「命令違反をやらかしたアホのケツを拭きに行け」と命じろと? 寝言は寝て言え！」

『た、頼む。私の叔父が大統領の秘書官なんだ。私を助ければコネが』  
「それ以上誰かの名誉を傷つけるならここで息の根を止めるぞ貴様」

「交じりつつ気無しの殺意を、マイク越しとはいえ、浴びたジョシユアは声を失った。」

「アンドリユー補佐官とアーネスト補佐官が必死にお前の為に頭を下げ、お前がそれを勝手にやって、勝手に死にかけているのを、我々が助ける意味や理由になると思ってるのかクソガキ」

『な、な…!』

「死にたくなければ必死に動け。頭を動かせ。それが出来ぬのなら、ここに来るべきではなかったんだ」

「タイコンデロガ、エンタープライズ、航空機の発艦許可を求めています！」

「戦艦水鬼が倒すまで待てと言っておけ。もうじき許可が出るぞ」

「了解です」

『い、いやだ…! 私が、私がコンナトコロデエエエ!!』

「発狂してる暇あるなら敵から逃げるんだな。——まあ、無理だろうが」

次の瞬間、アトランタとニューオリンズが大爆発を起こした。もち

ろん火災など発生していない。

理由は簡単。港湾水鬼が遠距離砲撃を始めたからだ。

因みにジョシユアたちがいる場所は長門達がいる場所と同じ第三陣。有効射程圏内である。

『ヒ、ヒイイイイイイイ!!』

「…だから言っておいただろう。我々はアウトレンジからの攻撃に徹すると、な」

「第一艦隊、第二艦隊より連絡！ 戦艦水鬼の殲滅を確認！ これより本陣に突撃すること！」

「後方のタイコンデロガ、エンタープライズに連絡。A-10、F-22発艦せよ。…良かったな、生き残る可能性が増えたぞ」

『くあwせdriftgyふじこーっ!!』

「…もう駄目だな」

提督は発狂したジョシユアに見切りをつけ、通信を切った。

『…お主、やりすぎじゃぞ』

「あれぐらいしないと反省しないでしょう?」

『まあそうかもしれんがの…。とそろそろ儂の艦隊も限界じゃ。弾薬補給を頼むぞい』

「了解です」

ビーッビーッビーッビーッ!

「どうした!?!」

「ハワイ諸島から高エネルギー反応！ 反応パターンは…そんな!?!」

「何だ、報告しろ!」

「…ICBMです」

「…何?」

「ICBMです! おそらく発射されるまで、残り15分!」

「スパコン起動! ICBMのターゲットとされている国を探せ!」

「了解!」

「海軍基地からハッキング開始! 恐らくタイプはピースキーパー!」

「退役したはずの奴だぞ!? 何であるんだ!」

「知りませんよ！ …幸い、核は積み込まれて無いようです。その代わり88,000キロの爆弾が積み込まれてますが」

「どっちにしたって被害は大きすぎる。何としても発射阻止しなければならぬ！ アンドリユー補佐官に繋げ。もしかしたら何か知っているかもしれない」

『その必要はない』

アンドリユーの声が聞こえた。

「貴方はこのことを知っていたのか？」

『いや、知らなかった』

「…本当は知っていたんじゃないか？ 本来では持っていない筈の“兵器”がハワイ諸島にあったんだ。出来れば内密に処理したいはずだよな？」

『……………』

「ピースキーパーは2005年付を持って退役しているんだ。そしてその時貴方はハワイ諸島の幹部だったよな？ …なあ、答えてくれよ」

『……………』

「教えてくれ、貴方なら知っているはずだ！ ICBMの発射防止用のコードが！ もしこれが発射されたらそれだけでアメリカは世界の敵となる！ 貴方はそれでいいのですか!?!」

『……………違うんだ』

「え?」

『さつきからそのコードを打っているが、全く反応がない。どうやら深海棲艦にコードを変えられたか、ハッキングされそうなところを潰された可能性がある』

「なっ!?!」

『だが、私とて黙って奴らの好き勝手にさせる訳にはいかない』

その瞬間、「するが」のコンピュータからハワイ諸島の軍事データ、それに伴った地形データ、そしてアメリカ艦隊の指揮権が届いた。

『このデータを使ってくれ。使えるところがあるだろう』

「…アンドリユー補佐官」

『…こんなことを言う資格は無いのだろうが、——頼む、奴らの目的をぶち壊してくれ!』

「——了解しましたツ!!」

通信を切り、沖田大将と回線が繋がった。

「沖田大将、指揮権をそちらに譲渡します」

『ふむ、いいのかの?』

「階級はあなたのほうが上なんですから当然です。その代わりに」

『分かっておる。——吉川中将、全能力、全戦力を持って、奴らの作戦を阻止せよ』

「ハツ!!」

「て、提督! ターゲットが判明しました! ロシアです!」

「第一・第二・第三艦隊に通達! そのまま港湾水鬼三体を殲滅せよ!」

『十河艦隊・有馬艦隊・タイコンデロガ・エンタープライズはミサイルサイロに攻撃せよ! 時間はそんなに無い! 急ぐのじゃ!』

時間との勝負が、始まった。

## 24 様々なネタが多い回

「糞、浮き輪モドキが邪魔して思ったところに攻撃が……！」

「しかもフラッグシップだから固いしな。庇う発動したらきついぞ」

長門達が港湾水鬼に攻撃していたが、それを護衛する浮き輪モドキが砲撃を邪魔をする。さらにル級フラやチ級フラも交じっている。最後の足掻きというべきか。

『ミサイルサイロを攻撃しろ！ ミサイルを発射させるな！』

『SM3発射用意！ もしもの為に準備だ、急げ！』

『ヒヤッハー！、燃やし尽くしやるアアアア！』

『おい誰かあのA-10に連絡しろ！ ちよつとは考えて落とせとない！』

通信越しに緊迫した声とふざけたことをやっている声が聞こえる。後者は別に問題ない。問題は前者だ。

SM3——弾道迎撃ミサイルは、名の通り飛んできたミサイルを撃墜する為のミサイル。発射阻止失敗した時のことを考えてのことなのだろう。

「早くこいつを倒さないと空の連中が安心して全力戦闘ができません！ 敵の迷惑通りにするな！」

「分かっているけど、数が多すぎるネー！」

艦装の端っこで万力みたいに敵を圧死している金剛がそうぼやいた。次から次へとポンポン湧いて出てくるのだ。敵自体はそんなに大したことはないのだが、やはり数が問題となる。ある軍人の「戦いは数だよアニキ！」は正しかった。

「…ナゼ」

「？」

「ナゼ、貴様ラハ私タチノ邪魔ヲスル…？」

「何だ、何を言っている!?!」

港湾水鬼の一人が、長門たちに問いかけた。

「私タチハ、人間ニ復讐スル権利ガアル。ナゼ、ナゼ邪魔ヲスル」

『何故も何も、お前らが先に攻撃したんだろうが！ そもそも何故と

言いたいのはこっちだ!』

港湾水鬼の言葉に、提督が通信越しに怒鳴った。

『何故貴様らはICBMを撃てる!? そもそもパスコードが無ければ使えないんだぞ?!』

「…ソレヲ貴様ニ答エル必要ハアルノカ?」

「喋りながらとは…舐められたものねツ!」

ビスマルクが浮き輪モドキを片手で掴み、

「せええええいッ!」

そのまま喋っている港湾水鬼目掛けてドツジボールみたいに投げ込んだ。しかし、

「無駄ダ」

浮き輪モドキをデコピンで粉碎し、

「オ礼ヲヤロウ」

お返しと言わんばかりに、航空機が雨あられと言わんばかりに飛んできた。

「くっ!」

幸いにも武蔵の三式弾で一掃できたが、下手に攻撃しようものなら此方がやられる。敵の練度が極めて高いことが分かった。

『ビスマルク!』

「大丈夫です! 戦闘に支障なし!」

「フン、貴様ラガ東ニナツテモ、ワタシニハカテンヨ」

『貴様…、一体何なんだ』

「何ガダ」

『俺の知っている深海棲艦は、お前のように理性的に喋るやつはいなかった。そもそもお前は深海棲艦なのか?』

「…深海棲艦ダヨ、ソレハ間違ッテナイ。違ウ点ハ——過去ノ記憶ヲ持ッテイルトイウコトダケダ」

「過去の記憶だと?」

ル級を砲撃で吹っ飛ばしつつ、長門はそう聞き返した。

「私タチハ、古イ記憶ヲ持ッテイル。艦娘ヨリモ前ノ記憶ダ。私ハソコデモ戦ッテイタ。貴様ヲ人類ノ為ニナ」



「古い記憶…、まさか第二次世界大戦のことか!？」

「ソウトモ言ウナ。戦イガ終ワリ、ヨウヤク平和ニナツタト思ツタ矢先ダツタヨ。私ハアメリカニ引キ取ラレタ。ソコカラハ地獄ダツタ」  
戦闘しながらも、その声には確かに強く、深く、昏い憎しみがあつた。

「腹ヲ切ラレ、中ヲ徹底的ニ調ベラレ、ソシテ最後ハ、妹ノヨウニ可愛ガツテイタ娘ゴト、マーシャル諸島デ体ヲ燃ヤサレタ!」  
『…』

「貴様ニコノ痛ミガ分カルカ!? コノ理不尽サガ分カルカ!? 貴様ラノ為ニ戦イ、貴様ラノ為ニ傷付キ、最後ニコレダ!」

『お前…まさか…!』

「ソウ…私ハ才前ダ、長門」  
「…!？」

港湾水鬼の言葉に、長門は言葉を失った。

「才前ハ、何モ知ラナイノダナ。ダカラ私タチニ弓を引ク!」

「…お前は何を言っているんだ?」

「…ハ?」

「私は既に思い出していたよ、そんなこと」

まさかの「知っている」発言に驚きを隠せない港湾水鬼。更に、

「むしろ、そんなことでこんなことをしていたのか、貴様は」

「ナ、ナンデ…!？」

「私を侮るなよ、《私》。そんなもの、とつくの昔に乗り越えたわ!!」

「グウ!？」

長門の砲撃が港湾水鬼のドテツ腹に直撃させた。その衝撃に思わずよろけたところに、

「ファイヤー!」

「ファイエル!」

「全砲門、撃エツ!!」

金剛、ビスマルク、霧島の砲撃が突き刺さった。

すさまじい轟音と共に、煙がもくもくとたち、どうなったか確認ができない。

「お姉さま!、長門! 無事!」

「比叡! 残りの港湾水鬼は!」

「大した強さじゃないのでパパッと殲滅してきました!」  
さり気なく凄まじいことを言っている比叡であった。

「——コノ、調子二乗ルナアアアアアアアアアアアツツ!!」

煙の中から凄まじい程の数の航空機が、長門たち目掛けて飛んできた。

「甘いッ!」

しかし、長門と武蔵がバルジを展開し、敵攻撃を防いだ。

「何故、何故ナゼなぜNAZEナゼエエエエエエエエツツ!!」

「全員、全弾撃ちこめエツ!!」

止めを刺すために、全員の砲撃で倒そうとしているが、

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄アアアア!!」

「なあっ!」

発狂寸前のせいか、体のリミッターが外れたような攻撃をしてくる。左腕はもげ、艦装は半壊状態だ。

しかし、敵は体がどうなっても知ったことではないと言わんばかりに攻撃を繰り返していた。

『ICBM発射まで、後五分!』

「ハハハハハハ!! モウ誰ニモ止メラレナイ!! 私ハ復讐ヲ遂ゲル!

人間ヨ、自分自身ノ手テ争イ合ウガイイ!!」

「まだミサイルサイロを破壊できないのか!」

『A—10でも破壊できないんだ! てか、どんだけ頑丈に作ったんだ?! 発射口硬すぎるぞ!』

「当たり前ダ! ソコハ既ニ浸食サレテイル。深海化シタ発射口ヲ破壊スルナド不可能ダ!!」

『——なら、入り口から入ればいいだけだ』

通信の中に男の声が入った。

『おい、誰だ!? この通信に割り込んでるのは』

『こちら、タイコンデロガ第一航空隊、ファング1だ。済まないが、話は聞かせて貰った』

「人間風情が、＼アレ＼ヲ止メラレルト思ツテイルノカ!?」  
『勿論』

上空にいるF-22——フアング1が、自信たっぷりそう答えた。

『アドミラル、ミサイルサイロに繋がるゲートを開けられるか?』  
『…副長』

『…一応開けられますが、航空機で侵入するのは不可能に近いですよ。地上スレスレで飛び続け、ミサイルのエンジン部分を破壊しなければなりません。そしてミサイルサイロの発射口が空くのは発射寸前です。スロットルを全開にし、破壊した後、そのまま脱出しなければなりません。…はつきり言って失敗の可能性が極めて高いんですよ?』

『構わんよ。それに——』

フアング1は、こう言った。

『女性にやらせてばっかじゃ、男が廃るんな!! さあ、時間が無い。ゲートを開けてくれ!!』

『…開けてやれ』

『提督!?!』

『いずれにせよ時間が無い。出来るのなら、そのチャンスに賭けるしかない!』

『…了解です』

『有難うよ、アドミラル。期待にしっかり応えさせてもらうぜ!』

ゲートが開き、F-22ゲートの中に突っ込もうとした。

『行カセルカ!』

『やらせない!』

港湾水鬼がF-22を落とそうとしたが、ビスマルクがこれを阻止。その後直ぐに振り解かれたが、すでにF-22はゲートに入っていた。

「エエイ、コノ蛆虫ガアア!!」

「ならその蛆虫にやられるお前はそれ以下デース!!」

金剛が三式弾の装填が終わり、全主砲を港湾水鬼に向け、  
「ファイヤーツ!!」

三式弾を真正面から降り注がせた。

「ガアアアアアアッ！」

「霧島！」

「お任せを」

そしていつの間にか後ろに回っていた霧島が主砲を港湾水鬼の背中に当て、

「撃エツ!!」

一式徹甲弾をブチ当てた。もう既に敵はボロボロの状態。勝負は着いた筈だった。しかし、

「マダ：マダ、復讐ガ：アノ娘ノ、涙ガ：」

「まだ立つとでもいうのか：!? 恐るべし復讐心だな」

だが、もう敵には交戦可能な状態ではなかった。放っておけばいずれ海の藻屑となっていただろう。

「終ワラナイ……。絶対ニ、終ワラセナイ……！」

アノ娘ノ、悲シミヲ、痛ミヲ、憎シミヲ、世界ニ伝エ、

「貴様はその段階で勝てないんだよ」

長門が、港湾水鬼を見てこう言い放った。

「お前はただ単に、その子をだしにして自分の好き勝手にやっているだけだ。そこに大義名分も、復讐を遂げる資格も無い。

そして、ビッグセブンが、この私が、人間を恨んで死ぬ訳がないんだよ」

長門の言葉に、港湾水鬼はあり得ないというように、首を横に振った。

「あいつはな、満足して、納得して死んでいったんだ。私たちのような兵器は、もう不要なのだ、理解したうえでな」

「ソナナ、有り得ナイ……有り得ナイ……」

「あいつは確かに悔しかっただろうさ。でも、あいつは人が好きだったからな。恨むなんて器用なマネは出来なかった」

「黙レ……」

「あの子が憎んでないのに、私が憎むと思うか？ お前の言う憎しみは、深海棲艦によって植えつけられた、偽りの感情でしかないんだ」

「黙レエエエエエツ!!!」

長門の口を塞がんと、ボロボロの体を動かし、突っ込んできた。

「――哀れだな、《私》」

主砲を口に突っ込ませ、最後に港湾水鬼に向けてこう言った。

「――お休み、ケダモノ」

ゴパアアアンツ!と、港湾水鬼の頭が弾け、そのまま海に沈んでいった。

「…長門」

武蔵は、長門の肩を掴み、こう言った。

「…大丈夫か?」

「ああ、大丈夫だ」

「…そうか」

武蔵は長門の顔を見たが、見た感じ大丈夫そうだったが、やはり心配であった。あんなことがあったのだ。何かしらのことがあってもおかしくない。

『ICBM、発射30秒前!』

『あと何キロだ!?!』

『残り1キロです!』

通信では、緊迫した声が聞こえてくる。もう私たちの役目は終わっている。これ以上することが無くなった。

「総員、その場に待機。作戦更新まで見守ろう」

「了解や」

「了解です」

「了解よ」

「了解ネー」

長門は全員に命令を出し、待機した。既に皆の艤装はボロボロ、今敵が現れたらかなりきつい状態だ。

『こちらファング1! もう直ぐ着く!』

『発射まで後10秒! カウント開始します!』

カウントダウンが、始まった。

(くそ、かなり狭い……)

ファングーは、ミサイルサイロに繋がる道を、フルスロットルで突き抜けていった。しかし、緩やかとはいえカーブも多く、ところどころ掠ったような跡が機体にあった。

(大丈夫だ、あいつにだって出来たんだ。俺に出来ない訳はない……)

ファングーの頭にあつたのは、ある男であつた。今では欧州で傭兵として活躍している、友人を。

(あいつの隣に立つと言つたんだ。この位成功しねえと……)

道の先に、光が見えた。サイロだ。

(恥ずかしくつてたまんねえんだよッ！)

『ファングー！ その光の先はICBMがあるミサイルサイロです！』

「了解！」

そのままフルスロットルで突き抜け――

(これで終わりだッ！)

ミサイルを発射した。

「ターゲット撃墜！ 繰り返し、ターゲット撃墜！」

「アイコンデロガ、エンタープライズに連絡！ 海兵隊を突っ込ませろ！」

「了解……あつちのCICやブリッジでは大歓喜でしょうね」

「まあな。アメリカ人が食い止めたんだ、感動も凄かろうよ」

「……長門たちに連絡しないのですか」

「……」

「彼女らは貴方の声を、命令を待ってますよ」

「…だな」

提督は通信を開き、長門たちに連絡した。

「総員、作戦終了、ハワイに上陸するぞ」

『了解だ』

「…長門」

『…今回は、色々大変だったな』

「…そうだな」

『…今夜、飲みに行ってもいいか？』

「ああ、何時でも来い。話を聞いてやることぐらいしかできねえがな」

『構わんさ。…有難う』

「気にすんな」

——こうしてハワイ諸島奪還作戦が、終了したのであった。

## 後始末的な回

ジョシユアどうなったの？↓こうなった。

ハワイ諸島奪還作戦が終了し、海兵隊が制圧している間、提督たちはジョシユアを探していた。今回の命令違反の件について話を聞きに来たのだ。流石に今回の司令官とはいえ、命令違反をし、それが原因で危うく負けかけたのだ。事情聴取を兼ねてきつちりと聞かなければならない。

「というわけで、アーネスト補佐官、どこか知りませんか？」

「済まないが、私も探しているのだが…」

「どうやらアーネスト補佐官も居場所を知らないようだ。」

「アンドリユー補佐官も探しているのですが…」

「…どっかトングズラしているのか？」

「いずれにせよ、彼にはちゃんと責任を取ってもらわなければいけませんからね。あのバカのせいでどれだけの犠牲者が出たか…」

十河提督がやれやれな感じでそう言った。戦争で死者が出るのは仕方のないことであるが、勝手な行動で死者をいたずらに増やすことは許されない。それが日本の提督の共通の考えである。…といても、当然守らない奴もいるのだが、まだ数が少ないのが救いといったところか…。

「それにしてもどこに行ったんじや。確かに「ビンセンス」は入港したのを確認したんじやが…」

「…もしかしたら、まだ「ビンセンス」にいる可能性がありますね」

「なら早くしましょう。この感じだとライフラインの復興とか早めにしたくないとまずそうですしね」

提督たちとアーネスト補佐官一行は、おそらくいるだろうジョシユアが乗っていた「ビンセンス」に向かった。

「これはひどいな…」



「砲塔部分なんか消し飛んでますね。むしろよく逃げ切ったねとか」

「ビンセンス」の被害が思った以上に酷く、艦橋も歪んでいるところがある。レーダーも二つのうち一つが現在進行形で火を噴いている。この状態だと操舵も逝かれかけてるだろう。ホントどうして無事戻ってこれたのか不思議でならない。

「おい、そのの」

「…なんででしょうか？」

近くにいた奴を呼び寄せたが、そいつの顔には炭と油が顔についていた。

「ジョシユア・バークを知らないか？」

「…さあ？ あんな奴のことなんか知りたくないし、知ってたら貴方たちにとつくに引き渡しています」

酷い言いようだが、むしろ上官が勝手にやらかして、それが原因で死にかけたりしたらこうもなるか。…本人の信頼度が最初っからマインナスになつていたという可能性もあるが。

「…どうやらここにもいないようですね」

「ホントどこにいったん」

ウウウウウウウウ!!

「っ！ どうした!?!」

「ラフェイバートン」、ハワイ諸島からアメリカ方面に向かっていきます！」

「何っ!?!」

ラフェイバートンはアーネスト補佐官が乗っていたイージス艦だ。本人か、司令官クラスじゃないと操縦できないはずなのだが、ラフェイバートンは動いている。つまり――

「あの野郎…！ 勝手に逃げ出そうとしてやがる！」

「タイコンデロガ・エンタープライズに連絡、戦闘機を出させろ！ A

―10の出撃許可も出す！」

勝手に作戦を変更し、それが原因で死にかけ、更にそれを命じた馬鹿が逃げ出そうとしているのだ。はつきり言って吉川・村上の二人は

殺意全開であった。…ほかのメンバーもアメリカ側以外苛立ちがMaxと化していた。

「副長、艦砲射撃用意！ 目標、「ラフエイバートン」！」

「ちよつ、ちよつと待ってください！」

「そうだぞ」

「ほら、彼もこう言っていますし」

「俺にも撃たせろ。あのバカのせいとんだ目にあつたんだ、きつちり札をしないとな？」ニコオ

「ウエ!? ちよ、ちよつと待ってください！ あの中には私の乗組員が!？」

慌てまくるアーネスト補佐官だったが、タイミングを見図つたかのように通信が入った。どうやら乗っているのはジョシユアとそのシンパだけらしい。

「…これで躊躇する理由が無くなったな？」ニツコリ

「いやいやいや!? あれでも総指揮官なんですよ!？」

「殆どが沖田大將がやったのにか？ ていうかたとえ総指揮官でもやらかしたことの責任を取らなきゃいかんのに何勝手に船を強奪した拳句、逃げようとしてんだよ?」

「まあ落ち着かんか。アーネスト補佐官に当たつても仕方ない。ここは見逃すという手だつてあるのじゃ『提督！ ラフエイバートン、攻撃準備に入りました！ いかがしますか!?!』……………」

まさかの暴拳に頭を抱える沖田大將とアメリカ陣営。バカと基地害（PTSD）が合わさつて非常に拙いことになった。

「総員、対艦戦闘用意！ こちらから攻撃するなよ！」

「…さて、まだ底い立てしますか?」

「……………」

言葉が無い、ただの屍のようだ。

因みに結果は、ジョシユア側がへたれて投降し、吉川・村上の両名が不満タラタラであった。尚、軍事裁判で終身刑が決まった模様。

## 復興工事（デスマ）

ハワイ諸島の各村・町を調査したところ、市民が全体の2割が死者・行方不明者になっていた。そして、一番酷かったのが——ライフラインがほぼ全部やられていたことと、工場等の建物も全部倒壊・全焼状態だったことだ。

ライフラインがやられているということは、水道・電気・ガス・通信・下水等、これらが全く使えないということだ。これは生活する上で超がつくほど重要なことなので可及的速やかに復興させなければならぬ。

提督達は日本の各々懇意にしているゼネコン・マリコン——マリコンとは、防波堤や海底トンネル、海底工事など海を現場としている土木・建築会社のこと——に連絡し、ジョイント・ベンチャー——ジョイントベンチャーとは他社の持つ経営資産を利用する、若しくは自社の経営資産を他社に利用させることで、ジョイントベンチャー当事者双方の事業上の発展を狙う戦略的提携を指す（By Wiki）。要するに手を取り合って大きな事業に取り組むということだ——組んでそれぞれの島ごとに復興作業を進めた。

「おい、誰か〇〇建築の人知らないか？ 幾つか質問があるんだが…」

「それならオアフ島にいるはずだ。通信で済ませとけ」

「また深海棲艦が来ているぞ、排除しろ！」

「ねー、カウアイ島の復興の進捗状況知らなーい？ どこにも無いんだけど」

「その書類の中に入ってるよ！ 引っ張り出すのがめんどいがな！」

「資材会計の印鑑どこだあ！」

…本来の業務＋復興作業の書類作業をしなければならず、しかも復興作業の書類はすぐに出さなければならぬ書類が殆ど。しかもそれが大量。結果的に完徹五日してようやくアメリカにの事務次官・災害担当者にバトンタッチ、その後死んだように丸一日眠った提督たちであった。

因みに書類作業をやっていたのは、吉川・村上・有馬の三人。沖田の爺さんは年もあつて流石にこれは…:という事になり、日本に帰国。十河も調べたいことがあるという事で一緒に帰国している。…ドンマイというほかない三人であった。

## その後

ハワイ諸島も奪還でき、ようやく自分の鎮守府に戻ることができた吉川。戦いによる疲れと五徹した疲れが全く取れず、移動している間寝続ける状態が続いていたせいも、体が鈍りに鈍っていた。

「こりやあ元に戻すの大変だぜ…」

「ハハハ…、良ければ、早朝マラソン付き合いますか?」

「付き合おう」

「ん? 突きあう?」

「あ・な・た?」

「あちよつと待つてビス子流石にそれはしやれにならアツ!?!」

「自業自得だな」

「ちよ、たすk」

「あら、どこに逃げようというのかしら?」

「御免なさい、調子に乗っていたのは認めるから流石に膝に石を抱かせるのはらめえええええつ!!」

…村上も何故かここ、トラツク諸島にいたが。

「そもそも、お前戻らなくていいのかよ? お前の帰りを待っているんじゃないのか?」

「あーいや、元帥から休みを貰つてな? 因みに他の艦娘も来ているから」

「…まさか、此処にか?」

「うん☆」

「ビスマルクさん、もっとキツクお願いします」

「任されました」

「あちよまつて、ご免！ でもここつて海も綺麗だし、休暇取るならここがいいんだつて！」

「その前にこつちの許可取れヴオケエ!!」

ギヤイギヤイ言い合っている二人であった。

「：なんか騒がしいですね」

「御免なさい、うちのバカがやらかしちやつて…」

「いえ、むしろ嬉しいですよ？」

「そう言ってもらえると有難いわ」

そう言っていると、

「第一ホテルあるんだからそこに泊まれよ！ 何でウチに泊まるんだ!?!」

「タダだからに決まつてるからだろ！ いい加減にしろ！」

「お前がいい加減にしろ!?!」

「うるせえ！ そもそもお前だつて何回か泊まったことあるじゃないか！」

「そうだな、有馬ちゃんのウチに泊まったことはあるな！ だがお前

のところは泊まった覚えはない！」

「何!?! 泊まったことあるのか!?! 何それ羨ま」

「あ・な・た？」

「チーン

「本当に御免なさい。 お金は支払いますので、お願いできないでしようか？」

「ぬう…、ちよつときついなあ」

提督は顎に手をやり、そう答えた。

「：理由を聞いても？」

「理由も何も、元帥もここに来るみたいなんだわ。 関係者引き連れて」  
「ああ…」

この言葉だけで納得してしまうビスマルクであった。

「という訳で、君たちがいいのなら止めはしないが、まあ元帥だからなあ…。 高雄も一緒みたいだが」

「…まあ流石の元帥でもNTRはしない…筈」

「NTR…」

「疾しいこと考えて無いでしょうね？」

「ひい何ありませんはい!？」

「…考えていたんかい…」

帰って早々、大変なことになっていたが、戦いよりもこっちのほうが好きと思った提督であった。

## 26 コラボ開始

「元帥殿、トラック諸島にようこそ!」

「ああ、そんなに固くならなくていいよ。今の僕は完全にプライベートだしね」

トラック諸島から帰ってきた日から四日後、元帥とその秘書艦である高雄、そして二十歳ぐらいと思われる青年と、何故か金剛や天龍を小つちやくしたような子や、ヲ級のちっこい版とホッポと港湾姫が来た。

尚、後者を見た提督は「ホギヤアアアアア!?」と悲鳴を上げながら懐に手を伸ばしていた。

「いやー、かなり海が綺麗だね。これなら子供達も喜ぶんじゃない?」  
「そう言っていますけど、本心では無いですよね…?」

「あ、バレ 元 帥 殿 ?」あちよべラッ!」

スッパアーン!!と心地の良い音を出しながら、ハリセンで頭をぶつ叩かれた元帥がそこにあつた。

「…えー…?」

「あ、別にお気になさらず。いつものことですし」

「いつものことなのか!」

いつもの発言で思わず突っ込んでしまう提督であつた。…というか常日頃こんな目にあつているということか…。

「イタタタ…、もうちよつと手加減してくれない?」

「大丈夫ですよ、人外ですし」

「人外認定!」

仲良く(?)喋っているお二人を放っておき、青年のほうに向かった。

「済まないが君は?」

「あ、どうも。私は舞鶴で幼稚園の先生をやっている者です」

「…緊張してんのか? 別に上官云々でどうこう言う気なんか無いから気を楽しみな?」

「あー…じゃあ、お言葉に甘えて」

ガツチガツチに緊張していたのか体勢もカチンコチンだったが、取り敢えず話してみたら少し緊張が解けたようで、雰囲気も少し柔らかくなった。

「それにしても、まさか本当に幼稚園があるとはなあ…。デマかと思っただよ」

「え？ 知らなかったんですか？」

「日本の新聞も滅多に来ないし、そもそも近隣の国の情報を収集していたしなあ…あとここ忘れがちだが割と前線だし…」

「え？」

「え？」

思わず聞き返してきた先生であった。どうやらあらかじめ聞いていた情報と違っていたようだ。

「え？ 前線って…？」

「ああ、と言ってもハワイ諸島奪還した時、殆どの戦力を集結させていたせいかな、今ん所散発的な攻撃しかないから安心していいぞ。ハワイにも鎮守府作るとい話だしな」

「ああ、なんだ。ホツとした…」

「でも時々砲弾が飛んでくるがな」

「不安じゃないじゃないですかヤダー!?!」

「嘘だぜ？」

「酷いっ!?!」

ギヤイギヤイ騒いでいると後ろにいた子供たちが若干…いや、こっちにも構ってよ的な視線を先生に送っていた。…天竜の後ろにいた龍田の目が少し怖かったが。

「先生、あの子供たちは？」

「え、ああ。舞鶴幼稚園でお世話している子供ですよ」

「ムー…」

先生を横取りされたのが気に食わないのか、金剛が若干警戒していた。

「…なんか警戒されるようなことしたっけか？」

「さあ…。どうしたの？」



「先生が知らない人と喋っているので寂しがっているだけですよ」

子ども達の後ろから、愛宕の声が聞こえた。

「貴女は？」

「はい、私は先生と同じ職場で働いています愛宕と申します。よろしくお願ひしますね」

「同じくおいです！よろしくお願ひしますね！」

「これはどうも、トラック諸島第五鎮守府所属、吉川中将だ」

「……」

「？ どうした？ そんな嫌な顔して？」

「ああ、いえ……ちよつと嫌なことを思い出して……」

「？」

先生たちのものすごい嫌な顔を見て思わず聞いたが、本人たちも喋りたくないのか、それ以上のことを聞くことはできなかった。

「取り敢えず、部屋まで案内しよう。ちよつと人目に触れては拙いのもいるしな」

「ちよつと失礼デース！ ヲ級はいいこなんですヨー!？」

「それがわかる人がどれだけいるのか……ってそんなことより早く建物の中に行きましょう、そこで話す」

「了解です」

提督は後ろにいるヲ級・ホッポ・港湾姫を周りに見せないようにして、急いで鎮守府内に逃げ込んでいった。

因みに元帥は高雄にきっちり絞られていた模様。この人には懲りるという言葉は無いのだろうか……。

「取り敢えず、ここトラック諸島のことを知ってもらわなければならない。それが分かればこういうことをしなければならぬのか分かる筈だ」

提督室に全員集め、ヲ級たちがなぜここにいるのが拙いのか、説明した。

「ここトラック諸島はな、深海棲艦に占領されたことがあってな、現地の人から見れば深海棲艦はトラウマかつ憎い敵なんだよ」

「で、でも彼女らはそんなことは…」

「しなくても、彼らの心には深海棲艦で荒らされ、中には殺された人もいるんだ。殺人鬼が町の中をウロウロしていたら誰だつて怖いだろう?」

原住民の心に深いトラウマがあるという事実に納得…したが、それでも感情が邪魔をするのか、金剛たちは難しい顔をしていた。

「というわけで、済まないがヲ級たちは鎮守府内だけにしてほしい。外に出ると下手するとその子も危ないし、周りの子も危険だからな」

「ワカツタ。私ハオ兄ちゃんサエイレバ問題ナイ」

「ウン、分カツタ!」

「ソウイウ事情ナラ仕方ナイ」

三人(?)から納得してもらい、取り敢えずほっとした提督であった。

「こう言っちゃなんだが、もし困ったことがあればいつでも言いに来るといい。出来るだけ希望に沿うよう、善処しよう」

「ア、出来レバオ兄ちゃんト同ジ部屋ガ良イナ」

「何言つてんの!?!」

「おう良いぞ」

「良くないよっ!?!」

「そうデース! 私もイツショにして欲しいデース!」

「金剛ちゃあああんっ!?!」

「ハツハツハ、モテモテだなあ。…そのうち手を出しそうだが」(ボソツ)

「聞こえてるし、手出さないからあああつ!?!」

先生をイジルのが楽しくなってきた提督であった。先生の不幸スキルはこういうところでも発揮するようだ。

「ま、そんなことより「そんなこと!?!」プライベートビーチもあるから、泳ぎたかったら泳げるぞ。予め言っておけば準備できるしな」

「因みに言つてなかったらどうなるんですか?」

「遊んでいる最中に模擬弾とペイント爆弾・ペイント魚雷がやってくるな」

「怖ッ!？」

何もなければ演習の弾が時々飛んでくるので、遊ぶなら提督に言っておくというのがここの鎮守府のやり方であった。

「後見学したいならこれも俺に言っておいてくれ。その時が現場責任者が教えてくれる。外に外出していいのは昼間のみで保護者同行でのみ許可が出る。…先生方、これでいいかい？」

「大丈夫です」

「分かりましたー」

「……………」

「…先生？」

先生の返事がなく、何があったのか気になった提督は聞き返してきたが、

「俺はロリコンじゃない、俺はロリコンじゃない…」

「(フォローできないレベルだから) 諦めろ、試合終了だ」

「グッフォッ!？」

無慈悲の一言でノックアウトした先生であった。

「あー吉川提督、ちよつといいかな？」

「? 何でしょう?」

元帥が提督に質問をしてきた。

「ここの周辺って水着ショップあるのかい?」

「あるにはありますが…高いですよ?」

「ああいや大丈夫、これでもお金は結構持つてるからね」

「なるほど。何を買うので?」

「水着を持ってない娘がいるみたいだからね、買ってあげようかな」と

「本心は?」

「水着姿を激写するたげボア!？」

セクハラ発言した途端、ハリセンが飛んできて見事に元帥の頭にクリティカルヒット。高雄の身体能力はプロ野球でも十二分に活躍で

きる程であった。

「(元帥、後はこの青葉におまk)」

「青葉さん？ まさかと思えますけど、やりませんよね？」

「ふえ!? あ、当たり前じゃないですか、ア、アハハ(ゴメン元帥、私も命は惜しいんです…)」

きつちり愛宕から釘を刺される青葉であった。

「じゃあ早速だが、これからどうする？」

「ゼロ、見タイ！」

「私も工廠見てみたいデース」

「俺もだなあ」

「私もおく」

割と工廠を見たいという子が多く先生たちを見た提督だったが、先生たちも問題無いようで、提督は明石を呼び出し見学許可をだした。…工廠で何を見るつもりなんだろうか…。

「ほら元帥殿？ まだ説教は終わってませんよ？」

「アイダダダダ!? ちょよ、本気で痛い、痛いからあー!?」

「第一貴方は…っ毎度毎度…っ、なんで息をするように…っセクハラをするんですか!? この前も…っ呉の瑞鳳にもやってみましたよね…っ！」

「アババババ、お、折れるう…！」

そうやってしている間も、元帥と高雄のじゃれ合い(サブミッション)でイチャイチャ(格闘技)していた。

「しないからね!? どうか助け」

「だが断る」

「元帥殿？」

「(〇〇) \ ナンテコツタイ」

その後は提督がいそいそと提督室から出て行き、提督室からしばらく悲鳴が聞こえていたそう。

27 どうしてこうなった!?

「イイイヤツホオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!! ううみいだああああ!!」

「落ち着け阿呆」ズパアン!

「オベロンツ!?!」

「…しよっぱなから振り切ってますねえ」

元帥たちがやってきた次の日、提督が海水浴の許可を出し、提督と所属している艦娘（半分）、元帥と秘書艦の高雄、そして先生陣と子供たちを呼んで楽しんでいた。…なぜか村上たちが混ざっていたが。

「第一、職業柄よく海を見てんだろが。はしゃぐ理由がねえぞ」

「分かってないねー、仕事抜きだから燃えるんだろが」

「…本心は?」

「ビス子の水着を写真に収めるために決まってるんだろ、言わせんな恥ずかしい」

「男のその発言は逆にキモいだけなんだよなあ…」  
「オイコラ」

最初っからエンジンから火でも噴きそうな勢いで飛ばす村上であったが、その後来たビスマルクの水着姿を見た瞬間、急に黙った。なぜ黙ったか? フィットネス水着（ググったら分かる）だったからだ。…体のボディラインがくつきりと浮かんでしまうのを着ているものだから男性陣（元帥&吉川除く）は体のある一部分を凝視していた。

「あら、貴方もとつくに準備していたのね?」

「ビス子、ちよっと草むらまでいこブフェオツ!?!」

「子どもがいるのにアカン発言してんじやねえ!?!」

「……………」

「そして先生よ、ちよっと後ろ見てみ?」

「え?」

先生が後ろを見ると、——絶対零度の笑顔（目が笑っていない）を浮かべた愛宕&子どもたちがいた。

「」

「…骨は拾ってやる、逝って来い」

「先生？」

「アリーデヴェルチ！」

「逃ゲタゾ、追エ！」

「逃がさないデース！」

「フフフ」

全力で逃げた先生だったが、やはりすぐに捕まり、

「ちよ、やめ——ギャアアアアア!？」

「…南無」

ある意味予定調和な先生の悲鳴が遠くから聞こえたのだった。…  
というかやはり奴も男だったか…。

ちなみに元帥は、

「その美しい女性よ。ちよつと僕とお茶でも…」

「あら、後ろの女性がおつかないからやめとくわ♪」

「……………」クルツ

元帥が後ろを振り向くと絶対零度の笑顔（ただし目がry）&ピキ  
マークを浮かべた高雄の姿が！

「元帥殿？ ちよつと話したいことが」

「サラダバー！」

「逃がしませんよ？」

「ナニイ!？」

高雄が阿○羅○空で元帥の後ろに回り、

「一瞬千撃!!」

「ウギョバア!？」

○獄殺もどきをかまし、元帥が妙高飛びしていたのだった。…ほん  
と懲りないな、あの人は…。

因みにお仕置きした人たち全員水着姿です。ある意味幸せだった  
んじゃないだろうか。

「男性陣元気ですねー」

「婆臭い臭いこと言っていると、老けて見られますよ?」

「…何でこう、しゃべり方が違うんですか?」

「女の子相手にズケズケ言ったらいかんでしょ？」

「…ちよつと変わりましたけど」

なんだかんだでしおいと喋っていると村上が復活した。

「おーイテテ、ちよつと本気で殴ったろお前」

「あんなんで本気な訳ないだろ。本気でやってたら犬神家状態になつてたぞ」

「…強すぎね？」

「最近では真・昇○拳取得を目指してる」

「やめろ!? 顎が粉々になつてしまう!?!」

「大丈夫大丈夫、人間相手にはしないから(尚テロリストには遠慮なしに使う模様)」

因みに長門は滅・昇○拳が使える模様。弟子は師匠に似るとは言つたものである。

「とかお前もビス子と同棲してんだろ。何故暴走するし」

「可 愛 い は 正 義 !!」

「…可愛いというより色気たつぷりなお姉さんポジじゃあ…?」

「しおいちゃんそんなことは言っちゃダメエ!?!」

そう言っていると先生と元帥の悲鳴が聞こえた。

「ちよ、俺の横にスイカ置くのやめて!?! どうせなら元帥のほうに」

「ちよつと先生それはないんじゃない!?!」

「はーい、エロ星人どもは黙っててくださいいねー」

「愛宕さん笑顔怖いんですがーツ!?!」

「愛宕、それじゃいけないわ」

「高雄君、僕は君信じ」

「もう一個スイカあるから一個ずつ置きましょう? そっちのほうか

ハラハラ感がより出るわ」

「ウゾダドンドコドーン!?!」

「トコロデマダー?!」ブオンツッ! ブオンツッ!

「ヲトウトよ、その音はスイカ割には絶対に出してはいけない音だ!?!」

「フツフツフ、先生ツタラ物欲シソウナ声出シチャツテ…」

「違うからっ!?! むしろ風前の灯火状態から逃げ出したいからの声だ

「からあーっ!?!」

「さあて、私も作っておきますかね」フオンツ！ フオンツ！

「高雄くううんっ!?!」

…若干悲鳴が聞こえているが、吉川たちは無視をし続けた。いやだつてこつちに飛び火したら怖いですし…。

「…先生もこつちに来ても変わりませんねえ」

「むしろあれが先生の普通なんだろう？ なら問題ない」

「さりげなく畜生な発言ゲブア!?!」

村上が余計なことを言ったせいで、水月に裏拳をかます吉川であつた。

「フム、ココデモ先生は騒ガシイノダナ」

「お？ 遅かった、な…!?!」

港湾姫が水着で登場した瞬間、吉川・村上両名は絶句した。だつて胸が…ねえ？

「……ツ!?!」ボタバタツ

「お前はムツツリ人間かなんかか!?!」

「うわあ…すごい鼻血です…」

「我が人生に…一片の悔い」

「貴方？」

「やっぱビス子が一番さ!」

(しっかり調教されてやがる…!?!)

「？ 何ノ話ダ？」

「分らないホウがいイ…」

「その喋り方はアカン、アカンからあー!?!」

村上がボケ一辺倒のせい、頭に血管が浮かんでしまうほど突っ込みまくっていた。突っ込むのも意外と大変なのである。

「はっはっは、こんなにボケるのも久しぶりだなあ。リラックスした状態で帰れるぜ」

「おうそうか、こつちはクタクタだぜ…」

「体力無えなあ」

「誰のせいだと、思ってるんだ!」



「誰のせいだろうね？」シラバツクレ

ピキッ

「…ほう？」

「(あ、やべ) はっはっは、ごめんよ。ちよつとちようしにのて」

「言いたいことはそれだけか？ なら死ぬがよい」

「うおおあ!?! やべえ、こいつの拳、躊躇がねえ!?!」

「見よう見まね…爆砕・重落下!」

「分かる人少ないネタだしてきたー!?!」

「フハハハハ、逃がさん、逃がさんぞオオオ!」

「だ、誰か助けてー!?!」

自爆した拳句、全力で吉川から逃げる村上であつたが身体能力では  
圧勝の吉川からは逃れられず、

「覚悟は良いか？」

「ヤメロー死ニタクナイ! 死ニタクナイ!!」

「失せよ!」

「ダズビダーニヤツ!?!」

速攻禊がれたのであつた。…なんだかんだで仲の良い二人である。

「ヲ級ー、ちよつと左に棒を下すといいいー」

「やめて!?! 当たるから、当たっちゃうから!?!」

「ムシロ狙ツテンノヨ」

「最悪だよ!?!」

「ところでビスマルクのはどうでしたか？」

「そりゃあ勿論マーベラスツ!!」

「ヲ級ちゃん、こつちのほうがいいわよ」

そう言われて愛宕がヲ級に渡したのは——模造刀であつた。

「まって!?! 死んじやう!?! 死んじやうからっ!?!」

「先生——雉も泣かずに撃たれまいつていう諺知っているかしら  
?」

「高雄君、落ち着こうではないか。暴力では何も解決しない」

「ならその手癖の悪さを止めてくれますか？」

「それは無理」

「なら 死になさい」

「あつちよやめギヤアアアアアア…！」

…引き続きお仕置きを食らっていた先生&元帥コンビであった。

## 28 大丈夫かこれ？

「あー、本当に死ぬかと思った…」シヤクシヤク

「禊ただけで死ぬわけねえだろ、何言ってるんだ」シヤクシヤク

「…あれって相当やばいやつだろ？ 知ってるんだぞ。あのヤバさ」シヤクシヤク

「だからこそだろ。完成していたらお察しクラスなんだから」シヤクシヤク

「…黙ってカキ氷食べるか喋るだけかにしませんか？」

「黙って食うか」シヤクシヤク

「だな」シヤクシヤク

先生たちがボコボコにされ終わり、帰りに間宮の店に立ち寄り、子供たちと一緒にカキ氷をシヤクシヤク音を立てながら食べていた。

勿論子供たちは大喜び。長門やビスマルク、高雄や先生たちも食べていた。

「しかし、本当に良いのかい？ 元帥だからお金には困ってないし、ここで奢っても良かったんだけど」

「…心配なく。後で上層部に接待費として落としますので」

「…しっかりとしてるなあ」

「下手にしたらそこから突っ込む大馬鹿野郎もいますからね。こういうのはちゃんとしとけば良いですし」

「成る程ね」

元帥と吉川が話していると先生の少し慌てた声が聞こえた。

「才兄チャン。アーン、シテ？」

「え？」

「あー!? ちょっと抜け駆け禁止ネー！」

「成る程、ああいう手もアリなのか」ボソツ

「時雨…。“オハナシ”しなきゃならなくなるわよー？」

「いやいや、するわけないじゃないですか愛宕先生（むう、お互いがお互いを牽制しあっているから中々近寄れない）」

「ちよつと落ち着こうね二人とも？」

「フッフ、妹ナンダカラ」アーン」シテモ問題ナイヨネ？」

「いやヲトウト何だけどね？ ……というか何これアーンしなければならぬ感じになつてない」

「駄目ネ！ ……ここに遊びに来て居る間は抜け駆け禁止デース!!」

「そんなことしていたの!?!」

「…先生、流石に幼女に手を出すのは人としてどうなんだ？」

「手出さないから!?! ……というか何その蔑んだ目!?!」

「いや、元帥が君の事をDMと言っていたからな」

「元帥、ちよつと腹を割つて話しましょうか」

「だが断る」

そう言つと元帥はカキ氷の器を持ちながらピユーツと逃げていった。

「あ、こら待ておいコラア!?!」

「ハツハツハー、さらばだ明智君（ガシツ） ……え?」

「元帥さん?」

逃げようとしていた元帥を捕まえたのは、ニッコリ笑顔の愛宕（但しブリザードな笑顔つき）であつた。

「えつと…? ……何をやる気かな?」

「ちよつとO☆H A☆N A☆S H Iが…」

「ごめんなさいちよつと待つてアツ!?!」

そしてそのまま近くの建物の影に入り、そこから元帥の悲鳴が木霊した。

「……………」グツ!

「先生、机の下でガッツポーズするのはどうなんだ?」

「ナラ金剛、君モ一緒ニヤツタライインジヤナイカ?」

「……………」

「金剛、誓いを破つたら……例のブツ、やらないぜ?」

「ウグ!?!」

「ちよつと待つて!?! ……何その例のブツって!?!」

「ヌググ、ちよつと迷うネ…」

「因みに今週は写真だそうだ」

「なら我慢するネー♪」

「写真!? 何の写真なの!?!」

到着してからツツコミまくっている先生であった。：不幸属性は伊達じゃない。

「：先生もいちいち構わなくてもいいんじゃないと思うことがあるんですが…」

「それでもちゃんと構ってあげてるからいい先生じゃないかな? …ロリコンだけど」

「だからロリコンじゃなああああいつ!!」

「はいはいロリコンロリコン」

「チイクシヨオウメエエエエ!!」

先生、魂の雄叫びである。：二人とも鬼畜である。

「水羊羹と小豆アイスでも買っておこう。響と春雨が好きだからな」

「そういえば、遠征は続けているのか?」

「ハワイ諸島の件で弾薬が尽きかけたからな…。あの後アメリカから金は貰ったが、できれば手を付けたくないし」

「何で手を付け…てああなるほど」

「そういうことだ」

因みにアメリカから貰った謝礼金はサラリーマン5年分位の金額である。

「そいや、次の日はどうするんだ? 大型ショッピングモールならあるし、それなりに娯楽はあるぞ」

「どうか何でそんなにあるのかと」

「開拓」

「開拓というレベルじゃねえ!?!」

トラック諸島を奪還した後、ライフライン構築ついでにちよつとしたテーマパークを作った企業が悪い(震え声)

「因みに作った企業は?」

「有沢重工グループの迅雷建築」

「あそこ頑丈と耐震性が売りの企業じゃないか!?!」

尚、有沢重工は車から戦闘機や飛行機、パワードスーツまで何でも

アリな企業である。

「人工島まで作って現地の人から凄まじい批判が来たもんなあ……」

「来て当たり前だし当然だろ。むしろなぜ今はこんなに溶け込んでんだ」

「仕事の斡旋」

「お金 か よ」

「なんだかんだで喋っていると、

「じゃあ明日は買物としましょう」

「そうですね、先生は？」

「……」

しくしくと泣いている先生の姿がそこにあつた。

「やれやれ……。もういつそ開き直ったほうが精神的に安定するんじゃないか？」

「そうなるにあきつ丸にお世話になる未来が見えますね……」

「先生の社会的生命が死にますわあ……」

「舞鶴でも若干死にかけだから問題無いじゃなゴゲフツ!？」

「はい元帥はO★H A★N A★S H Iですよー」

復活した元帥がさりげなく畜生発言した途端、愛宕のジークブリーカーが入り、ギリギリと背骨から音を立てながら再び建物の陰に行つた。……まあ胸に埋まった状態なので特に同情はなかったのだった。

「そいや、子供たちはゲームとかするのかわ？」

「まあしますよ？ 制限時間付ですけど」

「そうか、バ○チャ○ンでも貸したら喜ぶかな？」

「何故そんなの持つてんだし」

「因みに全部あるぞ」

「……やつてもいいかわ？」

「別にかまわんぞ。マ○オパー○イーとか○鉄とかあるし」

「それ友情破壊もんだからNGな？」

そう言っていると、先生も再起動したようで、

「えつと……、明日はどういう風にか？」

「シヨツピングということになりましたよ」

「先生もお疲れですし、明日は羽を伸ばしてみたらどうでしょう?」  
「そうさせてもらいます」

「なあ先生、先生はバ○チャ○ンでは何を使う? 因みに俺はテ○ジ  
ン」

「いやそこはスペシ○フだろ」

「フ○イ・○エンですけど?」

「ウエ!」

「因みに僕は○ファ○ムドだ「元帥?」もう勘弁してくれえー!」

元帥、再び (ry

恋する乙女はおっかなし…。

「まあ取り敢えず鎮守府に戻りますか。…後でテム○ンでフルボッコ  
にしてくれる」

「ああん!? デスモードでメツタメタしてやるぜ!」

「ハート飛ばせば」

「それはヤメロオ!!」

※気になる人はググってみよう。設定が某歌姫クラスである。…  
マ○ロスとのコラボ出来そうですね。

「何で男性ってああいうのが好きなんですかね?」

「メカは男のロマン故!!」

「…さいですか」

## 28 ショツピング回

「…何でこうなっているんですかねえ…」

「諦めろ、大体こんなもんだ」

「女の買物ってすごく長いもんな…」

「ハハハ、僕はあまり気にしないなあ」

「二うるせえ!! お前のせいで荷物持ちになったんだろが!!」

今提督たちがいるのはショツピングモール。何故ここにいるかというと…

早朝。

「そういえば、明日日本に帰りますけど」

「うんそうだね。僕としては町に出てうろつき回りたいけど」

「元帥殿? 貴方がうろつくとかかなりの数が立つのでダメですよ?」

「? 何が立つんだい?」

((無自覚か…))

「ふむ…買い物に行くのならウチの連中を連れて行くといい。その手のことなら得意な子が多いし」

「そうですねえ…。それでは、お言葉に甘えてもいいでしょうか?」

「おういいぞいいぞ。あと明石と夕張も頼むわ。あの二人、籠り気味だから外の空気を吸わせないと…」

「シャバの空気ですね、分かります」

「……………」ペキボキ

「御免なさい勘弁してください」土下座

そりやそんなこと言ったらそうなるよ。

「んーじゃ…僕たちも行かない?」

「え?」

「いや、女の子を手伝うのは当然だろう?」

「いや、俺たちは」

「あ、じゃあお願いしますねー」

「え、ちよ」



「任せといてー」

「二お前が仕切るなやあ!!!」

…と言うことである。

「良いじゃないか。どうせゲームするだけなんだし」

「せっかくの休みが買物で潰れるとかある意味地獄なんだぞ。男が下着コーナーほつつき歩いてたら精神的ダメージが大きいわ」

「化粧品コーナーとか男にとつて苦痛以外の何物でもないしなあ…」

「そしてどんどん増える荷物…そして文句を言う女子…」

「それは無いだろう？ 見たこともないぞ？」

「ところがあるんですよ…自分の荷物はほかの席を占領するくせに、ほかの人には『席ゆずりなさいよ!』とかのたまう女子もいるし」  
(※マジです)

「先生エ…」

先生の悲しすぎる発言に思わず同情してしまう吉川・村上であった。

「でもたまにムフフな展開もあるからいいじゃないか」

「たまに且つ夏限定ですけど？ 冬は炬燵で丸くなつとるがな」

「そして抱き合いながら温まるんだな。…ここは年中夏だけど」

「お前のほうがムフフな展開多そうじゃねえか!？」

「その代わり敵がお替り状態になることが多いがよろしいか？ とい

うかお前もここに来い。しごいてやる」

「ちよつと何言っているかわかんないですねえ…。というか俺も国内の中ではかなりの強者なんだけど」

「国内の強者がどうした。沖田大将や十河中将といった超人勢を見てみる。フィリピンとかラバウル、パラオとかにいるんだぞ」

「君もその超人勢なんだけどね」ボソツ

元帥のつぶやきが聞こえなかったのか、更にいう吉川。

「大体さ、何でこんなに潜水艦が多いの？ 大本営にソナー寄越せ言っても『無理』の一言だぞ、俺たちやワ○ミの社員じゃねえんだぞ」

「…未だに無視し続けているのか…」

「あー、一応申請しておこうか？」

「ぜひお願いします」

「土下座しちゃうほど!？」

一切の躊躇い無く土下座しちゃうほどであった。追いつめられてますな…。因みに最後のセリフは先生です。

「というか潜水艦ってそんなに倒すのが難しいんですか？」

「難しい…というより駆逐艦・軽巡・軽空母・航空戦艦・秋津丸以外通用しないんだよ」

「しかも爆雷だけじゃなく三式ソナー積んでおかないとフラクラスだと厳しいしなあ…」

「それだけじゃなく目の前で補給艦が爆散する光景を見たことあるか？ しかも目の前で」

「…心の底から同情するわあ」

「なら変われ」

「…だが断る」

そんなこんなで、

「お待たせしましたー」

「じゃあ荷物、お願いしますねー」

そこにあっただのはちよつと尋常じゃないレベルの量の荷物が！

「…」

「あ、あとまだ買いますのでー」

「…ちよつと宅急便にお願いしてくる」

「僕も行こう…。というか何を買っているんだ？ 化粧品？」

「私は化粧品にアロマ系ですねー。結構気に入っているのが多かったのよ」

「私は子供が気に入りそうな道具ですね。結構頭を使いそうなのが あったのよ」

「…まあ納得のいく物だよな。ところで高雄のは？」

「……………」

吉川の問いに返事が返ってこず、どうしたものかとレシートを見て

みると…

「…何でS Mグッズが多いのか。というかS Mグッズ売ってあったんか」

「あ、それ教えたの私ですね」

「コラ青葉ア！」

まさかの青葉に叱る吉川であった。

「いやー、まさかこんなに買うとは思わなかったですよ。よほどストレス溜まっているんじゃないですか？」

「だからってこれはねえわ。だってこれ未成年オールアウトメドレー状態じゃねえか」

「(レシートを見た村上) …うわあ」

「(レシートを見た先生) これは…かなりキてますね」

「元帥、悪いことは言わん。ちゃんと労わってやれ。でないとかヤバイ。社会的生命がヤバイ」

「そうだね…。これからはちゃんと労わるよ…」

(※ネタバレ、悪化します)

「じゃあ宅急便で送るようにはしておきましょう。あ、幼稚園のと高雄、愛宕、先生陣の分は元帥が出ておいてくださいね」

「…割り勘は？」

「無いからな？」

「dsyn」

そして、宅急便で日本に送るようにしたのは良かったものの、その金額が思いのほか酷かった。どのくらい酷かったかというとりーマン一か月分以上である。これは酷い。無論、金額を見た元帥が悲鳴を上げたの言うまでもない。

「ヒユウウウ…」

「げ、元帥が…燃え尽きている…！」

「まあ金額が金額だけにな…」

天龍の言葉に吉川が答えた。まあ空輸だから仕方ないツチャ仕方

ないのだが。

「それにしても：天龍、でいいのかな？」

「天龍で良いも何も俺が天龍だけど？」

「：こんなちっこい天龍って普通見ないからなあ」

「とうかこんなちっこいのが出てくるって：どうしてだ？」

「俺に言っても困るっての。後後ろ見ないほうがいいぞ」

「うん、殺気で分かってるから問題ないぞ」

「どう問題ないか聞いても（チャキツ）：oh」

後ろから刃物を構える音が聞こえ、冷や汗が止まらない状態になった村上であった。

「まあそれはともかく、何で君はここにいるのかな？」

「それは：」

「まあまあ。先生ならちよつとトイレに（シユツ）うおおお!？」

余計なことは言うんじゃないと言わんばかりの攻撃が飛んできたが、ギリギリで回避に成功。余計なことは言わないほうが賢いことに漸く気付いたのであった。

「だから雉も鳴かずに撃たれまいとあれほど：」

「いやいやいや! あんなn（ガシイツ）ガボンツ!？」

「はーいちよつと黙っててねー」

「モガモガモガガー!？」

「：何やってんの？」

「バカの口を塞いでます。というかもうすぐ来ると思うから待ったらどうだい?」

「：なあ、えつと：?」

「吉川だ。どうした？」

「なあ吉川さん。——どうやったら先生に甘えることができるんだ?」

「えー：?」

「おい」

まさかの発言に思わず声に出してしまったが、

「だって君たち十二分に甘えてんじやねえか。この状態にどう甘える

「ことを言えと?」

「だけど、金剛やヲトウトは…!」

「あれはむしろ甘えすぎな気もするがね…。まあ逆に聞くがね?——  
—何で甘えたいと思ったんだい?」

「それは……」

吉川の言葉に言葉が詰まる天龍。

「…最近先生さ、幼稚園に来ることが少なくなっただよな」

「ふんふん?」

「だから、甘えられなくて寂しくなって、でも金剛やヲトウトは最近  
会ってるみたいで甘えているんだよ…」

「なるほど?」

「だからさ、今回今のうちに甘えたいんだよ。龍田も素直じゃないか  
ら甘えることができないしな」

「成程ねー。——だそうですよ? 先生?」

「んなあつ!」

背後を見てみると、そこには優しい笑みを浮かべる先生の姿が!

「そっかー、天龍は甘えたがっていたのかー」

「うっ…!」

恥ずかしいのを聞かれたせいか、顔を真っ赤っ赤になっていた。因  
みに龍田はその姿を見て鼻血を出している。

「ハッハッハ、この可愛い奴めー!」ワシヤワシヤ

「うわっちよ、髪をグシグシすんじゃねえ!」

口では嫌がっても顔は若干嬉しそうな顔であった。

「ほーれ、龍田もこーい」

「きゃっ、ちよつと〜?」

口では (ry

もうぶつちやけ後ろから刺されても可笑しくないほどである。こ  
の天然チャーマーめ!

「モガモフェフェ?」

「あん? もうそろそろ放してくれって? もうちよつと待ってく  
れ、見ておきたいんだよ」

「モフアモゲゲモバ!？」

「ははは、そろそろこの状態は危ないって？　だいじよ『吉川さん』：オーウ」

次の瞬間、吉川・村上の兩名の財布が寒くなったのであった。：村上が若干哀れであるが、先生よりはマシだから問題は無いですね、ハイ。

## 29 コラボ最終回

「それでは皆さん、グラスをもって・・・、カンパーイ！」

「二かんぱーい!!」

「いやー、明日帰るのが嫌になってくるね」

「幼稚園の掃除とか書類も沢山あるんですよねえ・・・。まだまだ遊びたかったですね」

「時間があれば先生たちも一緒に遊びにきてください。歓迎しますよ」

「俺はー?」

「お前は言わなくても来るじゃねえか」

元帥たちがトラック諸島に遊びにきて三日目。最後の夜は先生・元帥・吉川・村上の四人でお酒（おつまみ付き）を飲んでいた。

「それにしても、前線といった割には何もなくてよかった」

「まあハワイ諸島奪還した時、頭を潰したからな。暫くは安全だろうな」

「しかも潜水艦も来なかったしな。運が良い」

「これで皆リフレッシュ出来ただろうし、買い物もできた」

「水着も拝めましたしね」

「あまり言うとは拙いですが？ 後ろを振り返ったらご本人登場とかありますし」

提督室で喋っていると、ドアをノックする音がした。どうぞー、と言うと入ってきたのはビスマルクであった。

「あら、こんなところでお酒を飲んでいたの?」

「おう、月を見ながらの酒も良いもんだぞ」

「なら私もいいかしら?」

「僕は良いけど?」

「俺も良いですよ」

「じゃ、失礼するわね。・・・ところでホットビールないかしら?」

「ねえよ、んなもん」

「冗談よ」

そんなこんなで、

「ところで先生は好きな人でもいるのかしら？」

「ブフェツフオツ!!」

…と思いきや、ビスマルクが先生に爆弾発言をブチかましたのだった。

「ゲツホゲホ…! は、鼻があー!! ビールの炭酸が鼻にイー!!」

「ちよっ!? 先生止めてくれ! 流石にそれは許容できないよ!」

「何を許容すんだよっ!!」

「その前に吹き出すんじゃないか! おつまみにかかったらどうすんだ!」

「ちよっとは心配してくれてもいいんじゃない!!」

相変わらずの不幸スキルであった。

「そんなことより「そんなこと扱い!!」好きな人はいないのかしら？」

「す、好きな人ですか…」

「え、ロリコンだから聞かれても答えようがないんじゃないか？」

「だからロリコンじゃねえつつてんだろがよ!!」

「じゃなんで子供と一緒にいる時鼻の下伸ばしてるんですかねえ…?」

「伸ばしてねえーよっ!!」

「無自覚か…」

「だから伸ばしてねえっての! てか話が逸れてる逸れてる!」

「では先生が好きな子は何かな？」

「元帥イイイイ!!」

キャラ崩壊レベルの雄叫びを上げながら元帥の首元を前後に揺らす先生であった。

「はっはっは、別に僕は好きな子は誰と言っただけだよ?」

「アンタ絶対“こ”は“こ”でもこっちの“子”のつもりで言ったよな!! 悪意が見えるんだよ!」

「ハハハ、何を言っているのかな?———そう言った方が面白いからじゃないか」

「このド外道!!」



実にこの元帥、ノリノリである。

「で、マジな話どうなのよ？」

「と言われても…」

「かーっ、駄目だぜ先生。好きな女の一人や二人いないと人生つまらないぞ？」

「いや、二人以上はいないでしょ？」

「……………」

先生の発言に提督は思わず視線をスツ…と逸らした。

「え？ 何故に目を逸らすの？」

「だってこいつケツコンカツコカリしてんの一人どころじゃないし」

「なん…だと…!？」

「あ、そうなの？」

「確か…金剛・長門・赤城・加賀・伊勢・大井・北上・川内だったっけ？」

「…さらに増えるけどな」

「言外に肯定した上に嫁さん増える発言っ!？」

「悪いか!?! 嫁さんが増えて悪いかあ!?!」

「逆切れ!?!」

飛び火しまくっている呑兵衛共であった。因みに提督はそこまでお酒は飲んでなかったりする。何でもそこそこが良いのである。

「はいはい、取り敢えず先生の話でしょ？」

「チツ」

「おいコイツ舌打ちしたぞ」

「キノセイツスヨー」

酒が入っているせいや若干酔っている先生たちであった。

「好きな人…かあ。好きな人はいるけれど…」

「告白は？」

「してないです…」

「しろよこのチキン野郎」

「酷いっ!?!」

「酷くねえわこの野郎。男ならウジウジ悩まず告白しちまえよ」

「同じ先生なんですよ…。もし失敗したらもう何時もの様に接するこ  
とは出来ないと思うと…」

「同じ先生というと…しおいちちゃんかしら？」

「何だ、やっぱりロリコンじゃないか（呆れ）」

「だから違うってーの！ 何でそう俺をロリコンに繋げたがるの!？」

「…だってそれが先生だし（でしよ）」

「あああんまりだあああ!!」

下手くそなどこそこの柱の男の物真似をする先生であった。…とい  
うか割と余裕そうである。

「と、というか皆さんはどうなんですか？」

「俺ならビスマルクに溺れているぜ？」

「あら、奇遇ね。私もよ」

「ダブルで惚気られただとオー!？」

カウンターに成功だと思つたら逆にジョルトカウンター喰らつた  
感じに決まつたのだった。…というかそんなこと言っていないのかと。

「僕はまだケツコンカッコカリしてないなあ…」

「元帥だから金はあるんじゃない？」

「あるけど、立場があると気軽にケツコン出来ないのがね…。元帥の  
立場上、人質にされてもおかしくないわけだし」

「あー…」

矢張り立場が上になればなるほど、こういうリスクも生まれるの  
だった。え？ 長門たちはって？ あいつらに素手で勝てる奴はい  
ません。提督以外は。

「というか僕からしてみたら君の方がおかしいんだけどね。中将なん  
だからそれなりに金は貰っている筈なんだけど？」

「給料はね。しかし、施設の維持費とかその改良・改築費は一銭も出し  
てないよ、上層部は」

「…これは、腐っているか…」

「だからと言って貴方を責める気は無いので。責めたところで意  
味なんて無いですし」

「…言外で責めているように聞こえているのは気のせいかな？」

「気のせいですよ。…まあ出来ればいいので上層部の雑草狩りでもしてほしいですけどね」

「…考えておくよ」

若干とげのある言い方をされたせいか、ちよつと元気を無くした元帥だったが、

「ま、今回は実態が分かったただけでも嬉しいもんですよ。中には見て見ぬ振りする連中もいますからね。その点貴方はその様な不公平なことはしないでしようし」

「…会つてから数日なのによく信用できるね?」

「もうそんなこと言っている段階でお察しでしょ?」

「…:…思つたより真面目な話で会話に入れない、どうしよう?」

「安心しろ、今のでブチ壊れたわ」

会話ブレイカー・村上が割り込んで空気をぶち壊しにされた二人であった。…原作(?)でもあまりシリアスになりきれない元帥の数少ないシリアスをぶつ壊すとは、どう足掻いても元帥はこうなる運命なのだろうか…。

「ところでよー、吉川は何でケツコンカツコカリしたんだ?」

「その言い方だとカツコカリするのがいけないみたいな言い方だなオイ」

「ああ、違う違う。ほら、大井とか性格がキツイじゃんか? どうやってケツコンまでいったのかなーと」

「そんなにキツイ…:…さういえば最初は物凄く辛く当たってきたなあ」

「だろ?… なのにないつの間にかああなつて(デレ大井)いるんだからちよつとそこんところの話も聞きたいねーつと」

「…言つても良いけどね?… その代わり文句を言うんじゃねえぞ」

さういつて何故ケツコンカツコカリまで行けたのか事の始まりから終わりまで行つたのであつた。(因みに三話目の番外編と31話のケツコンカツコカリを要約しているだけです)

それを聞いた皆さんはというと。

「お前、凄いなあ…:」

と逆に感心させられたのであつた。

「いや、普通そこまで言わねえから。というか男前なセリフだなオイ」  
「成程ねえ…。もしかして、他の艦娘にも言っているんじゃない？」  
「いや確実に言っているでしょうこれは？」

「おう言いたい放題するんじゃないやねっつの」

男三人から言われ放題の提督であった。

「でも、ちよつと羨ましいかも」

「え？？」

「だって、こんなに親身になってくれるのって、嬉しいものよ？」

「おう吉川。寝取ったら、お前、ぶち〇す」

「どんだけシヨックだったんだお前…。というかNTRは趣味じゃないから安心しろ。というか本気じゃねえでしょアンタ」

「あら、バレた？」

「声がどう見ても本気じゃないからな。すぐに分かる。…というか村上。お前の嫁なんだからそれぐらいすぐに分かれよ」

「べべべ別にききき気付いててていたししししし」

「どんだけ震えとんだお前…」

まあそんなこと言われたら動揺しますわな。

「でだ、好きな人がいるなら告白した方がいいぞ？ 正直な話、お前の好きな人は艦娘なんだろうが、このご時世、いつ沈んでもおかしくないんだ。沈んで後悔しても、その後ドロップしたとしても、そいつはお前が好きだったそいつじゃねえんだ」

「……………」

「後悔したくないならそうすべきだぜ、先生。それにこういう言葉があるんだ」

提督は最後にこう言った。

「——命短し恋せよ乙女。これはよく女性に例えて言われっけど、男にも当てはまると思わんか？」

「…お前、誰よ？」

「よっしや表出る村上イー！」

「あ、ちよ、ごめんなさいちよつと待ってギヤアアアアアア——」

首の襟をガツチリ掴みそのままズリズリ引っ張られる村上であった

た。…それなりに良いこと言ったのに台無しにするセンスはある意味凄いい。

「…確かに、ある意味そうかもなあ…」

「と言つても、先生へタレだけどねー」

「チクシヨウ、正論だから何も言えねえ…!」

「ま、彼の言ってることも正解だろうと思うよ? よく考えてみたらいいんじゃない?」

「…ですね…」

こうして、先生たち最後のトラック諸島の訪問は終わりを迎えたのだった。

「ギヤアアアアア!! パ、パロスペシャルはらめええええええ!!」

「オラオラアン! セっかく良いこといったなと思ったのにぶち壊してくれたのうキサン!!」ミリミリミリッ!!

「ちよ、いろんな方言が混じって」

「じゃあかしいわああああ!!」ミシミシミシッ!!

「ギヤアアアアアアアアアスツ!!」

因みに、夜に響く男の悲鳴は鎮守府の皆さんはスルーしていたのだった。

「こんなオチは嫌だあああああ!」

「逃がさんぞワレエ!」

「だ、誰か助け———ホワアアアアアアアアアアアッ!?!?!?」テイウンテイウンテイウン

### 30 提督、新たな力を手にしたでござるの巻

元帥たちが日本に帰った数日後の朝のこと。

「提督、有沢重工武器開発局の人が来ていますが？」

「ああ、有難う。・・・ということは、伊勢姉妹の武器が出来上がったのかな？」

「そういえば、刀にヒビが入って使えないって言ってましたね」

「あいつらリアル島津やるからなあ・・・。この前竹刀で試合したらあの二人遠慮なしに喉に突きカマしたしな。マジで喉がつぶれるかと思った」

「防具越しでも死にかけの一撃とか腕が上がってますね」

大淀と一緒に大淀と一緒に明石・夕張のいる場所に向かった。

「それにしても、最近は大淀と川内姉妹も強くなったなあ。気を抜くと負けそうになるし」

「私から言わせてもらえれば、何故人間であるはずの提督が艦娘である私たちに勝てるのかが分からないのですが」

「鍛えればある程度はいけるもんだぞ？ 鎧通しを習得したら深海棲艦でも通用するしな」

※鎧通しとは、鎧（甲冑）を着た状態の相手の心臓を、気功を通し、その衝撃で心臓を止めるという技のこと。人中狙うよりは難易度は下がる・・・訳はありません。

「普通はしないんですけどね。その前に一撃でKOですし」

「耐えれば勝てる」

「それが出来たら私たち要りませんから、その理論ですと」

「兜割り習得しなければ余裕余裕」

※兜割とは、簡単に言うと防御なんぞ関係無え！一刀両断だぜえ！といった技です。ゲームだと防御無視の大技・・・だといいなあ。そんなことを言っていると、明石達のいる港に着いた。明石達はというと「するが」のチェックをしていた。そしてその横に有沢重工・武器開発局の男性がその様子を見ていた。

「おい、見学をするのは結構だが、そこにいと危険だぞ」

「おっと、これは申し訳ない」

男はそう言う、そこから離れこちらに近づいて来た。

「どうも、私は有沢重工・武器開発局から参りました近藤と申します。お見知りおきを」

「日本海軍トラック諸島第五鎮守府所属、吉川春継だ。で？ 注文しておいた武器は？」

「こちらでございませう」

そう言う、二振りの日本刀を近くのテーブルに置いた。

「一つは伊勢専用、「海神」(わだつみ)。もう一つは日向専用、「火産霊」(ほむすび)です」

※最後のは火の神様である軻遇突智(かぐつち)のこと。決しておむすびでは無いのであしからず。

「ふむ・・・、これ、只の日本刀じゃないだろ？」

「ええ、その通りです。我らが誇る科学者がノリに乗ってしまい、ちよつとした能力が付いております」

そう言う、海神の説明をしたのだが・・・簡単に言うと、

オートトリジェネというバランスブレイカーレベルの代物だった。でもこれはまだマシな奴でもう一つの火生霊がオウカオー顔負けの火炎剣というもうちよつとバランス考えるハゲエ！と言いたくなるほどの性能と言う代物だった。

「・・・無論リミッターは設定しているよな？ 嫌だぞ、本気出した瞬間体がパーンツ！とか嫌だぞ」

「勿論です。もしもの時用なので」

「・・・ここにあの二人がいなくて良かったよ・・・」

島津式の二人がみたら嬉々として全力全壊(誤字にあらざ)でやりかねない武闘派だったりする。

「後、提督にも一つプレゼントがございませう」

「？ プレゼント？」

「はい、こちらに・・・YPS-00、起動せよ」

そう言う、外にあったトラックの荷台から大きいヒトガタがこちらに来た。

「こちらが我らが有沢重工の技術の結晶、YPS-00 迅雷です」

「・・・ちよつと待て」

提督は近藤にそう言つてツッコんだ。

「どう考えてもオーパーツだろ。というかこれをプレゼントとかどう見ても裏があるだろ」

「・・・やはりバレましたか」

「バレないと思つているのか。どう見ても開発費が億越え余裕な代物をプレゼントするとかあり得んだろ。そんなの信じるのは余程の無能だ」

「何、簡単ですよ」

近藤はそう言うのと、

「データが欲しいだけです。戦闘データの、ね」

「・・・一応言つておくが」

提督が若干殺気を滲ませながらこう言った。

「日本を占領、ないしは戦闘をするんだったら、貴様らの首が東京湾に浮かぶと思え」

「・・・そんな気は毛頭ございませんよ」

冷や汗をダラダラ垂れ流しながらそう言った。

「我々有沢重工はアジア圏内での安全確保したく、海軍・陸軍と協力し、兵器の提供をしていますのは知つてますね？」

「まあな。一部の弾薬は有沢製だしな」

「そのおかげで軍の発言力も発生し、ある程度のことも出来るようになります」

「本来はいけないことだけだな」

「しかし、いつまで経つてもアジア圏の制圧は成功せず、有沢重工は独自の軍団を作ることになったのです」

「・・・一応言つておくが」

「分かつてますよ、アトラス社のような愚策を犯すつもりはありません。これは会社全体の意思であり、決定事項です」

「ならいいが・・・」

「しかし、軍を作るには莫大なお金と時間が掛かります。人を育てる



「のはお金が掛かりますからね」

「で？ 無人機ならデータをコピーするだけで済む上、人が死なないからそれらを構成した軍を作ると？」

「その通りです」

近藤の顔には気のせいも、苦悩が滲んでいるように見えた。

「私の息子は、深海棲艦に殺されました。軍人だったとはいえ、私にはそれを、息子の死を受け入れる覚悟が出来ませんでした」

「……」

「そして、会社が無人機による軍を作る時は正直歓喜しましたよ。息子のような死に方を迎える若い者を減らせる。そういう確信がありましたから」

「……俺が言うべき台詞ではないかもしれんが」

提督は、近藤に向かってこう言った。

「確かに無人機運用は人は死なない。それは認める。でも、それは人の倫理観をぶち壊すものと知れよ？」

「……どういうことですか？」

「人は死を知ってこそ、平和を望む。だからこそ我々は平和を望めるんだ。だが、無人機の運用は情けを知らん。一度命令を受けたら愚直なままでに行う。そこには感情の行き交いは無い」

「……何が言いたいのです」

「無人機の運用は、下手をすれば“戦争による死”を忘れかねないということだ。事実、FPSのように空爆をしている軍は、人の死を触れて無いせいか躊躇せず民間人関係なく爆撃した。只でさえ半有人運用でもこうなるんだ」

「……」

「無人機の運用は悪だとは言わん。だが、そういう弊害もあるということでは覚えておいてくれ」

「……覚えておきましょう」

その顔には、何も無い、無の表情を浮かべていたが、

「ですが、少なくとも今の貴方にはコイツは必要の筈です。それに、コイツはデータを得るためだけの物とはいえ、従来のパワードスーツよ

りは高性能かつ優秀です。無人運用も可能ですが、有人運用を前提とした代物です。無論、データは頂きますが」

「・・・好きにしろ。だがこれだけは言っておく——もし、貴様ら有沢重工が誤った道を行ったら、軍人の一人として、日本の人間として・・・一人の人間として、全力で阻止させていただく」

「・・・分かりました」

「後でカタログを貰つとく。ところでコイツのA Iの愛称は？」

「いえ、所詮は兵器なのでそんな物は付けてません」

「そうか・・・。学習型なんだよな？」

「ええ、人間の頭を模したA Iです。その内声でも付けようかと思っっています」

「こちらの声は聞こえているのか？」

「勿論です」

「そうか。——迅雷のA I、聞こえるか？」

提督がそう聞いてくると、返事をするようにツインアイから光が灯った。

「これからお前の名前は「アル」だ。宜しくな」

嬉しいのか、理解してないのか、リアクションが全く返ってこなかった。——これが、提督の新たな剣且つ鎧となり、艦娘とともに戦うことになった提督の新たな相棒、迅雷&A I「アル」の、最初の出会いだった。

## “迅雷”&「アル」 戦闘開始の巻

迅雷&「アル」が提督の鎮守府に参入して一週間たったある日の事。新型パワードスーツの性能を確かめる為、護衛の艦娘と共に鎮守府から少し離れた海域で性能テストを開始した。

そう、この新型パワードスーツ“迅雷”の特徴は、水に浮くことなのだ。

今までのパワードスーツは陸をメインとしており、主に戦車の撃破や人命救助、災害救助等幅広い行動範囲とそのマシンパワーを生かしたのが今ある第一世代の特徴だった。

しかし、“迅雷”の特徴は第二世代であり、深海棲艦を撃破する為だけのパワードスーツであり、全体的にスペックが底上げされており、そして何より基本的に水に浮き、移動できる性能が最大の特徴なのである。

更に、背部にあるブースターを撤去することによってパック換装も可能としており、砲撃専用パック「轟雷」、空中機動専用パック「韋駄天」など、様々な戦局に対応可能という汎用性にも優れていた。

但し、一見素晴らしいように見える新型にも弱点があった。それは——操作性が激ムズなのと、そこまでする必要が無いことであつた。

操作性はパック毎に変わってしまったという残念な仕様であり、通常仕様の機体でもトルギスみたいなどんでもない加速がデフォ、ヘタすれば中の操縦者が血まみれ（自分の）になってしまふという兵器としては残念すぎる機体だったのだ。

何故そんな物プレゼントするし、と提督が担当者の近藤に言ったところ、「不死身や鬼と言われた貴方ならコイツの性能を引き出せると思ったからですよ」とのこと。有沢の技術力は極端すぎることに浪漫な技術者が多いことで有名だったことは知っていたがここまでする必要はあつたのかと思ってしまう提督であつた。

まあ貰った以上性能テストはしなければならぬし、いざ使おうとして限界以上の数値を出してマシンに殺されでもしたら泣くに泣けないのでその機体を使ったのだが。

「…あんなことを言っていた割には別に大した事は無いな」

《おそらく機体との相性が良いのでしょう。現時点ではすべて最高値を出しています》

因みに「アル」にも声がついたのだが、声は何故かアスラーダなのだった。

これも近藤に聞いてみたところ、前に見たアニメが面白かったので相棒の声を付けたとのこと。あらゆる方面にケンカ売っている技術者であった。

「相性ねえ…。クイックターンやクイックブースト、オーバードブーストまで可能な機体を手に入れたのは嬉しいのは嬉しいけどさ」

《？》

「ぶつちやけここまでする必要は無かっただろ。懐に飛び込む前に中の操縦者が天に召されるわこんなG」

《ですが貴方はそんなことにはなっていないません》

「頑丈さとあらゆる恐怖に打ち克つのが俺の数少ない利点だからな。これでも接近戦では同期の中ではナンバーワンだし」

「アル」との会話を挟みつつ、急発進からの急停止、そこからのブーストを使った大ジャンプ、更にそこから後ろにブーストをかけ後退する等、動作確認を行っていた。——音速というところでもない速度でだが。

「…提督って人間でしたっけ…?」

「人間だ…一応な」

『通信で聞こえてるぞ。体を鍛えたらある程度のGには耐えられるし、機体との相性も良いからこんなことが出来るだけだ』

「いやいやいや、前者は確かにそうですが、後者は補正があっても無理ですからね!」

「何言ってるのさ吹雪ちゃん。そんなこと言っていたら大和と長門の

ガチパンチに耐えられる訳無いじゃない」

「確かにそうですがそれ自体も普通はあり得ないですからね!?　　どうか伊勢さん日向さん、新たな武器の調子はどうですか?」

「中々いい感じー。海神(わだつみ)の真価は切れ味じゃないみたいだし、実戦が楽しみなだね」

「此方もだ。加減が難しいが上手くいけば凄まじい切れ味を發揮する筈だ。後は実戦でコツを掴むしか無いだろうがな」

「危うく消し炭なりかけたよう…。自慢のスピードで逃げてなかったらホントに危なかった…」

「その分私はマシっぽーい」

そう言っていると、救援信号を受信した。

『…だ(ジザザザツ) 助け…ださ…!　だれ(ジザザザザツ!!)』

その声はノイズが凄まじく、部分的だが、確かに助けを求めている声だった。

しかし、今の我々は提督の護衛がある。ヘタすれば提督自身も危険。普通ならとつとと鎮守府に帰るのが普通なのだ。——そう、普通ならば。

『…救援信号の場所を調べろ』

《了解》

「ちよ、ちよと待つて下さい!!　流石に危険すぎます!」

『現時点で我々が近かったら我々はこの者を見捨てたことになる。それだけは出来ない。何、救援信号を出したなら近くの部隊も来るはずだろ』

《信号、探知完了。我々の距離から三十キロ離れたところで、ル級を中心とした艦隊から攻撃を受けています》

「近くに味方は?」

《ありません。近いのは我々ですね》

「…吹雪」

「…はあ。何でしょう?」

「魚雷二本、スマンがくれないか?」

「?　良いですけど…」

そう言うと、吹雪は酸素魚雷二本を“迅雷”の横の腰にある武器格納ラックに左右二本ずつ格納した。

「でもどうするんです？　ここからだと言に合わない可能性が…」  
「知っているか？　コイツの最高速度は音速レベルとまではいかないがかなりの速度を維持できるんだぜ？」

因みに瞬間的に音速をたたき出すことも可能であり、それに耐える提督は人外レベルである。

「…まさか」

「そのまさかだ」

提督はそう言い、直ぐに吹雪たちから離れると、

ズツドオツツ!!という音と水柱と共に、提督は助けを求めている者を助けに向かった。

——“迅雷”と、AI「アル」と共に。

「糞ツたれがア!!　撃て撃て撃てエエエ!!」

「この船には近づけさせません!」

「このお!」

輸送艦を護衛しているトラック諸島第三鎮守府所属、護衛部隊長

天龍は悪態をつきながら敵に砲撃をしていた。

「(糞ツ、どうなっている!?　弱体化していたんじゃないのか!?)」

心の中で言っていると、駆逐イ級の魚雷が輸送艦に向かっていった。

「やらせねえっつの!」

腰の斬艦刀で魚雷の信管部分を切り落とす、如何にか魚雷を処理。

輸送艦を守った。——だが。

「天龍さん!　敵ル級、砲撃を開始しました!」

「チイツ!　朝潮、済まないが俺についてこい!」

「了解ですッ!」

天龍の命令に、半ば悲鳴のように、しかしながら負けてたまるかという意思を感じられる声と共に、戦艦ル級を止めに向かった。しか

し、

「(こいつら…！ 連携が取れてやがる!? 今までそんなことなかったのに!?)」

「きゃあ!?!」

「朝潮!?… 糞ツたれがあ!!」

朝潮が敵の連中に翻弄され、被弾。天龍も必死に反撃するも、敵に有効打を与えられずにいた。

「天龍さん！ 私に構わず逃げてくださいー！」

「阿呆！ 諦めてんじやねえ！」

しかし、ル級の目が被弾している朝潮をロックオンした。

「避ける、朝潮オー！」

朝潮はル級から逃げようとするが、機関部分がやられたのか、移動が遅かった。

朝潮は自分が沈むのを覚悟した。自分も艦娘なのだから、沈む覚悟は持っていた。

「朝潮オー！」

でも、

「最後に、提督の声を聴きたかったな…」

『待たせたな!』

次の瞬間、轟音と共にル級の体が真つ二つに裂けた。

「…え?」

朝潮は何が起こったのか、全く分からなかった。

「朝潮、大丈夫か!?!」

「な、何が…!?!」

天龍が朝潮を確保し、援軍の味方を確認した。そこには——真つ赤な鬼が、立っていた。

「な…!?!」

『済まない、少し遅れてしまったようだな』

「アンタは?」

『トラツク諸島第五鎮守府所属の者だ。救援要請を出したのは君たちだな?』

「あ、ああ…」

天龍は目の前の後継を半ば信じられなかった。それはそうだろう、全身機械化したナニカが立っているのだから。

「(パワードスーツか? しかし、こんなの見たことが無い——)」

天龍が思索していると、混乱状態から脱した敵艦隊が攻撃を開始した。

「しまった!?! 味方が!」

『大丈夫だ。——島風、着いたか?』

「提督はっやーい(大汗)」

『割と余裕そうだな。輸送艦と護衛部隊の守り、頼んだぞ』

「やればやれるけどさー、なるべく早くね? 吹雪たちも激おこプリン丸だったし」

『OK』

島風との交信も終わり、提督は背中にあつた突撃槍「仁王」と左の格納ラックに収めていた酸素魚雷を取り出し、天龍に言った。

『ここから離れた方が良い。援護は一切無用』

「お、おい!?! 幾らなんでも無茶だ!」

『現時点で交戦可能なのは俺しかいない。お前らじゃ死ぬだけだ』

「だがよ!」

天龍は納得しなかった。艦娘としての矜持がそれを許さなかったのだ。

『安心しろ。——お前らより強いのでな』

その言葉と同時に、

提督は躍り出た。



「まず最初に、コイツを喰らっどけ！」

左に持っている酸素魚雷を近くにいたチ級に叩きこみ、即爆殺。

その後、「仁王」を構え、イ級の側面を突き刺す。

「まだ終わってねえぞ！」

『ブースター、最大出力』

そしてそのまま背中中のブースターを吹かし、リ級の胴体を刺し、更にそのままもう一体のル級に突き刺し、

「焼け死にやがれエツ!!」

『放電開始』

突撃槍の根本にあるトリガーを引いた次の瞬間、

ズババババババヂイッ!!!と凄まじい音と共に、凄まじいほどの熱量が三体の敵が体の中を焼き、黒焦げとなった。凄まじいほどの熱量である。

しかし、この攻撃で「仁王」は使用不能。残るは駆逐イ級・後期型のみ。しかし、その最後の敵がいけなかった。

「コイツ、フラか!?!」

『敵、攻撃開始。回避行動』

「分かってる！」

単艦でありながら近づけさせない攻撃をするイ級。こりやどうしたもんかと思つた矢先であつた。

「川内さん直伝……!」

イ級の背後から近づく艦娘の姿があつた。その娘の名は――

「魚雷バンカーツ!!」

――吹雪である。

「提督?! 一体何を考えているんですか!？」

『いや、こうでもしないと間に合わなかったんだよ』

「そうかも知れませんが、もう少し自分を大切にしてください! 貴方が傷ついたら悲しむ人がいることを忘れてませんか!？」

『い、いや、忘れてないとも』

「なら今後こんなことをしないでください! 良いですね!？」

『いや、流石にそれは』

「何か言いましたか!？」

「イエナニモ」

吹雪の剣幕に思わず肯定せざるを得なくなった提督であった。

「おいアンタ」

『あん?』

「今回は助かった。感謝するぜ」

『気にすんな。データも取れたしな』

「それは効かない方が良いのか?」

『そうしてくれると有難い。まあ聞かれても答えられないがな』

「そうか。後で提督経由で改めてお礼を言わせてくれ。じゃあな」

天龍は朝潮を背負いながら、輸送艦の護衛に戻った。

『…島風』

『はいはい』

『輸送艦の護衛、引き続き頼むぞ』

『了解です。間宮製のお菓子頼みますねー』

詳しいことを聞かず、文句を言わずに（お願いはする模様）新たな任務に就いていった島風だった。

「では提督、帰りますよ! 帰ったら金剛さんと加賀さんの説教がありますからね」

『うげえ…、戻りたくねえ…』

「そんなこと言っても駄目です!」

『? 何だ?』

《如何しましたか？》

『いや、声が聞こえたんだが』

《近くに我々以外の存在を感知できず。気の所為ではないでしょうか》

『……だと良いが』

その後、鎮守府に帰った提督は二人からコツテリ叱られたのであった。

### 32 提督、ブチ切れる。 前篇

“迅雷”の初戦闘が終わったあくる日のこと。今回の戦闘で発生した始末書を書いていた提督の元に、訪問客が訪れた。相手はどうやらあの輸送船を護衛していた艦隊を指揮している提督らしい。

何故“らしい”という言葉を使ったか。理由は簡単。——目の前にどう見ても中学生の、気弱そうな男の子が来たからだ。

「こ、この前は本当に有難うございました。おかげで大事な補給物資が失われずに済みました」

「ああ、別に気にしなくていい。救援信号があがったら助けに向かうのは当然のことだし、最悪物資を捨てなきゃならなかったしな。天龍の指揮も良かったし、ちゃんと鍛えれば第一線でも活躍できるぞ、あの子は」

「有難う御座います。おね——じゃなくて、天龍も喜ぶでしょう」

…何か怖いのか、オドオドビクビクしながら受け答えをする第五鎮守府の提督。気になったので問いかけてみた。

「…君、何でそんなに怯えているの？ 別に取って食ったりしないから安心していいぞ？」

「いえ…話に聞いていた人物と聞いていたのと違ったので、ちよつと戸惑っているだけです」

「（…ちよつと？）聞いていた人物像というと？」

「…怒らないですか？」

“君”にはね」

言外に言ったやつ処刑の臭いを醸しまくっている吉川であったが、男の子はそれに気付いていないのか、こう言ってきた。

「えつと、“トラック諸島第五鎮守府の提督には気をつける。気に入らなければ死が待っている”って…」

「……………ほう？」

「ヒィ!？」

言われも無いセリフに、思わず全身から殺意の波動モドキが出て、男の子は悲鳴を上げてしまったが、それに気づいた吉川が慌てて殺気

を押さえた。

こんなこと言ったやつは一体誰だこの野郎、と思いながら、笑顔（引き攣った）で問いかけた。

「…誰がそんなこと言っていたのかな？」

「えと…、呉山という男からですが…」

「また あい つ か !!。つかムシヨから出たのかあの野郎」

因みに呉山という男、演習編でも出ているが、考えが吉川と反りも合わなければ、親の光を借りるキツネ野郎だったりする、フ○ツキン野郎だったりする。さらに言えば今吉川の鎮守府に所属している大和達3人も元々そいつの所属の艦娘だったりする。

「舞鶴で結構言われてますよ？」 あいつは卑怯モンの種無し野郎”とか、“あんなのが海軍にいるとか世も末”とか、“俺の大和をあいづが奪った”とか…。御免なさい僕が言ったわけじゃないんです止めて怖いイイイイ!?”

余りに酷すぎる発言に、思わず目の前の男の子の事を忘れて殺気全開になってしまった吉川であった。

無理もない。そもそも卑怯者は呉山の方であり、世も末なのはあいつであり、大和に至っては吉川自身には全く関係ないのだ。なのにここまで言われたらどんなに温厚な人間でも助走をつけて”遠慮””手加減”を怒りという川にブン投げている。

「ほうほうそうかそうか…。あの野郎、余程蝦蛄の餌になりたいと見える」

「あ、あのう…。僕が言ったということとは言わないでくださいね？」

「勿論」

自分に向けていないとはいえ、物凄く濃い殺気に気絶することなく、吉川に言った部分、彼自身も結構胆力があるのだろう。…アンモニア臭がするのはしょうがないものとしてだが。

「…正直スマンかった。まさかそうなるとは…」

「いえ良いんです…。誰だっけ自分の悪口を言われたら怒るでしょうし…。でも」

「分かっている。俺の名に誓って絶対に言わない。男の約束だ」

先ほどの高濃度の殺気を「怒り」というかなりマイルドな言い方を  
する部分、かなり気を使ってくれているんだろう。この子は大物と  
化すなと思つた吉川であつた。

「でだ、済まないが墓参りついでにお礼参りしに行つてくる」

「良い訳ないでしょう？ 第一その馬鹿の居場所は分かっているの  
ですか？」

「全く分かつてないがそれが何か？」

「それが何かじゃありません。ちゃんと調べて行つてください」

第五鎮守府のシヨタ提督が帰つた後、加賀にこのことを伝え、日本  
に一度行くことを伝えた提督であつたが、即止められたのであつた。  
…と言つても、呉山をめることは賛成していた。そりや愛する男性が  
言われも無い暴言で貶されたらこうもなる。

「大淀なら特定できるだろうし、舞鶴には有馬もいるよな。…済まな  
いが」

「大淀に吹雪、大和、武蔵、大鳳、“迅雷”を持っていくんですね？」  
「…よく分かつたな？」

「秘書艦歴No.1は伊達じゃないですから。本当は私が行きたかつたん  
ですけどね」

その代わり、私の分までしつかりやつておいて下さいね？と激励の  
言葉を貰つた提督であつた。

「大淀。あいつの場所は分かりそうか？」

「ちよつと待つてくください。監視カメラの“目”を盗んでますので、  
ちよつと時間がかかります」

「…これ、職権乱用じゃあ…?」

「ばれなきや良い（良いのよ）」

「…まあ今回は今回だけに仕方ないですよね」

「うむ、今回は流石に名誉毀損でも訴えられるし、全く問題ないしな」

「そうね、ネットで調べていたら偶々監視カメラの“目”に入っちゃってたとかよくある話ですしね」

「ですよねー」

「うむ」

常識派の吹雪も見て見ぬふりをしているほど、艦娘の怒りはかなり深いようで、武蔵と大淀に至ってはノリノリで呉山を探していた。一番槍は私がもらうと言わんばかりの怒りのオーラ全開で。

尚、今現在提督たちがいるのは「するが」の本来へりを格納する所に、簡易的な入渠施設に装備の格納室があるところにいる。

「……………」

《どうかいたしましたか、大和殿》

「あ、アルさん…」

《アル、で結構ですよ。かなり暗い顔をしていたので、気になって声をかけてしまいました》

「…もしかしたら、私達の存在が提督のメンツを傷つけているんじゃないかと思つて…」

「私たちがいるだけという理由で貶す人なんて吐き気を催す邪悪ですけど? 大和さん、あのビチ糞野郎の言葉なんか気にしなくていいんです!」

「た、大鳳ちゃん、物凄く言葉が汚くなっているわよ?」

「これでもマイルドな言い方なんですよ。本当は（ピーッ!）とか（ピャーッ!）とか（ガトリング音）だったり言いたいんですよ?」

「えつと…大鳳ちゃん?」

「何です?」

大和が大鳳の後ろを指さしていた。気になって後ろを見てみると

「…あまり女性が言うには過激すぎるぞ?」

「キヤーーーーーッ!?!」

まさかの提督に驚きの余り悲鳴を上げてしまった大鳳であった。

「い、いつからそこに!?!」

「…放送禁止コード付近から」

「最初からじゃないですかヤダー!?!」

《最初ですか?》

「テンパっててそれどころじゃないと思うわ…」

アルの冷静な突っ込み(?)と大和のフォロー(?)に顔を真っ赤っ赤になっていた大鳳であった。多少なりとも気になる男性の前で放送禁止コードに接触しまくっている発言をすれば恥ずかしさの余り布団に包まって季節外れのカタツムリになるものである。

「でも、ありがとな」

「…何がですか」

「怒ってくれてたんだろ? 大和と俺の為にさ」

「…自分たちを大切にしてくれる人が貶されていたら誰だって怒るでしょう」

「ま、そうなんだけどな。——後、大和」

提督は大和の目を見てこう言った。

「俺は君たちを保護したのは後悔してないぞ。昔も、今でもだ。」

第一あんのドクスカス野郎の言葉で君たちが暗くなる必要は無い。あのゴミが言ってきたら笑ってこう言ってやれ——『それがどうした』ってな」

《…マスター、第三者から言わせてもらいますと、若干告白っぽく見えます》

「…マジで?」

《マジです。…大和殿?》

「ふえっ!?!」

顔を真っ赤にしてポーツと聞いているところに、アルの問いかけに思わずビクウツ!?!と過剰な反応を返していた。

「な、何? 何かどうかしたの?」

《いえ、お気になさらず》



「…気のせいかしら、人の顔があつたら多分（・ω・）な感じに見えるんだけど」

《気のせいですよ》

そんなこんなで、提督たちは舞鶴に到着した。

「さて、あの糞野郎はどこにいるか分かるか？」

「調べてみたところ、裏路地にある麻薬精製工場にいるようですね。呉山の他にも指名手配を受けている連中もいるそうですね」

「…『目』に映っているという事は、警察側も黙認しているのか、もしくはそれに気付かない愚かなのか、どっちなんだ」

「そんなことはどうでもいいです。さして重要なことではないですし」

「…そうだな。じゃ、お礼参りで行こう」

提督は『迅雷』に乗り込み、光学迷彩を起動。裏路地に溶けて行った。

「…あれ？ ちょっと私はー!?」

…完全スルー（というよりいるのを無かったことにされかけた）された有馬は、慌てて提督に合流しようとしたのだった。——その時、監視カメラが此方をじっと見ていたが。

「こちら、ペガサス。見つけたぞ」

《敵の数は10名です。RPG等の火器は見られません》

『んー?』

「どうしたウルズ？」

『なあんかこれ嫌な予感がする。他の艦娘には避難勧告と誘導をしてもらおう』

呉山の居場所である麻薬生成工場の屋根に到着した吉川と有馬。スキヤニングで敵の居場所を確認していた時、有馬が警告を発してい

た。

以前、誘拐されたことがあったせいかな、危機探知能力がずば抜けて高く、海軍学校時代では熊の巣を感知したこともあったほどである。

『こちらブレード、了解した』

『こちらクサナギ、了解しました』

『ブリザード、了解です。現場から離れておきますね』

『フェニックス了解。一応周囲に哨戒機出しておきますね』

『サイファー了解。…ん？』

『どうした？』

『…嫌な予感的中したかも』

《警告。パワードスーツの反応有り。数、5》

「散開ッ！」

アルの警報を聞いたやいなや、近くにいる皆に即命令。提督はとうとう――

「アル！ 風縫、抜刀！」

《了解。――敵、左から接近》

窓からダイナミックお邪魔しますをカマし、二階の窓から入った。それに即反応をした敵は天晴だが、相手は運が悪かった。

「ダイナミック☆スタンプ！」

「グギユエツ!」

その敵の真上から同じパワードスーツを着込んだウルズ――有馬が落下。敵の背中に落っこちたのだった。

ベキイツ！という鈍い音と共に動かなくなった敵が、一瞬恍惚の笑みを浮かべたが、そのままあの世に逝かれたのだった。間抜けにも程がある。

「おい、ウルズ。お前は屋根から狙撃するんじゃないのかと」

「いや、釣られちゃった♪」

「阿呆」

「物凄い短い言葉で罵倒された!?…あでも好きな人から罵倒されるの好きか――」

「おい馬鹿止めろ、そんなことより呉山はどこだ」

《ターゲット、地下に逃亡中。スキヤニング不能。どうやら強力な  
ジャミングがある模様》

どっからどう見てもヤバイ感じのフラグである。

「ますます怪しき全開だ。どう見ても地下に兵器があるフラグだろ」

「いやー、感が当たってて良かった。被害は少ない方が良いもんね」

「全くだ。それにあいつが何故こんな場所にいるのか、何でこんなに  
武器、パワードスーツがあるのか」

《恐らく、バックに大きい組織があるのだろうと思われます。大麻を  
売ってその大きな金で買っているのでは?》

「なんにせよ、とっとと捕まえるぞ」

そのまま、工場を後にし、呉山を追いかけたのだった。

### 33. 提督、ブチ切れる 後編

工場地下に潜入(?)した提督たちであったが、ここで一つミスを犯した。それは、呉山本人の処遇である。

今は麻薬精製の罪という建前があるが、最初は私刑にする気マンマンの状態だった為、このような事態は想定しておらず、もし警官に見つかって、捕まりでもしたらその段階で減給もの。一応調査書を提出すれば問題は無いのだが、勿論そんなものは無い。大淀に頼んで偽装するしか手は無いのである。(勿論大淀にはそれぐらいの事は朝飯前である)

しかし、提督はそれに気付いていない。なんだかんだ完璧めいた提督だが、こういう面は抜けているのだった。(但し、それが良いという娘も多い。もげろ)

提督たちが地下を搜索すると、大きな場所に出た。真っ暗なので赤外線センサーを使用、アルが周辺を探查しようとしたが、

《ここら一帯の探查が出来ません。恐らくジャミングだと思われるます》

「チツ、通信は?」

《同じく使用不能です。近距離通信なら可能ですが》

「:はめられたかな?」

「まだ分からん。敵さんも出てこないしな」

《周辺に生体反応はありません。地下に入る直前までは呉山のみでしたからいたとしても問題はありません》

「:何故奴は地下に逃げたんだ?」

提督は、呉山が何故地下に行ったのか疑問に思った。その他の連中が逃げ切れたのだから奴として出来た筈だからだ。

「馬鹿だったんじゃない?」

「あいつは曲がりなりにも提督になった男だぞ。それに気に入らない連中をことごとく失脚させている」

《前方より多数の飛行体接近。回避を》

「噂をすればきやがったッ！」

アルの警告に素早く反応した提督は、有馬の手を掴み、アジャイル・スラストで横の端っこまで緊急回避を行った。その直後——あり得ない数の小型のロケットが、提督たちの横を勢いよく通り過ぎた。

ロケットが完全に通り過ぎたのを確認し、提督は飛んできた方向に目を向けた。まだこれで終わる筈がない、と。

「…ところで聞きたいんだが」

《何でしょう？》

「飛んできたロケットはどのぐらいだ？」

《千です》

「どつからそれほど数を調達しやがった連中は!？」

『——正確には、空母の艦載機召喚の技術<sup>魔術</sup>技術を使っているがなア』

あの糞野郎の声が聞こえた。

『中々に骨が折れたぜえ。てめえに復讐しようと思えば売ればいて、ここまでの兵器を作り出すのはよ』

ズシン、ズシンと、こちらに近づいてきている。

『お蔭で俺の体はクスリでポロポロだ。糞親父も天罰を下してえから、さっきのでミンチにしてやるつもりだったが、上手くいかねえもんだ』

くひひひひ、と狂った嗤い声が漏れた。

「…有馬、下がれ」

「…でも一人じゃ…」

「お前のパワードスーツじゃ足手まといにしかならん。しかも敵は狂っている。従来通りの戦い方じゃ死ぬだけだ」

『オイオイ、人様が話している最中に無視してんじゃねえよ』

奴の姿が、見えた。

『まあ別に良いけどな。——てめえらはここで死ぬんだからよ、この素戔鳴（スサノオ）でなア!』

姿は、…ドラグナーに出てくるギルガザムネそっくりのせいか、と

んでもなく悪役面であった。

しかし、手に持っている五メートル近いバスターソードは、機動性の高い迅雷であっても、ギリギリ回避は難しそうと感じてしまう程の威圧感を放っていた。

「…どっから手に入れやがったこの野郎」

『そんなのに答える理由は無えなあ。ま、神は俺を見捨ててはいなかった。そして——』

バスターブレードを大上段に持ち、

『さよならだ』

そのまま振り下ろした。しかし——

「獲物を前に舌なめずりとは、三流のやることだ」

アジヤイル・スラスターでくるりと後ろに回り、そのまま膝カックンでバランスを崩し、そのまま倒れた敵に、

「で、何がサヨナラだ？」

火に油を注いでいた。

『テンメエエエエツツ!!』

「おうおう、沸点の低いこと低いこと。お前の頭は沸騰したやかんか何かか？ あ、頭の中スツカラカンでしたねえ。空焚きしたらそりや燃えますわ」

『殺ス！』

「お猿さんが何か言ってますねえ…。ウキヤウキヤ五月蠅いわ」

『ガアアアアアアアツツツ!!!』

「…うわあ、よくもまああそこまで怒らせることができるね…」

因みに有馬は即退避していた。凶体のデカイ敵じゃあ相手出来ないと判断したのと、提督の言葉で下がったのだ。

「(まあ、それが正解だったけどね)」

物凄い勢いでバスターソードを振り回すのを見ると心の底からそう思う。五メートル近い分厚い鉄板を振り回しているようなものだ。直撃＝即死、それも顔に当たったら原型何ぞ留まらない。

それでも提督が避ける事が出来ているのは、相手の力量が低いこと、冷静でないこと、そして何よりも、提督自身が間合いの把握が出

来ていること。この三つが提督に味方しているからだ。

しかし、提督自身も焦っていた。理由は、相手の装甲を破れる武器がないこと、アジャイル・スラスタアの多様でバッテリーが半分を切ったこと、そして——迅雷自体が対パワースーツ用の兵器ではないことだ。

素戔嗚の装甲は、見た感じ非常に分厚く見える。風縫で一回切りかかったがまるで歯が立たなかった。凶体のデカさも相まって急所に決まらない。

バッテリーも残り少なく、更にパワースーツの破壊ではなく無力化なのだ。ヘタに全開で言ったら中の糞野郎が死んでしまう。麻薬の工場をやっていた以上、流通ルートや顧客の事も調べなきゃいけないし、死んでしまったら勿論聞けない。

こうなるんだったらパイルバンカー付けとくべきだった、と後悔しまくっていたが、実はパワースーツにも共通の弱点はある。背中の制御ユニットだ。機械を制御する以上、どこからか各パーツに指令を送らなければならない。その為背中に制御ユニットが付いているのだ。要は人間の脊髓と同じである。しかし、

『ヌオラアアアアッ!!』

やたらめったら振り回しているせいで近づけない上に、敵の機体性能が高いのか、そっからの返しが早い。迅雷のパワーなら拮抗出来るが、それに耐えられる武器が無いのだ。風縫で止めようものなら吉川が吉／川みたいなことになってしまう。

こんな奴にこんな売るなよ。基地に刃物じゃねえか、と思っていると突然ベキン！と音を立てて手に握っている武器が軽くなった。風縫が折れたのだ。しかも掠っただけで。

「吉川！　これを使ってー！」

それを見た有馬が持っていた接近武器を提督めがけて投げた。それを掴んだ提督は即抜刀、武器をみてみると、

「クリムゾン・エッジか？　いい趣味してるぜホント」

「だってワイヤーも切れるし頑丈だから重宝するんだもん…」

ククリ刀型パワーダースーツ専用武器、クリムゾン・エッジ。

特徴は携帯性、切れ味、耐久性の三つを高水準でクリアしている武器であり、各国の特殊部隊でも使う人は多い。

と言っても矢張りナイフの延長線にある武器だからリーチはお察し。如何にかして隙を作り出し、そこを突くしかない。

『ギャハハハハ！ そんなんで俺を止められるわきやねえだろオオオオオオ!!』

《警告》

「わかってらあ!!」

敵のバスターブレードをクリムゾン・エッジで止め、如何にか踏ん張ろうとしたが、耐えられずそのまま吹っ飛んだ。

「糞ツ！ パワーが可笑しい!!」

《敵のパワーは此方とほぼ一緒です。最新型だと思われます》

「そんなのは分かっている!」

『そらそらそらアアアアアツ!』

其処から追撃しようとしたが、

「舐めんなこの野郎オオオオオ!」

相手の攻撃を躲し、背後を取った後、

「はいだらあああああああああツ!!」

クリムゾン・エッジを制御ユニットに突き刺し、そのまま倒れ、無力化に成功。相手がイノシシでなかったらおそらく勝てなかった戦いであった。

おそらく機体の中で罵詈雑言を並び立てているのだろうが、それを聞かせるスピーカーも死んでいる為、ビチビチと鮭のように動くことしか出来ない敵を見て、

「…後は警察経由で聞こう」

「そだねー…」

深い深いため息をついたのであった。

後日、呉山を取り調べた刑事に聞いてみたところ、大金を払って出



所した後、ヤバいのを売っていた人から元を買い、そのまま育て、売っていたようで、そのお金で工場を作って、地下に大きな空間を作っていたとのこと。まさか兵器を置いたためのスペースなのかと聞いてみたところ、最初は電気を通して第二の栽培所にするつもりで作ったらしい。

しかし、如何にか復讐を成し遂げたかった呉山は、ある日見知らぬ男から兵器提供の話を持ちかけられ、その話に乗った呉山は弟の名を借り（実はコイツ三人兄弟の二男だったりする）提督に復讐する為に噂をたてたそう。その面ではある意味正解だったと言える。

因みに何故不名誉除隊された呉山の話、あのシヨタ提督たちは信じたのかというと、日本では呉山の逮捕を知る人はおらず、それを日本で知っているのは海軍上層部と、ごく一握りの人物だけだった。

実は、呉山の父親は非常に人格者で、海軍の中では非常に人気があったのだが、演習回で発覚したのを機に「息子の不始末は親の不始末」という事で上層部に報告し、辞任したが上層部がそのまま公表するのはマズイ、という事になり日本では報道されなかったのだ。

これが原因になるとは露とも知らずに。

いずれにせよ、今回の事で完全にムシヨ送りだし、今回は釈放無しという事に収まりそうだと刑事さんは言っていた。尚私刑に関しては大淀が偽装工作をしてくれたお蔭で捕まる事は無かったが、パワードスーツの使用で始末書を書いていた。

「取り敢えず、始末書だけで済んでよかったねー。大淀がいなかったらどうなっていたことか…」

「ウチの大淀は情報戦に強いからな。その代わり実戦が弱くなってしまったが」

※それでもレベルは80程である。

「しかし、私達の出番がありませんでしたね…」

「しようがない、海では私たちは強いが、陸ではそうじゃないからな」  
「適材適所って奴ですよ」

大和がしよんぼりしているのを武蔵たちが慰めているのを見なが

ら、提督はあることを考えていた。

それは、呉山に兵器提供した奴の事である。どこの企業の者か警察も探したが、全く該当する者がおらず、パスワードスーツも製品番号（出荷される製品に付けられる、始めから終わりまで一続きの番号。各製品ごとに固有の番号が割り当てられており、メーカー側で所有者を管理する際や商品の偽装を防止する目的で使用されるほか、事件や事故などの問題が発生したときにこの番号が参照される場合もある。シリアル番号、シリアルナンバーともいう BY WIKI）も完全に削られていたのだ。これではどこの会社で作ったか分からない。

そして、作った奴は艦娘にも詳しいことも懸念の一つであった。呉山は途中こう言ったのだ。——『——正確には、空母の艦載機召喚の技術を使っているがなア』と。

普通の企業なら知る筈のないこと。なのにそれを知っているのだ。

「（…杞憂であればいいんだがなあ）」

提督は嫌な予感を感じながら、始末書を書いていた。

### 34. 墓参り編

「ほら、もうすぐすぐ着くから荷物準備しとけよー。2,3分ぐらいしか止まってくれないからな」

「…提督、いつそ「するが」で行った方が良かったんじゃあ…」

「その代わり墓参り終わったら即帰ることになるぞ？ それに本国で一旦整備した方が良くない？」

「うう、そう言われるとちよつと嫌ですね。提督の故郷ですし、色々見て回りたいですし」

「と言っても一泊したら舞鶴に帰ってここにやならんがな」

「それにしても早く見てみたいですね——福岡を」

始末書を書き終えた提督は、「するが」のメンテナンスを海軍整備基地に回し、迅雷は有澤で最終動作確認の為、舞鶴にあるパワードスーツ専用の整備ドックで留守番させた後、大和達と一緒にその足で新幹線に乗り、故郷の福岡に向かっていた。

…もしかしたら名前前で広島辺りかなーを考えた人がいましたらゴメンナサイ…。

博多駅に着いた一行は、まず提督の実家に立ち寄ることにした。荷物を預けると、ホテル代を浮かせるためである。

もしかしたら嫌じゃないだろうかと思っただけであつたが、むしろ伝えた瞬間食い気味で聞いてきたところを見てホツとしていたのであつた。(吹雪たちからして見れば、ある意味挨拶(意味深)なのだから、そりやそうだろう)

と言つてもまずは腹ごしらえである。

「そーいや昼飯何が良い？」

「博多ラーメン！」

「水炊きかな？」

「アジの胡麻和えだろう？」

「明太子じゃないですか？」

「個人的には魚介類が良いですから…武蔵と同じですね」

「じゃー多数決で魚だな。ちよつと待ってろ、調べる」

提督はそういうと、スマホで辺りの美味しい飯を探していた。

暇になったせいか、吹雪が話を切り出した。

「…そういうえばさつき百貨店の中見てみたんですが、東京と比べて値段は安かったですね」

「福岡は物価が安いって話だしな。かなり人気があるんだ」

「さらに言うと家賃とかも安いから単身赴任先としても人気ねー。博多に軍港が無いのが残念」

「？ 何でないんですか？」

「商業に力を入れてるからよ。軍港よりコンテナをトラックに積むクレーンを建てた方がいいの。横浜や川崎とかその例ね」

「…何で知っているの？」

「さつき調べたのよ」

そう言っていると、調べ終わったのか提督が声をかけた。

「よっし、場所は分かった。皆ー、行くぞー」

「…「はーい」」

因みにお昼は漁港の近くの店だった模様。大和達からは高評価だった。

その後、提督の故郷の町まで行ったが…、

「…「遠すぎるッ!?!」」

「…何なんだいきなり？」

「いやいやいや、車で行ったら二時間以上って遠すぎますって！ 後どのくらいなんですか！」

「んー？ 後十分かな？」

「それ言って三十分以上経っているんですが。というかここどこですか？」

「行橋」

「…門司港の方が近かったんじゃあ…」

「門司港付近はあんまり分からね。ぶっちゃけ作者も行ったことないしな」

「メタい!？」

「と言つてもそこまで田舎っていう程じゃないのだな」

「ここはな。少し大通りから離れると畑が見えるぞ。コンビニもかなり減るしな」

「むしろ都会は溢れかえってますからね…」

途中途中休憩を挟みながら運転し、漸く提督の実家に到着した。

「さて着いたぞー」

「こ、腰が…痺れて…」

「腰を伸ばしたらパキパキ鳴るゝ」

「たった二時間揺られたただけだぞ。六時間なら分かるが」

「それ下手したらエコノミー症候群になりますよね…」

「ホントに見る限り畑しか見えないですね。コンビニ一軒もない…」

「まあ車で20分であるからまだマシじゃないか？」

「いきなり失礼なこつば言うているな…」

実家の玄関から一人の筋骨隆々の爺さんが出て来た。

「ところで、歯ば食いしばれキサン」(訳:ところで、歯を食いしばれ貴様)

「ちよ、いきなり何をゲボアツ!？」

「やかましい! いつん間にボウズば作っちきよった!？」(訳:やかましい! いつの間の子供を作ってきた!?)

「ちよ、何か勘違いしてんぞジジブヘツ!？」

「こん儂の根性入れなおしとってくれるわ! 覚悟しとれよ!？」(訳:この儂が根性入れなおしてくれるわ! 覚悟しろ!?)

「話聞けジジイイイイイイイ!!」

「ちよ!?! 提督落ち着いてえええええ!?!」

突然の乱闘に慌てて止めに入ろうとする吹雪だったが、逆にそれがいけなかったようで、

「第一なし孫んこつば教えてくれなかったんじゃ! 初孫なんじゃぞ

！（訳：第一何故孫の事を教えてくれなかったんじゃ！ 初孫なんじゃぞー！）

「だから俺の子供じゃねえっつの！ 俺の職業知ってて言ってるのか爺！」

「知つちて言うているんじゃ！ どげんしえそんおなごし性つちよろしゅうしたばいんじゃろ!?」（訳：知ってて言っているんじゃ！ どうせその女性とよろしくしたんじゃろ!?）

「俺がそんなことすると思っっているのかコラア!? 終いにや破顔掌すんぞー!」

最早恥晒しレベルのケンカである。大和達がどうしたもんかとオロオロしていると、

「父さん、人前でそんなんやっちゃいかんでしょうが?」

玄関から50前半のおっさんが出て来た。

「なんじゃ冬彦。コイツん根性ば」

「だからと言って去年と同じこと言ってたよね? 天井はいいから早く皆さんに挨拶」

「ぬう…。吉川源一郎（キツカワ・ゲンイチロウ）じゃ」

「僕は吉川冬彦（キツカワ・フユヒコ）。いやーウチの親父がやらかしてごめんね嬢ちゃん達」

「あ、いえ…。何というか、個性的ですね?」

「個性的というか、何というか…。結構マイルドだね? もっとストレートに言ってもイイんだよ?」

「いたらんこつば言わんでよか」（訳：余計なこととは言わんでいい）  
「去年も同じこと言うからとうとうボケたかと思っただぞ爺」

「フン、きんしゃーたんびにちごうとるおなごし子連れてきよつたらこうなるわ」（訳：フン、来るたんびに違う女子連れてきたらこうなるわ）

「いや、きんしゃーたんびっていうけど去年しか来てないからね? それも一回」

「というかそろそろ標準語喋ろ。いつまで博多弁喋っている気だ」  
「儂ん勝手じゃろ」

「あー…嬢ちゃん達がついてきてない感があるから普通に喋ろうや。ぶつちやけ作者もそこまで詳しくないし」

「…分かった。これでいいんじゃない？」

「えっとお…」

話のテンポが掴めていない大和達である。提督がそれに気づき、自己紹介をした。

「さっきも言っていたが、またもう一回言うぜ。

こちらの爺さんが吉川家当主 吉川源一郎。

その横にいるのが次期当主 吉川冬彦。

ここにはいないが当主の奥さん 吉川ユメさん。」

「おいこら若造。何故儂の名前を呼び捨てにしやがった」

「人柄の差に決まってるだろ」

「よし表出ろ。その根性きつちり叩き伸ばしてくれろ」

「やめなさい父さん」

どうしようと、パワフルなお爺さんを宥める冬彦氏であった。

「ところで、この嬢ちゃん達は？」

「ああ、こちらの自己紹介しとく。

右から吹雪・大淀・大鳳・武蔵・大和だ」

「ど、どうぞよろしくお願い致しましてゆっ」

緊張のあまり舌を嚙んじやった大鳳であった。

「ハッハッハ、そんなに気にしなくていいよ。んじゃ家に行こうか？」

「おい息子。それは儂が」

「貴方が言ったら怖がりますよ。色んな意味で」

「……………」

「…まあ言ってるな。強面だし」

提督と冬彦氏の無慈悲なセリフに黙ってしまったお爺さんであった。…まあでも仕方ないですよね、身内でも怖がってしまうレベルの顔だし。

家に入ると、一人の女性が近づいてきた。

「あらあらいらっしやい。去年と違う子だねえ」

「どうもお久振りです、ユメさん」

「春ちゃんも久し振りねえ。あらいけない、お客様にお茶出さなきや」  
そういうと女性は奥に行つた。それを確認した吹雪と大和は提督に質問を投げた。

「…さっきの女性若かつたですけど、もしかして後妻ですか？」(小声)  
「そう思うだろ？ あれでも80後半入つてんだぜ…」

「いやいやいや、どう見ても50前半でしたよ!？」(小声)

「ウチの家系、女性が若く見えてしまう家系らしいんだ。…俺は直系の人間じゃないから、親戚の女性言つたらユメさんしか見たことないけどな」

「…世の女性がある意味羨ましく見てしまいそうですね」(小声)

「お爺さんと奥さんが外見は年が離れすぎててビックリしましたよ。…年を聞くとそれはそれで嫌ですが。色んな意味で」

「結婚当初は30前半の男性と見た目女子中学生の同い年だったから、よく警察に職務質問されてたみたいだったかな」

「いい加減儂の恥を晒すなアホ孫」

お爺さんが話に加わりました。

「一応言つておくが、職務質問されたのはここではたったの三回じゃ」  
「それでも多いわ」

「旅行の時は誘拐犯と間違われたものねえ」

お婆さんが話に加わりました。

『「おい！ 其処の男性！ その子を離しなさい！」と言われたときは何か事件があつたのかと思つたわあ」

「ちゃんとその警官からは謝つてもらつたがの。お蔭で旅行が台無しだったわい」

「そう言つてるけど、父さんも満更では無かつたんじゃないか？」

「冬彦。お前は奥さんと一緒に都会に旅行したら高確率で職質される旅行を楽しいと思うか…?」

「でも好きな女性だろ？ なら楽しい思い出になつたんじゃないかな？」

((あ、この人提督のメンタルに近い))



叔父のセリフに思わずそう思ってしまった大和達であった。遠縁ではあるが、確かに血が繋がっている部分ではある。

「そろそろ夕日も刺してきたところだし、そろそろ墓参りに行こうか？」

「そうですね。じゃあ大和達は どうする？」

「一緒に墓参り行きたいですっ」

「私もですね」

「私もだ」

「よし、吹雪・大和・武蔵は参加つと…」

「じゃあ私は夕飯の準備を手伝いましょう」

「大鳳はお手伝い」

「私は少し付近を散歩したいですね。提督の故郷ですし」

「…まあいいけどな。何もないがいいのか？」

「歩くだけでも何かしらの発見はありますし、こんなに畑があるのも無いですから」

「分かった。六時までには帰ってこいよ」

「良いのかい？ 女性が一人で散歩するのは？」

叔父さんが提督に言ってきたが、

「ああ見えて合気道有段者だから問題無い。むしろ手を出してきた奴ザマアとしか言えんな」

「…艦娘って全員そうなのか？」

「俺の所が特別なだけだから」

シレッと自分の鎮守府が規格外的発言を言ってしまう提督であった。

「という事で山の懐まで来ました」

「二「いやいやいや、何で山なんですか（なんだ）」」

「墓地というのはかなり金がかかるからね。それに都会ならあるかもだけど田舎だと山に墓地があることも多いんだよ」（※そんなわきや無い）

「さらに言うとも墓は山のてっぺんじゃ。蜂もおるから気を付けるよう

にの」ジャコン！」

「…一つ聞きたいんだが、何で猟銃持っているんだ？」

「猪が出るからの。あいつら畑を食い荒らす害獣じゃし、大人になると大の人間を轢き殺せるから気をつけにやならんのじゃ」

「更に言うとな人の猪は熊と同じレベルでおつかない。下手したら1メートル超える奴もいるからこういうの（猟銃という名の銃剣付歩兵銃）が必要になるのさ」

「…因みに出てきたら？」

「今夜の鍋の具材になるのう」

軽く引いている大和に対し、

「ほう、猪の肉か。食べてみたいものだな」

「臭みが強いから好き嫌いが激しいよ？ 個人的にはウサギとか」

「というか基本牛・豚・鳥以外臭みは強いがな。その三つでも臭いしな」

武蔵は一度食べてみたいと肝っ玉の大きい発言を出していた。

なんだかんだで一行は提督の両親のお墓の前に到着したのだった。

「…一年経っただけじゃ変わらないもんだな」

「そりゃそうじゃ。儂も手入れしているんじや、墓の周りには草一本も生えとらんわい」

「父さん週に3回も行ってるもんねえ。『気に入らないが孫の為じゃ』と言いなながら行っている部分素直じゃない」

「これ以上言うなら儂とて考えがあるぞ？ お前の恥ずかしい話とかな」

「オーケイ分かった取り敢えず謝るからやめてくださいやがれお父さん」

「取り敢えず雑巾はあるから、大和はバケツに水を入れてきてくれ。武蔵はその手伝い。吹雪はお線香を置く台の掃除を頼むわ」

（…ほう？）

提督の指示に爺さんが少し驚いた顔をしたが、すぐに真顔になり、

「じゃあその別嬪二人は儂についてくると良い。案内する」

「父さん、変なことしないようにね？」

「するか阿呆。お前はさっさと手伝いにいかんか」

「はいはい、と言いなながら提督たちの手伝いに戻った伯父さん。その姿を確認した爺さんは大和達に質問してきた。

「…なあ、その黒髪の別嬪さん。孫は…どんな感じじゃ?」

「え、あ、私ですか?」

「あー、スマン。名前覚えてないんじや。どっちが大和さんで武蔵さんか分からないんじや。スマンの」

「じゃあ改めて自己紹介しますね。私は大和型一番艦 大和と申します」

「同じく、二番艦 武蔵だ」

「うむ、有難う。で、さっきの質問なんじやが…」

「鎮守府では立派な提督ですよ? …少し敵が多いですが(ボソツ)」

「うむ、訳有りの私たちも同じように接してきたしな。…お蔭で同じ心境の者が多いが」

「成程。なんか罵られる様な行動も無いんじやな?」

「!?」

「…安心したわ。あいつも立派になったもんじやのう」

「爺さんはしみじみと言いなながら、それでいてホツとしているような口調で言った。

「…アイツの過去は、君たちは知っているのかの?」

「はい、と言っても大鳳…あ、今日一緒に来た眼鏡をかけていない子ですが、その子経由で」

「ほうか。あいつは親が死んでしまう前は活発な子でな。本人は覚えていないじやろうが、儂もよく遊んだものじや」

「と言っても、儂は陸軍所属だったから、一回二回ぐらいじやがな、と自嘲するように言った。

「じやが、両親が死ぬとあいつは引きこもってしまった。家族が余程好きだったんじやろう。冬彦が声をかけても反応が無かったし、儂らには懐きもしなかった」

「…今とだいぶ違いますね」

「うむ、それに儂は陸軍じやったから家にはよくおらんかった。いじ

めをあつたことを知るのも、大分後になってからだだったしの」

あの時の冬彦の怒りはすごかったのう、と自慢げに言った。

「その時も、いじめが何だと言ったら冬彦が『アンタの大事な孫が泣いてんだぞ、分かってんのか糞親父!!』と怒鳴ったときは恥ずかしく思ってたわ。自分の考えにな」

「…当時としては、仕方なかったんじゃないのか」

「だとしても、儂は気付かなんだ。家族が悲しんでいるのを、全くな。…おお、ここじゃ。じゃあスマンがバケツに水を入れてくれんか？」

「あ、はい」

大和がバケツ三つ取り出し、水を入れた。

「奴は、今でこそあんな感じじゃが、その時は儂らの前で泣こうとせんかった。多分、弱みを見せたくなかったんじゃないやろう。弱みを見せたら何をされるか分からない、とな」

「だが友人は違うと」

「その友人ですら最初は疑つとつたんじゃないや。恐らくその友人がいなかったら、もつと酷いことになっていたじゃろうな」

「……………」

「その生活が、あいつが海軍学校に行くまで続いた。儂には心を開かなかつた。ウチの女房には心を開いていたみたいじゃつたがの。」

「じゃが去年、突然奴が返つて来たんじゃないや。『長年の、心の清算をする為』と言つてな」

その時もお前さんみたいな子を連れて来とつた、と当時を思い出したのか、少し嬉しそうな顔をしながら言った。

「そして墓参りが終わった後、奴はこう言つたんじゃないや——『じゃあ爺さん、ウチに帰ろうか？ 色々話もしたいしな?』とな」

「やっぱり、嬉しかったですか？」

「そりやな。長い時間がかかったが、こうして遠慮なく話すことが出来たのは、やはり嬉しいもんじゃ」

「ならあんな行動しなきゃいいのに」

「この歳になると恥ずかしいんじゃないよ」

本人（提督）がいたら『男のツンデレとか誰得だよ』とやれやれ顔

で言いそうである。

「さて、話を聞いてくれて有難うな。こんな奴のことを聞くのはないからの」

「いえ、お気になさらず。…少し、自分と重ねてしまいましたから」

「…もしや、聞いてはならんことを聞いてしまったのかの？」

「気にしないでください。提督のお蔭で、立ち直れましたから」

「姉さん…」

「だーかーら、気にしないでいいって。ほら、早く行かないと怒られますよっ。」

辛い過去を完全とまではいかないが、少なくともあまり気にしないレベルに落ち着いていた大和は、笑いながら提督のいる場所に向かったのだった。

## 第49話

大和たちが水を汲みに行っている間、提督たちは墓周りの雑草抜きや蜘蛛の巣を取り除いていた。だが、爺さんが除いていたおかげですぐに終わった。：蜘蛛の巣に引っかけたテンパった吹雪がコケて提督にパンツ見られたりしていたが、流石にそこら辺の描写はあまりにかわいそすぎるのでここでは書かない。

「うう…：やらかしちやっただあ…」

「まあ誰だつて引つかかったら『ウエ!?!』みたいなリアクションとるよね」

「なんかその言い方だと(OWO)みたいな人物に見えてしまうんだが…」

「…春継、大分オタクになってない?」

「まあ駆逐艦と一緒にいるしなあ。…思ったが仮面ラ○ダーを見る女の子って多いのかねえ」

「さあ?少なくとも言えるのはそれって大半の男たちが血涙を流しかねないから言わないほうが良いよ?」

「邪な考え持っているからそうなるんじゃないかねえのかと突っ込みたいわ」

「既に突っ込んでますよね…」

尚、この話を聞いた吹雪は一緒に見てみようかな…と思ったそうな。

「そういえば、仕事はどうだい?」

「ハワイに行ったり馬鹿共の相手をしたり胸糞な話がありましたか?」

「…前半は少し羨ましいと思ったが、後半でその気持ちが無くなつたわ…」

「もうね? 足引つ張る暇あるなら鍛えろと声を大にして言いたいし厄介事がネギしよってやって来るんだ…」

「厄介事がかい?」

「それなりのうま味(ネギIIクリア報酬)を持ってくるから」

「ああ…」

「しかも断るのも難しいのばつかでしたよね」

「あれは悪意を感じてしまうのがなあ…。一部は信頼してくれた友人からの依頼だったし、如何にか立ち直すことが出来た…。と、思う」  
「自信なさげだねえ？」

「俺やあ本職のカウンセラーじゃ無いんだぞ…。完全に回復したか分からないし、下手に上に報告したら“誘拐”しかねんし」

「黒いねえ…」

「これはまだ良い方だ。もつと悪くなると如月バイオカンパニーとか群雲重工とかに連れて行かれることもあるし」

「日本二大真つ黒企業じゃないか。やはりそういう話も海軍もでてくるんだねえ…」

「？ 如月？ 群雲？」

「日本の企業の中でも黒い噂しかないところだ。最近ではアメリカのR―TYPEとの企業提携までした話だしな…」

「あ、R―TYPEは知ってます。確かバイオメトリクス関連の企業だったはずですよね？」

吹雪の答えに提督は頷いた。

「更に言うならアンブレラ社の関連企業だな。表向きは医療品関連の物を売っているが裏は…。うん、色々やばいところだ」

「それ言っちゃっても良いんですか…？」

「こんな田舎にいないだろうし、調べると出てくるんだよ、この手のはな」

「そういえば欧州のフェンリルも黒い噂が出てるよね」

「あそこは医療機関というスーパーパソコンングロマリット《超複合企業》だし。というか何で軍事部門まであるのかと」

「食品からスペースシャトルまで何でも揃えますだもんな、あの企業…最早医療機関じゃないという」

閑話休題。

「ま、今のところ大変だけど楽しくやっているよ」

「成程ね…。そういえば去年来た娘は元気かい？」

「長門たちか？ 今じゃ二つ名持ちになったよ

「あの子たちがねえ…。ところで、どんな感じに？」

「長門は美しい容姿とその強さから“姫若子”。赤城は強いけど依然世話になった鎮守府で食った量が凄まじかったのか”ミスブラックホール”。加賀はハンターよろしくただただ敵を狩りに徹していたせいか”獵姫”。伊勢・日向はいつの間にか島津みたいな戦い方になっていたせいかなのかわからないが”鬼姫”。…一部不名誉すぎるけど、二つ名持ちは”個”としての最高評価を意味するからなあ」

「女性に喧嘩吹っかけていくスタイルだね」

「むしろ硫酸をぶっかけている気が…」

そんなこんなで喋っていると、爺さんたちが戻ってきた。

「遅かったな爺さん」

「フン、後は雑巾がけするだけじゃな？」

「相変わらず似合わないつんだ」

「ほれ」

「あぶあ!? ちよ、雑巾を顔に押し付けるなでくれ!」

じゃれ合いながら線香を乗っけている台を雑巾で拭いたり墓についている泥を雑巾で拭いた後、お手手の皺と皺…もとい、合掌し、汚くなったバケツの水を排水溝にジャアアアアと流し込んだ。

「さてと、そろそろ晩御飯も出来ているんじゃないかな？」

「そうじゃのう、…そういえば、娘っ子が一人手伝っておるようじゃが、腕前はどうなんじゃ？」

「腕前はかなり良いぞ？ と言ってもバリエーションが少なくて少し嘆いていたから今回は良い経験じゃなるんじゃないかな？」

「……………(大和さん達も凄い腕前だし、私もやったほうがいいのかな…………?)」

「提督のふるさとの味か…。筑前煮だったか？」

「筑前煮も好きだけど、美味ければ何でもいいからなあ、俺…」

「そういえば大和ちゃんは料理とかは上手なのかい？」

「上手どころか一流シェフレベル。でも作る量が少ないから本人も少し気にしているみたいだな」



「それ本人を前にして言わないで言わないで…恥ずかしいから…」  
「そういえば最近鳳翔さんのところに通っているよな、姐さアダダダダダダ!」

「武蔵? 余計なことは言わなくていいのよ?」

喋りながら下山していると、山の入り口に大淀がいた。

「あ、提督。ちよつといいですか?」

「? 何だ、藪から棒に」

「えつとですね、少し変わったものを拾いまして…」

「変わったもの?」

「ええ、これなんです」

そう言っただけで見たのは——不思議な、淡い蒼色の光を発していた勾玉であった。

「……これ放射能物質じゃ?」

「あ、いえ。簡易型のガイガーカウンターで調べましたが、そんな反応はありませんでした」

「……どこで拾った?」

「ここから西にあるちっちゃな祠のようところに座っていた女の子から手渡されたんです」

「女の子?」

「ええ、これを貴方に、と。…年は小学校高学年ぐらいでしたが、提督は心当たりは?」

「いや、ない。…いや、まさかな」

「……あるんですね?」

「いや、あるというかないというか」

「あ る ん で す ね ?」

大淀のニッコリ笑顔の、しかしながら全身から凄まじい覇気が出まくっているのを見て、提督は観念したようにお手上げした。

「俺が小さい時に出会ったのとすごく似てるなあと思っただけだ」

「…本当にそれだけですか?」

「その子が来ていた服装、見た目が古臭い感じの服だったろ? 戦国時代の農民の服装みたいな」

「…ええ。…もしかして初恋の相手ですか？」

「何でだよ!? 俺をロリコンにしたいの?」

「いえ、何となく声が悲しく聞こえたので。…だとしたらあの女の子は一体なんでしょう?」

「…もしかしたら、ここらの土地神さまなのかもなあ」

「土地神さまですか? もしかしてカエルの神様みたいな」

「あれはいろいろ違うからな?」

「じゃあトイレの神様?」

「それ廁神。確かに神様だけど…ていうか何で知っている」

「ネットって便利ですよね…」

「…仕事に悪影響出ない範囲内でな」

「もちろんです。プロですから」

大淀全開のポケをスルーしつつ、勾玉を見た。

(…俺の前に出なかったということ、俺はもう大人なのだからか)

提督は、自分が小さかった頃の、自分の親が生きていた頃の記憶を思い浮かべていた。

(…本当に、神様だったのかも知れんな、君は。神出鬼没みたいなのころもあったし)

そこには、小さな自分と、小さな女の子が遊んでいた。

小さい頃、自分の親が生きていた頃は、よく爺さんの家に遊びに行っていた。…親が亡くなった時も気にかけてくれて、今考えてみれば感謝の極みである。

その時に友達になった女の子がいたのだが、その女の子が変わった子だった。服装も古すぎる上に、遊び道具も御弾きやかると等、今時の子供でもこんな古いのはやらないんじゃないの? と突っ込みたくなるものであった。

当時の爺さんたちの家は電気は通っていたが、娯楽といえる娯楽は全くなく、あったのが簡易型の麻雀台であった。

しかし、当時は麻雀には全く興味がなく、女の子と遊ぶことが多

かった。もちろん爺さんと遊ぶこともあったが、隠れて遊んでいたのだ。

しかし、低学年の時に両親が死んでしまい、その子とも遊ぶことができなくなってしまった。ただ一回だけ手紙が来たが、それっきりだ。

中学からは祖母のお手伝いや体を鍛えたり、全くと言っているほどに子供らしい遊びをしていなかった。子供時代が一番灰色だったという悲しすぎるという人生であった。

多分その頃からその女の子が見えなくなっていたのかもしれない。よく遊んでいた場所を通っていても不思議な気配はあってもそこには何も無く、非常に不気味がっていた記憶がある。

「全く、今の今まで忘れていたとは…」

少し散歩してから戻ると伝え、大淀たちは家に戻っていった。

提督は回想しながら勾玉を見ていた。ぼんやりと光るその勾玉は、何かお守りのような感じがした。

※尚、フラグは建っていない。：女の子側には。

「それにしても、何だこの勾玉。微妙に温いし、何か優しい光を放っているし…」

『頑張ってるね、春継君。そして——有難う。楽しかったよ』

「…!? あの子の声か?」

提督は付近を見回したが、人の気配は全くない。しかし、あの声は確かにあの子の声だった。

「……成程」

——あの子は、一体何なのか、分からなかったが、提督は何となく嬉しく思った。——覚えていてくれたのかと。

去年は会えなかったからすっかり忘れていたが、もしかしたら本当に神様だったのかもしれない。何せ去年来たのは十月——神無月

だったのだから。

「提督、ちよつとお話があります」

「え？ 何ぞ？ 何か俺やったか大和？」

「何、簡単な話だ。——初恋の相手の話だ」

「弄る気満々の顔だな武蔵!？」

「え？ 先生と同じロリコンの気があるという話じゃ…？」

「ちつさい頃の話だ！ それも幼稚園位の！」

「吹雪ちゃん？ ちよつと言っちゃだめよ？」

「大淀さん？ 何で汗かいているんですか？」

「やはり貴様か!? 確信もなく言うなア！」

「：やれやれ。静かに飯も食えんのか」

「爺さんも満更じゃないくせに」

「あらあらまあまあ、楽しい食事ねえ」

家に戻った提督は、弄られながらも楽しい食事を済ませ、一泊した後、午前中に博多に着いたのだった。

「じゃあお嬢ちゃんたち。いつでも家に来てね」

「はい、有難うございました。しかもこんなにお土産くれるなんて」

吹雪の目線の先には、十箱以上の大量のダンボールがあった。中身は農作物。特にサツマイモがメインである。

「家では余ってしまうし、腐らせてしまうより使ってくれる人にあげたほうがいいから」

「だからと言ってこんなに大量にプレゼントしなくてもよかったのに…」

「提督、もう終わったのか？」

「ああ、舞鶴に着くよう書いておいた。別の高速貨物列車に乗せるから、大和と武蔵はちよつと手伝ってくれ」

「了解だ」

「ああ、それとハルちゃん」

「ちゃん付けヤメテ!? んで、どうした?」

「仕事、忙しいでしょうけど、頑張つてね」

「……勿論」

その後、大量の段ボールを高速貨物列車に預け、その日のうちに舞鶴に到着。少し遅れてきた段ボールをへするがへに乗せ、日本を後にしたのだった。無論、〈迅雷〉も一緒にである。

(もう少しゆっくりしたかったが、これ以上は加賀たちの負担が大き  
い。やれやれ、次はいつ日本に来れることやら)

提督室の中で、心の中でそうぼやいていた。本来なら来れるはずがなかったのだから望外なのだが、滅多に日本に来れない。トラック諸島周辺の安全を完全に確保しない限りは。

「…未だ終わらぬ戦争…。和平派の存在か…」

提督は北方棲姫とヲ級、港湾姫の存在を思い出した。

彼女らは戦いを望まぬ者。もしかしたら、トラック諸島にも和平派がいるのではないか? そう思い始めていた。

「なるべく早く平和を作らにやな。これ以上、戦いを続けても良い事が無い。憎しみの連鎖が続くだけだ」

——じゃないと、家族全員紹介できねえしな。

提督は、新たな覚悟を決め、トラック諸島に戻っていった。

### 36. 秋刀魚回

日本からトラック諸島に戻ってきてから数日たったある日のこと。

「大本営から秋刀魚漁をする漁師たちの安全を確保してほしいとの連絡が来ています」

「秋刀魚か…。そういや秋刀魚の時期だったな、あっちでは」

提督室で書類に印鑑を押す仕事をしていた提督に、長良が大本営から発令された命令書類を提督に渡していた。

「深海棲艦の所為で天然物が滅多に獲れなくなつて、世界的に魚介類は物凄く値段が高いんですけど?」

「養殖もあるが、やはり味も違ってくるし値段もまだ高いからなあ…。今ん所、鮭や川魚が安全かつ値段もそこそこ安く手に入るから、そっちが主流になってきているけどな」

尚、この世界の秋刀魚は、天然物は一尾5,000円、養殖物だと2,000円である。

幸いにも秋刀魚や鮪、鰹に鰯等といった魚は、人工的に作り出すことに成功している為、この程度の値段に済んでいる。その代りクジラやイルカが確保できなかったが。これには(ピーツ)シエ○ードもニツコリしたとかしなかったとか。

「更に漁師船が来る前なら何しても問題なしだそうです。事実上の漁の許可ですね」

「そんな命令が出ているということは、今回は物凄い群れなんだろうな。下手したら環境に影響出てしまうレベルの」

「かもですねー。…赤城さんたちは物凄い勢いで取りに行きそうです」

「秋刀魚が取れるルートは日本周辺の太平洋側、日本海に北方…。ホップがまた虐められるのか…」

「ま、まあ今年は舞鶴にいますという噂も聞きますし、もしかしたらアルフォンシーノ方面かもしれないですし」

「…まあ太平洋方面ならば対潜水艦用の武装でいいな。アルフォンシーノは1―5が取れなくなつてからだ」

「3—5は？」

「極力行きたくない。というか何故かボスに行く前に中破になるし、烈風の数は全然揃っていない。未だに紫電改二がウチの主流だし」  
「艦攻機は充実しているのに、艦爆機と戦闘機は全くでしたね、そういうば」

尚、最近出たのは彗星一二型甲だったりする。艦攻機と大口徑主砲は凄まじい開発運を持っていくせに、それ以外になると点でダメになってしまいう提督であった。

「つと、そういうえばそろそろ潜水艦隊が戻ってくる時間ですね」

「お、そうか。んじゃ、迎えに行きますかね」

そう言って、提督は提督室から出て行った。

因みに、提督業がこの世界では大人気の職業なのだが、実は提督になつたら女の子と知り合える他に色々なメリツトがある。

一つは社会的地位とお金。二つ目は――

「提督！、こんなにも貝が獲れたでちー！」

――このように、貝類を獲ってきてくれることがあるというメリツトだ。

現在、シーレーンを維持できるほどの戦力はあっても、流石に深海棲艦が大量にいる太平洋（特に赤道付近）やインド洋方面、オホーツク海にベーリング海の安全確保が出来ていない。その所為で、漁に出ても生きて帰れないことが非常に多い。天然物の値段が異常に高いのは、その希少性と、危険な海から釣ってきてくれた人への手当も含まれているからだ。

しかし、艦娘――特に、潜水艦ならば、ある程度の危険性は強引に無視できる。海底に眠っている貝や海底資源も手に入れることも可能なのである。

……といつても、海底資源といつても獲れるものは無く、ここにこれがあった、そこら辺にこんな物があった等といったものである。ま

あそれでも知らないよりは遙かに良いし、もしかしたら新たな資源になるかも知れないので、吉川提督の鎮守府は、時々潜水艦隊には海底資源の調査を命じてたりする。

そしてその帰りに、浅い海の底にある貝類——サザエや蝦蛄、アサリにカキが採ってきたりしてくるのだ。

因みに季節の違う貝も入ってないかと思ってるだろうが、深海棲艦が発生した所為か、生態系が大きく崩れたのだ。特に貝類はその燻りを喰らってしまった、殆どの海に生息、大量発生してしまったのだ。

まあ味と健康には全く問題は無い為、貝類は比較的安価で売ったりするが、やはりタダで持ってきてくれたほうがメリツトも大きい為、提督は「食費を浮かすためにできる限り採ってきてほしい」とお願いしている。

何せ食欲魔人が凄まじい勢いで食うからこうまでしないとキツイというのも、理由の一つだが。

「おー、こりや凄いな。蝦蛄まで採れてるじゃないか」

「ヘッヘッヘー、それに何とシャコガイまで採れたのー!」

「おーこりや素晴らしいな。後で鳳翔のトコに持っていこう」

「…? あれ? 他の皆はどうしたの?」

「はっちゃんやタコを採ってきたんだけど、顔に絡みついてきたからイムヤとユーちゃんが助けに入ってるのー」

「しおいは何か大きい獲物を見つけたとか言って隊列から離れたでち」

「オイオイ、大丈夫か?」

「うーん、そろそろ戻って来ると思うんでちよ」

「——おーい、戻ってきたよー!」

提督が（おっ?）とそこを見てみると——

「どーお? こんなデカイ貝を採ってきたんだよー!」

——ゴリゴリと馬鹿でかいオオシャコガイを引きずりながら、こちらに手を振るしおいの姿があった。



※オオシヤコガイ：世界最大級の貝。一番大きい貝だと二メートル近く。体重は200キローバ

ーというギネス級のデカすぎる貝。ジツクリコトコト醤油で煮込むと美味し

いらしい。手塚治虫の作品「ブラックジャック」で子供がこいつに挟まれる

というストーリーがある。

「何採ってきてんだアアアアアアアア!?」

「お、大きい貝でちね」

「むむ、こんだけ大きいと身も大きそうなのね」

「冷静だな!?! そしてどうやって持ち上げたそんなモン!?!」

「え? 普通にバラスト用の浮き輪を使って持ち上げたんだよ」

どうしてこうもウチの鎮守府は男らしい性格(?)が多いんだ……、と頭を抱えた提督であった。

「ところで、どうして迎えに来たんです?」

「ん、ああ。次から貝類などを採りに行かなくてもいいことを伝えにな」

「え? 何で?」

「もしかして…朗報でちか?」

「ああ。大本営から秋刀魚漁の手伝いが発令された。その後の処置も含めの、な」

「赤城さんが喜んで取りに行きそうなのねー」

「炊飯器と大根おろしとポン酢もって戦場に出そうですよね」

「そこまで意地汚くない…よな?」

アイツならやりかねない、と考えてしまう提督であった。凄く有能なのだが食費がそれに比例して凄まじいのが玉に瑕な赤城であった。

「ま、そういうことだから無理して採らなくても大丈夫だから。後は出撃の編成次第だな」

「別にイヤイヤやった訳じゃないでち。貝を掘り掘りするのも楽しい

でち」

「というか喜んでやっているからまったく問題ないのねー」

「……そうか」

「あ、それとユーちゃんも改造可能練度に達したでち」

「OK、ありがと。じゃあこれらを鳳翔さんのところに持って行くか」

「この馬鹿大きいシャコガイ、どうするー?」

しおいが持ってきたオオシャコガイを見た提督が、

「ジェットエンジンで焼くか?」

「それ黒焦げなるでち!」

「そうなのー。どうせならガスバーナーで焼いたほうが」

「それもそれでどうなの…。というか私が採ってきたんだから私が焼くに決まってるじゃない。——七輪で」

「二」それこそ無理だから（でち）（なのね）!」二」

一週間後、

「まっつっつたく採れねえええええ!!」

「日本近海でも殆ど狩り尽くされてますね…。アルフォンシーノでもあんまり採れないですし」

秋刀魚がまっつたく釣れてなかった。

1日目

「フアーwwwwww「セリヤア!!」アアアアア………」

——画面が大変乱れております。しばらくお待ちください——

……ちよつとヤバめの魚が釣れてしまい、フリスビーみたいに釣れた魚をブン投げた。

尚、磯風をドロップした模様。

2日目

ようやく秋刀魚が釣れた。しかしこの一匹しか釣れず、日本海近海の秋刀魚漁を断念。

3日目

アルフォンシーノで秋刀魚が3匹釣れた。しかしボーキの消費が激しく、二隻から三隻に変更。……十回やって三匹とか運が無いとしか言えない。

尚、浜風と山雲をドロップという運の良さはあつた模様。確かに欲しかったが違う、そうじゃない。

4日目

秋刀魚が2匹……。釣れなさすぎイ!?!今ココ。

「費用対効果が割に合わんレベルだなあ……」

「合計六匹しか取れてないですからね……。ま、まあでも、まだ四日目ですからまだまだ釣れますよ」

「……だといいんだがなあ……」

提督はこれからのことを考えて深々と、ため息をついた。

~~~~おまけ~~~~

ユーちゃんが改造可能練度に達したことを知った提督は、後日ユーちゃんを改造したのだが……

「UボートU-511改め、呂号第500潜水艦です。ユーちゃん改め、ろーちゃんです！ 提督、よろしく願いしまーす！」  
「面影無ええええええ!?!」

「ああ、引つ込み思案だったユーちゃんは何処にでち…」

あまりの変貌っぷりに驚きを禁じ得なかった二人であった。

「ふえ？ どうしたの？」

「ああ、いや…あまりの変化にな…」

「変化とかそういう生易しいレベルじゃ無いでち。○ルナ○フ状態  
だったでち」

「??」

二人の反応にハテナマークを浮かべまくっているろーちやんで  
あった…。

### 37. お茶会（多分）

「それでは諸君、これよりお茶会を始めよう」

「……毎回思うんだけど、金剛主催なんだから金剛にやらせるべきなんじゃ……」

「その金剛がお茶の準備でいないのだから仕方ないだろう？それに本人からもOK貰っている」

「……第一夫人の余裕かしら」

提督とケツコンカツコカリをしている艦娘限定のお茶会という名の裏会が開催された。戦艦寮のレクリエーションルームに長門・金剛・赤城・加賀・伊勢・北上・大井・川内、以下八名が集まっていた。「皆ー、待たせたネー」

「今回初めて参加するけど……こんなに紅茶飲むんですか？」

「ポツドが六つ、お茶請けが十……。胸焼けがしそうだねえ……」

「あ、後甘いのが好きな人はチャイがあるからALLOKネー」

「甘いお菓子に甘い紅茶……」

「一ついただこう」

「そういいながら甘いお茶請けにチャイを取ったのは——長門であった。」

「あれ、長門さんそんなに甘いのが好きでしたっけ？」

「提督の前ではあまり食べないようになっているだけで甘い物好きなんだ。最近では自家羊羹を作ろうかと考えているぐらいな」

「……提督も甘いのが好きですけど……？」

「……ちよつと提督の元に行ってくる」

「行かせないデース」

「行かせないなあ」

「頭にきました」

即提督の元に行こうとして即止められた長門であった。というか提督LOVE勢の前でそんなことを言ったら止められるのは当たり前なのだが。

「むしろなぜ知らなかったのかと。あなた金剛と同期なのに金剛が

知っているのはおかしいでしょ?」

「提督の前で食事とか恥ずかしいじゃないか!」

「乙女か!」

「どっちかというと純粹培養（無菌）みたいな感じですよね」

「…おかしい。さつきまでお茶請けが十あったのに、いつのまにか三分の一にまで減っている……」

「あ、もしかして一口も食べてなかったですか?」

「「やっぱいい!」」

赤城の凄まじい食欲に、大井に川内が驚愕していた。ポッドも既に赤木の手により二つが空っぽになっていた。恐るべき食欲である。

「…赤城さん。あまり食べすぎると太りますよ」

「お腹周りは贅肉がつかないので全く問題ないです。あ、でも最近胸がきついんですよ…」

次の瞬間——ゾンツ!!と室温が五度ほど下がった。

赤城と加賀が冷気の発生源を見ると——北上と川内がレイプ目で赤城の胸を穴を穿たんとガン見していた。

「フフフ……胸の大ききなんて提督には関係ないからねー…」

「アハハ……そうよね関係ないよねー…」

赤道近くというのに雪女でもいるのかと言いたくなるほどの冷たく昏いオーラを出しまくっている二人を見て周りがリカバリーを試みたが…。

「そ、そうだな。提督はそんなこと気にしないな!」↑長門（デカイ）

「て、提督もそんなこと気にしないもんねハハハ!」↑伊勢（デカry）

「提督も川内のことを好きみたいだし問題ないネ!」↑金剛（デry）

「そ、そうですよ北上さんの魅力はそんなじゃないですからね」↑大

井（ry）

「「……………」」

冷気（オーラ）が増々増しただけだった。…むしろドライアイスに指をくっつけた感じの鋭い痛みが部屋を占めていた。

「「フフフフフフフ……………」」

くくカメラが凍り付いております。融けるまで暫くお待ちください……

「いやーごめんね？ ちよつと心の整理ができなくてねー…」

「いやーまいったねー。まだまだ修行不足だわー」

「あ、うん…」

二人の前では胸の話は絶対に話題に出してはダメ、と全員の心に刻まれた瞬間であった。

「さて、お茶会を開いたのはほかでもない。——提督がまたフラグを立てた可能性が浮上してきた」

部屋の中の換気を済ませた後、長門は皆にそう言った。

「……今回は誰ネー？」

「浜風・磯風・山雲の三名だ」

「速攻墮としてるじゃない!? 提督のフラグ構築能力はどうなってるの!?!」

「もう諦めろ。今でも吹雪・大和・武蔵・大鳳・古鷹・木曾・高速戦艦勢に空母勢、更に重巡全員が既にフラグが立っているんだ。今更増えでも変わらんさ」

「最早多重債務者みたいな感じになってますね…」

因みに、駆逐艦勢は九割は兄を見る視点だったりする。…一部は。「川内、三名の状態はどうだ？」

「まだまだ新兵レベルだね。魚雷の使い方も砲の使い方も甘い。香取と神通が教導してるから、あと一週間で実践に使えると思う」

「吹雪の時は三日で済んだのにその子たちは長いんですね？」

「あの子は努力型の天才だね。夕立と島風と雪風は感覚型で、時雨と村雲と秋月は理論型。吹雪に綾波に響が努力型だね。」

感覚型は文字通り感覚や戦場の空気で進化・洗練されるタイプ。理論型は頭ン中で独自の計算を組み立てるタイプ。努力型はまるで高野豆腐が水分を吸うように戦い方や使い方を学習するタイプの子。…思ったけど駆逐艦勢の中でレベルが高いのって天才が占めているねー」

「何で最後の説明は料理に例えたんですかねえ…」

「最近凝ってるから」

クツキーを指先でクルクル回しながら川内は答えていた。

「ま、凡人でも凡人なりの戦い方を教えたらいいしね。チームワークやコンビネーションとかあるし、あんな天才がゴロゴロいたら私の立場が無くなるしねー」

尚、鎮守府内での川内は一二を争う力量持ちです。因みに相手は神通。

「それにしても、これ以上フラグは立たないだろと思っていたらまさかまだ立つとは…。平和になったら刺されそうだな」

「その為の夫人の会ネー。皆と仲良くしつつ牽制しあい、提督に危険が迫ったらエクスクリュージョン…完璧ネー！」

(実は穴だらけなんだけど言わぬが花なんでしょうねえ…)

金剛の話を聞いた赤城が口には出さなかったが、そう考えたのだった。

「そろそろケツコン指輪がときゆ頃…ゲフンツ！、届く頃だろう」

「ねえ噛んだよね？ 思いつきり噛んだよね？」

「知らんな」

「確かケツコン指輪は一つだったよね？」

伊勢が長門をからかっているのを加賀が助け出した。

「いや、三つだったぞ」

「三つかあ…」

「……一応言っておくが、前回のような賭け事はダメだぞ」



「え」。……バレてたの？」

「匿名希望の方からな」

尚、家具コインで上限20枚の賭け事だった模様。

「個人的には古鷹に受け取って貰いたいなあ。あの子健気に提督をサポートしてるし」

「いやーどうだろ？ 木曾や飛龍、蒼龍に羽黒もいるし……」

「私は更にケツコン指輪を購入にお昼代賭けるわ」

「いやいやそこまでの金はないと思う。お昼代三日分断食に賭けるわ」

後日、また新たにケツコン指輪を購入したことを知った赤城は三日間断食する羽目になって融けたアイスみたいな感じになっていた。

### 38. ケツコンカツコカリ第二弾（その一）

「うえっ、口の中がまだ血の味が…」

ある日の昼過ぎ、提督はティツシユで口の周りをゴシゴシ拭いていた。そのティツシユには血がこびり付いている。

理由は、迅雷の空戦パック“韋駄天”にあった。

韋駄天は迅雷の後ろのバーニアを撤去、そこに前進翼型のパックを装着することで大空へ飛ぶことができる。エンジンは、マクロスF（劇場版）で出てくる“デュランダル”のような、翼にエンジンを載せるタイプになった。しかし、どうやらこれが拙かったのか、試験中に翼がボツキリ折れてしまったのだ。

パージに成功したとはいえ、5000mからの落下を流石のアジャイルスラストでも殺し切れず、海に真っ逆さま。着水の衝撃で内臓にダメージ。更に海に落ちた所為で機体の一部が壊れるという事態に。

工廠妖精は翼が折れた原因を探る為、明石と夕張と共に壊れた部分を回収中、近藤は翼が折れた瞬間あまりの出来事にぶっ倒れたりしていた。しっかりとしろ有沢重工・武器開発局。

尚、後日妖精さんの調査で分かったことは、

- ・ただ単に前進翼の剛性が全く足りてなかったこと。
- ・エンジンも重い。何故軽量化しなかったのかと小一時間（ry
- ・ちよつとこの計画がませろオラア！

ということであった。：最後以外は近藤に手渡し、これらを改良するように伝えた。

閑話休題。

「幸い軽い吐血で済んだのは良かったが、これ結構キくなあ…」

「えつとお…、大丈夫ですか提督？」

「大丈夫大丈夫。体のあちこちが痛いだけだし、余裕だぜ」

（5000mから落下してそれだけで済むってかなり頑丈…という言

葉じゃ済まないよね)

提督の横に古鷹が寄り添うように歩いていた。

「よし、ここまでで大丈夫だから」

「でも、あんなどころから落ちたんですし、まさかの事態も…」

「だから大丈夫だってば。大和&長門の裏拳のほうが痛かったしな」

「でもですね…」

心配してくれてるのか、古鷹が言ってくるが、

「嘘言ってもしょうがなかるうに。この話はとりあえず終了な」

「ちよ、まだ終わって——」

「今日の夜、提督室に来てくれないか？」

「——え?」

提督の発言に思わずフリーズ。かと思いきや、

「ええええええええええええええ!!」

トマトみたいに真っ赤っ赤になったりしていた。

「どっどどどどどうしてでっすか!」

「落ち着け落ち着け、ちよっと渡したいものがあるからさ」

「今じゃ駄目なんですか!」

「駄目です」

「そっそうですか…」

(これは…あれかしら? あれよね?)

「……あー、大丈夫か?」

「ひゃ、ひゃい!? 大丈夫でふ!? ひよれでは、しちゅれいしまふ!」

顔を真っ赤っ赤にしてピューツと逃げた古鷹を見た提督は、

「……可愛い反応だなあ」

こんなことを言っていた。

因みに、重巡察では。

「おー古鷹ー。おかえ…え? どしたの? 熱でもあんの?」

「加古」ガツシ

「お、おう?」

「提督に夜に来てくれと言われたわ」

「……ふあっ!」

「こんなこともあったそうなの。」

「さて、古鷹はOK。あとは……」

「あ、提督。さっきの事故大丈夫なの?」

「飛龍か。ちょうどいいな」

「へ?」

「こつちの話。そーいや蒼龍はどうした?」

「何か江草隊の彗星が調子悪いそうだから妖精さんに頼んでいるんだってー」

「妖精さんサイド」

「なんかあらたにもんだいがでたそうです」

「なんのそうびなの?」

「えくさいのすいせいなのです。きたいすうはすくないのでできればさんめいほどひきぬきたいのです」

「わかったのです。いちぶそつちによこさせるのです」

「やまとほうのほうとうにひびがみつかったのです」

「こつちもー」

「……きようはですまーちなのです」

「ちよつとしたカオスなことになっていた。」

「そうか。ウチの鎮守府では君らの航空隊は非常に頼りになるしな」

「ふふふ、褒めても出ないぞー」

「事実を言ってるだけなんだがなあ。…後、今日の夜」

「提督室に来てくれ、でしょ? さっき古鷹が悶えながら走り去っていったし」

「……ちよつとやり過ぎたか……?」

「まあいいんじゃない？ それと、それは私だけ？」

「いや、蒼龍もだ」

「…世界中の男たちが聞いたらぶち殺されるよね、絶対」

「知らんがな。というかこの流れどっかでみたぞ」

「気のせいじゃない？」

それからしばらく飛龍としゃべった後、羽黒と基礎を探しに出かけたのであった。

「姉さん、そろそろ働こうか？」

「嫌クマー。せめてこのサ○ラ○ト○スを潰してから」

「昨日も真竜ヒュ○ノスを潰すまでと言ってサボったよな？ 多摩ねえも働いてるんだから球磨ねえも」

「輸送任務三日間やったんだクマーよ。その分ゲームしても問題ないクマよね？」

「無い訳ないだろアホねえ。最悪コンセント抜くぞ？」

「それはやめろクマー!! 血も涙もないクマーか!? それがなくなったらただの箱になってしまおうクマー!」

「だったら働けばいいだろ!」

「…お前ら何してんの？」

「あつ」

「おいこら球磨。 “あつ” てなんだ、 “あつ” て」

「気のせいクマー」

「で？ 俺ん所にまだこの前の書類が来てないんだ——」

「アツハツハーすぐに出してくるクマー!」

言うやいなや残像を起こすようにあつという間に逃げた。

「…スマン提督。アホねえが迷惑かけたみたいで」

「あいつも有能なのにこういう悪癖があるのがなあ…」

どのぐらい有能かという夕立と一対一で渡り合えるほど。有能な怠け者というべきなのか…。

「そーい、提督はどうしてここに来たんだ？」

「あ、一応夜の誘いをばと」

「……ドレス着て来たほうがいいのか？」

「そっちの方じゃない」

少しズレているのを苦笑いしながら約束を取り付けることに成功。  
最後の羽黒を探しに出かけたのだった。

「フッフッフー、いいこと聞いたクマよ」

「ハア：北上さん」

「あいよー。じゃ、球磨ねえは私たちとO☆H A☆N A☆S H Iしよ  
うねー」

「んげえッ!? 捕まってたまるかクマアーツ!!」

「残像だ」

「クマアー……」

尚、隣の北上&大井の部屋に避難していた球磨はデバ亀ろうとした  
が、二人に速攻止められていたのだった。

「さて、この部屋だったよな」

提督は、羽黒&摩耶の部屋についていた。

「この部屋にいるといいんだが……」

そう言って、部屋を開けた。——ドアノックもせずに。

「カーニバルだよっ♪」

「……………」

「……………」

摩耶がゴスロリ擬きのような服を着て、別世界のモノマネをしているところを目撃してしまった。こんなところを見てしまったらそ  
りや硬直してしまう。

「……………見たのか？」

「……疲れてたんだな」

次の瞬間、目覚まし時計を思いっきり提督にぶつけたのだった。プロ野球選手レベルの投げっぷりである。

「ドアノックぐらいしろおおおおおッ!!! バカアアアアアアアッ!!!」

凄まじい正論である。

「んで、なんでここに来たのさ。このボケ提督」

「いやまあ確かにドアノックしなかった俺が悪いんだが、ボケはやめて」

「あゝ?」

「何でもない。今回ここに来たのは、羽黒にちよつと伝えたいことがあってな」

「羽黒か? 羽黒は今風呂に行っているぞ」

「ん? 出撃はさせてないはずなんだが……?」

「アイツ結構綺麗好きだからなあ…。そろそろ帰ってくんじやねえか?」

そんなことを言っていると、ノック音がした。

「噂をすれば帰ってきたな」

「ただいま…て、提督?! どうしてここに!?!」

お風呂上がりの所為か、色っぽい雰囲気を身に纏った羽黒がいた。しかし、

「おう、ちよつと夜に提督室に来てほしいんだ」

「提督室にですか? 誰かの誕生日ですか?」

「いや、君に…いや、君以外にもいるんだが、渡したい物があったてな」

「その言葉だけ聞くと史上最悪のセリフだよなあ…」

「言うな。頼むからそれを言うな」

「え、えつと…そんな提督が好きです、よ?」

「……………伝えたいことは伝えたから、戻っておくわ。あと一つ言っておく」

「?」

「摩耶、ゴシツク似合ってるぜ」

「ひやつ!? う、うるせーッ! とつとと部屋に戻って休憩しやがれえええええええつ!!」

「ちよつと、摩耶ちゃん…叫びすぎだよ…?」

ツンデレな言葉をバツクに提督は提督室に戻ったのだった。

尚、提督が戻って机を見ると、

「……………始末書と報告書の山が出来ているなあ…。夜までに終わらせにやならん…」

今回の事故の始末書等の山・山・山であった。

やれやれと思いつながら判子とペンを持って書類をガリガリガリツ!!と凄まじい勢いで処理をしたのだった…。



### 39. ケツコンカツコカリ第二弾（その二）

「よし、服装もOK。髪型も乱れてないつと…」

夜、古鷹は提督室の前に来ていた。一応他の人も来ることは知っているが、今の古鷹にはそんなことはどうでもいい心境であった。

理由は…やはり思いを寄せていた人からのお誘いだからだろうか。

「提督ー、失礼しますよー……」

ドアノックをし、古鷹が中に入ると、

「zzz…zzz…」

机に突っ伏して爆睡しているバカの姿があった。因みに時間は夜の八時。自分で言つといてこの失態は無い。

「あら…。しょうがない人ですね」

苦笑いを浮かべながら、提督の肩を揺らして起こした。

「提督、起きてください。もう夜ですよ」

「ぬぁ…もう、夜…夜!?!」

慌てて起きた提督は壁にかけていた時計を見て更に慌てた。そりやそうだろう、自分で言つといて約束をガン無視したようなものだ。

「ちよつ、他の皆は来てるのか!?!」

「来てないですよ、私が一番です」

それを聞いた提督はホッと安堵のため息をついた。

「スマン、いつの間にか寝てしまった」

「別にいいですよ。今日は色々遭りましたし」

「…そういつてくれると助かる。ようやく体が本調子になったしな」

（…高所落下で、内臓にダメージ入ったのが、たった半日で回復って…私たちの提督は化物じみてるね…）

そんなことを言っていると、

「あもう、提督…いますか?」

「ああ、いるよ」

「失礼します……」

羽黒が入ってきた。恥ずかしいのかモジモジしている。

「えっと…もしかして食べられるんですか？」  
「ブッフエツ!？」

まさかの吃驚発言に古鷹からもらったお茶を吹いた提督であった。  
「ちよつと待て、そんなこと無えから!？」

「え？ でも足柄姉さんがそんなことを…」

「…因みにどんなことを？」

『男はみんな野獣なのよ』って…」

「よっしゃあいつはアルフォンシーノとカスガダマ行きだ」

頭にピキマーク浮かべながらイイ顔をしていた。

「くちゅんっ！ な、何か寒気が…?!？」

でも大体は合っているのだが、提督のダイヤモンド級の理性で抑え込んでいるだけである。決してホモとかではない（断言）

「とにかく、そんなんじゃないから。…まあ、ある意味では気を悪くするかもだがな」

「…ある意味で？」

「とりあえず全員揃ってからな？」

そういうとまたドアのノック音がした。入ってきたのは飛龍・蒼龍の二人である。

「おまたせ、待った？」

「いや、待ってないぞ。…これで残るはあと一人か」

「木曾なら少し離れた通路で悶々としてたよ」

「してねえよっ!？」

「何してんだお前は…」

「いや、ちよつと恥ずかしかったしな…」

「なーんだ、悶々としていたじゃない」

「だーかーら違うって言ってるだろ飛龍ウ！」

「夜だから静かにな」

「ぐっ…」

提督の言葉に木曾は押し黙ってしまい、それを見た飛龍がムフフと笑っていた。

「相変わらず提督には弱いねームフフ…♪」

「KO☆NO☆YA☆RO☆U」

「だ、だめですよ…!」

「そうですね、喧嘩は駄目ですからね」

羽黒と古鷹がストップをかけ、木曾をなだめていた。

「お前ら、そんなに仲が悪かったっけ？」

「仲が悪いというより面白がってやっているだけみたい。ちゃんと戦場ではちゃんとするよ」

「…蒼龍も大変だなあ」

「何だかんだかなり長い付き合いだから、慣れたけどね。飛龍も悪意を持って接しているわけじゃないから…」

アハハ、と乾いた笑いを浮かべた蒼龍であった。

「…さて、君たちに来てもらったのはある物を渡す為で「ケツコン指輪でしょ?」…真っ先に潰すのはやめてくれないか飛龍」

「いやだってここにいる全員条件満たしているし、それ…に…提督が夜に呼びつける理由ってこれぐらいしかないよね?」

「ぐうの音も出ねえや…」

「ま、まあそんな提督が私は好きですよ…?」

「羽黒ちゃんストップ。提督のHPはすり減ってるから」

羽黒のフォローになっっていないセリフに古鷹がストップをかけたが心の中でorzになっっていた提督であった。

「…とりあえずこの書類を読んだ後、名前を書いて俺に渡してくれ。その時にケツコン指輪を渡すから」

「はいはい。取りあえずペンつと…」

「…ところで印鑑の部分はどうするんだ、血判でも押せばいいのかわ?」

「おいばか抜刀スナそこは俺の仕事だから!」

「何だ、親指を軽く切って押せばいいのかと思っただぞ」

「すんなよ、絶対にすんなよ!!」

発想が安土レベルの発想力である。

「それにしてもよく買えたねケツコン指輪。あれ結構高いんだけど」  
“迅雷”のテストパイロットもやっているからな。その分の金があつたから買えたというか…」

「因みに無かつたらどのぐらい伸びていたんだ？」

「半年以上じゃねえかなあ…。 “迅雷”の危険手当もかなりあるし」

「そういえば “迅雷”の事故は大丈夫だったんですか？」

「あつぱつ…!!?」

古鷹が気遣いのつもりで言った一言が、木曾の様子を変えた。

「……提督?」

「いやちよつと待てもう完全回復してっから! もう回復してっから!!?」

「そんなことはどうでもいい、重要なことじゃない」

「重要だからな!!」

「何で提督が怪我をしているかということが一番重要なんだ」

「お前相変わらずだなその考え!! 俺だって人間なんだから怪我だつてするに決まっつてんだろ!!」

※5,000mから落下して軽く内臓を痛める段階で十二分に人外です。

「というか大丈夫なのか? 怪我は? 作つた盆暗々てくるから安心していいぞ?」

「しなくていいつつの! 最高責任者の俺が処罰は出しているんだから問題ない」

※尚しわ寄せはフィジカル面では明石・夕張・工廠妖精らが、メンタル面では近藤がこうむっております。(後者は当たり前) 後 “迅雷” 魔改造フラグが立ってます。

「つか俺至上主義は止めてくれ。俺が死んだらどうする気だお前」

「勿論、後を追うだけだが?」

「思いが重いわ!!」

「ブッフ」

ギャグで言ったつもりがないのにそれっぽく言ってしまった結果、飛龍・蒼龍が吹き出していた。必死に声に出さないように真顔に徹しているが顔が物凄いプルプル震えていた。

「というか提督が気付いていないだけでオレのような考えを持っているの、結構多いぜ?」

「ある意味聞きたくなかった一言だ!」

「むしろ気付いて無かったのか…?」

「いやまあ長門とか軽い依存入ってね?と思う部分はあったけど…」

「軽いどころか結構重いですよ?」

「知っていたのか古鷹!」

「というかケツコン組で依存が入ってるの長門と金剛ですねー」

「マジか…」

「といってもヤンが入ってるのはいないと思いますけどね」

木曾のめる発言は物理じゃなくSEKKYOUの部類なのでノークンである(震え声)

「……よし、全員書いたな? じゃあ指輪渡すぞ」

提督は一人一人にケツコン指輪を渡した。

「……何かイベントみたいのは?」

「そんなものは無い」

「体がピカーツて光るのは?」

「そんなものは無い」

「……面白くない」

「ケツコンカツコカりにそんなこと言われても困るわ!」

飛龍がむくれた顔をしながら不満げに言い、それに突っ込む提督であつた。

「強いて言うなら、燃費や回避力、というか全部のステータスが上がるぞ」

「そんなん無くて技術でどうにかできそうなんだけど」

「お前の発想はおかしいし普通出来ないからな?」

※飛龍は艦攻の一点のみの、蒼龍は艦爆の一点のみの天才です。

「……………」

「? どうした、古鷹?」

「え? うん:ちよつと、心がポカポカするなって、思っただけです」  
「……………」

「ふえっ!? 何で無言で涙を流しているんですか!」

「いや、男らしいのが多かったからこういうシチュの免疫が無かっただけだ」

思い返せば説明を聞かずに即ケツコンカマーンな大井とか他の鎮守府にいる大井が見たらどんな反応示すか気になるなあ、とズレにズレまくったことを頭に思い浮かべていた。

すると天井から、バカアツ!!と凄まじい音を立てながら一人の艦娘が登場した。川内である。

「とうわけで、皆さんには提督夫人の会に入って貰うよー!」

「天井壊しながら入ってくるんじゃないツ!」

川内の頭に拳骨が落ち、KOされた川内は、

「ぐふっ…! でも、私が倒れても、第二、第三の登場が…!」

「そんなにあつてたまるか」

「では皆さん、この書類に書いてくださいね」

「加賀さあああああん!!?」

すぐ後ろで加賀さんが古鷹たちに紙を手渡していた。

「では皆さんの書類をすべて受け取りました。——ようこそ、提督夫人の会に」

「…………もう突っ込みきれねえ」

物凄い疲れた顔で、しかしながら満足げな顔を浮かべながらケツコ  
ン関連の書類に判子を押していた。

「嫌————!?! 何でハードなところに私を送るのよー!?!」

『余計なことを言った罰に決まってるんだろ。ほーれまだまだ来るぞー』

「余計なこと言わなきゃよかったー!」

後日、カスガダマで一人の哀れな重巡が前線で10回連続出撃（休憩無し）に行っていた。

## 40. 提督の強さ

「オラアツ！ そんなんで俺から一本取れるのか!？」

「相つ変わらざるの強さよね……!! 組手なんだから少し手加減してくれてもいいんじゃない!？」

「手加減して深海棲艦に勝てるならな。そもそもこっちは回避のみなのに当てきれないのはどうなんだ!？」

「回避⇨紙一重レベルの相手に喰らいつける私たちを褒めてほしいのだがな……!？」

ある日の朝、鎮守府内にある体育館で、三人の組手が起きていた。その三人は提督、伊勢、日向である。

最近体を動かしていないということ、伊勢姉妹の組手に参加したのだ。

「艦娘相手に何でそこまで動けるのか知りたいとこね……! 2対1で、竹刀とはいえ、得物持っている相手に当たることすらできないなんておかしいでしょ……!」

「相手の動きと勘ですがなにか?」

「提督も感覚派だったか……!」

正確には、手甲とプロテクター等で竹刀をずらしたり、弾いたりしている、当たっているつちや当たっている。——まったくの有効打がないだけで。

「ホイあと一分! それまでに有効打が無かったら罰ゲームが待ってるぜえ!？」

「ちよつと待て聞いてないぞ!？」

「今決めたばかりだからな! ほれほれ当てて見せろ!」

「ぬぐぐぐ……! 日向! 何が何でも当てるわよ!？」

「ああ!」

「ああもフラグ建てといたらそりやあ負けるわな」



「ぬああーっ！」

「まあ、そうなるな」

一分後、そこには全くの無傷の提督と汗まみれの伊勢姉妹の姿があった。

「提督、正直に言ってほしいんだけど、ホントに人間？ この前の事故のことといい、人工生命体と言われても納得してしまうんだけど」

「失礼だな。後の先を習得しているだけなのに」

「それ普通じゃない技能よね!？」

「まあ落ち着こう姉さん。 緑茶でも飲まないか。——提督の奢りで」

「なんでだし」

「ぬぐぐぐぐぐぐぐ……!!」

「強いて言うなら、大振りの攻撃は止めておけ。格下相手なら問題ないが、姫級とか鬼級だと致命傷を与えることができないしな」

「一刀両断ってロマンじゃない？」

「その前に刀が折れるがな」

「その点私は便利だな。新しく貰った刀のおかげか、よく燃える」

「火産霊（ホムスビ）だったな。あれは色々凄いな」

火産霊とは、日向が持っている日本刀のこと。特徴はるろうに剣心のキャラクター、志々雄真実の持っている無限刃のようなもの。但し地面をこすって着火みたいな感じは無く、本人の意思に従って炎を吹き出す仕組みなので、どっちかというと魔剣のイメージが強い。

因みにどんな感じかというと、突き刺した瞬間敵の体から炎が“吹き上がる”光景が広がった。正直かなりグロイ光景である。

「日向のは破壊特化だもんねえ…。私のはどっちかというと殿（しんがり）よりだし」

「そういうな。殿役も重要な役割なんだから」

一方伊勢が持っているのは海神（ワダツミ）。特徴はリジエネレート、いわゆる再生能力である。

とは言っても、どこぞの化け物レベルの再生能力持ちの神父様ではない。精々体にできた切り傷やアザ、骨折を再生する程度である。骨

折でも単純骨折レベルじゃないと直せない部分、チートと呼ばれるものほどではない…はず。

「んで、そこで覗き見している奴は、これを見てどう思った？」

「ひよえっ!?!」

体育館の端つこに覗き見していた吹雪・夕立・葛城・磯風・浜風らであった。

「えっと…、いつ気付きました？」

「終わった後だな。俺もまだまだだわ」

はあーつとため息をついた提督とそれを見た伊勢姉妹がヤレヤレ顔をしていた。

「んで、どんな感じだった？ 吹雪君からいつてみようか」

「んえっ!?! えっと…、提督の動きを見るだけで精いっぱいでした…」

「夕立は？」

「抱き着いてサバ折りすれば勝てると思ったっぽーい」

「あらやだ物騒な思考」

「お前も人のこと言えんだろ伊勢。葛城は？」

「ぶっちゃけ勝てない。というか提督、何であんな紙一重の回避を重視していたの」

「カウンター狙い」

「一言!?!」

「攻撃が完全に振り切ると、すぐに行動できないからな。そこを狙ってやれば一発だ」

「少なくとも空母には関係ないわね」

「残念！ 相手との間合いを知ること重要だからある程度は知る必要はあるんだなこれが」

「この一言を聞いた葛城は、一瞬で石化した。どうやらかなり苦手らしい。」

「磯風はどうだ？」

「駆逐艦は装甲が薄く、脆いので提督の戦い方は非常に参考になるな

！」

「そうかー」

予想とは少し違ったが、目をキラキラさせながら答えた磯風が可愛かったので頭を撫でていた。

「ぬ？ 提督、少し恥ずかしいぞ」

そう言いながらもまんざらでもない反応であった。

「……………」

「夕立ちちゃん!? 目が凄いい恨めしそうな感じになっているよ!？」

尚嫉妬したのか、夕立の目がちよつと怖かった。

「浜風は？」

「……………一つ聞きたいのですが」

「何だ？」

「もしかして、後の先といった感じの技能は、駆逐艦上位に食い込むには絶対必要技能なのですか？」

「そうだぜ？」

そういつた瞬間、orzとなった浜風であった。どうやらあの動きが再現できないと思っただけ。……………まあ、それが普通なのだが。

「まあ実戦を重ねたら自然と身に付くから安心しろ」

「提督のは？」

「実戦Ⅱ訓練」

「どんな訓練ですか!？」

実戦バリの訓練とか何気に恐ろしすぎる回答が飛んできて思わず驚いた浜風であった。

「訓練の内容は…確か、

・ 四国から本州を水泳横断。

・ CQC訓練

・ 戦術・戦略の勉強

・ パワードスーツの搭乗訓練

後は…なにがあったけな」

「厳しい…という訳じゃないですね」

「尚、リアルで血尿が出るまでしごかれる」

「前言撤回します」

最後の発言でドン引きした吹雪であった。というか血尿レベルは下手すれば腎不全の可能性がある為、よく無事だったなと思ったみんなであった。

「ま、ひたすら戦場にでるしかしかないな。沈まなきや自然と覚えるし」

「死ななきや安い精神ですか……」

「そういうこと。更に言うとな自分の力量を把握して進退決めなきやならないことはよく起きる。それをちゃんとしていれば嫌でも上位に食い込むさ」

「そういえば力量は把握せず演習でボツコボコにされた艦娘もいたね」

「? 誰ですか?」

「天龍」

「「ええっ!?!」」

因みに吹雪たちが驚いた理由は、今と全く繋がらなかったからだ。今では輸送艦護衛部隊旗艦として立派な活躍をしている。

「あいつが鎮守府に来たばっかの時は酷かったぞ。大破しても『出撃させろ』の一言。あの時は腹パンからの服を着せたままお風呂にポイしてやったわ」

「うわ あ」

今暴かれる天龍の恥ずかしい過去暴露が炸裂していた。もし本人がいたなら全力で止めていただろう。黒歴史を暴露されているのと一緒のようなものだし。

尚その後龍田に槍で顎鬚をジヨリジヨリされたのは言うまでもない。

「皆、ここで集まってどうしたんだ?」

「あ、長門さん」

「長門か。いやな、さっきまで伊勢たちと組手しててな」

「成程。因みに結果は提督の勝ちだな?」

「よく分かったな」

「私にも勝てるぐらいだからな。師匠の弟子は伊達ではないということだ」

「「「「?」」」」」

まさかの吃驚発言に駆逐艦勢と葛城が物凄い驚いた顔をしていた。因みに、彼女らの長門のイメージは接近戦に異常に強すぎる、しかしながら優しいというイメージである。

「えっちよ、エツマジで!?!」

「吹雪、キャラぶっ壊れているから」

「そんなのいつものことです!」

提督の突っ込みをメタで返された提督だった。

「師匠ってまさか霧島さんや武蔵さんらが異様に接近戦に強いのって……!?!」

「いや、武蔵と霧島は完全に素で習得した。構え方とか色々違うし」  
「私に接近戦、もとい格闘を教えてくれたのは私だけだったしな。おかげで虎砲まで覚えたぞ」

※虎砲とは、簡単に言えば中国拳法の寸勁に似通っている。但し破壊力は折りたたんだ布団を文字通り「ブチ抜く」レベル。

尚提督はその長門を真正面から勝てる。(大汗)

「ま、相手の動きや行動、そして相手の攻撃の恐怖を押しとどめることができるかだな」

「押しとどめる、ですか」

「恐怖心が全くないのもいけないしな。ある程度必要なのさ。…だからと言って相手の懐に飛び込めないのもいけないけど」

「どんなに強力な攻撃でも、当たらなければどうということはないのだからな。今までの人がいなかったのか、深海棲艦は接近戦に弱い」

「そして懐に飛び込めば、46cm三連装砲でブチ当てることができるわけだしな。唯一例外が沖田大将閣下の大和だけだ」

「その大和ってどんな化け物なんですか…?」

「一撃必殺」。これを遠距離で姫級や鬼級で実践できるレベル」

因みに沖田の大和の二つ名は「鉄城」、「浮沈艦」の二つである。…

攻撃力・防御力・回避力がずば抜けている大和だからこそ得られる名前である。

「ま、難しいことは考えないことだ。自然とやれ、それが良いんだ」

「「「「はーい!!」」」」

最後は、提督がめて解散した。

因みに、伊勢姉妹の罰ゲームは、ネコミミ、猫のシツポをつけて最後に「ニヤン」をつけるという屈辱的な罰ゲームとなった。

「フザケンニヤー!!」

「まあ、そうなるニヤ」

## 41. カレー回

ある日の午後過ぎ、食堂の厨房にはある二人の艦娘がいた。

「ひえええええ!!? 目が、目がーっ!!?」

「玉ねぎを切る前にティッシュで鼻を封じておきなさいとあれほど…」

「外見的にダメですー!!?」

「まあその前に、冷蔵庫の中に入れて冷やしておけばそんなことにもならなかったんですけどね」

「ごめんなさい反省していますのでそれ以上突っ込むのはやめてくださいお願いします」

食堂で料理を作っていたのは比叡と鳳翔。どうやら料理の指導をやっているようだ。

「それにしてもカレーですかー。金曜日にカレーを食べるってなんででしょうかね?」

「曜日毎に料理を固定しておくことで航海中の船員が何曜日か分かるようにする為みたいね。後今回何故カレーにしたか分かるかしら?」

「どんな臭いものでも食べられるから?」

「あなたの皿にだけ熊の手入れますよ?」

「ごめんなさい」

絶対零度の微笑を浮かべながらしれつとえげつないことを言っている鳳翔であった。…熊の手を知りたい方はググってみよう。熊肉の段階で察する人は多そうだが。

「カレーの最大の特徴は——ルーを入れるだけで美味しくできるからです」

「…ん? 提督は一から作ってますけど?」

「あれは作りなれているからです。それに一から作ったら時間が非常にかかりますからね」

尚作る手間も凄まじく、調合をミスるとまづくなったりする為、普通にルーを使ったほうが美味しく手間もかからないのだ。

じゃ何故位置から作っているのかだっ?

「インドカレー用のルーがあるならそっち使ってるわ！ 無いから一から作ってんだ！」

以上、提督からの一言でした。：レトルトで良くね？というツッコミは無しで。

「材料はジャガイモに人参、玉ねぎに肉にルーを入れて終わりですからね。提督のは根気が入ります」

「：面白くないですねー」

「目玉焼きを黒焦げにせず、みそ汁の色が青色から味噌の色にしてからおっしやつてくださいね？」

ボツコボコである。

「カレールーはメーカーによって味がガラツと変わりますからね。辛口ならハ○スのジャワ、○村屋。甘口なら同じく○ウスのバーモンドが美味しいですから。もっと甘口の方は蜂蜜・林檎を入れるといいみたいですよ」

「誰に言っているんですか？」

※ 誰かにである（棒読み）

「ところでジャガイモの芽はちゃんと除けましたね？」

「除けましたって。そんなに顔を近づけなくても…」

「除けずに提督に提供して提督がトイレに引きこもりだった時期を忘れてませんか？」

「だいぶ前の話じゃないですかヤダー!？」

※ ジャガイモの芽には毒が含まれています。ちゃんと根元から取り除きましょう。

尚、光に当たっていると緑色になってる場合もあるが、それも毒が含まれるためちゃんと皮を剥がしましょう。黴ではないから食える食える（鉄の胃袋）

「人参の葉っぱは食べれるので、おひたしにして調理しますか」

「おひたし言うとうれん草や小松菜のイメージ強いですねー」

「人参の葉が食べれるというのはあまり知られてないみたいですからね。大根の葉っぱも食べれる人は主婦でもない限り知る機会は無いですし」



尚、どちらも栄養素は高く、殆ど捨てる部分がない程である。  
そうしていると、一人の男性が厨房に入ってきた。提督である。

「よう。どんな感じだ？」

「提督でしたか。今はカレーの準備が終わって副菜を作ろうとしたところですよ」

「……まさかとは思いますが、すっぽんとか入れてないだろうなあ、比叡よ」

「私をなんだと思ってるんですか!？」

「ポイズンキッチン料理長」

「ヒドイッ!？」

「大丈夫ですよ。私が隣で指導してましたから」

「良かったわー。銀の匙を料理に突っ込むことはしなくていいのな」

「ガチの毒扱い!？」

「今更だろうが(ですよね)?」

「ちきしょうめええええっ!」

どこぞのちよび髭総統みたいなしゃべり方をしながら比叡は涙を流していた。

「あ、後今回は味見役に一人呼んできているから」

「? 味見役ですか？」

比叡が頭の上に?マークを浮かべていると、

「提督! 鳳翔さんの料理の味見ができると聞いて飛んできましたが  
すいません何でもないです」

「逃がさん……お前だけは……!」

「いやですよ!?! シニタクナイ! シニタクナイ!?!」

ドアを開けて即逃げに転じようとして提督に首根っこ掴まれた赤城であった。 ……大食い、バカ食いが代名詞の赤城がここまで嫌がるのはある意味BC兵器扱いに等しいだろう。

尚、こいつが既存の製品で唯一食べれないのはバルト海産のニシンの缶詰である。 ……世界一臭い、と頭に付くが。

「まあ落ち着けよ。鳳翔が手伝っているんだから死にかけることは無い無い」

「それでも嫌なもの嫌なんですけどね!! 比叡が調理の段階で冷汗が止まらない程だから!」

「ちよつと赤城さん、表に出ましようか?」

「味噌汁BC兵器化事件(08・参照)の前に空母勢全員マーライオン化&トイレ引き籠りが発生したのを忘れてませんか?」

「あれ酷かったもんな…。一時的とはいえ、わが鎮守府の航空機動部隊が最弱化したもんなあ……」

尚、その時は被害から免れていた龍驤・瑞鳳・瑞鶴・翔鶴らが頑張っていたが、最古参の龍驤以外は練度がそこまで高くなく、中破・大破はザラなことがよく起きていた。

しかも全員回復するのに一週間かかったのだからその間は文字通りの地獄と化した。三式弾による対空砲撃でも落とせる数は限りはある訳で。しかも相手はたこ焼きみたいな、猫みみたいな形の艦載機な訳で。しかも黄色のオーラを纏っている訳で。

…結果? ギリ勝ちました。長門と金剛らが三式弾で一掃してくれたおかげで。

「あん時は被害艦をトイレの近くにある部屋に避難させ、スグに行けるようにしたのも俺だけだな」

因みに、提督自身もがちり地雷を踏んでおり、顔を真っ青にしながらも陣頭指揮を続けていた。…手元に〇ン〇ー〇〇の箱を肌身離さず持っていたが。実にタフである。

「そんなこともありましたねえ。その時は私は料理店を開いたばかりで、そんなことは暫く経ってからでした」

「むしろ鳳翔がいなくて良かったぜ。せつかくの良い話が台無しになるところだった」

「皆して叩き過ぎじゃないですかねえ!」

「テロと評されて解体されてないだけ温情だろうか!」

当時、鎮守府に搬入する食べ物に農薬をぶちまけて毒殺を企んでいた事件もあった。結果、全ての鎮守府は警戒心で空気がピリピリしていたのだ。

このことがバレテしまうと比叡が解体される可能性があった為、当

時少将だった提督は強引にこの事故を闇に葬ったのだ。…自身の腹痛と闘いながら。ほんとにタフである。

無論、完全回復した空母勢からO☆SHI☆O☆KI☆とO☆HA☆NA☆SHI☆I☆が待っていたが。流石の提督もこれについては黙殺、比叡の悲鳴が嬌声に変わるまで放置していた。…元に戻すのも一苦労したが。

因みにその時鳳翔除く空母の皆さんが持っていたのは赤いロウソクにムチその他諸々…後は察して下さい。

「話している間にカレーの味見をしたいと思いますので…御二人とも？ よろしいですか？」

「バッチコーイ！」

「提督がやる気になっているので私はこの辺で「逃」がすと思  
うか？」「デスヨネエ…」

赤城が涙を流しながらスプーン一杯のカレーを受け取った。提督もそれに続く。

カレーの色はカレー色（意味不）。問題は味である。

「いっせーのーで食べるぞ？ いいな？」

「分かりましたー…。…いっせーのーせっ」

赤城の合図と合わせてそのカレーを口に入れた。

……二秒……三秒……。

「…カレーの味だ（ですな）」

「一体何を想像したんですか!？」

「過去の自分の行いを振り返ってから言え！」

幸いなことにごく普通のカレーであった。鳳翔さんマジパねえ。

「付きっ切りで教えた甲斐がありました」

「ほんとありがとな。目標は一人でこのレベルのを作れるようになることだが…出来そうか？」

「出来るかじゃないのです。——「やれ」。提督はそう言ってくれればいいのですよ」

「あのー、何で戦地に赴く雰囲気になっているんですかね…？」  
「空気読んでください」

「鳳翔さんがすっごいセメント!?!」

そんなことを言っていると、廊下側からドタドタと走っている音が聞こえた。

「提督ー!? ここにいるのー!?!」

「ん? どうした?」

入ってきたのは島風。どうやら物凄く焦っているようだがどうしたのか。

「磯風の料理を食べた秋月と清霜が倒れたの!」

「……………」

このセリフを聞いた提督は、目元を抑えながらため息をついた。

「……………鳳翔さん」

「分かりました。店には翔鶴・瑞鳳もいますから大丈夫ですよ」

「悪い。島風、場所を。赤城は医務室に行つてバケツ（高速修理材じゃないほう）準備しておけ」

「了解。……………まさかメシマズの才能を持った娘がいたとは……………」

提督は直ぐに指示を出し、食堂から飛び出したのだった。——鳳翔さんを御姫様抱っこしながら。

因みにこのことがケツコン組に知られるまで一時間もかからなかった。尚青葉が関わっていた模様。

尚、事態は直ぐに終息した。磯風は比叡と共に特訓（ハートマンレベル）することになり、秋月・清霜は診査して何も無かった為、大きな問題にもならなかった。

「唯なあ……………まさか表面黒焦げ中身ナマ、しかも内臓は取り除いていないのは驚いた。一体どうゆう調理をすればあんなんが出来上がるんだ?」

予想以上のブツを見てしまい、戸惑いを隠せない提督であった。…料理ベタ恐ろしい……………。

42. コロネハイカラ沖海戦（ショートランド？ あいつは消した！）

「急いで！ そろそろ敵本隊が来る！」

「ドラム缶を洞穴の奥にパンパンになるまで突っ込め！ 水雷戦隊の底力、陸軍に見せつけるぞー!!」

「二ヒヤッハー!! 弾薬ボーキ燃料鋼鉄何でもござれじゃー!!」

：現在、提督率いる川内・吹雪・深雪・涼風・漣・清霜は、コロネハイカラ島にて陸軍の資源輸送作戦を展開していた。

大本営から発表されたのはショートランド沖・コロネハイカラ沖・ステビア海・バニラ沖にある島に資源を輸送、及びその周辺の敵基地の破壊活動。：ぶつちやけいえば「陸軍の援助、ついでに敵もフルボッコ」という作戦であった。

今回の作戦の特徴は、水雷戦隊による攻略、つまり戦艦や空母は使う機会があまりないのである。

この発表を聞いた軽巡・駆逐艦組は狂喜乱舞。今まで大規模作戦（今回は中規模）で活躍できるステージはあまり無く、精々鎮守府周辺の潜水艦狩り、北方のキス島ぐらいなものである。そりや主役だと言われたら喜びますな。

ショートランド沖海戦では、第一艦隊は戦艦を一隻のみにし、重巡と軽空母をメインに、第二艦隊は川内を旗艦に吹雪・清霜・深雪・江風・木曾という組み合わせで攻略。全力でフルボッコにした結果、たった半日で陥落してしまっただが。

現在攻略中はコロネバンカラ沖の輸送任務である。といつてももう少して終了するぐらいに資源はパンパンになっており、今回も直ぐに終わる任務であった。

少し違う点を言うならば——敵がすごい勢いで接敵していることぐらいである。

「敵、確認！ 敵さんお顔真っ赤になってる！」

「そりや自分らのテリトリー好き勝手したら怒りますって！ 吹雪！」

交戦します！」

「援護するよ！ 清霜、吹雪に続きます！」

「オイオイ、アタイを置いて行かないでくれー!?」

「…やれやれ、ホントは私が行きたかったんだけどね。」

漣、深雪。付いて来て。援護するよ！」

「了解k t k r!!」

「了解だぜ！」

川内が敵の位置を確認、吹雪・清霜・涼風が突貫。川内は残った漣・深雪を指揮。本来ならば火力の高い川内が行くべきなのだが、その前の重巡の攻撃に当たり、小破していた。

大して影響ないのだが、万全な状態でやらないと一発でやられる。それが軽巡棲姫、いや、姫クラスの攻撃なのである。

「敵艦、視認しました！ 清霜ちゃん、涼風ちゃん！ 援護お願い！」

「あいよー！ とりあえず魚雷でも喰らっとけー!!」

「吹雪ちゃん！ 二時の方向、魚雷痕！」

吹雪が敵艦隊に突貫、それを援護する為、涼風・清霜が酸素魚雷を発射。これでイ級二体が爆沈した。しかし、その前に軽巡へ級、ホ級が魚雷を発射。しかし、清霜が目視で魚雷痕を確認。吹雪に伝達し回避に成功。

…たつた三行でここまでの戦いが発生しているのである。これぞまさしくハイスピードバトルである。

「吹雪ちゃん！ こちら川内！ 横から援護するよ！」

『こちら不知火。ただ今より支援を始めます』

川内が横からへ級に喰らい付き、更に不知火の魚雷支援が軽巡棲姫に直撃、中破に持ち込んだ。

「漣の本気、見せつけてあげるっ！」

「深雪様の本気、見せつけてやんぜー！」

漣、深雪はホ級に攻撃を仕掛け、先制攻撃で中破に持ち込んだ後、

「見逃すと思った？ 残念！ 漣はしつこいのです!!」

酸素魚雷で撃沈、敵の戦力を減らしていた。

「エエイ、何度モ何度モ行ツタリ来タリシオツテ！ イイ加減シツコ

イゾー！」

「こつちや主役張ってるんだ！ この溢れ出す熱い炎、簡単に消せると思うなー！」

「何ノコトカサツパリ分カランゾ!?」

※ 水雷戦隊主体の作戦でテンションがハイになっているだけです。

「訳分カランコトヲ言ウナ！ 私達はコノ作戦ガ失敗シタラ殺サレテシマウー！」

顔を恐怖に歪ませた軽巡棲姫は、活を入れるように大声で、

「——— 貴様ダケデモ、水底ニ沈メエ!!」

「ツ!?!」

川内に砲撃を開始した。

やはり軽巡とはいえ、棲姫の名は伊達では無く、艤装が削られるように被弾した。

本当なら一発二発直撃しても可笑しくない攻撃のラツシユだったが、流石はケツコンカツコカリしただけあって、ギリギリの回避&パライで直撃だけは避けていた。

「ハハハ！ 流石ダナ！ シカシ、何時マデ持チ越エラレルカナ!?」

「くっ……!?!」

しかし、そう何度も受け流せるものでも無く、ジリ貧なのは変わらなかった。——— 川内一人なら。

「こつちを———」

そう。

「忘れないで———」

軽巡棲姫は忘れていたのだ。

「欲しいんだけどねえー!!」

駆逐艦の三人の存在を。

「酸素魚雷、一斉射アツ!!」

吹雪の号令に合わせ、三人の左右の太ももにある五連装酸素魚雷が同時に発射。軽巡棲姫が気付く頃には既に回避できる距離は通り過ぎていた。本来ならここで終わっていた筈だった。

「コノ軽巡棲姫ヲ——」

敵が姫でなければ、の話だったが。

「侮ルナアアアアツ!!」

軽巡棲姫は左手にある魚雷発射管をパージ、吹雪たちが放った魚雷めがけてそれをブン投げた。

ズドオオオオオオオオオオツツ!!、という腹に響く音と共に、三人が放った魚雷が誘爆、視界が一時的に遮られた。

(オノレエ…い…コノママ終ワラセテタマルカ…!)

軽巡棲姫は心の中で悪態をついていた。それはそうだろう。駆逐艦相手にここまでスタボロにされたら誰だつてこうなる。

しかし、

「(作戦通り…!!…) 川内さん!!」

「分かつてる!」

一瞬でも川内の存在を認識の外に追いやること。

「ナツ!」

「喰らえ——」

それが吹雪たちの作戦であり、

「——ツイン魚雷バンカーツツ!!」

奇襲を得意とする川内への絶大な信頼である。



「作戦完了！ コロネハイカラ島沖の安全、及び資源の輸送が完了しました！」

「ご苦労！ よくやってくれた！ ……ところでだ」

鎮守府に帰投した川内達は、そのまま風呂に直行せず、提督の元に向かい報告した。——余計なお土産付きで。

「何で軽巡棲姫《ソイツ》を連れ帰ってきたのか説明してくれ」

「いや、敵の情報を知るには丁度いいと思ったから」

「……………」

川内の言っていることは分かるし、確かにその通りではあるのだが、

「……………それなら大本営の報告を待つても良かったんじゃないのかわ？」

「……………あつ」

「忘れてたんかい!?!」

どうやらハイになりすぎて、そこまで頭が回らなかったようであった。

「ヌツ、グウウウ…………ツ」

すると、軽巡棲姫が目を覚ました。

「……………」

あたりを見回した後、

「……………ココハドコダ？」

「ここはトラック諸島にある鎮守府だが？」

「ファツ!?!」

素っ頓狂な声を上げて驚いていた。死んだと思って目を開いたら敵の拠点の一つだったのだ。ポルナレフ状態にもなるう。

「ワ、私ヲドウスルツモリダ！ エロ同人ミタイニスルノカ!?!」

「ブフツ!?!」

軽巡棲姫のセリフに思わず噴き出した提督だったが、どうにか持ち直して、

「如何こうするつもりはない。精々情報を聞き出す程度だ」

「……………私ガ怖クナイノカ、人間」

「まったく？ 陸に上がった深海棲艦なんて、脅威じゃないからな」

※ 但し泊地水鬼等の陸を得意としたのは除く。

「……私ガオ前ヲ人質ニスルカモシレンゾ？」

「ほうう……。——試してみるか？」

次の瞬間、軽巡棲姫は自分の首に死神の鎌が掛けられているイメージがでた。

「——ッ!？」

冷や汗がまったく止まらず、体がガタガタ震えだす。

それを見た提督は、

「なんてな。安心しろ、実験台や拷問はしない主義なんだ」

殺気を緩めると同時に、先ほどのイメージは無くなっていった。手のひらには汗がジンワリとしている。

「……貴様、〃鬼武者〃ノ中ノ者力？」

「何だその厨二病くさいのは!？」

「トラック諸島周辺ニ、鬼神ノ如ク強イ敵ガイルトイウ話ガアツタカラナ」

「だからと言って〃鬼武者〃は無えよ……」

厨二くさいネームドを付けられていたことに嘆く提督であった。すると、

「…フ、フフフフ……」

軽巡棲姫の口から笑い声が漏れだした。

「フハハハ……! 貴様ハ面白イナ！」

「面白くないんだがなあ、俺は……」

どうやら肩をガックシ落としているのが面白かったらしい。ひとしきり笑った後、

「——分カツタ、敗者ハ勝者ニ従ウノミ。好キニスルトイイ」

「あつバカそれを言ったら」

「ん？ 今好きにしてもいいって言いましたね？」

「ホレ言わんこつちやない!」

香取がドアをバーンッ!!と開けながら、そう聞き出した。どうやらドアの前でスタンバっていたようである。

「敵の構成は!? 今回の深海棲艦のリーダーは!? 提督に惚れた!」

「最後オ!? お前何言ってるんだ香取イ!」

「スマナイガ、私が知ツテイルノハ私が担当シテイタノシカシラナイノダ。リーダーハ駆逐棲姫。ソレ以上ハ知ラン。 貴様ノ提督ハ……変ワリ者トシカ言エンナ」

「全部言いやがった!」

「それじゃあ——」

香取は軽巡棲姫にガンガン質問を飛ばしていた。学者としての血が騒いだらしい。

「……とりあえず川内達は風呂に行きなさい。明日、新たな作戦がある」

「了解です」

「後君たちには特別に間宮のアイスクリームを取っているからな」

「mjd!」

「マジです」

「イヤッホー! 直ぐに風呂に行くぞおー!」

言うや否や、あつという間に吹雪、川内を除くメンバーは走って風呂に向かった。

「…廊下を走るなよー」

「多分言っても意味ないと思います…」

「だね」

吹雪が提督の言葉にそう返し、川内が吹雪の言葉に賛同したのであった。

### 4.3. コロネハイカラ島東方沖海戦

『痛い……』

『ゴメン提督。一人中破しちゃった』

「了解した。気を付けて戻ってこい」

現在、提督はコロネハイカラ島東方沖海戦を繰り広げていた。

コロネハイカラ島東方沖はコロネハイカラ沖海戦と違い、輸送護衛部隊を発足しなければならない。

輸送護衛部隊を編成する場合、第1艦隊は駆逐艦4隻が必須。そして残りの2つを軽巡・航巡・航戦・水母を2隻か、揚陸艦、補給艦、潜水母艦の中から1隻選択できる。

第2艦隊は軽巡を一隻、旗艦にしなければならず、更に駆逐が3隻必須。

残りの2つは重巡か航巡を入れるしかない。因みに雷巡はダメなので先制ワンパンすら叶わない。(但し阿武隈は除く)

結果、火力が足りない、雷撃も足りない、実質敵艦隊への攻撃役は第2艦隊が請け負う形になっているのだ。とはいっても重巡入れてもかなりキツイことには変わりなく、航空支援・雷撃支援・砲撃支援を入れないとまさしく運ゲーになる海戦だった。

「今回は偵察のつもりで出撃させたが、下のルートは補給艦殲滅以外の任務がない限り使わないほうがいいな」

今回使用したルートは下ルート。潜水艦隊と輸送船団が主のルートだが、実はとんだハズレルートであった。

理由は、今回初めて出てきたPT子鬼群である。

PT子鬼群は装甲、火力を犠牲に、速度が島風以上、雷撃が極めて高い敵である。見た目はまさしく“子供”なのだが、夜戦になるとカットイン↓中破or大破のコンボが待ち受けている。しかも回避力をズバ抜けており、駆逐艦の主砲か、副砲でないとダメージが与えられないのである。しかも当たるかどうかは運次第という。

尚、実はコロネハイカラ沖海戦でもPT子鬼群はいたのだが、提督が存在をガン無視していた為、気付かなかったのだ。

「となると一番有効は上ルートか……。確か上ルートは重巡二隻だったな。よし」

提督はこの結果を踏まえ、更に編成を考えた結果、

#### 第一艦隊

旗艦：あきつ丸

二番：鈴谷

三番：秋雲

四番：清霜

五番：江風

六番：涼風

#### 第二艦隊

旗艦：川内

二番：古鷹

三番：加古

四番：吹雪

五番：島風

六番：秋月

となった。第一艦隊はあきつ丸は大発に紫電改二×2、鈴谷は上スロットに瑞雲一二型・試製晴嵐をセット。残りのスロットにはドラム缶という構成、残りの駆逐艦の装備も全部ドラム缶装備である。

一方、第二艦隊は雷撃を捨て、砲撃に特化した構成になっており、古鷹・加古の働きが重要なファクターになった。

しかし、それでも火力は貧弱なので、道中支援は不知火ら重巡部隊の支援砲撃、決戦支援は朝潮率いる長門・金剛・霧島・陸奥による支援砲撃による作戦が決行された。

尚、第一艦隊にいるあきつ丸はトラック諸島陸軍の子じゃなく、フィリピンに向向していたのを呼び戻した子である。

「こつちに戻った途端、第一艦隊旗艦になってほしいと言われたのであります。どうしてこうなったのであります」

「いやな、どうやらボスマスに水母棲鬼がいるらしいんだ。しかし、今回の構成は空母を入れることができない」

「だから自分を呼んだということではありませんか。…まあ確かに自分は、戦闘機を乗せることはできるので問題は全く無いのであります」「すまんな、帰って早々出撃なんてことになっちまって」

「今回は直接的な戦闘はないようなので別に良いであります。後艦載機の練度はどうなのでありますか？」

「安心しろ。紫電改二、練度MAXだ。…頼むぞ」

「了解、であります」

あきつ丸はそう言い、提督室から退席したのであった。

そんなこんなで、どうにかラスト一回にまで資源輸送をした提督たちであった。描写？ たまにPT子鬼群の雷撃で吹っ飛んだり、水鬼の攻撃で大破したりの映像を何回も垂れ流しても面白くないではない？

「…何かメメタアな話があったのであります」

「気のせいじゃない？」

なにはともあれ、最後の重巡り級フラを撃破。陸軍の指示にあった揚陸地点に資源を隠し、敵の司令部である水母棲姫を撃破する為、北に進路をとったのだった。

「それにしても、今のところ全員無傷…。できれば次の敵でも無傷で切り抜きたいね」

「今第一艦隊は武装してませんからね。少し丈夫な輸送艦のようなものです。私たち第二艦隊がしっかりしないと、被害がシャレになりません」

『こちら、第三艦隊。引き続き、ギリギリまで支援砲撃をします』

『こちら川内、了解！ 派手をお願いね!! —— 敵艦隊、目視で確認！』

『支援砲撃、始めえ!!』

第三艦隊旗艦、不知火の号令と共に、遠くから砲撃音が聞こえた。

『着弾まで五秒、四秒、三秒——』

「——島風ちゃん！ 吹雪ちゃん！ 吶喊!!」

「了解！」

「足の速さならまっかせてー!!」

着弾するより早く、川内・吹雪・島風が呐喊、島風が先頭を切ったのと同時に、

『着弾、今!!』

ズドドドドドドドドツ!!、と雨のように砲弾が降ってきた。

この支援により、重巡り級フラ、軽巡へ級エリ、イ級二隻が轟沈。残るは戦艦ル級フラ、重巡り級エリが残った。

「古鷹ちゃん、援護!!」

「了解！ 皆、ル級に砲撃を集中、こちらに敵の気をこっちに向けさせて！」

「りようかい、帰ってさっさと寝たい……」

「秋月、了解しました！」

残った古鷹たちは後ろでル級に砲撃。接近した川内たちを対処しようとしたル級の足を止めた。

「行くよ！ ——アサルトコンバットパターン、ファイズ!!」

「了解!!」

川内が言うや否や、三人の速度が更に増した。目標は重巡り級エリである。

「まず最初は私だねー！ 連装砲ちゃん、お願い！」

島風が抱えていた連装砲を離し、連装砲が自立行動を開始した。

「——まずは足を止める！ 連装砲ちゃん!!」

「(＃。＼) シマカゼチャンライジメルヤツハボツコボコニシテヤンヨオ!!」

連装砲が島風の号令と共に砲撃を開始、リ級の足を止めた。

「——円の動きで追い込む!!」

そのあと、吹雪がグルグル円を描くように手持ちの12.7cm連装砲（B型）二丁で撃ちまくり、

「そこに集中砲火!!」

島風と合流し、連装砲と共に顔と手に集中して砲撃した後、

「——最後は真ん中を打ち貫く!!」

背後から接近した川内がリ級の後頭部に魚雷を叩き付け爆殺した。

「島風ちゃん、戦艦お願い!!」

「はい!!」

敵が沈むのを確認した川内は島風に戦艦ル級の始末を頼んだ。島風の速さなら十二分に対処が可能だからだ。

「——ゴメン、もう沈めちゃった!」

まあその前に、古鷹たちの奮戦のおかげで反撃させる暇も与えられぬまま沈んでいったが。

「了解。島風ちゃん! 合流するよ!」

「はい……もう一体行けると思ってたんなけどなあ」

出番がなくなった島風は少し残念そうな顔をしていたが、すぐに気分を切り替えた。——次はコロネハイカラ島東方沖海戦のボス、水母棲姫である。

『こちら、第三艦隊。これより第四艦隊に支援砲撃任務を委譲します』

『こちら第四艦隊。後は任せておけ!』

「あちらは決戦支援部隊に切り替わったみたいね」

「そうでありますな。…そっちの被害は大丈夫なのでありますか?」

「みんなピンシヤンしてる。今最後の戦いに備えておにぎりを食べているところね」

次の戦いが水母棲姫のせいか、あきつ丸は緊張した顔をしていた。それもその筈、あきつ丸は今回が初めての中規模作戦だったのだ。しかも連合艦隊を組むことはまず無いから緊張感が更に倍プッシュ。内心はマジでマールライオンになる五秒前状態である。

「大丈夫、貴女は回避のみに専念して。後は私たち、第二艦隊の仕事。それに第四艦隊には長門や金剛、陸奥に霧島の姐さんまでいるのよ?」

余裕の勝利よ」

『——残念だが、霧島に代わって私が撃つがな』

「その声は……」

『武蔵だ。君はあきつ丸と聞いたかな?——安心しろ、私たちが君たちの帰りを邪魔する敵を薙ぎ払ってやる』



『アー!? チョット武蔵ズルいネー!』

『ハツハツハ、こういう言葉を吐けるのは良いな!』

『チョットミーもアツキーにエンカージメント(励まし)な言葉を送りたいデースー!』

「あ、アツキー……」

「——敵機、直上オツ!!」

加古の鋭い言葉が、あきつ丸を戦場に戻した。

上を見ると、敵重爆隊がこちらに向かっていた。

(こちらが全く気付かなかったのでありますか!? とにかく——)  
あきつ丸は懐に入れていた巻物を取り出し、

「——紫電改二、行くのであります!!」

巻物から(工廠妖精がふざけてイエローストライプにした)紫電改二が飛び出した。

「総員、回避に専念! 吹雪ちゃん! 秋月ちゃんを!!」

「了解!」

川内が即座に皆に指揮、吹雪に秋月のフォローに回った。

「チョット遅れちゃったけど、行って! 瑞雲一二型! 試製晴嵐!」

あきつ丸にやや遅れて、鈴谷が瑞雲一二型・試製晴嵐を発艦。味方上空の制空権をあきつ丸・秋月に任せたのだった。

一方、その秋月はというと、

「二つ…三つ…四つ…!」

さあ来なさい! 貴方達が放った艦載機、全部叩き落とします!!」

「凸(。皿。#)カカツテコイヤゴルア!!」

大張り切りで艦載機をボコボコ落としていた。流星は史実でB-17、フライングフォートレスを叩き落とした武闘艦である。…後長10cm砲ちやんが若干ヒヤッハー気味なのは素です。

幸い、高練度艦だけあって被害はゼロ、一方敵は瑞雲一二型・試製晴嵐混合飛行隊が駆逐イ級一隻を沈めた。奇襲のつもりが逆に被害をこうむってしまったパターンである。

更に、

『こちら第四艦隊! 敵艦隊確認! 砲撃可能距離に入り次第、砲撃

を開始します!』

『こちらのレーダーにも反応がない敵か! 多くの敵を藻屑に還してくれる!!』

『可能距離まで、あと五秒! 四秒!』

『総員! 徹甲弾、装填!』

第四艦隊旗艦、朝潮のカウントと同時に、長門が戦艦組の陸奥、金剛、武蔵に徹甲弾の装填を指示。そして、

『砲撃可能距離、入りました!! 長門さん! 号令どうぞ!』

『全主砲、斉射! 撃えッ!!』

重巡部隊とはまるで違う、遠くにいるあきつ丸たちにも腹に響く轟音が聞こえた。

『着弾まで、3秒、2秒、1秒——着弾、今!!』

次の瞬間、遠くに水柱が何本も生えた。重巡部隊派手さも、水柱の大きさもまるで違う。

この支援砲撃により、戦艦夕級フラ二隻、駆逐イ級エリが爆沈。残るは小破した水母棲姫と、無傷の軽巡ツ級のみとなった。

「さつきはよくもやったねー! お返しだ!」

「凸(。∩。#)シマカゼチャンノタメナラタテニモナツテヤンゾゴルア!!」

島風がツ級めがけて一人で呐喊。その速さが尋常じゃないレベルで近づいていた。

「チッ! ツカエナイ…:ガラクタドモガ!!」

水母棲姫が舌打ちをし、島風を人質に取ろうとしたが、「貴女の相手は私です!」

「とつと倒して鎮守府に帰らせてもらうよ!」

「エエイ! 雑兵風情ガアアアアアアッ!!」

古鷹・加古の砲撃でまたもや食い止められた。

「行くよ——アサルトコンバット、パターンイオター!」

島風はトップスピードを維持しながら、敵ツ級に接近。連装砲も自

立行動で島風と同じ速度で敵に砲撃。そのあと円を回りように砲撃し、最後に、

「これはおまけっ!」

背中から取り出した魚雷を、真正面から口の中にシューウウー……ッ!! 超! エキサイティン!! していた。あの意味哀れな死に方である。

「くっ……! こいつ、硬い!」

「邪魔ヲ、スルナ!」

「ああもう……! 二人で倒すのはキツイね!」

一方、古鷹たち重巡組は、水母棲姫に砲撃を続けていたが、中々決定打になるものが出てなかった。

ダメージは通っているのだが、重巡とはいえ二人分の火力はかなりのダメージになる。相手の左腕を破壊し、しかも徹甲弾による砲撃なのに、だ。

「私ハマダ、終ワツテイナイ! コノ身ガ碎ケチルマデ、戦ウノミ!」

「———ならここが貴女の終焉の地だよ!」

背後から、川内が左右に魚雷を持って、

「ツイン魚雷バンカーッ!!」

それを、水母棲姫の背中に叩き付けた。だが、

「ソレガ…、ソレガドウシタアアアッ!!」

「なっ!? キヤア!」

それをものともしないかのように、逆に川内に近距離砲撃をブチかましていた。

「あれほどの攻撃を受けてもまだ倒れないなんて……!!」

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

雄たけびをあげながら、古鷹たちのラインを強引に突破。向かう先は———

「こつちでありますか……!」

「逃げて! あきつ丸たち!!」

「逃ガサン…… 逃ガサンゾ!!」

あきつ丸率いる第一艦隊であった。

「総員、回避に専念するであります! 鈴谷さん、自分と一緒にあの悲しい化け物を対処するであります!!」

「だああもう、武装なんて持つてきてないのに……!」

そう言いながらも、即座に瑞雲一二型・試製晴嵐を即座に発艦。攻撃力は艦砲射撃と比べて大したことはないが、現時点では鈴谷の最大武装なのである。

一方、あきつ丸はというと、

「呐喊であります!!」

「ちよっ!? 何やってんの!?」

いきなり呐喊という吃驚な行動をやっていた。

「ウオオオオオオアアアアアアアアアア!!」

「武神流、奥義が一つ——」

そして懐に飛び込むや否や

「——武神轟雷旋風陣!!」

—— 肘鉄、中段突き、ハイキック、上段回し蹴り——

「ガハアツ……!?!」

「まだ終わってないであります!!」

浮き上がったところに中段蹴り、そしてそのままサマーソルトのように蹴り上げ、

「グウ……」

「これで——」

最後に水母棲姫を抱き抱え、

「——最後まであります!!」

ジャンプして、そして頭から勢いよく落下させたのだった。俗にいうイズナ落しである。

一際大きな水柱が立ち、あきつ丸は内心(勝ったのであります!)と思っていた。しかし、彼女は忘れていた。——ここは海上であつて、コンクリのような硬い地面の上じゃないことを。

「——アアアアアアアアアアツ!」

「な!? しまっ——!?!」

あきつ丸は自分の行動を反省していた。今まで陸の仕事が多かったせいかな、このことをすっかり忘れていたのだ。

しかし、後悔しても遅かった。後は水母棲姫の攻撃を食らうしかないと思っていた。——水母棲姫が後ろに迫る存在が見えなかったら、だったが。

「貴女の相手は——」

その存在は、

「この吹雪です!」

吹雪型一番艦、吹雪である。

「マダ：マダ終わってナイ……!」

「いいえ、ここで終わらせます! 私か——あなたに引導を渡しませ!!」

そう言うや、太ももにマウントしていた酸素魚雷を二本、両手に持ち、

「この二撃で……!」

「無駄無駄無駄アアアツ!!」

「——遅い!」

水母棲姫の攻撃を潜り抜け、

「これで——」

左の魚雷で右手の鉤爪状の手を破壊し——

「——最後です!!」

残った右手の魚雷で水母棲姫の腹部を魚雷バンカーでブチ当てた。

轟音と共に吹き飛ばされた吹雪であったが、それを島風がジャンピングキャッチ。二人仲良くゴロゴロ転がった。

「敵は?」

吹雪が水母棲姫のいた場所を見ると、そこには、

「…コ…コデ、オワル…ナ…ンテ……」

——沈んでいく水母棲姫であった。

「…もしかして、勝ちました？」

「「「いやったー!!!」」」 コロネハイカラ島東方沖海戦、任務完了だああああっ!!!」」」

歓声と共に、コロネハイカラ島東方沖海戦の安全確保、及び資源の輸送任務が終了した。これによりショートランド・コロネハイカラ沖・コロネハイカラ島東方沖の輸送任務のすべてが終了したのだった。

## 4.4. 鹿島着任

さて、コロネハイカラ島東方沖海戦を制した提督であったが、ここで新たな問題が発生した。それが――

「提督、バケツがもう無いです!」

「80個じゃ足りなかったか……!?!」

バケツの不足であった。

バケツ――高速修復材は艦娘の艤装の修復、及び艦娘の傷等を回復させる優秀な物なのだが、これを集めるには特定の任務をこなすか、遠征で確保するか、現金購入しなければならぬ。

提督は「わざわざ購入する必要はないしなあ」とバケツを一回も購入したことはなく、基本的に任務か遠征のみで確保していた。

しかも今回は中規模とのことだった為、そこまで大量に必要ではないと判断してしまったのだ。

結果、西方海域戦線・ステビア海に進出したのは良いものの、そんなに攻撃することが出来なくなったのだった。

「ぬぬぬ……。今回はかなり珍しい娘が入ると聞いたのにこのざまか……」

「なら俺が探してこようか? どうせバケツがない以上、攻撃はできぬえし」

「…そうだな。天龍、すまんがバケツを探しに行ってくれ」

「了解了解。資源を集めても問題無えよな?」

「ああ。…ところで聞きたいんだけどな?」

「あん?」

「……何で龍田はさつきから「金熊怖いわあ……」とぼやいてんだ?」

「あー……。最近やったゲームことじゃないか? 初雪が進めてきたものらしいが」

「……龍田を遠征部隊から外せ。代わりに阿賀野を連れて行ってくれ。あいつ最近暇そうにしていたからな」

「了解。ほれ龍田ー、とつとどこつちに戻ってこーい」

ほっぺをペチペチ叩きながら呼び戻している天龍を見た提督は、

「……何かお姉ちゃんしてるな」

「どういう意味だコラ」

「だってお前雷（カミナリ）とか聞くとビビるじ」

「それ以上言う口を縫い合わずぞ」

ドスの効きまくった声で言った天龍であった。こういうところがまた可愛いところではあるんだがなあと提督が思っていると、

「…ん？ 誰かこっちに来ているな」

「ああ、そっかいやコロネハイカラ島東方沖海戦を突破しただろ？ その褒美で新しい娘が来るって言っていたな」

「……何か最っ高に嫌な予感しかしないんだが……」

「大丈夫だろ多分」ピコーン！

「たった！ フラグが立ったぞ！」

「何のだよ!?!」

ギヤーギヤー言っているとドアをノックする音が聞こえた。どうやらご登場の時間になったようである。

「はいどうぞー」

「切り替えはえーな」

「——失礼します」

天龍の突っ込みを無視しつつ、入ってきたのは、

「初めまして、本日より第五鎮守府配属になりました練習巡洋艦、鹿島です」

「初めまして、ここ、第五鎮守府のトップである吉川だ」

「あー、一応挨拶しとったほういいな。天龍だ。主に輸送船団の護衛のリーダーをやっている。よろしく頼むぜ」

「そして私は龍田よお。天龍ちゃんの部隊の副長をやっているのお」

「…いつの間に復活した!?!」

せっかくまじめだった空気が龍田の復活で一気にシリアルと化した。…本人にはその気がないのだろうが、さっきまで魂が抜けかけていたのにこのセリフである。

「フッフツ変わっているんですね、ここは」



「だそうだぞ龍田」

「だそうよ天龍ちゃん」

「おまえら鏡見てこい」

「お前もだよ！」

「天龍ちゃんもよ〜」

漫才なことになってしまい、更に呼吸困難なことになっていた鹿島であった。顔を真っ赤にしながら我慢している光景を見た提督は、「思いつきり笑ってもいいんだぞ？ ウチんところこんな感じだしな」

「漫才がですか？」

「何でだよ」

「漫才というより変人っぷりじゃねえか？」

「むしろ人外じゃないかしら〜？」

「お前ら二人あとでシゴキな？」

「んじや、早速遠征行ってくるぜー！」

「ああん、まっつ〜天龍ちゃ〜ん」

ニツコリ笑顔で死刑宣告（精神的な意味で）した瞬間、即逃げ出した天龍たちであった。

「まっつたく、とりあえずは数日間は基地の中を覚えてもらう。そのあとは座学を三日、実践演習を一週間とする予定だ」

「了解です。…あのお、つまらないことをお聞きしたいんですが…？」

「もっと砕けたしゃべり方しても良いのよ？ んで、聞きたいことって？」

「香取ねえはここに配属されているんでしょうか…？ 一応、挨拶だけでもしとかないといけないかなって」

「あー……。今はやめておけ。ちよつと合わせられない状況になっている」

「？ 怪我でもしたんですか？」

「怪我はしとらん。まあ、マッドな精神状態になっていてなあ……」

未だにガムみたいに軽巡棲姫にべったりへばりついている香取であった。軽巡棲姫も思わず「ソロソロ解放シテクレナイカ……？」と

嫌そうな顔をしてしまうぐらいにはベツタリしていたらしい。おかげで寝る暇すらないとか。

「とりあえず五日たってから会ってみるといい。そんな時は正気になっているだろうし」

「は、はあ……」

そう言っていると、何やら大声で言いながらこっちに向かってきている音が聞こえた。どうやら外から聞こえてくる。

「？ 一体なんだ？」

そう思つて提督が窓を開けて下を見てみると、

「待つて！ まだ聞きたいことが——」

「イイ加減ニシロ！ 三日間モ貫徹シタダロウ!!」

「それでもツ！ 私の知識欲はたまらないのよおー!!」

「変態ダァーッ!!」

そこには目元にクマを作つた香取と、涙目で全力で逃げている軽巡棲姫の姿があつた。見ている感じは物凄い邪気を放ちまくっている香取に、そいつから逃げ出す軽巡棲姫……。どっちが悪者か思わず勘違いしてしまう光景である。

「……何してんだお前らあー!!?」

「何つて…何が？」

「お前は何もなくてもおつけかけける習性でもあんのか?! そろそろ可哀想だから解放してやれ！」

「そんなあー!?!」

「そんなも糞もあるか?! 彼女の姿をよく見てみるよ！」

「え？」

提督の言葉を聞いた香取は、軽巡棲姫の様子を見てみると、状況その一、涙目で怯えている。

その二、先ほどの行動

その三、第三者視点で見れば…?

これらのことを考えた次の香取の言つたセリフは、

「おのれゴ○ゴム！ 許さんツ！」

「お前は何を言っているんだアアアアア!?!」

何と現実逃避であった。

「……姉さん？ 何をしているのですか？」

「……その声は、まさか……」

鹿島の言葉を聞いた香取は額に冷や汗を流しながら恐る恐る提督の横にいる鹿島を見た。

「…姉さん？ あれほど提督に迷惑を掛けちゃダメと言ったよね？」

「ちよ、ちよつと待つて!? なんで鹿島ちゃんがいるの!? 昨日はいなかったですよね!?!」

「そりやアンタ、今日からここに配属されたからに決まってんでしようが」

「ということですよ。今日からきつちりと、き・つ・ち・り・と！管理しますの、覚悟してくださいね？」

「え、えつと…何をカナ？」

「お部屋に決まってるでしょう?」

「いやあああああつ!?!」

イイ笑顔で死刑宣告を送っていた鹿島であった。

因みに何故死刑宣告かというと、実はこの香取、整理整頓が下手糞なのである。何かしらの教材などはキチツと綺麗にできる癖にお部屋は汚部屋なのである。何故か。

後で聞いた話によると、香取と鹿島は配属される前は一緒の部屋だったらしく、香取が汚していた部屋を、香取に説教した後よく片付けていたらしい。

香取にとつてはその説教が苦手らしく、正論オンリーなのが心にクルとのこと。まさしく自業自得である。

「すいません提督。姉が失礼な行動をとってしまい……」

「鹿島ちゃん？ 一応私これでもみんなから先生と言われるほどのことはしてるのよ?」

「黙ってくださいいね、愚姉」

「愚姉扱い!?!」

やたらセメントの言葉が一方的に飛んできた。どうやらあの行動は鹿島にとって許されない行動だったらしい。

「第一、何で軽巡棲姫がいるんですか？ あれ敵ですよね？」

「勝者の権利執行」

「いや、普通執行しないんですけど!？」

「何言ってるんだ？ 噂だがイタリアなんか深海棲艦相手でも口説き落としているという話だぜ？」

「恋に心が炎上している国生まれじゃないでしょ？」

「そうか？ イタリア（艦娘）とか割と抱きつく感じのスキンシップが多いんだが」

「話がずれていきますよ？」

「ま、取り敢えず軽巡棲姫がいるのは問題無い。コイツ、武人気質みたいだしな」

「……何か壁からこちらを見るようにしているのはなんででしょうかね？」

「十五分ほどのお前の行動を振り返ってみろ」

「ですねえ。それでは、軽巡棲姫に関しては全く問題ない？」

「そういうこと。陸の上なら俺なら勝てるしな」

因みに、深海棲艦は海の上だとかなり強いが、陸に上がった瞬間、何故か驚くほど弱くなる。アーマードコアで例えるなら、

海の上：ナインボール・セラフ・リバーズ

陸の上：モリ・カドル（管制室の誤誘導付き）チャントエンゴシロ  
ヨオ!!

分かりにくい？ならガンダムで例えるなら、

海の上：ユニコーン（最終回Ver）

陸の上：ボール

レベルで弱体化する。陸に上がったら戦車どころかRPGでも撃破は可能なのである。…問題はその前に全滅させられるという部分だが。

「提督はかなり人間枠から離れてますからね。短い付き合いでも分かれますし」

「……取り敢えず香取、お前は提督室に來い」  
「嫌です」

「言うと思ったから降りてきました」

「／＼（＾○＾）／」

「取り敢えず、最初にお部屋チェックから入りますか。：色々聞きたいことがありますしね」

「／＼（＾○＾）＼ナンテコツタイ」

「ほら、行きますよー」

香取の襟元をガシツ！と握り、ズルズル引つ張っていく鹿島であった。どうやら上下関係では圧倒的に鹿島が上らしい。

「軽巡棲姫やーい。聞こえるかー？」

「……………」

無言泣きであった。どうやら物凄く恐かったらしい。まあ血走った眼をしていた奴を見たら怖すぎるし恐ろしすぎる。

「あー：取り敢えず落ち着いたら提督室に來なさい。ちよつと一つ二つ話したいことがあるから」

提督は軽巡棲姫にそう言って、机の上にある書類にハンコを押す作業に入った。

## 45. ちよつと深めの設定披露 + α

「調査ダト?」

「ああ。敵の身元預かり証明の為に、ある程度敵の情報を書いておかなきゃならなくてな。すまないが、知っていることを話してくれないか?」

時間を少し遡ること五分前。午後過ぎにようやく提督室に来た軽巡棲姫。そこに提督がノートパソコンを起動させて開口一番こう言った。

「落ち着いたか? さっそくで悪いが、少し事情調査に協力してくれないか?」

現在、日本海軍の尽力により、アジア圏内、及び日本とアメリカのシーレーンの確保が出来ており、比較的物の出入りが多い。しかし、やはり深海棲艦の強襲が多く、三%の輸送船が海に沈んでいるのだ。特にこのような被害が多いのは日本とハワイ諸島間の潜水艦の雷撃による事故である。

なので、敵を鹵獲した場合、保護を認める代わりに情報を貰うのが海軍の習わしであった。

日本海軍学校の扱う教科書には「情報は戦争において(ある意味)兵器開発よりも重要である」という言葉が、掲載されている。過去の教訓を生かした、二度と愚策を犯さないという意味を込めたものだ。

つまり何が言いたいのかというところ——「鎮守府に居るのだったら情報出してくれ、そしたら海軍が全力でバックアップする」というだけのことである。

「フム……。知ツテイルコトハソソナニ無イゾ。ソレデモイイノカ?」

「そこんところはしょうがない。もしかしたらダダ被っている可能性もあるし、少なくとも君が味方にいるということは、戦力的にも、相手の戦意を挫くにも欠かせない存在だということを書いて送るさ。」

だが、何一つ知らないは流石に通らないからな?」

「分カツテイル、流石ニソソナコトハシナイサ。」

ソウダナ……ぞでいあつく、トイウめんばーヲ知ツテイルカ？」

「ゾディアック……？ 確か黄道十二宮に属する星座の総称だよな？」

「アア。貴様ヲノ輸送船ヲ沈メテイルノハ、恐ラクぞでいあつくノ可能性ガ高い。」

ぞでいあつくトイウノハ、元々少数精鋭ノ部隊ダツタンダガ、はわい諸島ノ大敗デ、連中ノリーダーガ、ココイヲノ海域ヲ担当シテキタンダ」

「フム……構成メンバーは？」

「全員合ワセテ

レッド・レイジ 憤怒の烈火、No. 1 “カプリコルヌス”。れ級ふらダ。貴様ノ長門ト同ジ近接ヲ得意トスル奴ダ。

コイツハ他ノ奴ヲト比ベテ理性ガ存在シナイ。

ブルー・ウエイル 慟哭の蒼、No. 2 “アクアリウス”。る級ふらダ。得意ナノハ遠距離ニヨル砲撃ダ。但シ、コイツハ一人デ行動スルコトハ無イ」

「ということとは二人組か？」

グリーン・リガー 「アア。厳格ノ緑、No. 8 “レオ”。同ジる級ふらダナ。トイツテモコイツノぼてんしやるハ憤怒の烈火ト同ジダ。気ヲツケナキヤアツトイウ間ニ海ノ底ダ」

「成程ね。こりやきついな」

イエロー・デイトライト 「歡喜ノ黄、No. 3 “ビスケス”。を級ふら改ダ。コイツハブラック・ブルータル 残忍ノ黒、No. 10 “リブラ”ト一緒ニ行動スル。を級改デ、噂

ジャ赤城・加賀ガ墮チタ姿ジャナイカト言ワレルホド仲ガ良イ。

ホワイト・デザイア 欲望ノ白、No. 4 “アリエス”。つ級えりダ。」

「ん？ そいつはエリなのか？」

「一応言ツテオクガ、実力ハ私ヲモ上回ルゾ。」

パープル・インパルス 衝動ノ紫、No. 5 “タウルス”。戦艦棲姫ダ。

グレイ・デイスベアー 絶望ノ灰、No. 6 “ジェミニ”。ち級ふら二人、文字通り双子ダ

ナ。

クリームゾン・リベンジ 復讐ノ紅、No. 7 “カンケル”。駆逐棲姫ダ。すぴーど重視ノ戦

イ方ヲスルゾ。

ダークレッド・アニモシティ 憎悪ノ暗赤、No. 9 “ウイルゴ”。軽巡棲姫ダナ。コイツハとー

たるばらんすが凄マジク高い。

スレートグレー・ハーティネス

傲慢ノ浅灰黒、No.11 “スコルピウス”。り級ふらダ。

ミッドナイトブルー・マリス

悪意ノ群青、No.12 “サジタリウス”。……コイツノ正体ハ

マツタク分カララン。名前ダケダ、知ツテイルノハ。

カラーネズ・ナッシングネズ

ソシテコイツラノ指揮官ガ、虚無の無色。コイツノ姿ハ“サジ

タリウス”同様、マツタクノ謎ダ。

——コンナトコロカ。……何デ顔ヲ手デ隠シテイルンダ」

「名前が厨すぎて痛いんだよ色々」

厨二病全開の名前に悶えまくる提督であった。しかもそれをノートパソコンに打ちながらなので更に精神ダメージがドンツ！状態である。

（とりあえず聞くべきところは聞いたのでこれを出しておけば良いよな？ 実際聞いたことを打っただけだし。）

「話ハ終ワツタカ？」

「いや、最後にまあお願いという感じなんだがな——お前、名前無いの？」

「アル訳無いダロウ。番号デ呼バレルダケダ」

「成程ね。じゃあ提案なんだがな？」

——名前、付けない？

「……何故ニ？」

「軽巡棲姫て呼ぶのめんどくさい」

「アー……確カニ面倒デハアルナ」

「という訳で名前付けようしよう。そんでお前は何か良い」

「又……イキナリ言ワレテモ思イツカンナ」

「うーん……宗谷はいくらなんでも戦艦には合わんし、三笠は何か違うんだよな……」

「……何デソナ名前ガ出テクルノダ」

「え？ 普通に良くね？ どっちも縁起のいい名前だと思うしな」

※ この世界の三笠に関してはアメリカのミズーリと同じく、一応宗谷と同じく動かしております。

「うーん……三河もいい気がするな」



「私トシテハソレガイインダガナ」

「そうか？ なら次から“三河”な？」

「分カツタ。……アア、モウ一ツ思イ出シタ」

「？ 何だ？」

「ぷろじえくと・ろすとばれる……聞イタコトハ？」

「無いな（キツパリ）」

「ソウカ……噂ニヨルト、コチラニ寝返ツタ人間側ノ計画ラシイ。調ベテ損ハ無イ筈ダ」

「おう。後これ渡しとくわ」

そう言うのと、提督はチケットのような紙を三河に渡した。

「？ コレハ？」

「間宮印のお菓子の食べ放題券だ。これで誰かと一緒に行ってみたらどうだ？」

「ン？ フム……。ソウダナ、最近川内ト喋ルコトガ多イシ、ココラデ誰カトこみゆにけーしよん取ルカ」

そう言うと、三河は提督室から退出した。それを確認した提督は、  
「……ゾディアックに、プロジェクト・ロストバレルか。前者にしろ、後者にしろ、かなり有益な情報だな」

ノートパソコンに三河が喋ってくれた情報を打つ提督。確かに人類にとって有益な情報。しかし、言葉とは裏腹に、提督の顔は暗かった。

「ゾディアックに関しては話を聞くだけでもかなりヤバいな。厨二ネームも酷いが実力も相当だ。」

それにプロジェクト・ロストバレル……。どっかで聞いたことがあるんだよなあ。確かプロジェクト・ラインバレルだったか？」

提督は海軍学校時代の新聞に載っていたとあるプロジェクトを思い出した。

「確か人類の破滅を防ぐための計画だったか？ 人類には自滅スイッチがあるのかなんとか言っていたが、そういうばあれ以来見ていないな。……調査するべきか？」

しかし、提督はこの時気づかなかった。

事態は、より一層最悪の状況に進んでいたことに――

さらなる悪夢に――

そして、自分の両親の死の真実に――

まだ、気付いてなかった。

## 46. トラック諸島防衛戦（前編）

「何？」「プロジェクト・ラインバレル」の情報が全く無い？」

『うん。一応東京の村中君にもお願いして貰ったけど、提案した人の名前すら無いんだ。確かに聞いたことのあるはずなのに、ね』

「……………」裏に消された可能性が高い？」

『どうだろ？ 何れにせよ、少し気になるから引き続き調べとくよ』

「すまんな」

『気にしないでいいよー』

“三河”の情報提供から三日後の昼、提督は有馬に連絡を取っていた。理由は三河から聞いた“プロジェクト・ラインバレル”の件である。

トラック諸島に長い間いる提督は、日本の事情・政治等全く分からない。その為、友人の有馬・村上をお願いしたのだが、結果は“全くの不明”であった。

「色々興味深いものが出てきたからな。ゾディアックも今まで知らなかった情報だし」

『まあ確かに知らなかった情報だから興味持つのは分かるけど、必ずしも正しいことを言っているとは限らないんじゃない？』

「それは無いな。話した限りあいつは根っからの武人氣質だ。嘘をつくほどの捻くれた感じは全くない」

『ふーん…………、まあ、君が言うならそうなんだろうけど、気をつけなよ？ それが本当なら、君のいる場所は最も危険な場所になるわけだしね』

「上等。まとめて叩けば一気に安全になるしな。運が良ければもしかしたら和平交渉も出来るかも知れない」

「和平ねえ…………。…………それを望む人はいるのかな？（ボソツ）」

「？ なんか言ったか？」

『何でも？ 取り敢えず分かり次第連絡するね』

有馬はそう言うのと通信を切った。

「失礼します」

「加賀か」

「ええ。例の件について調べて見たら面白いのが見つかったわ」

「……見せてみる」

提督は加賀にそう言うと、加賀は提督室にあるブルーレイプレイヤーを起動、ブルーレイディスクをセットした。

「この前輸送船が沈んだでしょう？ その輸送船を護衛していた艦隊が撮っていたらしくてね。その中に三河が言っていた“ゾディアック”のメンバーが、映っていたの」

「フム……、取り敢えず見るとしよう」

ちようどプレイヤーが再生可能状態になっていたので、再生ボタンを押したのだった。

その中に移っていたのは——燃え盛るような赤いオーラを撒き散らす、船の外壁を文字通り喰らう、レ級の姿であった。

「……こいつはまたヤバそうなのが写ってるなあ……」

「ヤバそうじゃなくてヤバいです。事実、交戦中の味方の艦装が喰われました」

「予想以上にヤバかった!?!」

艦娘の艦装は、生命線である為、かなり頑丈に作られている。といても交戦中に艦装が壊れることはあるのだが、まだ壊れる分、壊れた部分を取り換えればいいだけの話だが、艦装ごと喰われた場合、その艦装は使えない。それはそうだろう、パーツを替えようにも消失してるんだから直りようがない。

「それに、撤退中の映像にもある敵が写っていたわ」

加賀はリモコンを使つて早送りにして、問題の最後の辺りまで飛ばした。

「これは、チ級か？ いや、オーラの色が、灰色……!?!」

「……もしかして、コードネームの中に“色”が入っているのは、放つているオーラの色を示しているからじゃないかしら?」

「確かに。レ級にしる、さっきのチ級二体にしる、普通の深海棲艦じゃない。というか明らかに逸脱してやがる」

「ということは実力も未知数ですね。本気でやる必要があります」

「常日頃本気状態の奴が多い気がするんだが……」

「軽空母勢は割と手を抜いてますがね。……まあ私たちの得意とするのは特殊戦・電撃戦・救助戦の三つですからね」

「殆ど軽空母使わないからな…連合艦隊だとかかなり使う頻度は上がるが」

「なので提督。特訓の計画が出来上がったので確認をお願いいたします」

「……お前、最初からこれを狙っていたら？」

「そう言いながらも、提督は計画書を見通した。」

「……これ最近来た奴には厳しすぎないか？」

「このくらいしないと練度が急には上がりません。大丈夫です——  
死ななきや安いので」

「畜生発言はいかんだろ」

訓練内容は、最高練度（要するにケツコンカッコカリ完了組）のメンバーVSそれ以外のメンバーなのだが、個々の鎮守府の最高練度は色々と上限突破&独自進化しているので、ぶつちやけ1対6でも普通にボッコボコにされるといふ。

「かろうじてそのメンバーに食らいつけるのは“狂犬”夕立と“忠犬”時雨の二名だけである。」

「あと開発部が震電改を開発したようです。更に制空権の強化が図れますね」

「よう作れたな。確かあれ舞鶴や横須賀、呉以外じゃ持っている奴はいなかったはずだが」

「映像を元に作り上げたそうです」

「何だその驚異のメカニズム」

「性能も恐らく本物同様の筈と工廠長妖精も言っていましたから。…そのあと泥のように寝ましたが」

「あの真田妖精か……」

※ 真田妖精とは工廠長妖精のこと。口癖が「こんなことがあると思うって」

「まあ、実際このぐらいのことをしなきゃならないのがなあ……適度

に休憩を入れることを条件に許可する」

「了解しました」

加賀が返事をしたのと同時に、警報が鳴った。

これにまず最初に反応したのが提督だった。

「どうした!?!」

『東の空から超巨大な深海棲艦反応ッ！ 同時にこちらに深海棲艦が接近中！その数、十!』

「加賀!」

「駄目です！ 全艦隊、ステビア海に出撃しています！ 現在帰還中ですが、それでも帰還するまで残り120分!」

「なら…! ——— 明石! “迅雷”は出撃可能か!?!」

『いきなり何言ってるんですか!?! この警報は…!』

「現在、東の海から超巨大な深海棲艦の反応、そして東方面から連中が接近中だ！ 最悪なことに全艦隊が出撃していて、留守の時を狙われた!」

『だからって…!?! まだテストもしてないんですよ!?!』

明石が大声で否定していると、通信が入った。陸軍の航空隊からだ。

『———こちらトラック諸島陸軍、第17航空小隊所属、“セイバー1” 連中の狙いが分かった！ 東の空から現れたのは巨大爆撃機!」

モデルは恐らくアメリカのXB-19! 真つ直ぐトラック諸島方面に向かっている。海軍の支援を要請する!』

「情報、感謝する!」

『こちら、トラック諸島第一鎮守府所属、了解した! 秋月、摩耶を向かわせる! 敵の高度を教えてください!』

『高度一万メートル! 現在少しずつ降下しているが、砲撃じゃ届かん!』

『おいおい、あの高さじゃ艦載機でも届かんぞ!?!』

「…いや、届く艦載機がある」

『何!?!』

「こちらトラック諸島第五鎮守府、そいつを叩き落とせる艦載機を持っていて! 第一鎮守府、聞こえるか!?!」

『聞こえますよ!』

「そつちの空きのある艦隊はあるか! あつたらそつちに震電改を乗せた加賀を送りたい。」

本来震電は高高度迎撃用に開発された機体だ! 迎撃は十二分に可能!」

『了解しました! 直ぐにそちらに艦隊を送ります!』

「一つ分空けとけよ! じゃないと意味が無い!」

通信を切った提督が次にとつた行動は、

「——迅雷の出撃準備を急げ!」

迅雷の出撃であった。

『だからテストも終わってない状態で出させるわけにはいかないんです!』

「そうかもしれん。だがな、現時点で第一、第二、第四、第五が出撃していても、恐らく耐えられんぞ」

『それはどういう——』

「接近中の敵艦隊が判明。ゾディアックのメンバーが混じってます。オーラの色は紅、——クリムゾン・リベンジですね」

『それがどうしたと!?!』

「ゾディアックの実力が、俺たちと同じ可能性があるんだよ。だとすれば俺たちより練度の低い奴らじゃ意味が無い。それに、現時点で奴らとタイマンはれるのは俺だけだぞ」

最高練度の艦娘以上の実力を持つ吉川提督だからこそ、この後のビジョンが明確に分かってしまう。——時間稼ぎすら叶わないと。

「なら、打てる手は打っておかなければならない。……皆の帰れる場所を守るためにな」

『……分かりました。三分待つてください』

「二分だ」

『…了解よ』

不承不承ながら、明石は“迅雷”の出撃準備に入った。

「……提督」

「何だ?」

「……十分、持ってください。——直ぐに救援に向かいます」

「あいよ」

『こちら第一鎮守府所属、第三艦隊旗艦、扶桑です！ 加賀を迎えに来ました！』

「了解。——直ぐに終わらせてやる」

……若干加賀の声がおかしく聞こえたのは気の所為です。

「糞ッ！ 艦娘の装備じゃないからって、機関砲で落ちないのはおかしいだろうがー」

『セイバー1！ 近寄りすぎです！ 対空機銃で落とされます！』

『こちらセイバー2！ 更に艦載機接近！ 下のヲ級を黙らせないとネズミみたい湧いてくるぞー！』

『セイバー3！ 後ろに食いつかれてます！ ブレイク、ブレイク！』  
『んなろがああああッ!!』

「阿呆！ 雄叫びあげてもブレイク出来てねえぞ!!」

F-4EJを駆るセイバー1がセイバー3の後ろにいた艦載機を撃墜。しかし、艦載機の数が増す一方であった。

「どんだけ湧いてやがる!! 敵だけ高度制限がないのか!!」

『セイバー小隊に次ぐ！ あと一分で救援が来る。持ちこたえられるか!?!』

『『余裕に決まってんだろ!』』

『よし、後でステーク奢ってやるから全員戻れよ！ 一人欠かすことなくな!』

『『オイこいつ死亡フラグ建てやがったぞ?!』』

……割と余裕そうな雰囲気だが、かなり危険な状態なのである。

『——その心配はありません』

「あん？ どっからの通信——」

セイバー1が疑問を浮かべたのと同時に、周りの敵艦載機が落とされた。



「な……!?!」

『——こちらトラック諸島、救援部隊。現着しました。上空のF-4EJ三機は下がってください』

『隊長!』

「了解した! ……すまんが、後は頼む!」

『承りました。——さて、提督も交戦しているでしょうし、とっとと海の藻屑にしてあげます……!——行きなさい、震電改!、紫電改二!!』

加賀の弓——震電改を飛ばすためだけのコンパウンドボウ——から放たれたのは、作戦の要の震電改、そして随伴機の紫電改二(紫電改二でも迎撃は可能だが、火力が足りない)が射出された。

『さあ——後悔しろ。そして慄け』

『貴様の行き着く先は、絶望だ……!!』

※ こちらの加賀さんは、敵っぽい言い方しますが味方です。

提督の艦隊が帰還するまで、残り30分。

## 47. トラック諸島防衛戦（後編） 十提督の決断

時は少し遡る……。

く加賀が交戦する十分前く

「準備は出来たな!？」

「準備は出来ています！ 搭乗どうぞ！——御武運を!!」

提督は地下にあるパウードスーツ専用工廠にある“迅雷”に搭乗した。

しかし、提督は迅雷に搭乗した途端、ある違和感が気になった。

「……少し全体的に重くなったか？」

『提督！ 前方にあるエスカレーターに移動お願いいたします！ 時間が無い為、説明しながらで!』

「了解だ」

提督はそういうと、前方の工事車両エスカレーターに移動した。

カタパルトに足を乗せると、ガコンツ!!という音と共に、足場が上に上がって行く。

『提督、“迅雷”のスペックを教えてください。』

まず最初に全体的にサイズが大きくなっています。大体1.2倍ほど大きくなっており、その分性能が接近戦専用機に近くなっております。

アーマーは、特許申請中のブレードアーマー。装甲の大部分がエツジ（刃）になっています。殴ったり蹴ったりしたらその攻撃が切れ味の凄まじい刃傷になります。

アジャイルスラスタは大型化しており、短時間限定ですが、空を飛ぶことも可能です。しかし、その分電気を食う為、多用はできません。なるべくクイックブレストのみでお願いいたします!』

「了解した!」

『武装は踵部分、爪先部分、肘部分にナイフを内蔵、更に膝に着脱可能なブレードの固定武装。膝の武器はブレードに電気を纏って突き刺すことも可能です。』

後の武装は好きなのを受け取ってください！ 大体見た目通りの武器です！」

「分かった。今回はこいつにするか」

提督は持ち出したのは、迅雷よりも大きいバトルアックスと、騎兵槍を持ち出した。

武器を取った途端、上昇していた工事車両用のエスカレータが止まり、青空が見えた。

前方には海に向かうように、射出用カタパルトが伸びていた。提督はカタパルトにある射出用のアンカーを足のフック部分に繋がれた。

『それでは、発進どうぞ！——御無事で！』

「了解！——吉川 春継！“迅雷”！ 出撃する！」

次の瞬間、ギャリリリリイイイイイツ！！という金属独特の凄まじい金属音と共に、“迅雷”は交戦海域方面に射出された。——いきなりゼロから音速レベルになった為、危うくブラックアウトしかけていたが。

「痛つつう……！！ 危うく交戦する前に血を吐くところだった……！！」

『マスター、接敵まで残り30秒』

「あいよ。まずは空母を抑える！——無明、スタンバイ！」

提督は、無明（バトルアックスの名前。名付け親は明石）を構え、

「ジェット、ブーストオ！！」

ゴバアツ!!という音と共に、刃の反対側からジェットエンジンの音と、青白い炎が噴き出た。それを、

「トマホオオオクツ、ブウウウメラン!!」

敵艦隊めがけてブン投げた。

因みにこいつの重さは、小型のジェットエンジン（但し物凄いハイパワー）も付けている為、重さは百<sup>キロ</sup>程。それが秒速100メートル、時速360<sup>キロ</sup>で飛んでくるのだ。それが当たったらどうなるか。：ちよつとしたSAN値直葬ものの光景が広がった。

「……なんか駆逐艦組や心の弱い方には見せられないスプラッターな  
ことになったな」

『ヲ級改2、チ級が轟沈、ヲ級改1、リ級フラ2が大破。残りのチ級2、  
タ級フラ、今回の指揮官と思われる“クリムゾン・リベンジ”が健在  
です』

「おう。さっさと終わらせるぞ」

そこに回りながら戻ってきた無明を片手でキャッチし、接近しよう  
とした時だった。

「——お前か。あれをやったのは」

ゾクツ！ と背中に氷が突っ込まれたかのような殺意を感じた。

「ンなるツ！」

片手で無明を持ち上げ、敵目掛けて横薙ぎしたが、そこには誰もい  
なかった。

『マスター、後ろです！』

「遅い……」

後ろを取ったクリム軽ゾン・リベンジ棲は、現状を把握される前に仕留  
めようとしていた。戦術的には何ら間違っていないかった。——こ  
いつじやなければ。

「やっぱりな！」

ザクツ！

「ぐっ……!?!」

「後ろを隙だらけにすれば勝手にそっちに来てくれると思っていたよ  
！ こちとらそれなりに修羅場くぐってんだ！ 小娘に負けられな  
いんだよ！」

踵に内蔵していたナイフで、クリムゾン・リベンジの腕に突き刺し  
た。同時に、提督は一つ違和感を感じた。

“ コイツ……深海棲艦独特の喋り方じゃない……？ 独自進化した  
類か!?”

「ふん……私を使い捨てた奴も、同じことを言っていた……。どうせ、貴  
様もそうなんだろう？」

「さあね。少なくともそいつは俺みたいに前線に出てきたことはあん

のかね!？」

「だからどうした。——私の名は復讐ノ紅<sup>クリムゾン・リベンジ</sup>…。人間に復讐するもの也!」

「復讐心に駆られた者が、俺に勝てるとても…」

無明を再び構え、

「思ってたのか手前はよオツ!!!」

再びブン投げた。しかし、

「どこを見ている……」

軽々とその攻撃を躲してしまう。

「チツ!」

舌打ち。

提督は高速移動しながら背中に収納していたもう一つの武器、騎兵槍「流星」をアクティブにセット、構えた。

「どんな武器だろうと、私の速さに当てられない。これは既に確定したものだもの」

「知っているか?——慢心ダメ・絶対という言葉をよ!」

ギユバツ!!と、またしても背後から強襲しようとした駆逐棲姫に<sup>クリムゾン・リベンジ</sup>

“流星”を突っ込んだ。だが、

「言った筈。誰も私に触れることも出来ない」

「慢心乙っ!」

次の瞬間、“流星”がバカンツ!!という音と共に刀身が開き、そこからレールガン<sup>銃</sup>が覗いていた。

「くたばれッ!」

ズドンズドンズドンツ!!と立て続けに発射。しかし、それでも致命的なダメージとはならなかった。

「無駄」

「無駄でいいんだよ。——思う存分ブチかませ」

『了解した。——新人、さっそく働いてもらうぞ!』

『やれやれ……ま、言われたらしっかりやりますわ』

『よし、装填完了! 一斉射ア!!』

「なっ!?!」

敵は驚いた。どうやって味方と通信を取ったというのか。

答えは簡単。長門が飛ばしていた零式水上偵察機によるライトによる一方通行のサインを送っていたからだ。

ついでに提督がそのサインを受け取ったのは、二回目の斧投げのとき。艦娘との信頼と性格の両方を獲得していなければできない技術だ。

「……成程。他の連中とは違うようですね」

しかし、それでも当たらない。

「それでも、掠りもしませんが」

『徹甲弾ならばな。——だが、三式弾なら?』

その瞬間、砲弾内部のマグネシウムや可燃性のゴムが入った焼夷弾子と非焼夷弾子が、広範囲に深海棲姫クリムゾン・リベンジに降り注いだ。

「なんツ?!? 貴方達の提督がいるというのに……!?!」

『だからこそ、だ。その隙が、有り得ないというその考えを逆手に取るのが、提督の戦い方だ』

「そういうことだ」

提督は三式弾の破片を浴びながら、敵にそう言った。

「さらに言うと、これだけじゃ無いと思うんだがな」

『正解だ』

「何を言ってる——」

深海棲姫クリムゾン・リベンジが問いかけた瞬間、背中から凄まじい衝撃が襲った。

三式弾と徹甲弾を混ぜて撃っているのだ。砲撃地点に提督がいるのにも関わらず。

『三式弾に混じって徹甲弾が飛んでくる……さあ、どう避ける?』

「関係ない。頭を潰せば、私の勝ち……!」

「成程ね。——ところで、後ろを気にしなくていいのかな?」

「ツ!?!」

深海棲姫クリムゾン・リベンジが後ろを振り向いた瞬間、右から再び衝撃に襲われた。

「があああああアツ!?!?」

何があったのか、衝撃に襲われた方向を見ると——提督が投げた“無明”が提督の元に戻っていた。

「まさか…あの斧が戻ってくるのも含めて奴の策というのか!？」

更に、二回目で投げた時に生き残っていた残りの千級2、夕級フラが速攻潰された。提督に意識を向けさせ、他の味方の存在を忘れさせる戦い方。主人公は伊達ではない。

しかも斧の直撃の所為か、右腕が千切れかかっていた。辛うじて皮膚一枚で繋がっている状態……。更に三式弾の所為か、自慢の速度が活かせ切れない状態でもあった。深海棲姫にとって、最悪の状態であった。

「さあ…そろそろ終わりにしてもらおうか？」

ニツコリと、しかしどう見ても親愛の笑みじゃない、どっちかという獲物を見つけた類の笑みを浮かべていた。心の弱い奴なら気絶しかねないオリジナル笑顔っぷりである。

「……ここは交戦するのは無謀だな。引かせて貰おう」

「それを見逃すとも？」

「出来るさ。——こうしてな」

パアンツ!!と、突如凄まじい光が、提督の目を襲った。

そして光がなくなつたのを確認した提督は、“迅雷”のレーダーを使って、すぐに深海棲姫を探索した。

「……チツ、逃げられたか」

『提督、大丈夫か!?!』

『提督、大丈夫?』

通信から、長門と加賀の声が聞こえた。

「ああ、無事だ。そっちは?」

『こっちは空母が全員中破・大破している。唯一無傷なのは私と雪風、夕立だけだ』

『こっちは巨大爆撃機を叩き落とせたわ。派手に爆発したから、恐らくかなりの爆弾を積んでいたのだと思うわ』

「……取り敢えず、全員帰還しろ。もしかしたらまた来るかもしれない」

『了解した。一つ、いい話もあるからな』

『了解よ。第一鎮守府に寄ってから戻るわ』

「分かった。全員、欠けることなく戻ってくるようになる」  
提督は通信を切り、自身も帰還したのだった。

「ヴィットリオ・ヴェネト級戦艦4番艦、ローマです。よろしく」  
「ああ。ゴタゴタしているが、後で長門か金剛に案内させるよ」

無愛想な挨拶を交わすローマだったが、提督は全く気にせずそう言った。

(出会った時の天龍に比べたら屁でもないしなーこの程度の挨拶)  
いかに最初の天龍が酷かったのかが窺える。

「分かったわ。……ところで、お姉さまはここにいるのかしら?」

「ああ、今では第一艦隊に入れるまでに、頼れるお姉さんになっているぞ?」

「……そうですか」

心なしか、ホツとした様な顔を浮かべたローマだったが、

ドドドドドドドドドドドド……!!

「? 何かしら?」

「ああ、先ほどイタリアに連絡したからな。多分それだ」

ズドバァンツ!!

「ローマァー! 会いたかったよお〜!」

「ちよ、姉さん!?!」

ドアを蹴破って入ってきたイタリアであった。……尚、イタリアは第一艦隊に所属したままであり、しかも中破している訳で。その結果、胸のメロンがヤバイ訳で。

しかし、イタリア本人はというと、そんなの気にしていないのか自分の顔をローマの顔にスリスリスリと擦り付けている。余程妹が来たのが嬉しいのだろう。姿恰好が青少年の目に毒というだけで。

「ああーつと……。取り敢えずイタリア? 君の恰好を考えてほしい



「んだけど？」

「へ？」

きよとんとしたイタリアだったが、自分の姿に気付いたのか、顔を真っ赤にし、

「キヤア!？」

「…ハア、相変わらず姉さんはなんか抜けているわね」

「やれやれ……これでも来てなさい」

自分の提督服の上着をイタリアに投げ渡した。投げ渡したのは本人が恥ずかしがっているのに近寄ったら可哀そうだったからである。

「全く……嬉しいのは判るけど、だからと言ってドアを蹴破って良い訳無いだろうに……」

「ホントにご免なさい提督。いつも姉が迷惑を掛けています…」

「私お姉ちゃんなのに…」

イタリアがシヨボーンな顔をしていると、加賀が提督室に入ってきた。

「加賀、ただいま戻りました」

「お帰り。じゃあ済まないがイタリアとローマは下がってくれ」

「分かりました。ほら、姉さん」

「あ、後でちゃんと返しますね」

そう言うのと、二人は提督室から出て行った。

「……さて、——加賀、現状の維持は出来そうか？」

「無理ね。第一・第二・第四・第五の練度じゃ、あつという間に駆逐されるわ。文字通りの、ね」

「やはり、救援要請すべきだな。…ハワイ諸島の姫の殲滅が、まさかこうなつたとはね」

「遅かれ早かれこうなるわ。提督、後悔してるの？」

「まさか。後悔はしていないさ」

「でしょう？ なら私たちのやることはただ一つ。そして貴方はこう命ずるだけで良い。——勝て、と」

「……なら、こう返そう。」

——勝つのは当たり前だ。

死ぬことは許されない。

犬死は許さない。

私たちの後ろには、守るべき市民がいる。

その市民の日常を守れ。

死ぬ覚悟ではなく生きる覚悟を持って」

「『そして、——全員、必ず生きて帰れ』」

「……トラック諸島に配属したばかりの頃、私たちによく言っていたからな。覚えてしまった」

「長門か。済まんかったな、帰還途中に砲撃してもらって」

「構わんさ。ローマも協力してくれたからな」

「じゃあ、第一艦隊戦闘長として聞きたい。——どんだけ持つ？」

「：長くても一週間。それまでなら、私たちの鎮守府なら持つ」

「分かった。——現段階で、トラック諸島の防衛は限界があると判断。舞鶴に救援を要請する」

数時間後。

「元帥。トラック諸島の吉川中将が救援要請が打診されました。可及的速やかに増援を要請することです」

「うん？ 吉川というと、この前先生と遊びに行つた？」

「ええ。『現在』ゾディアック』の脅威に晒されている。他のトラック諸島の鎮守府の戦力じゃ対抗できないとのこと。いかがいたしますか？」

「……あの提督が救援要請するほどまでに追い詰められているというのかい？」

「元帥なら知っているのでしょうか？ トラック諸島奪還作戦で一番の功績を挙げた提督が吉川提督なのを」

「ああ、あの後知ったから吃驚したけどね。…成程。〃分かった。急いで救援を送る」と

「了解しました。(…日頃の言動で勘違いされがちだけど、ちゃんとできるのに何でも…)」

これを機に、トラック諸島の防衛は強化。更に七名の提督の派遣を決定。第一・第二・第四・第五の提督はフィリピンに異動。更に新たに3つの鎮守府が建造された。

以下、移動が決定された提督である。

- ・有馬 美咲(アリマ ミサキ) 少将
- ・村上 竜乃助(ムラカミ タツノスケ) 少将
- ・金剛 了(コンゴウ リョウ) 大佐
- ・豊能 優太(トヨノ ユウタ) 大佐
- ・神代 緋鉄(カミシロ ヒテツ) 中佐
- ・坂本 明日香(サカモト アスカ) 大尉
- ・ジャツカル・ツヴァイク大尉

〃以下の七名はトラック諸島に向かい、吉川中将の指示に従え〃

「吉川君が助けを求めてくるなんてね。それほどまでに危険な相手とということかな」

『だろうな。こっちは急いでトラック諸島に向かう。この感じだとかなりやばいはずだ』

「こつちも急いで向かうから、村上君も無理しないでよ?」

『当たり前だ。あいつは大事なダチだ。助ける、絶対にだ』

「あら、トラック諸島に異動命令が来てるわね」

「お姉さま。いつそブツチしません?」

「それは出来ないわ。〃上〃からの命令ですし、私もお目に掛かりたいと思ったもの。——トラック諸島の守護鬼に、ね」

「今度はトラック諸島に異動かよ。何か避けられてない? 俺」

「むしろ生身で一つの海域を解放したら誰だって扱いにくいと思いますって」

「ボーキガリガリ食いなから言うなっつの。……そこには間宮のアイヌとかあるのかね?」

「噂によると間宮も伊良子のカフェもあるそうですよ?」

「よっしや急いで向かうぞ!」

「提督、トラック諸島の異動命令が来てますよ」

「マジでか。……アレ?トラックって…」

「あの“守護鬼”のいる場所ね。噂によるとかなりの激戦区になるのではというものでしたよね? お姉」

「ええ。…提督、いかがします?」

「向かうさ。結婚の金も必要だしな」

「明日香ー。トラックに異動だつてよー」

「ええ? 何でこんな時に異動なんて……」

「さあね? ま、トラックに行けば財産目当て・権力目当て・女ったらしのナンパ男・ナルシストのミュージシャン(笑)みたいな奴は来ないんじゃない? 少なくとも刺激はありそうよ?」

「むう……。めんどいけど、行くしかないかな? ……おいしいお菓子もあればいいんだけど」

「て、提督うゝ……。? 異動命令が来ているみたいよ……。?」

「……分かった」

ギョロツ

「ペイ!」

「……直ぐにトラックに向かう。準備をしておくように」

「わわわわ分かったわ!」

「……………(……そんなに怖がらなくても)」

合計八名による対ゾディアック部隊は、後の歴史家からこう言われ

た。

——彼らの活躍がなければ、トラックどころか、世界の危機であつただろう。

私たちは尊敬と感謝の念を込めて、彼らをこう呼ぼう。

“正義の味方”と

## 48. 第一波応援、現着!

「なあ金剛……」

「何かしら?」

「もしかして、お前もトラック出向なん?」

「もしかなくてもそうですよ。…あなたも元気そうで何よりです」

「まあ上の命令だしなあ……。はよ間宮のお菓子食べたい……」

現在、横須賀からトラック諸島に向かっている“金剛 了”と“豊能 優太”は、改いずも型護衛艦“むなかた”の甲板に立っていた。

改いずも型護衛艦 一番艦“むなかた”。

こいつの特徴はヘリを搭載するのではなく、簡易的な鎮守府としての役割を持つ船である。その代わり搭載している兵器は高性能20mm機関砲と投射型静止式ジャマー、自走式デコイのみ。艦娘との連携を前提としている為、レーダー機能はイージスと変わりはないが、完全に艦娘に頼り切った性能なのである。

今回、かなり危険度が高いと認定された為、新しく建造された“むなかた”と、二番艦の“つしま”の派遣が認められたのだ。

尚、二番艦の“つしま”は最終チェックの為、佐世保にいる。残りの人員が乗り込み次第、トラック諸島に向かう予定だ。

「第一さー、かなりの激戦区って言ってたから道中もかなり敵襲があるんじゃない?」と思ってたけど、まっつったく無いじゃねえか。平和そのもの」

「道中襲われたら堪らないって。無事トラック諸島に到着できればそれでいいわよ?」

「そうかもしれないけどさー」

「———何だ、敵が来るのがそんなに堪らないか?」

二人の後ろから来たのは、“村上 竜乃助”少将であった。

「はっ! 申し訳ありません!!」

「…はあ。トラック諸島に到着したらかなりの頻度で敵が来るから安心しろ。お替りし放題らしいしな」

「少将は、何故ここに?」

「ちよつと頭が煮詰まってな。サツパリさせる為に来たんだが」  
村上は、豊能をチラツと見て、

「……ま、逸る気持ちは今は抑えとけ」

「はっ、有難う御座います」

「食堂に伊良子の最中があつたから食べに行つたらどうだ？ お前さん好きだつたら？」

「まじd」

ズドガンツ!!

「ゲブア!？」

「失礼致しました」

「いや、今の奴アバラ打ちで悶えてないか……?」

「大丈夫です。淑女の嗜みですので——ほら、食堂に向かうわよ」

グデーン……となつている豊能をペチペチほつぺを叩いていた。

「おま……淑女の嗜み（物理）とか……!？」

「上官に対してタメ口で聞いたらいけないからでしょう?」

「お姉えーさまー! その汚い男から離れてくださーい!」

「誰が汚い男だコラア!？」

「いい加減お姉さまに近寄らないでください。お姉さまが妊娠したらどうするんですか!？」

「……お前ら、ここで暴れたら強制的に海に叩き込むぞ?」

「静かに致します! サー!!」

村上の無慈悲な一言に黙った二人であつた。その時であつた。

ヴーツ!ヴーツ!ヴーツ!ヴーツ!ヴーツ!

『コンデイション! レッド! 発令! 至急、艦娘は出撃準備を!』

「——喜べ、戦争の時間だぞ」

「だそうよ、豊能君?」

「だそうよ、ゴミ」

「何か? お前の所為? 扱ひされてねえか俺!? 後比叡こつちや来い」

早速、彼らに試練が訪れていた。

「ど、どんだけ湧くんだここ……!」

「トラックに近づかなくてもこれほどの敵の数ですか……」

「予想以上の酷さだな。雑魚とはいえ、物量で押されるのはこっちにとっては余り嬉しくない」

「」

「……比叡、寝るなら部屋で寝なさい」

あの後から、敵が退いては警報、退いては警報の繰り返し状態が続き、精神的にも肉体的にもクタクタになっていた。

後比叡は寝ているのではなく魂が抜けかけているだけである。

「トラックまでもう少しといったところだが、このままだと疲労が酷くなる一方だな。……まさか休みを与えないように連続して雑魚を送り込み、敵さんは主力を使つてないから大した損害は無い。……嫌らしい手口だな」

「効果的なやり方ですが……あれですね、人を数でしか数えないタイプのやり方ですよね」

「まあもう少しでトラックに着くし、もうチョイの辛抱で」

ヴーッ!ヴーッ!ヴーッ!ヴーッ!ヴーッ!

「また来たか!!」

「総員、戦闘準備! この戦いを凌げばトラックに着く! 気合入れてけ!!」

「了解! ほら比叡、もう少しですよ」

「ああ、お姉さま成分が、お姉ニウムが足りないんじゃないんじやあ、」

「……取り敢えず首根っこ掴んでひっぱつか……」

「敵艦隊、確認! 空母ヲ級2、戦艦ル級1、重雷3!」



「とつとと突破するわよ！ プリンツ、付いて来なさい！」  
「はい、お姉さま！」

敵艦隊に呐喊していくビスマルク・プリンツ。

敵艦隊が出現しているポイントは、“むなかた”がトラック諸島に向かう最短ルート上にいる。本来ならば遠回りしていけばいいのだが、村上の艦娘は大丈夫であるが、それ以外の艦娘の疲労が凄まじく、これ以上の無理は不可能と判断、強行突破ということになった。

尚、バックアップとして新型パワー道具“ガーンズバック スナイパー仕様” & “試製99型電磁投射砲 EML-99X”に搭乘している村上と、彩雲を準備している赤城に、何故かその横でスタンバっている豊能がいた。

「……何故いるの？」

「何故も何も元々俺は生身で海域を解放したことありますから」

「その時にボーキにつられた結果、何の因果か豊能提督の元にいますからねー」

「生身でか……。何かアイツとよく似てるよ」

「アイツ？」

「今回救援を要請した奴だよ。友人でな」

「そうなんすか？」

「ああ。生身なら多分最強クラスの奴じゃないかな。範馬勇次郎レベルの」

「オーガレベルなのか……」

「といっても優しい奴だよ。敵には一切の躊躇なく磨り潰すけど」

『提督、支援！』

「あいよ！」

村上は、試製99型電磁投射砲を構え、チャージを始めた。

試製99型電磁投射砲。

元々はアメリカのミラージュ社の物だったのだが、有澤がそれをパーク…もとい接收し、更に魔改造を加えたものである。

威力は横に並んだ大型タンカー十隻分まとめてブチ抜き余裕というバ火力。但し銃身が砲撃に耐えられない為、三発までしか撃てな

い。安全性をかなぐり捨てれば五発は撃てるが、銃身が弾詰まりで爆発するか撃った時に発生した熱で融解するかのどっちかである。

パワードスーツの背中に大型バッテリーを積むことでチャージ時間を短くしている。機動性？皆無です。

「よし、チャージ完了！ 狙い撃つ！」

次の瞬間、目が焼けるかと思うほどの光と、鼓膜が破れたかと錯覚してしまう程の音が発生した。

同時に、遠くにいたル級とヲ級の上半身が文字通り“消滅”した。射線上にいたとはいえ、移動している敵にジャストで狙い撃てる腕前。未恐ろしい奴である。

尚、主人公は真つ向からボッコボコにする模様。海軍学校時代、練習試合で畳をバラバラにしたバカの行動は一味違うということである。

しかし、

『敵、出現。反対側です！』

『それでは、豊能君。よろしくね』

『お姉さまの期待を裏切ったらサメのエサな？』

『比叡、いい加減にしないと——さん付けするよ？』

『いつてらっしゃいませやがれ豊能様アン!?!』

「へーい。——赤城、頼むわ」

「了解です」

赤城はそう言うと、彩雲を飛ばした。そして、彩雲が高度を低くし、豊能に近づくと、

「——ちよつと敵を倒しに行ってくる！」

「何だそのコンビニ的ノリ!?!」

思わず村上が素になつてしまう程の奇天烈っぷりを披露した。それは、彩雲に飛び乗り、そのまま新たに追加された敵艦隊に呐喊していった。誰だってそんなことしたら突っ込む。作者だって突っ込む。

しかし、彼の行動は無意味に終わった。それは、

『トラック諸島から高速で接近する物体有り！ 敵味方識別装置では味方…早い!? 早すぎる!?!』

『敵ではないのなら無視してください!』

『通信、入ります!』

『——よお村上。生きてるー?』

『勝手に殺すな! 後よろ!』

『あいよ。——エネミー! キイイルツ! ゼエエムツツ!!』

オオオオオオルツツツ!!』

「(……うん、アイツ疲れすぎてゐる所為かヤツバイこと言ってるな……

それでも助けに来てくれるのは嬉しいことだけど、なんかねえ……)」

ナチュラルハイって奴だアアアアアアア!!!な状態になっている  
主人公が助けに来たからだだった。……せつかくの見所がつぶされた  
当の本人はというと、

「うっわ、敵を引きちぎっては投げしてるって噂マジだったんか……」

噂の真偽がはつきり分かり、すんごくドン引きしていた。誰だつて  
敵を文字通り引きちぎっていたら……。

「いい加減に何度も何度も輸送船を襲ったりして来てんじゃねえええ  
え!! 時間に関係なく襲ってくるからお蔭で寝不足なんだよおおお  
お!!」

提督、魂の叫びを披露しつつ、村上らの船の救助を終わらせ、トラツ  
ク諸島に案内したのだった。

「ようこそ、トラック諸島に。歓迎しよう、盛大にな!!」

「もう敵からの盛大な歓迎を受けたのでいいです……」

「間宮のシュークリームでも?」

「旦那! 一生ついていきやす!!」

ズドゴツ!!

「アツチヨンブリケツ!」

「失礼致しました」

「気にしてないし、むしろある程度はつちやけてもいいんだがなあ……」

提督の（豊能にとつて）朗報に取り敢えず脇に一発キツツイのお見舞いした金剛さんであった。

「それにしても……君は……女の子じゃないよな？　骨格的にもかなり違うし」

「……よくお分かりですね」

「まあ偶に暗殺者を送ってくる国もあるからね。目は鍛えられているよ」

「オイ待て。初めて聞いたぞ」

「わざわざ言うべきことじゃないからな。言ったところでそいつは既に蝦蛄のエサになっているだろうし」

「（成程……。實力はかなり高い、ということですか。呉の海軍学校の伝説は本当と見てもいいかもしれませんね……）」

二人の会話を聞きながら、金剛さんはそう思っていた。

尚、海軍学校の伝説というのは、主人公と有馬・村上の三人が打ち立てた（やらかしたとも言う）出来事のことである。

「ま、雑談はこの程度にしておいて——どんな感じだ？」

「ぶつちやけ、あと二日遅かったらかなり拙かったな。助かった」

「まあここに来るまで途中までは何もなかったしなあ……もしかして」

「ああ、予想だが付近の敵もトラック諸島に集結してきているんだと思うぞ。物量作戦もおかしいレベルだしな」

昼・夜関係無くトラック諸島<sup>じこ</sup>に来ているのだ。精神的にもかなりキツかったのだろう。……その結果がああハツチャケっぷりになったというだけで。

「そうか。——待たせたな、こっからは俺たちも入る」

「頼んま。……こいつらは使えるのか？」

「大丈夫です。これでも指揮には自信がありますので、軍師的なポジション<sup>ポジ</sup>という風に考えていただければ」

「後そこで悶えている奴は生身で一つの海域を解放した猛者<sup>バカ</sup>だから戦

力として数えても問題ないしな。

それに、まだまだ援軍は来るから、最終的には防衛のみならず、攻撃に転ずることもできるだろ。問題は……」

「ゾディアックだな。ぶっちゃけ、俺も撃退に成功しただけだし、後から来るメンバーでどんだけ攻勢に回れるかだな」

「……現時点で対抗して撃退しているのがお前だけなのが悲しいな。もう少し情報が欲しいところだ」

「だ……誰か……俺に……アイスを……」

「そこはシユークリームじゃないの?」

「……ここ暫く忙しかった提督にとって、漸く休みが取れた日であった。」

## 49. 第二波応援、緊急事態発生 前篇

応援の第一陣がトラック諸島に到着した三日後、佐世保からある護衛艦三隻が出撃した。

改いずも型護衛艦二番艦 “つしま”

金剛型護衛艦六番艦 “こまごめ”

金剛型護衛艦七番艦 “つるみ”

計三隻の船がトラック諸島に向かっていった。

責任者は有馬 美咲少将。

次に搭乘している士官は

神代 緋鉄（カミシロ ヒテツ）中佐

坂本 明日香（サカモト アスカ）大尉

ジャツカル・ツヴァイク大尉

の三名。現時点では応援の中ではほぼ最高戦力の一つという扱いとなっていた。

若手のホープ二人に百戦錬磨の古強者の雰囲気纏う男。更に航空戦力として七本槍に挙げられる少将である。特に少将は大規模作戦の経験がある為、第一波の応援をプラスすると、防衛は十二分に可能——その筈だった。

「第一陣殲滅！ 第二陣、三分後に接近！」

「雲龍達は後退！ 神代中佐！」

「了解！ 千歳！ 千代田！ 出撃してくれ！」

『了解！』

「叢雲は引き続き“つしま”の護衛を！ ジャツカル大尉は出撃準備をしてください！」

『了解！ もう、トラックは目の前だというのに……!!』

『了解』

——“つしま”のCIC内では、怒号と蒸暑さが占領していた。

現在、〃 つしま〃 は敵の攻撃に合い戦闘、交戦していた。普通ならすぐに終わる筈の戦闘だったのだが、今回は予想を上回る数の敵が〃 つしま〃 に殺到した。その数、約50程。

その為、〃 つしま〃 はエンジンを完全に停止。トラック諸島に応援を要請した。

しかし、トラック諸島側にも敵が来ており、応援には暫く時間がかかるとのことであった。

「応援が来るまでここで踏ん張ります。皆さん、すみませんがここで脱落するようなことは一切しないで下さい。」

誰かを犠牲にする作戦は、する気も無いししません。——無事にトラック諸島に、皆で着きましょう」

……何か最終回じみたことを言っているが、ぶっちゃけた話未だにスタートラインにすら立っていないのである。悲しいなあ。

「こりゃあ予想以上の戦場だな。千歳、千代田。無理するなよ」

『うーん…多分無理かも。敵の数が多すぎるし、それに……二式から送られた情報では変な敵もいるみたい』

「変な敵？」

『うん、——灰色のオーラを纏ったチ級がいるって……』

更にヤバい敵が、彼女たちに近づいてきていた。

「この程度じゃないわよね？」

「この程度じゃ私たちの渴きは抑えられない」

「さあ、もつと」

「もつと私たちに」

「生きる実感を、殺す実感を寄越しなさい」

突如、〃 つしま〃 〃 こまごめ〃 〃 つるみ〃 に警報音が発された。

「どうしたの!？」

「敵艦隊、更に接近。第二波、およそ40!」

「全戦力を投入したの!？」

『……出るぞ』

「ジャツカル大尉、危険すぎます!」

『問題無い——何時ものことだ』

ジャツカル大尉は意味深なセリフを残し、通信を切った。

「大尉? 大尉!？」

「…ジャツカル大尉の出撃を許可します。明日香大尉」

「了解!——叢雲、〃つしま〃の護衛、それ以外のことはしなくていいからね!？」

『了解!』

「更に少将権限でジャツカル大尉所属の第六駆逐隊の出撃を。雲龍?」

『了解。あまりしたくないけど……』

「ごめん。——でも、ここで皆死ぬ訳にはいかないから」

『分かってるわ。天城は護衛として残しておく』

「お願い。…勝手な願いだけど、援軍が来るまで持ちこたえて」

有馬少将にとつて苦渋の決断であった。現在、〃つしま〃に搭乗している艦娘の大部分が駆逐艦か、空母勢なのだ。戦艦の攻撃力を持っているメンバーは少なく、現在持っているのは神代中佐の榛名・扶桑。有馬少将のローマ・重巡の妙高ぐらいなのだ。そもそも航空戦力をベースに組み立てている為、戦艦等の打撃陣は全く入れてなかったのだ。——それが、今になって最悪な事態になっている。

無論、駆逐艦のほかにも軽巡もいるが、駆逐艦同様、彼女らが本領発揮するのは主に夜戦。彼女たちの鎮守府では、昼ではあまり期待できないのが現状なのである。

「ジャツカル大尉! 敵は重巡をベースにした打撃艦隊です! 一発でも直撃したら即撤退を!」

『了解。——ジャツカル・ツヴァイク。出るぞ』

「引き続き出撃を! 雲龍艦隊はジャツカル大尉のフォローを!」

「千歳、千代田! 艦攻・艦爆、全スロット使え! ボーキ何ぞ気にすんな! 思う存分やってやれ!」



『了解。——さてつと、出来る限りの援護をしないとね』

『お姉。無理しちやだめだよ?』

『お姉ちゃんだもの。お姉ちゃんが頑張らなきゃ、ね』

——現戦力での防衛戦が始まった。

「先ず先方は…三体か」

ジャツカル大尉は、他の人間と比べ違うところがある。それは——艦娘の性能を持っているという能力だ。

今ではその外道な研究をやらかした研究所は“消滅”したが、そこから逃げ出したジャツカルを元帥が保護、今では元帥直属として活躍するほどの実力を持っている。

——無論、触れてはならない闇の部分にも。

話は変わって  
閑話休題

ジャツカルは腰に下げていた改造型試作51cmシヨットガンを構え、

「——先ずは、貴様からだ」

目の前の重巡り級に散弾をぶちまけた。

散弾で頭がザクロみたいにグシャグシャになったのを見た敵は、敵討ちだといわんばかりに砲撃を繰り返す。しかし、ジャツカルが頭を吹っ飛ばした敵を、ミートシールドにして攻撃を凌いでいた。

そして、敵の攻撃が収まったのと同時に敵に接近、そして

「二体目」

後ろの腰に吊るしてあった、斬艦刀二本を抜き、一本をり級の首を落とし、

「三体目」

二本目をり級の頭に投げ刺した。この光景を見た残りの敵は逃げようとしたが、

「遅い」

三体纏めて首を刈られた。

「……………ここから先は通さん」

「ジャツカル大尉、リ級艦隊を撃滅！」

「早い!? あれが、ジャツカル大尉の力ということなの…!?」

“ つしま ” の C I C 内では、ジャツカル大尉の脅威の殲滅に驚いていた。それはそうだろう、生身の人間が深海棲艦を倒しきっているのだから。

しかし、これを見た神代中佐は顔を暗くした。

「俺にも…あれぐらいの、いや、せめて海上に立てることが出来れば…千歳・千代田 あいつらと一緒に戦えるのに…!!)」

陸限定とはいえ、生身で軍刀で八級を叩き斬り無力化したほどの実力者だからこそその願望なのだろう。

実際は、彼専用のパワードスーツを所有しているが、先ほどの戦闘でシステムエラーが発生し出撃できず、現在整備員が急ピッチで整備している。

だからこそ、彼は焦る。

「頼む…早く、早く整備が終わってくれ…!!)」

しかし、彼の願いは神様には届かなかった。

『お姉ッ！ しっかりして、お願いッ！』

「！ どうした!?!」

『敵増援、例ゾディアックの敵の攻撃に…！ キヤア!?!』

『どうした!?! おい…おい!?!』

『どうしました!?!』

「敵増援、ゾディアックの攻撃で千歳被弾！」

「…拙い、救援にも行けない…!!)」

「クッ…！ 整備員、まだ終わらないのか!?!」

『待つてくさい、システムが完全にバグってて直すのに最低でも五分かかります!』

「もつと早くできないのか！」

『無茶言わんで下さい!?!』

「糞ッ！」

神代中佐は、壁を拳で殴った。その時である。

「レーダーに感！ 数は……三！ 援軍です！」

「ふざけんな！ そんな数でどうにかできるはずが……!!」

「待つてください！ 音速で接近する物体を確認！ 個体名“迅雷”です！」

『……すまない、レ級の群れに手こずった！ 救援に入る!!』

—— 漸く、援軍が到着したのである。

「通信が……！」

「これで、貴方達に援軍は来れなくなったわね？」

「まあ、通信機が壊れようが壊れまいが、援軍は来ないでしょうけど」

千代田は考えていた。

「(どうする!?! このまま交戦しても、勝ち目はない。でも、トマホーク・ハープーン程度じゃ倒しきれない……!!」

それに、千歳お姉の被害も大きい……なら」

「一応言っておくけど、君が艦載機を発艦させるよりも早く、私たちの魚雷が襲い掛かるよ」

「それでもいいなら、止めないけど」

「——馬鹿にしないでくれる？」

千代田は艦載機を出すための吊り手を固く握った。血が出るほどに。

「魚雷が怖くて——」

そして、後ろに載せていた艦載機取容箱からくり箱がバカンツ！と開き、吊り手

から糸が飛び出し、

「空母がやれるかあ!!」

「無駄だって」

「わからないの?」

艦載機を出そうとする前に、チ級フラの二体が魚雷を発射した。しかし、

「舐めないで!」

寸でのところで回避に成功。片手で千歳を回収し交戦しようとしたところだった。

空から声がするのだ。

「ホオアアアアアアア——」

その声はどんどん大きくなり、そして、

「チヨオオオオオオオオオオオオオツツツツツ!!!」

左にいたチ級にぶち当たった。

「なあっ!?!」

「キヤアアア!?!」

着弾と同時にドデカい水柱が起き、右のチ級がその衝撃で水切りのようにバウンドしていた。

そこに彩雲が低空飛行で突っ込んできた。

彩雲に掴まった男が言った一言目が、

「いってええええええええええ!! 固ツ!! ビックリするほど固ツ!!」

——ライダーキック擬き 豊能 優太が足をサスサスしていた。

「ビックリはしましたが、右腕を犠牲にすれば何ともありません」

水柱がおさまり、そこに立っていたのは、右腕が無くなっていたチ級であった。

「それでいいんだよ。師匠が来るまでの時間稼ぎだったんだから」

「時間稼ぎ?」

「———こういうことだ」

突如、チ級のいた場所が爆ぜた。

「チッ!」

しかし、相手もさること。この攻撃をギリギリで回避。そして直ぐ

にもう一体の手級が合流した。

「糞ツさっきので仕留めておきたかったんだがな……！」

「その千歳姉妹！……ここは俺が引き受けた！……とつとと下がれ！」

「何言ってるの!? 無理に決まってるじゃない！」

「阿呆！……お前の姉を守りながらは無理つつつてんだ！……いいから下がれ！」

「……分かった。後でお礼するから、無事でいてよ!!」

千代田は千歳を肩で担ぎ、そのまま戦線を離脱した。

「さあ。——いざ、参る!!」

“無明”を構え、提督は敵に突っ込んでいった。

「二十体目……！」

ジャツカルが交戦し始めて30分が経過。航空支援と魚雷支援のお蔭でどうにかここまで減らせたが、彼にも疲労が見え始めた。

「提督！……引いてほしいのです！……もうこれ以上は……！」

「そうよ！……あとは雲龍さんがやってくれて……！」

「そうか……！」

ジャツカルがその通信を受けて、後退しようとした瞬間だった。

「敵、更に増援！……駆逐イ級後期フラだと思われます！……数、20」

「そんな……!!?」

「……俺のことは気にするな」

「提督!!?」

「……いいんですね?」

「構わん」

「分かりました。なるべく急ぎますので、それまで耐えてください」  
「雲龍さん!!?」

『無茶だ、疲れている状態で重巡十体を相手するのは自殺行為——』

「大丈夫だ」

『提督……』

「…俺を信じろ」

『……分かったわ。直ぐに、直ぐに戻るから！』

暁が涙声で通信を切り、接近中のイ級の撃破に向かった。

「さて」

ジャツカルが息を大きく吸い、吐き出し、吸い、吐き出しを繰り返して、息を整えた。

「…行くぞ」

弾切れの改造型試作51cmシヨットガン<sup>ノッ</sup>を捨て、敵に躍りかかろうとした時であった。

「本日二度目のおおおおお——」

そう、またあいつである。

「ホアツチャー——————!!!」

今度は三体纏めてブルズアイ<sup>アイ</sup>に仕留めていた。

「チイッス！ 間宮のお菓子のお届け（強襲）でーっす！」

「……………」

「ちよ!? 無言で剣を構えんの止めて!?!」

シリアスな空気を蹴り壊したら誰だって警戒する。

「そ、そんなことより貴方に朗報！ 駆逐艦にも救援が向かってきているから安心してくれ！」

そして、もう直ぐ師匠から貴方にプレゼントだ」

「……贈り物？」

「そう！——お、来たな」

豊能が大空を見上げると、あるものが降ってきた。

ジャツカルがそれを掴む。

「……これは、メイスか」

「特殊ギミック付のが付くみたいだけどな」

そう喋っていると、リ級から砲弾が飛んできた。

「げえ!?!」

「……………掴まっつていろ」

ジャツカルが早速貫つたメイスを、振った。  
砲弾が面白いぐらいにメイスに叩き落とされる。

「…成程。いい武器だ」

「あー…ごめんけどお願いが……」

「…何だ？」

「上空に俺を飛ばして」

「分かった」

そう言うや否や、豊能の襟を掴んで、

「——ヌオオオリヤアアアアッ！」

「予想外のパワーだあああああ……」

上空目掛けてブン投げた。その後直ぐに彩雲が再び回収、再び大空へと戻っていった。

「……………」

ジャツカルはその姿を確認した後、

「さて——行くぞ」

メイスを握り、敵に躍りかかったのだった。

## 第64話

「オオオオオオオオオオオオツ!!」

ジャツカルにメイスが届いた頃、提督は“無明”を全力で振り回していた。

「無駄」

「無駄」

「ええい、ステレオで言うんじゃねえ!!」

しかし、提督の攻撃は悉く躲されていた。正確には、当たってはいるが受け流されているのだ。

「馬鹿正直に当たるのは愚行」

「当たっても衝撃を逃がせばダメージは少ない」

「だからって実行出来るかよ……!!」

「それよりも、そろそろパワードスーツの電池は大丈夫なのかな？」

「まあ、そのパワードスーツの電池を多く消費させるためにレ級をぶつけさせたのだけどね」

ギリツと、提督の口から血が流れた。

「まあ、後はこうやって時間を引き延ばせばいい」

「それで、チエックメイトだ」

「——それで、俺を仕留め切れると——」

提督は“流星”も構え、

「思ってたのかあ!!」

“無明”をブン投げた。

「当たらない」

「無駄無駄」

チ級の双子は、そう言い横にスライド移動した、瞬間だった。

「——え?」

右側にいたチ級が、後ろに吹っ飛んだ。

メキメキメキツ……!とチ級の体から異音が大きくなり、

ゴギンツ!、と

鈍い、骨の折れる音が聞こえた。



「……があああああああッ!？」

「お姉ちゃん!？」

「……ほう？・ 貴様が妹か」

左側にいたチ級妹が振り向くと、「迅雷」の姿が変わっていた。

黒をベースにしていた装甲は、焰のような赤い色に。

肩にあるアジャイルスラスタは、放出口から紫電を撒き散らし、

そして、顔は——鬼が、嗤っていた。

「…あり得ない」

「何がだ？」

「あの短い期間で、そこまでの、強化が出来るはずが」

「——お前、人間の底力舐めてねえか？」

「流星」を、再び構えた。

「こちらからお前らのような連中を相手し続けた先駆者英雄がいるんだぞ？」

「流星」の穂先が、紅い液体で濡れていた。

「俺たちを、生かそうと戦い続けた艦娘英雄がいたんだぞ？」

「迅雷」の体を、紫電が覆う。

「その人英雄たちの集大成の一つがコイツだ。——貴様たちとは思いの硬さが違う」

「思いなぞ、唯の幻想に過ぎない」

「なら試してみるか？——その時は、お前は八つ裂きになっているだろうがな」

そして、再び提督はチ級に躍り出た。

「行きなさい、流星！」

雲龍たちは、新たに出て来たイ級の群れを掃討していた。後期とは

いえ、十二分に対処可能と判断したからだ。

事実、練度の低いジャツカル配下の第六駆逐隊でも十二分に戦果を稼いでいた。注意するべきは精々魚雷を出させない程度だったから。だからだろう。——雲龍が間違っていたと気付くのが遅くなつたのは。

『戦艦ル級の群れ、更に接近！——雲龍隊の真後ろです！』

「え!?!」

「しまった……!?! これは囿!?!」

駆逐イ級の反対側に、戦艦ル級の艦隊が接近していたのだ。ご丁寧に爆音や魚雷音で気付かれないように移動しながらだ。

「暁たちは後ろに！ 戦艦は私が——ガハアツ!?!」

雲龍が暁たちの退路を確保しようとしたが、ル級の砲弾が直撃。艦載機が発艦不可能な状態に追い込まれた。

「雲龍さん!」

「ぐ……げほっ！ 貴方たちは直ぐに逃げなさい！ 今の貴女たちじゃ敵わない!」

「で、でも……!」

「しっかりしなさい！ お姉ちゃんなんでしょう!?! このまま皆で死にたいの!?!」

「雲龍さん……!」

「——ゴメンなさいなのです、お姉ちゃん」

暁と雲龍のやり取りを聞いた電が、突如ル級に呐喊していった。

「電!?!」

「電！ すぐ戻って!」

「直ぐに戻ってくるのです!! 魚雷を撃つだけ……それだけなのです!」

「駄目よ、すぐ戻りなさい！ 貴方では倒し切れない。直ぐに戻りなさい!早く!」

雲龍が電に戻るよう言うが、電はそれを無視した。

「分かっているのです。倒し切れないのは!」

「(でも、だからって……だからって雲龍さんを見殺しには出来ないの

す……)」

『電!? 戻って、お願い! お姉ちゃんの言う事が聞けないの!? お願いだからっ…返事してよお……!』

「(……ゴメンなのです、お姉ちゃん)」

——その一瞬の考えが、次の行動を遅れさせた。

ズガアンツ!!!

「あぐっ!？」

ル級の砲弾が、電に当たってしまったのだ。

水面をバウンドしながら、漸く止まった電が見たのは、

「——電!? しっかりして!」

自分の体を抱きかかえながら、泣きながら声をかける暁と、

「こおんのー!!」

「これ以上やらせない……!!」

各上<sup>ル級</sup>相手にけん制し合う雷・響であった。

「バカっ! 何で一人で行こうとしたのよ!？」

「……んりゅ……を……見捨てたく……なか……」

「電……」

『——皆、早く引いて!』

雲龍が通信越しで叫ぶのと同時だった。

砲弾が、真っ直ぐ暁たちに飛んで行ったのだ。

「お姉ちゃん! 電!」

雷が叫ぶが、とつくに回避可能距離ではなくなっていた。

暁が電の体を覆うようにした。代わりに自分が受けようとしたのだろう。

だがしかし、

「——間に合ったか」

彼女たちが見たのは姉が傷付く光景ではなく、

「……響・雷。——この子たちを、抱えて逃げろ」

彼女たちの、提督<sup>ジャッカル</sup>が砲弾を弾く光景だった。

『……ごめんなさい。あれだけ大口叩いていたのに、こんなことに』  
「…しようがない。俺たちにも、問題はあつた」

『——後は、私が責任もつて〃つしま〃まで送る』  
「分かつた。——聞こえたな？」

ジャツカルの問いに、暁・響・雷は頷く。

「よし——行け!!」

今の彼らには、これだけで良かった。

ジャツカルはメイスを持ってル級の群れに。

三人は、電を守りながら雲龍のいる場所まで後退した。

其処からのジャツカルの戦い方は、苛烈の一言であつた。

最初に会つたル級の顔にメイスを叩き込む。ル級の顔が異音をたててもげた。

更にその勢いを活かしたまま、メイスの先端を別のル級の腹部に叩き込んだ。これだけでも十分なのに、メイスの先端から、真つ赤に芯が熱せられているパイバンカーが飛出し、ル級のお腹の中身を海上にぶちまけた。後日この映像を見た奴がマールライオンと化した。

そして、突き刺さつたままのメイスを、敵めがけて投げ込み、それを弾いたル級の懐に飛び込んだジャツカルが、ル級の艦装をもぎ取つて、それを撃つたのだ。

そして、皆さんは知っているだろうか?——ル級の盾みたいな砲台の艦装の下は、かなり鋭利になっていることを。

ガゴシュツ!!と、その艦装でル級の胸を突き刺した。

「……さあ、死にたいのは誰だ」

この後、五分後に敵が殲滅されたのは言うまでも無い。

しつかりして、と女性のこえが聴こえる。

体のあちこちが熱を持ったように熱く、痛い。

段々意識がクリアになってゆき、気付いたら、

「——お姉！ 気が付いた!?!」

「アツツ……! 私、一体……」

「あの灰色のオーラのチ級に雷撃に襲われて、それにお姉が……」

「それに当たったのね……ゴメンね」

「気にしないで。もうすぐ着くから……」

その途端、千代田の体がガクツと倒れかけた。

「あぐっ……!」

「千代田、貴女……!」

「大丈夫、まだ動ける……!?!」

そう言った物の、千代田の体は動かない。それはそうだろう。あの主人公ですら手こずる相手を一対二で戦ったり、千歳の体を抱えながら戦ったりしていたのだ。とうに体の限界は迎えていた。

更に、嫌な予感は何に続く。

「駆逐イ級が放った魚雷がこつちに来ている……!?!」

ジャツカルが相手しているが、一人で相手しているのだからどうしても穴が大きくなる。

それでも、“つしま”に行きそうな魚雷は即潰しているのだが、それ以外の魚雷は基本的に無視している。——その流れ弾が、彼女たちに来ていた。

「動いて……お願い……だからあ……!?!」

お姉が動けない状態なのに、ここで動かなかつたら……!?!」

直撃まで、十五秒。

「お願い……誰か……!?!」

直撃まで、十秒。

「——……おおおおおおおおおおお」

「…えっ。この声は…!?!」

直撃まで、五秒。

「——チイエストオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!!」

直撃まで、三秒。

この時、彼は魚雷の信管のみを切り上げ、千歳・千代田姉妹を救助した。

「スマン、大丈夫か!?!」

「…提督?」

「おう！ギリギリ間に合って良かったわー!」

フルスキン状のパワードスーツなので、顔は分からなかったが、千歳たちには物凄い安心した顔が見えたような気がした。

安心した所為か、彼女たちに眠気が襲った。

「安心して寝とけ。新たな援軍も来たようだしな。」

なんならほっぺにチューでもしようか?」

「…その状態で出来ないでしょ」

「お姉の言うとおりね…」

そんな事を言っていると、いつの間にか意識を失っていた二人であった。

「でいいいやッ!」

提督が“無明”を、“流星”を、拳を、蹴りを放つ度に千歳<sup>妹</sup>の体が切り傷が出来上がる。

千歳<sup>姉</sup>は既に骸と化し、唯ひたすらに躲し続ける。

死にたくない為だけに。ひたすら避け続けた。

しかし、

「もう限界だよなあ?」

やはり終わりはある。

「最後の手向けだ。——迅雷、あれやるぞ」

『了解。——READY』

突然、迅雷の装甲から赤い光が漏れ出した。

「なっ!?」

千級妹が驚いた途端、右腕が切り飛ばされた。

「ぐううううううッ!?」

迅雷の姿が視認出来ない。

唯一つ確認出来るのは、——もう、助からないと、いう事だった。

胸に凄まじい衝撃が襲われた。

その衝撃で、千級妹は大空へと飛ばされた。

「豊能! トドメは譲ってやる!……!……! 発決めてこいッ!」

「おうッ!」

豊能が彩雲から飛び出し、

「ホアツチヨ……!……!……!……!……!」

千級妹の胸部を、ブチ破った。

「……………?」

ジャツカルは、敵の動きに違和感を感じた。

敵が引いていくのだ。それも、四方八方に。

「……………終わったか」

恐らくこの戦いで、最も戦果を稼いだ男の、戦いの終わりを告げる言葉だった。

こうして、トラック諸島に8人の猛者が揃った。

## 第65話

第二応援隊到着して数日経った。今は敵の攻撃が止み、気味が悪い程、何も無い日が続いた。

恐らく、敵は再編成を行っているのだろう。敵の本拠地が判れば攻撃のしようは有るが、現在、提督たちがいるトラック諸島では新しく建造された鎮守府の改装が行なわれてた。と言っても自分好みの“居場所”を作っているだけなのだが。豊能は間宮さんを引き抜きしヘッドハンティングに行ったりしたが、幼馴染金剛さんに淑女の嗜み（物理）されたりしていた。と。どうか彼以外は普通だった。流石間宮印のお菓子狂いだけあってアブローチは熱烈だったらしい。速攻フラれたが。

そして、No. 双子6による被害も大きく、特に神代中佐の千歳・千代田姉妹は暫く出撃出来ない程であった。ジャツカル提督の電は、幸いにもバケツで如何にかなる程度の怪我だった。と言っても脳震盪を起こしていた為、念の為に3日程安静にしてみらったが。今では吉川提督の駆逐艦しごかれてに揉まれている。理由は、応援に来た中で一番練度が低いからだ。

だったら何で応援に来たんだよ……と思ってる方もいるだろう。その答えも非常に簡単。ジャツカル本人の戦闘力の高さ。そして……吉川艦隊を当てにしているからだ。

前回、戦闘を見た方はお分かりだろうが、ジャツカルの戦闘力の高さは凄まじく、前回の戦果は

重巡が20。

戦艦が10。

駆逐艦が数隻。

途中からメイス貰ったり、雲龍らの援護もあつたとは言え、これ程の戦果は中々挙げられない。ジャツカル自身の特異性も有るだろうが、並大抵の実力者では無い。

そして、第六彼女駆逐隊は彼のことを父親のように慕っている。……顔が非常におっかない所為で、偶にビビる事もあるが。



だが、彼が彼女ら自分らを庇いながら戦うのは幼い彼女たちでも分かった。——無理だと。

そこで白羽の矢が刺さったのが吉川主人公であった。事実、彼が率いる水雷戦隊は個人（夕立とか川内とか時雨）だとトップクラスの實力者なのだ。特に川内は以外にも（？）教えるのが上手く、評判の良かった。

彼女を引き抜こうと画作しようとした連中もいたが、後日、ケツにロウソク刺さった状態で公園のトイレにいた話もあった。真実？……知らない方が良い事もある。

まあそんな事はどうでも良い  
閑話休題

彼女らは後日、吉川提督の元に行き、教えを請いに来、吹雪たちと一緒に特訓をしている。

唯、彼女らと吹雪の体力差は凄まじかった。どんぐらいかとうと、第六駆逐隊の中で体力のある響が鎮守府一周していると、吹雪は三週半回っている程。尚、この段階で響はグロッキー状態。対する吹雪は軽く肩を息する程度だ。因みに島風だと10週は軽く回っている。速い（確信）。

なので技術面では無く体力面を鍛える事になった。……その後、筋肉痛で悶えてしまい、ジャッカルから心配するような顔を向けられるが、徐々にではあるが体力もついてきているので近いうちに筋肉痛は無くなるだろうが。

神代中佐が駆るパワードスーツにも触れておく。

神代中佐が所有しているパワードスーツ、“天野幅切”（アノハバキリ）は、“迅雷”と同じ様に従来のパワードスーツから懸け離れたコンセプトの元で作られている。

この天野幅切は、何とバック換装無しで空を飛ぶことが可能なパワードスーツなのである。迅雷も一応アジャイルスラスタードで跳ぶ事もできるが、あくまで“跳ぶ”、つまり一時的な飛行なのに対し、天野幅切は鳥の様に飛ぶ事が特徴なのである。

両腰にラムジェットエンジンを積み、その莫大な推力で飛ぶのだが、実は弱点が幾つかある。

一つは装甲が薄い事。

二つは空間認識能力が高くないと乗りこなせない。以上の二つである。

装甲の薄さは、飛ぶ為に装甲が最新の空力カウルが使われているのだが、やはり重さがネックになっていて如何しても厚さが薄くなってしまふ。被弾が命取りになってしまう機体になったのだ。

二つ目はやはり空中に飛び続けなければならないので、下にも注意しなければならないのだが、敵艦載機の攻撃や、対空砲撃にも気を配わなければならない。結果、空間認識能力が高くないと乗りこなせないというダブルパンチを喰らった機体なのだ。コンセプトは“エアードミネーター制空権支配者。かのF22と同じコンセプトである。

製作会社は三菱重工。元は陸軍の採用コンペティションで作成されたのだが、二つの弱点が原因でアメリカのミラージュ社が作り上げたMシリーズで総合評価が高かった最新作のM9“ガーンズバック”が正式採用された。当たり前っちゃ当たり前である。

尚、村上少将が駆るガーンズバック 狙撃仕様もこのシリーズから派生した物のカスタム品である。

倉庫の中で眠っていたコイツを神代中佐が安値で買い取ったのだ。捨てる神あれば拾う神有りである。

本人の適性も高く、問題無く繰り出せたのだが、下手したら高い金出してゴミを買ったかとも思うとゾツとする話である。(尚、後日千歳姉妹から怒られた模様)

基本武装は、斬艦刀 疾風が二本。状況に合わせて30cm滑空砲、14cm機関砲がプラスされる。

まあそんな事はさておき。

彼らは短いながらも思い思いの休暇を過ごしていた。

「くっそー。流石に間宮さんや伊良湖ちゃんを引き抜けなかったか……」

「当たり前でしょう。貴方だけに優先する訳には行かないんだから」  
「そうだけどさー。俺、甘いのがないと禁断症状が出るんだ……」  
「悪いことは言わないから一回断つのをお勧めするわ。このままだと糖尿病になるよ?」

「おう考えるわ。……そろそろか?」

「そう言えば吉川中将が来るんでしょう?そろそろアイスを食べ終えたら?」

「んー後もう一個」

そう言つてアイスに手を伸ばす。が、

「お前は食い過ぎだ。自重を覚えろ、ちつとは」

我らが主人公、吉川提督が横からアイスを掻っ攫ったのだつた。

「全く、話があるからと聞いてみればどんだけ食つとんだお前は」

「まだ五個ですぜ?」

「食い過ぎだよバカタレ。で、話つてなんだ?」

「あ、そうそう。コイツなんですがね? 直してほしいんですよ」

そう言つて出されたのは、変わった形のベルトと、スイッチの形をしたコネクタだった。

「……何ぞ、これ?」

「変身ベルトです(ドヤ顔)」

「叩き折んぞ」

「ゴメンなさい。でもマジなんですよ……」

「……あのな? 冗談じゃなかったら頭がパーなんじゃないかと勘違いされてもおかしくないという事は理解してんのか?」

「理解してますよ。彼は」

吉川の問いに金剛さんが答えた。

「本人も今の今まで忘れてたそうでしたが、夢でこのベルトとそっくりなのが深海棲艦と戦っていたとかで、探してみたらベルトが光っていたそうです」

「……だが実際動かしてみてもウンともスンとも言わない、と?」

「そういう事なんすよ」

「……………ハア」

提督は深くため息を吐き、

「分かった。一応調べてやる。と言ってもあまり期待すんなよ?」

「あがしやつす!」

ドゴオ!

「オベロンツ!」

「……………今まで見過ごしたけど、幾ら何でも失礼」

「別に気にして無い。公の場所でしたっぴかりすりやいいさ」

「だそうだけ……………」

ズバアン!

「テイターニアツ!」

「だからってタメ口で良い理由にはならないでしょう?」

親しき

仲にも礼儀有り、よ?」

「これはいいんか……………!」

「んじや、俺は鎮守府に戻る。あまり店の迷惑を掛けないように」

提督はそう言つて間宮の店からでたのだった。

一方、神代中佐はと言うと、

「ホレ、林檎だ」

「ありがと」

甲斐甲斐しく、自前の短刀で林檎をカットして千歳姉妹にアーンしていた。ナイフじゃ無く短刀でカットしているとか最早手足の延長である。

折角の休みを看病に使っている部分、心から彼女たちを愛しているのだろう。お熱いことである。

一方、坂本大尉とジャツカル大尉はと言うと、

「……………」

「紅茶のお代わりは如何でしょうか?」

「有難く」

喫茶店”伊良湖”で英国式ティータイムを送っていた。

尚、デートと思う方もいるだろうが、デートでは無い。ただ単に行き着いた店が同じだっただけである。

厳つい強面の男と見た目が榛名そっくりな十代に見える美少女(歳は2 (ry))……。完全に男避けです。本当にありがとうございます。いました。

まあ、当の本人は気にしてもいないらしく、紅茶をガブ飲みしていた。

尚、二人がトイレに近くなったのは言うまでも無い。

残った村上少将と有馬少将はと言うと、

「みんなは休暇を満喫しているんだろうなあ……」

「文句言うなって。俺たちは外に出れないだけじゃないか」

「まあね。吉川君もしっかり楽しんでもいいんだけど」

残り番をしていた。全員が休暇に入る訳にはいかない以上、誰かが貧乏くじを引かなければならなかったのだが、最も階級の高い吉川中将は休み無くトラック諸島を防衛していた為、艦娘の休暇を兼ねて強制的に休ませたのだ。

無論、居残り番でも半舷休息を取っている。ブラック鎮守府とは縁遠い。

尚、まさか提督が珍妙なベルトを持って帰ってきた時は頭がどうにかなったかと思われたのだった。

こうして、彼らの休暇は過ぎてゆく。

## 第66話

「密航者？」

「豊能大佐が補給船の中にいたのを確保、現在彼が責任持ってやっているとのことでしたが……」

「でしたが？」

「……まあ本人を見た方が早いですね」

コンコンツ。

「どうぞ」

「失礼します」

「……ブホツｗｗｗｗ」

提督と加賀の前に出てきたのは、——小さい子供達に囲まれている豊能であった。尚最後に笑ったのは提督である。

何故、豊能大佐がこんな状況になっているのかというと、

アメリカ発・ハワイ経由の輸送船がトラック諸島の港に向かっていった。

港に入る前に入港許可証を船長に渡すことと荷物のリストを受け取るために、一番港（民間）に近かった豊能大佐が輸送船に向かった。

その仕事が終わった途端、何かガヤガヤと騒がしくなった。

向かってみたら、見た感じ4、5歳程の子供達が倉庫の一番後ろ（人目につかない場所）に乗っていた。

酷く衰弱していたので、豊能大佐が子供達を保護、病院に。

結果、このザマだよ！ とのことらしい。そりゃ衰弱している状態で保護してくれた上に飯や衛生面でも助けてくれれば懐くのは当たり前である。

後、補給船の船長は本当に知らなかったらしく、一時、ウォーカー（正式な手続きをせずに国と国を股にかける上に難民を送る者の総称。無論違反のため、即捕まる）の疑いもあったが、裏も綺麗なものだったため、翌日にはインドネシアに向かっていった。

別に提督としては保護するのは別に問題は無かった。極偶にはあるが、密航で来る子供が過去にいたからだ。因みに密航した理由は『日本に行きたかった』とのこと。（当時のアメリカは色々ヤバく、第二回ウォール街の悲劇が起こったり、南米の難民が押し寄せてきたり、更に深海棲艦の影響で海沿いの民間の港の数が激減したりと悲惨の極み状態だったのだ。金融的にも就職にもガツタガタだったのである。しかも今でも難民問題が続いているのだ）

問題は、その子供達のこれからである。本来なら強制送還が当たり前なのだ。（過去の子供も強制送還した）

あまり接しすぎると、情が湧いてしまい、色々拙いのだが……。

「なあ……そろそろ離れてくれ……」

「やー！ パパから離れたくない！」

「ブツハｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」

（もう）だめみたいですね……。

因みに先ほど喋った子は日系ブラジル人のジュリイ・美風。親から日本語を教えてもらい、普通の日本人レベルの語学力と、ブラジル・英語も喋れるトライリンガル<sup>三言語者</sup>である。弱冠六歳でトライリンガルとか天才じゃなからうか。

「あー…すまないが、これから君たちのパパ「オイイ!？」に話があるから、悪いけど話してやってくれ。君たちの前じゃ言えないことがあるからな」

「むうー……」

「お、そうだ。ここに明石のアイスクリーム券があるから、このお姉さんと一緒に行くといい。加賀」

「承りました」

「やったあー!! 皆、おじさんがアイスおごってくれるって！」

カチーン……。

「プギヤーム9（ハハ）」

……子供の無邪気な発言で、一瞬で瞬間冷凍した提督であった。散々笑われた所為か、お返しといわんばかりに笑い返してくる豊能が提督室に残り、加賀と子供達は明石の店に向かっていった。

豊能と提督の二人きりになったのを確認した提督は、先ほどの霧囲気を変え、豊能に問いかけた。

「……さて、子供達がいなくなったから、聞きたいことがある」

「……やっぱ子供の件ですか？」

「ぶつちやけ、強制送還か孤児院に預けるかのどつちか。」

強制送還は下手すると強制送還先で餓死してしまう可能性が出てくる。

孤児院は……ぶつちやけお奨め出来んな。場合によっては子供達を食い物にする連中もいる」

「……このままで維持するのは、無理っすかね？」

「無理とは言わないが、そうすると格差が生まれてしまう。＼あいつが良くて自分がダメ＼なことになると、下手すると逆恨みで殺されてしまう可能性だってある。親子関係無くな。」

「それに、子供達を養える程の潤沢な金は持っていないだろ？」

「……………」

子供達をどうするか、顔には出さなかったが、彼自身もかなり苦悩していたようだった。

「子供を大切に思う心は大切だ。美德とも言える。——だが、そいつらの人生を、一生を背負える覚悟はあるのか？」

答えは、無言であった。

「背負えないなら、あまり接しない方が良い。金も無く、覚悟もない状態で預かってても、全員不幸になるだけだ。」

「まだ過去にこんな人がいたと言われる位が良いさ」

線引きをしろ、と。

提督は、言外でそう言っていた。

「最終的な決断はお前自身が決めることだが、決断は早いのが良い。これだけは覚えておいてくれ」



俺自身も、歩いた道だしな、と。提督はそう言っていた。

「そう言われても決断できるかあー!!」

豊能は自分の鎮守府で大声を出していた。そりやあそうだろう。そう簡単に出来るのならとつくにやれているのだから。

しかし、提督の言っていることも正しいのも事実であり、子供達の一生を背負えるのかと問われると無理なのである。

「でもなあ……」

子供達が自分を慕ってくれている上に、アメリカには帰りたくないと言っているのだ。何とかしてあげたいと思うのが人の情というものである。

「ねえ」

しかし、あの子達を優先しても事態が好転する訳がない。

「ねえねえ」

どうしたもn

「ねえってばーッ!!」

「ソゲブツ!?!」

腹部に凄まじい衝撃に襲われた豊能は、その痛みに悶えながらその正体を確かめてみた。その正体は――

「もーパパ何で無視するのー!?!」

「それはね、パパじゃないからだよ」

美風ちゃんであった。豊能をパパと言う辺り、一番好かれている子供でもある。

「……なあ美風ちゃん。親とかいないのかい?」

「……父さんは、海に出かけたきり帰ってきてない。母さんも、病気で

「……」

「……ゴメン、わりいこと聞いちゃったな」

「ううん、気にしてない」

美風ちゃんはそういうと、豊能の胸でスヤスヤと寝始めた。

「……どうしろってんだ」

ますます悩みが深まった豊能であった。

「で、結局手も打たなかったのね？」

「打てる訳ねえだろ！ あんな可愛い子を強制送還出来ねえって！」

数日後、金剛さんが豊能の元にやって来た。理由は豊能の仕事に迷いが見えているからだ。

気になって来てみれば、こういう事情だったことが分かり、取り敢えず安心した金剛さんであった。

「でも何かしらの手を打たなかったのはかなり拙いよ？ ……中将閣下は、なんて言ったの？」

「……その子達の未来を背負える覚悟が無いなら、あまり接しないほうがいい、とは言っていたな」

「妥当ね」

「時既に遅しって感じだがな」

「開き直っている場合？ 早く何かしらの手を打たないと……」

尚、その話題になっている子供達は、比叡・赤城の二人が相手している。比叡に関しては金剛さんの傍にいたかったようだが、その本人が子供達の相手をするように言われた為、この場にはいない。

「他に、なんか言われなかった？ この行動をしてはいけないという、何か行動の制限みたいなのは？」

「制限ねえ……」

金剛さんに急かされ、数日前の、提督の言葉を思い出していた。

「……いや、特には言われてないな。唯、あまり鼻屑にすぎないようにとは、言われたが」

「ならチャンスはあるね。というか遠まわしに許可してない？」  
「どこがだよ」

「鼻屑にしなければいい。つまり、彼らに何かしらの仕事を与えればいいんじゃないかしら？ それなら、鼻屑にならないと思うんだけど」

「調べたけど、ゴミ拾いがお仕事という子供に特別な仕事なんぞやらせたら大量の子供がやってくるぞ？ 人の噂は早いしな」

この“ゴミ拾い”は隠語でもなんでもなく、文字通りのゴミ拾いで

す。  
「なら、養子にするとか」

「考えたけど、俺にべったりな段階で引き離せると思うか？ 引き離

そうもんなら凄え金切声で叫ばれそうだぞ」

「……………養ったら？」

「5人分の子供を養える金も無えよ！」

尚、この世界の大佐クラスの給料は基本給が35万程。更に危険手当や戦果・貢献度で変動する為、トータルすると平均50万程となる。豊能大佐と金剛大佐が21歳という年齢を考えると凄まじいお給金である。

中将クラスだと基本給が60万。そこに先ほど言った危険手当や貢献度をプラスすると、100万程。更に吉川中将はパワードスーツのテストパイロットも兼任している為、更に金額がアップ、トータルで150万程である。更にボーナスも。基本的に休暇という休暇もあまり得られないブラック（但し本国で鎮守府を構えた場合は割と平穩）でもあるが、その分のリターンも考えるとドッコイドッコイな金額でもある。提督業も楽ではない。

しかし、二人ならいざ知らず5人も養えるほどの金額ではないのは確かである。子供の教育代はシャレにもならん金額なのだ。

「うーん……………他には…」

「……………正直な話、彼らを死んだことにしたほうが一番穏健な気がオ  
ブウ!？」

「言つて良いことと悪いがあるよ？」

豊能の発言を即気付けでボコる金剛さんであった、その時である。けたたましい警報が流れたのだ。

『こちら、上空警戒班！ 第二鎮守府周辺に敵潜水艦を確認！ その数、10！』

『第二つて…』

「俺んところじゃねえか!? ああ、糞ツ！」

「悪態ついてる場合じゃ…!」

『敵、更に増えました!』

『これは一体何だ!? 形がハッキリしてねえぞ!?』

陸軍パイロットが驚きの声を上げる。

『こちら、第三鎮守府。形がハッキリしてないとはどういうことですか?』

『文字通りの意味だ! ル級の形をしたかと思えば、ヲ級の形をしたりと変身しているんだ! しかも変な色のオーラまで出てるしよお!』

『何色ですか?』

『群青色だ!』

「……なあ、異なる色のオーラっていうことは」

「ゾディアック、ですね……」

再び、強敵が現れた。

『敵、上陸を開始! 急いで対処を!』

上陸という、最悪な状態で。

「豊能提督! ご無事ですか!?!」

「何とか、なっ!」

「比叡、子供達は!?!」

「全員そろってる! でもこのままだと……」

あの後、即外に出た豊能達だったが、既に敵が上陸を開始しており、

工場は完全に制圧されていた。

子供達も危うく捕らわれかけたが、赤城と比叡の二名が子供達を守ってくれていた為、全員揃っていた。

しかし、敵の数も多く、陸に上がっているから耐久度や防御力もかなり低くなっているとはいえ、敵の数も多い。豊能自身も、一人二人ならある程度の数ならどうにかなるが、流石に大勢を引き連れて移動するのは無理があった。

現在は食堂に集まっており、工場から一番遠い場所にいるのだった。

金剛さんは武の才能は全く無いので戦力外。

子供？ 論外。

比叡は……当てに出来るが、優先度が金剛さん至上主義レベル。

赤城は……陸じゃお荷物となる。

今この場で頼りになっているのは、豊能だけなのである。

「工場の機装預かり所まで行けばどうにかなるけど、そんなことは敵も分かっている、か」

「んで、どうすんの？ 私が上空目がけて投げても良いけど」

「お前に投げさせたら壁にめり込みそうだからいいわ。」

艦載機の一つでも飛ばせれたら、いつもの行けるんだがなあ」

比叡の冗談（本音混じり）を受け流しつつ、工場の奪還の方法を考えていた。

建物の屋上からイーグルダイブ（怪鳥蹴り）……そもそも鎮守府内で一番高いのが工場（四階）で、あとは三階建てばかり。

地下から……その地下の地図が無いので行けない。迷子にでもなったら笑い話にもならないし。

おとなしく救助を待つ……それしか残ってない。

「救助が来るまで待つしかないだろ。この状態で工場奪還は無理だし」

「まあそれしかないでしょうね……」

豊能の言葉に赤城が賛成した。他のメンバーも賛成したようである。

「しっかし、一体どつから侵入してきたんだ連中は」

「確か、ここに来るまでもリーダー兼デコイのユニットを囲むように置いてるって話だったよね？」

「接近したら即警報が鳴るのがな」

「となると……裏切り者がいるとか？」

「考えたくもないけど、その可能性は高いですねー……」

「まあ少なくとも俺たち提督側じゃないだろ。提督側にはシステムの干渉権は無いし」

そう話し合っていると、通信が入った。

『第二鎮守府、豊能中佐！ 応答を!!』

「こちら豊能。こちらは無事です」

『こちら第三鎮守府、大淀です。現在、救助隊がそちらに向かっています。現在の場所を教えてください』

『第二鎮守府食堂二階です』

『了解しました。——提督、お願いします』

「……ん？ 今提督って」

次の瞬間、窓ガラスをブチ破って入ってきたのが現れた。

「ッ!?!」

豊能と比叡は即身構えたがその姿を見て警戒を解いた。その人物とは、

「無事か!?!」

「!!」もう少し落ち着いて入ってくれ（ください）!!「!!」

豊能から預かったベルト一式と、変な形の籠カントレット手を付けている吉川提督であった。

「子供達は海に連れて行けば全員助かる。工廠は…時間を稼げばいい。簡単な仕事だろ？」

「簡単じゃないんですがそれは……」

「何言ってるんだ。人質救出と並行してテロリスト殲滅すんのとどつちが楽と思ってるんだよ」

「どつちもです」

吉川提督がそんな無茶ブリを言いながら、豊能にあるものを渡した。

「今のうちにこいつベルト渡しておく。それにしてもこのベルト、この技術じゃできない物のオンパレードだったぞ」

「……え？　もしかして直ったんですか？」

「ウチの技術明石・タ張スタッフに不可能は無い」

といつても、配線の一部が切れていたただけだったみたいで直ぐに出来たと言っていたがな、と提督はそう言った。

「変身機能がついてると聞いた時はどこぞのヒーローかと思ったわ」

「変身ってことは、ウルト○マ○みたいな変身っすか!？」

「んな訳ないだろ。腰のベルトを介して変身するみたいらしい。コネクタを繋げると出来るらしいが俺は出来なかったしな」

「……もしかして、ベルトが意志を持っているんですか？」

ベルトの説明に金剛さんがそう言った。幼馴染なのもあるのだろうが、心配しているのだろう。

「多分な。ま、お蔭で新しい変身機能の奴も開発しやがったが」

「…もしかして、変な形の籠ガントレット手ですか？」

「ああ。こいつは——」

次の瞬間、食堂のドアがこちら目がけて飛んできた。

「——伏せろッ！」

近くにいた金剛さんの頭を押さえ、地面に伏せたのと同時に重厚なドアが頭の上を掠った。

「——見いつけた」

そこに現れたのは、群青色のオーラを纏う、ナニカであった。

「金剛、比叡！　ガキ共を連れて逃げろ！」

「しかし！」

「いいから早く！　豊能！　いきなり本番だがやるぞ!!」

「このタイミングでとか嫌になるわ畜生！」

豊能がそう大声でぼやきながら、吉川提督から渡されたベルトを服越しに装着したのと同時に

『METEOR READY?』

と、音声が出た。

提督は、ポケットからスマホを起動させ、5のボタンを三回押し、通話ボタンを押した。その瞬間、

『STANDING BY』

と、音声が出た。

そして、

「**「——変身!!」**」

豊能はベルトについている真ん中のパーツが輝き出し、

『COMPLETE』

提督はそのスマホを、腕の籠ガントレット手にある接合部分に装着した。

豊能は青と黒をベースにした左右非対称の、隕石をイメージしたような形に。

提督は赤と黒をベースにした、頭がΦのようなデザインの形に。

「お前の運命さだめは、俺が決める!」

「ガキ共に手も足も触れさせんぞオ!!」

「アハハハハハ! 新しい玩具が見つかったあ♪」

目の前の強敵に、躍り出た。



## 第67話

「なに……これ……」

金剛さんの目の前に現れた二人の姿に、驚きを隠せなかった。子供達は目を輝かせて二人をガン見していた。

群青色のオーラを放つナニカは、

「あはははははは!!」

笑いながら二人の攻撃を受けていた。いや、正確には“受けていた”ではなかった。

「糞っ！ 攻撃が効かない!？」

「違う、攻撃が徹つてないんだよ！ 体が霧みてえだ！」

そう、二人の攻撃が効いてないのだ。敵の体と、その周りに黒い霧のような物が出ており、パンチしようがキックしようが文字通りに霧を蹴っているような感じなのだ。更に、

「無駄無駄無駄ア！ 効かないよのーん!!」

ズゴアアツ!! と、手から衝撃波をぶつ放すというふざけたस्पックであった。

回避するだけならできるとは、金剛さんが逃げ遅れた所為でその攻撃を相殺せざるを得なかった。

「はよ逃げろ！ お前らがいるとこつちも本気が出せない！」

「す、すみません！ 比叡！」

「わ、分かりましたわ！ お姉さま！」

金剛さんと比叡、赤城が急いで子供達を避難させた。その間も攻撃は飛んできたが、

『BURST MODE』

『SATURN READY?』

「お前の相手は俺たちだゴルア!!」

「こつちを見ろやホアツチャー!!」

フアイズ吉川は手から光弾を放ち、

メテオ豊能は右手のレバーを操作し、右手から多数の光のチャクラ戦輪ムをバンバン投げていた。

しかし、

「だーかーらー、無駄だつて言ってるじゃーん」

その攻撃も、悉く透き通ってしまふ。まるで実体のない敵を相手しているようである。

「こつちの攻撃が当たらず、向こうの攻撃は通るとかチート過ぎねえか!？」

「落ち着け、冷静に考えろ！ 実体の無い敵なんてある筈ねえだろ！ でなきや攻撃できる筈が」

「考えるのもいいけどさー、足を動かさないと——その足、引きちぎっちゃうよ♪」

凄まじい悪寒を感じると同時に、メテオ<sup>豊能</sup>の手を掴み後退した瞬間、

ザグンツと、

先ほどまで自分たちが立っていた場所が、消滅していった。

「あつはははは！ 初見で避けたの初めて見たー!」

「豊能オ！ 死にたくなかったら常に動け！ 止まったらああなるぞ!？」

「怖ええええ!?! 冗談抜きでやべええええ!?!」

大声で叫びながらジグザグ動いて間合いを詰める二人だったが、

「はいドーン!」

間合いを詰めると衝撃波が襲い、

「はいサクーツと!」

敵から離れるとあの消滅攻撃が襲ってくる。

更に間合いを詰めることに成功しても、攻撃が全くと言っていい程に通用しない。割と詰んでいる状態なのだが、吉川は敵の行動を観察していた。

(生きている以上、必ずどこか攻撃が徹るポイントがある！ そのタ イミングかあの敵が覆っている黒い霧を払えば、どうにか……!!)

「んー、二人とも避けているばっかだけど——ここ室内なの、忘れてなーい?」

次の瞬間、食堂の壁が凄まじい勢いで罅が走り、壁と天井が崩落した。

「チイツ!!」

「嘘だろオイ!?!」

フェイスは腰についているファイズシューツをセットし、

『EXCEED CHARGE』

「んなろがあ!!」

ゴドガシャアアン!! と、落ちてきた大きな破片を、一撃で粉々にした。更にこの攻撃の衝撃波で周辺の破片もフェイスを中心に、円形になるように吹き飛んだ。

メテオは、またレバーを操作し、新たな力を召還していた。それは、

『MARS READY?』

「マーズ、ブレイカーアーーー!」

右手から灼熱の、火星をイメージしたような球体が出現し、破片を燃やし尽くしていた。しかし、立っていた場所が悪すぎた。

彼が立っていた場所はキッチン側で、戦闘の影響でプロパンガスが漏れていた。しかも、マーズブレイカーは本物の火だった。

この二つが導き出される答えは一つ。

食堂の場所が、一瞬で消滅した。

食堂の爆発は、衝撃波と共に避難中の金剛さん達にも届いていた。

「キヤア!?!」

「うわっふ!?!」

「くうっ!?!」

金剛さん、比叡、赤城が思わず顔を押しさえた。衝撃波で顔を叩かれたのだ。

子供達は恐怖で泣き叫び、足が止まる。

「皆、海まで行けば助けは来るわ！ 頑張って!？」

「ほら、男の子でしょ！ 転んだぐらいで泣かない！」

「ほら、背負ってあげるから……!？」

金剛さん達も子供達を背負って移動しようとしたが、思った以上に進まなかった。

美風ちゃんも声を上げて泣いてはいなかったが、恐怖で震えていた。仕方も無いことだろう。大の大人である人間でも足が震える状況なのだ。

四方八方から敵が来るかどうか神経を張らなければならないのだ。その恐怖は子供達にとって恐ろしすぎるものだ。

そして、最悪な事態に陥った。

「あ……」

海を目の前にして、敵が三体いたのだ。

潜水艦の力級当たりだと思っていたが、どうも違った。体は2m以上あり、全体がローブで覆われている。そして顔は——機械で、作られていた。

ガスマスクのような顔で、こちらを見た。

「比叡」

「分かってますわよ。」

赤城。私が敵に突っ込んだら、子供達を海辺に倉庫があるわ。そこでお姉さまと隠れていて」

「……それしか無いの?」

「無いわ。——今から5秒後に」

比叡が金剛さん達を逃がそうとしたその瞬間だった。

左の敵が、何かに轢かれたように吹っ飛ばされたのだ。

その時、金剛さん達が見たものは——

「……………バイク?」

白と赤のベースにしたバイクだった。ただのバイクが何でここに、と思った金剛さんだったが、しかし、その考えは直ぐに覆ることとな

る。何故なら――

『BATTLE MODE』

ガシャガシャガシャツ!! と音を立ててバイクが人型に変形したからだ。

SB―555 V オートバジン。吉川が新たに所有した、無人機である。

「な、何ですかこれえ!」

「バイクが人型に!? ……提督<sup>豊能</sup>が喜びそうな代物ですね」

比叡と赤城が驚きの声を上げているが、金剛さんはそれどころじゃなかった。というか絶え間ない異常さが彼の思考にとんでもない負荷がかかっていたからである。

肉体的にも精神的にも限界を迎えかけていた金剛さんだったが、流石に子供達を安全圏まで送らないとという気持ちの一心でどうにか保っていた。

残りの二体の敵もオートバジンが内蔵してあるガトリング砲で蜂の巣と化していた。すると、今度は彼らの周囲を警戒するように周りを見渡し、「ついてこい」というかのように彼らにジェスチャーを送っていた。

「……とりあえず貴方?は味方で良い、のよね?」

金剛さんがオートバジンにそう問いかけたが、特に何も反応をせず、彼らに「はよこい」のジェスチャーを送っている。すると、

「おおい……。無事ですかあ……。…」

遠くから、バタバタバタ……と風を叩く音が聞こえた。そしてそれと同時に人の声も。

一体どこから、と大空を見渡していると、

ヘリがこちらに向かっていている最中だった。それは、陸軍の所有しているMi―26、通称ヘイローと呼ばれる世界最大の最大積載量<sup>ペイロード</sup>を誇るヘリが、こちらに向かってきていた。

『スイマセン、お待たせ致しました!』

こちら、第十師団<sup>フィリピン所属</sup>第二中隊隊長、細川大尉です！ これより子供達の保護と敵性因子の排除に入ります！」  
漸く、救助隊が来たのである。

一方その頃、<sup>ライターズ</sup>二人はというと、  
「ゲツホゴホ……！ し、死ぬ……！」

「この程度で死にやあせん！ とうかこつちはお前の所為で死にかけたわ!!」

「サーセンっしたー!？」

食堂から吹っ飛ばされ、危うく死にかけていた。二人の装着しているスーツのお蔭か、特に怪我らしい怪我もしていなかったが、衝撃波で頭が物凄くクラクラしていた。頭をトンカチでぶん殴られたかのような感じである。

吉川は豊能を一発シバいた後、敵の姿が見当たらないことに気付いた。

「オイ、あの性悪がいねえぞ」

「マジだ。師匠、どうします?」

「どうするも何も、探すしかなろうよ」

吉川が5分とはいえ気絶していたのが恥ずかしいと思っていた時だった。

「豊能君！ 吉川さん！ 大丈夫ですか!？」

金剛さんがこちらに来ていた。全身傷だらけである。

「おい、どうしたんだその傷」

「少し、敵の攻撃で……」

「そうか……」

「そーいや金剛ちゃん。敵を見なかつたか?」



「アイツにはなあ…比叡が磁石みてえに引っ付くからだよ！」

……とんでもない理由で、しかしながら凄い説得力のある言葉であつた。

「ま、お前はこっちにケンカ売ってきたんだ。——タダで済むと思うなよ」

『PHOTON ENERGY FILLING COMPLETE  
ON』（光子エネルギー 充填完了）

『COSMIC ENERGY FILLING COMPLETE  
ON』（コズミックエナジー 充填完了）

『FAIZ (METEOR) SYSTEM UPDATE!』

突如、二人の姿が変わつた。

吉川は赤と黒の姿から、

赤のラインが白に。

目の部分の色が黄色から赤に。

そして——胸の装甲部分がスライドし、ガルウイングみたいに胸の装甲が肩に移動。胸の機械部分が露わになつた。

豊能は青と黒をベースにした左右非対称の、隕石をイメージしたような形から、

スーツの色が青、装甲部分が金色に。

頭部の形が、落下中の隕石から、まるで隕石が地上にした瞬間のような形の金色に。

そして、いつの間にか握っていた棒状の武器を握っていた。

ファイズ アクセルフォーム。



メテオ　メテオストームフォーム。

二人の、超攻撃的なフォームが形となった。

「さあ、——死ぬ準備は出来たか？　出来てなくても知らんが」

「俺の運命は——嵐を呼ぶぜ!!」

全力全壊（誤字に非ず）の、一方的な戦いが、始まった。

そこからは色々酷かった。アクセルポイントで逃げられないように固定化・ロックオンし、アクセルクリムゾン・スマツシュをブチかました後、そこから更にメテオ・ストライクを叩きつけたり。グラインパクトで相手の背骨をへし折った後、シャフトでアバラをへし折らんばかりのラツシュ。最後は通常状態でのクリムゾンスマツシュ&メテオ・ストライクのダブルライダーキックを披露したりと小さい子供には見せられないことになっていた。

困みに、それをやった二人はというと、

「あぎやあああああ!?　あ、足が！　足が引きつるうううう!!」

「おいこれちよつとやり過ぎじゃないですかね？　車いすでも使わなきゃいけないぐらい足が固定されてんですけど?」

「貴方の場合、豊能さんと違い足が折れかけているんです。骨折している部分も数多いのに何言っているんですか?」

割と悲惨じみていた。

豊能は単なる筋肉痛なのだが、吉川の状態が悪く、

- ・ 右尺骨、単純骨折（グラインパクト使用によるもの）
- ・ 両脛骨、罫が三か所（クリムゾン・スマツシュの打ち過ぎ）

・中足骨、単純骨折（上と同じ）

と、結構骨がヤバい状態であった。変身解いた瞬間、立てずに倒れたのが原因です、と軍医から凄い睨みつけられた。

金剛さん達はカスリ傷はあったものの、入院するほどのことではなかった。子供達も元気である。

「何がともあれ、今後無理な行動はしないように。体が持ちません」  
「俺だって好きでやってる訳じゃないんだがなあ……」

自分の体を見て、深いため息をついた提督であった。

尚、後日有馬から泣き疲れたり、金剛から凄い看病されたりと束の間の入院を休暇過ごしていた。

「ほーれ、お姉さまを心配させた馬鹿にはコイツをいれましょうねえ……!!」

「やめろお！ アツアツのチーズ（チーズフォンデュの奴）を口に入れるのはやめろお!?!」

「うるせえ！ 私だってあんなことされてないのに!?!」

「どんなことだ!?! そして血涙流すな怖えんだよお!?!」

「喰らえ、天誅ー！ー！ーツ」

「あぎやあああああ!!」

約一名ほど、最初のかっこよさが無くなるほどに嫉妬看病を喰らっていた。

## 第68話

「ふむ……」

提督が入院して3日経ち、提督の右手首を上下左右動かしてみた医者が考え事をしていた。理由は「ファイズシステム」の使用を許可するかしないかである。

提督自身は何ともないと言ってはいるが、「ファイズシステム」の負荷はかなりとんでもない。

吉川・豊能の二人が使用しているライダーシステムには適性率というものがある。適性率が高いと怪我や思考障害等、ヤバい類の症状は極めて軽くなる。低ければ……最悪、使っただけで「あの世行き」になってしまうとんでもないシステムなのだ。

豊能が使っている「メテオシステム」は、未知のエネルギーを使用している為、本人以外は全く使用できない。因みに適性率は何と120%。

吉川が使用している「ファイズシステム」は、適性があれば使えるが、全くのゼロの場合は弾かれ、適性が低ければ良くて大怪我レベルの欠陥品である。しかも、吉川の適性率は92%。それで地味な骨折とか起こしているのだから低かったらどうなるかお察しものだ。

……まあ、ライダーシステム自体、解析に参加した大淀・明石の力をもつてしても、解析できたのが2割程。しかも「メテオシステム」を元にしていて、壊れたら修復不可な代物の為、あまり知られて無い&安定性や量産性に欠けるレベルである。

無論、使用できれば深海棲艦に対抗できるが、「供給や安定性、安全性が確保されてない兵器」を誰が使いたがるのかと言えば、9割の軍人は「NO」である。残りの1割は、実験体を使用して解析するか、吉川達のように進んで使う者ぐらいである。

話を元に戻すと、この軍医はもう少し検査入院をするべきか、復帰させるか迷っているのだ。

現時点では二人を復帰させなければならぬ程の事態は起きていない。しかし、あのシステムがどのような影響を与えているのか考え

たら……とグルグルと思考が空回りしている。退院させるか否か、軍医が迷っているのを横で見ている人達はというと、

「……何かヤバいのが出たんですかね？」

「出たとかいうなよ俺まだ25なんだぞ」

「……えっ!？」

「えじゃねえよ。俺そんなに老けてる？」

しょうもない会話を繰り返していた。吉川の骨折自体はほぼ完治。豊能の筋肉痛も2日で痛みは引いている。豊能がここにいるのは検査入院で色々調べられたからだ。因みに体は一部を除いて全く問題は無く、健康体であった。

「いや、体から貫禄つかオーラを放っているように見えたし。25でそこまでの奴はいないでしょ？」

「そりや最前線で体張って指揮していたからな。……一応言っておくが、イー<sup>す</sup>ジス<sup>が</sup>でだぞ？」

「個人でイージスを所有とかどの位戦果を挙げなきゃいけないんですかね……？」

「そりやあ、姫級や鬼級のジ<sup>格</sup>ヤイ<sup>上</sup>アントキ<sup>殺</sup>リング<sup>し</sup>を30回繰り返せば貰えるぞ？ あと階級が少将に挙げればワンチャンあるな」

「何すかその難易度インフェルノ」

※この世界だと姫級や鬼級は環境災害（津波や地震とか）に匹敵するレベルの強さ。一体狩るだけでも一苦労。しかも結構な頻度で“湧く”。

尚、最高スコアは沖田大將が率いる艦隊で94。吉川が85。有馬少將が57。村上少將が61である。平均で20も狩ればエース扱いなので、このスコアはかなりヤバい。

それはさておき、

「……骨は完全にくつついた様なので退院しても大丈夫ですが、なるべくそのシステムは使わないように。というか今年に入って碌な怪我してないですね」

「文句は敵に言ってくれ。こっちは仕事をしてるだけだ」

「そちらの方も異常はありませんでしたが、何か違和感でも感じたら

すぐに入院するように。あと血糖値が高いですよ」

「無視すんな」

「俺まだ若いのに血糖値が高いのか……。間宮印のアイスを五個食っただけなのに……」

「食い過ぎだろ（です）」

「なんだかんだで退院許可を貰い、退院許可書を頂こうとしたその時であつた。」

ドタドタドタツ!! ドバーンツ!!!

「パパー！ お見舞い来たよー!!」

「……ここは病室です。お静かに」

「おー美風ちゃん。元気なのはいいがここは病院だから静かになー」

「はーい、パパ」

「テヘペロツ☆と舌を出して笑顔を見せた女の子——ジュリイ・美風がやってきた。」

今回の襲撃で、豊能大佐の鎮守府は8割方の施設としての機能停止：つまりほぼ全壊となり、豊能は一時的な措置として村上少将の副官として処理。全壊となった鎮守府は一旦更地にして新たに組み立てることになった。

この時に鎮守府が全壊した責任として、二日ほど病院で謹慎、そののち村上少将の副官という事となった。因みにその謹慎処理もぶつちやけ病院で治療するだけでOKのガバガバっぷりなので事実上の処分無し。但し、ライダーシステムの兵器使用の許可の書類(50枚)を書く羽目になった。

豊能大佐が保護していた子供たちも、安全をとってフィリピンに移動。そこで保護という事になった。——ジュリイ・美風を除いて。

彼女に関しては断固として離れようとせず、根負けしたフィリピンの陸軍大将が、

「海軍中将の吉川、少将の有馬・村上、大佐の豊能が責任を持って少女

を保護すべし」

という命令書が飛んできたのだ。吉川もこれには思わず乾いた笑いが出てしまった程、思い切った行動である。

……まあぶつちやけ一人ぐらいなら問題無い為、拝命したのだが。因みに流石に部屋に閉じ込めるのもどうかと思つた吉川は、豊能に、

「間宮と伊良湖のお店に勤めさせたらどうだ？」

と、提案したのだ。豊能は結構迷つたのだが、美風ちゃんが「やってみよう！」という言葉で許可したのだ。これが昨日の話なのだ。……間宮が昨日きた美風ちゃんをガチパテイシエとしてな意味で育てようとしたりと、その時一緒に付いていった金剛さんが全力で止めたりとかなり大変だつたらしい。

話を元に戻して。

まあそんなこんなで美風ちゃんは豊能の元にいることになったのだ。無論、豊能だけじゃなく金剛さんやその配下にいる比叡が遊び相手になつている為、大分楽になつていた。

しばらくすると、

「着替えをもつてきましたデース！」

「ん」

金剛が吉川と豊能の着替えを持ってきた。

「モウ、美風ちゃん？ ホスピタルで走つちやノーデシヨ？」

「えへへ、ゴメンなさい」

金剛が美風ちゃんを軽く叱りつつ、提督たちはそそくさと着替えた。なるべく早く鎮守府に戻らなければならぬ用事がたくさんあるからだ。

「ア、テイトク。午後にニューフェイスがやってくるヨ」

「マジか」

……今しがた、更に仕事が増えて慌てて着替え始める吉川であつた。

退院の手続きが午前中一杯潰れてしまい、鎮守府の食堂で丼飯をかっ込むように食った吉川は提督室に向かったのだが、入った瞬間驚いた。その理由は、

「あん？ 何でお前らが…」

「一か所で顔合わせた方が楽だからだよ。新人の戦力判断は得意だろ？」

「そういうこと。退院して直ぐでゴメンけど、その観察眼、当てにしている」

「ハア……まあいいけどな」

有馬・村上の二人が提督室が提督室に来ていたからだ。

今回来る艦娘は対空特化の子とドイツ艦、更に新たに戦艦が登場したという情報しか知らされていない。練度やクセ、性格等、見極めることが重要となる。一つでも間違えると場合によっては艦隊全員に悪影響を与えるからだ。例えば自分の腕に過剰な自信を持つ娘とか矯正しないとマズイ類のとか、協調性がかけらもないとか、それらを見極めるのが吉川は得意なのだ。

「そろそろ来る時間だね」

「みたいだな」

そう言っていると、ドアノックが聴こえた。どうぞと言おうとした、その瞬間――、

ズゴシャアツ!!

「ハアイ♪ 失礼するわよー」

「帰れ」

「WHAT!?!」

金髪美女の爆乳娘が、ドアを破壊しながら入ってきた。

「やれやれ。これだから礼儀の知らないヤンキーアメリカは嫌いなんだ」

「H A H A H A! 芋臭いドイツの病弱娘は黙ったら?」

「二人とも。上官を前にしてそのような行動はお互いのお里が知れま  
すが?」

「自分だけいい子ぶつても意味ないぞ? ヤーパン?」

「……やれやれ」

帽子を深くかぶった吉川は、椅子からスツと立ち上がった。それを見  
た二人は即座に耳を両手で塞いだ、次の瞬間、

「——ATTENTION気を付ツツツ!!」

凄まじい怒号が飛んできた。

「「ツ!」」

「上官を前にケンカとどういうことだ? ケンカしたいのならとつと  
とここから帰れツ!! ここは遊び場じゃない、前線基地だ!!」

「「二も、申し訳ありません!!」」

(すんげえ怒号……)

(軍人ならある程度声が大きくないと舐められるけど……これは凄  
い  
わ)

「貴様らは誇りある軍人か!」

「「サー・イエツサー!」」

「ヤヴォール!」

「なら軍人らしい行動をせんかツ!! こんな若造に言われるなど、恥  
と思えツ!! 良いな!」

そういつた提督は直ぐに椅子に座った。入った三名は若干顔を青  
ざめながらも、シャキツとした顔つきになっている。

「では、右から挨拶してくれ」

「HI! アイオワ級一番艦、アイオワ」

「グラーフ・ツエツペリン級航空母艦一番艦、グラーフ・ツエツペリン」

「秋月型防空駆逐艦、初月——以上、三名。着任します」



——アイオワ級一番艦、アイオワ。

対大和型を想定とした戦艦で、当時としては割とんでもない性能を誇っていたが、当時機動部隊で編成されたことはあまりなく、彼女が活躍しだすのは第二次世界大戦後というちよつと可哀そうな子である。まだ降伏文書但調印式や映画やゲームで度々登場する三番艦ミズリーの方が知っている人が多そうな感じだが、性能は対大和を想定しているだけあって“高速戦艦”という部類だけなら最強クラス。(但し回避は低め)

※因みにこの子は現在パソコン版ではなくVITA版に登場する。

「アイオワは吉川艦隊に。グラーフは村上艦隊に。初月は有馬艦隊に編入する！」

——明日、吉川・村上・有馬の合同演習を行う。貴様らも来るように。良いな!？」

怒号を挙げ、彼女たちが提督室を出たのを確認した後、吉川の隣に二人がやって来た。

「あまり怒らないでやってくれ。あいつらはまだペーパーなんだぜ?。」

「ペーパーだろうがなんだろうが、上官を前にしてケンカするのは論外だろ」

お忘れかも知れないが、吉川“中将”に村上“少将”、有馬“少将”というトップエリートである。会社で言えば大きい支部の店長(社長)の前でやらかしたようなものだ。礼儀を失しているとかそういうレベルじゃない。

「第一、ここで上下関係をしっかりとかないと色々不味いからな。……お前らもしなければならぬんだけどな」

「ああうん、そこについては本当に感謝しているよ?。」

(全く、なーんでこんな子がいっぱい来るのかねえ……?)

吉川は心の中で**最悪**な**出**会**い**た。——後に最強の一角と言われる、  
アイオワの**最悪**な**出**会**い**のコンタクトなのを、彼は知らない。

## 第69話

翌日、吉川・村上・有馬の合同演習を知らされた神代中佐、坂本大尉、ジャツカル大尉の三名は、演習場の近くにある建物にいた。

この建物は演習場のほぼ全域を無人機によって網羅できる装置がある。これで演習場の戦闘が見られるのだ。

「ふーん、三人の上級将校による演習ねえ……」

「この時期にやる意味は分らんが、提督ランキングでも上位のメンツだからな。見る価値はある」

「……それが、使えるかどうかは」

「俺たち次第、という事か。……後画面の前でもつのすっごい険悪なオーラを出しまくっている三人は一体なんだ？」

「確か、新しく配属された艦娘らしいよー。アメリカの戦艦もいるって話だし」

「アメリカか……」

神代・ジャツカルの両名は何とも言えない顔で言った。それはそうだろう。艦娘の元は第二次世界大戦で活躍した軍艦がベースだ。そして戦っていたのはアメリカ軍。むしろ「仲良く出来るのだろうか……？」と思ってしまうのが普通だろう。

幸いにもアイオワは第二次世界大戦ではこれと言った活躍もしていない。もしこれがサウスダコタとかアルバコアとかダーター辺りだったら凄まじい拒否反応を起こすこと間違いなしである。

「……………」

一方、話題の三人はというと、全く顔を合わさず、ただただ不機嫌なオーラを量産していた。正直そろそろ瘴気と言ってもいいぐらいの濃さが周辺を覆っているのだから周りからして見れば傍迷惑である。

しかし、それに全く気付いてない辺り、余裕がないのか、又は別の理由があるのか。

取り敢えず、黒いオーラ量産している三名の事は頭の外に追いやつた。ヘタにつついて痛い目見るより、見ないふりした方が良いからだ。

そして、やはり話題になったのは、

「今回の演習はどういうやり方にするんでしょうねー？」

「そりゃあ、吉川大将閣下と一人ずつ戦うでしょうな。流石に二人を相手に勝てると思えんし」

「……俺は、二人相手にすると、思う」

「その理由は？」

「…勘、だ」

そう喋っていると、演習の開始の時間がやって来た。

「時間だ」

六人は、演習場の映している画面を見た。そこで広がってる光景は——吉川連合艦隊VS村上・有馬合同艦隊の文字が映し出されていた。

吉川連合艦隊の参加者は、

第一艦隊

旗艦 長門改

二番 大和改

三番 武蔵改

四番 伊勢改

五番 川内改二

六番 大鳳改

第二艦隊

旗艦 那珂改二

二番 夕立改二

三番 吹雪改二  
四番 イタリヤ  
五番 北上改二  
六番 龍驤改二

やたら気合いが入りまくっている第一艦隊が浮きまくっているが、第二艦隊もそこそこバランスが良い編成である。

一方、村上・有馬合同艦隊はというと、

村上艦隊

旗艦 ビスマルク d r e i

二番 プリンツ・オイゲン改

三番 妙高改二

四番 利根改二

五番 筑摩改二

六番 最上改

有馬艦隊

旗艦 雲龍改

二番 天城改

三番 龍鳳改

四番 飛鷹改

五番 初春改二

六番 照月改

殴りあう気マンマンの村上艦隊と、制空権絶対奪うウーマンな有馬艦隊という、ガチすぎるチームであった。

因みにこっち側は連合艦隊じゃないのかと思う人がいるだろうが、こっち側は連合艦隊ではなく、二つの艦隊として戦うことになっている。一人なら連合艦隊を作る必要がある為（二人でも連合艦隊は作れるが、必須ではない）、吉川艦隊だけ縛りを受けている状態なのである。

普通に見てみたらどう考えても吉川側が圧倒的に不利である。大和がいるじゃんって？制空権奪われた状態でまともに戦えるのかと。

「……これ唯のイジメじゃない？」

「守護鬼と呼ばれた吉川閣下も、流石にこれは……」

「……それでも、吉川閣下が、勝つ」

「それも勘？」

坂本がそう聞くと、ジャツカルは無言で頷いた。

一方、例の三人はというと、

「ふん。こんなの、結果が分かり切っているじゃないか。どうせ見栄でも切ったんじゃないか」

「芋臭いドイツ女と意見が合うのは *nasty* だけど、流石にこの編成ならワンサイドゲームでフィニッシュだね。——ツマラナイ」

グラーフ・ツェッペリンとアイオワはこき下ろしまくっていたが、初月は違和感を感じていた。

（確かに、この編成なら勝てる理由は無い……。だけど、この違和感は何かおかしい、だけど、それが分からないほどの、この違和感は一体……）

そして、この六名は三人の演習を目にするが、演習が終わった後、口をそろえてこう言った。——「頭おかしい」と。

演習開始時間により少し前に戻す。

「第一艦隊！ 三式弾、零式弾、装填！」

「こっちの第二艦隊は、第一艦隊が撃つたのと同時に有馬艦隊に呐喊するよー！ 第一艦隊の事は気にしない！」

「いつものことっポイ？」

「いつものことだねー……もうこのことに違和感を感じない私がいて悲しくなるう……」

「何や吹雪ちゃん。相手は空母やで？近寄ったら入れ食いや」

「分かっているんです。でも……うーん、なんて言ったらいいのかなあ」

「ま、ウチらの戦い方が奇抜なんわしようがないわ。自然と身に付いてもうたモンやし」

「そこー！もう行くよー！」

「って、那珂ちゃんまってえなー！」

「うわわわわ!? ちよつと待ってくださーい!？」

戦闘前だというのに気の抜ける会話を繰り返していた吹雪たちであつた。

第二艦隊は割とプレッシャーを感じていないようで、むしろ潰す気マンマンな感じに戦意が高まつていた。彼女たちにとって空母はボーナスのように見えるらしい。

第一艦隊はというと、

「……………」

「…姉さん、私達の相手はビスマルク率いる村上艦隊だ」

「ええ」

「……やはり、少しきついですか？」

大和・武蔵・大鳳は地獄のような場所から村上に助けられている。  
(詳しくは 11 ① を参照)

其処の艦娘とは仲が悪くなってしまったが、村上には厚い恩義を感じている。最初は演習といえど戦うのを嫌がった大和であつたが、吉川が、

「奴にとつて最大のお礼は、お前が元気になっていることだよ。あいつ自身お前らを助けたのは仕事もあつただろうが、お前らが心配だったからだ。

自分が助けた艦娘が、明るく無事に過ごしていたらあいつは満足なんだよ。元気な姿を演習を通して見せりや、それだけで恩返しだ」

と、本人が聞いていたら「お前俺の本心暴露するなよお!!」と突つ

込むだろうセリフを言った。

「見せつけてやんな。お前自身の、大和の本当の力というのをさ」

「提督は不器用だからな。ああいう言い方しか出来ん」

「ま、要するに全力で戦えつという事でしょ？戦いたくないから手加減なんてしたら、それこそ侮辱もんだしね」

長門と伊勢が、三式弾・零式弾を装填しながらそう言った。

「難しいことは考えるな。ビスマルクあいつは村上艦隊の中でも最も最強に近い。戦う事に集中しないと、終わるぞ」

「…分かってるわ。私も、今は戦う事に集中する」

「そうだ。それでいい。——武蔵、大鳳。大和のサポート、頼む」

「任された」

「了解」

「川内、昼はあまり砲撃戦は参加しなくていい。雷撃戦と回避を優先。」

——夜戦は、任せた」

「了解了解。ふふつ、楽しみだなー♪」

「伊勢は私の後ろに。本来ならこういうのは陸奥が得意なんだが……」

「別に弾が来てもこっちで切り払うから気にしなくて大丈夫。むしろ中破してから本番だし」

シレッととんでもない会話を繰り広げつつ、懐まで飛び込むマンマンであった。

そして、演習開始時間十秒前になった途端、全員が静かになった。

九秒、八秒と進むにつれ、周りの空気がピリピリし始め、

ゼロになった途端、

「行くぞッ!!」

長門の号令と共に、全員の雄叫びが上がった。



「第一艦隊と第二艦隊が別れた？」

「成程。取り敢えず攻撃力重視の第一艦隊は村上艦隊に。機動力重視の第二艦隊は有馬艦隊に向かったのか」

「でも、第一艦隊は良いとして、第二艦隊はイタリアと北上、夕立ぐらいしか対抗出来ないわ。それに、制空権も奪われてまともに戦い筈……」

「確かに……。試合は始まったばかりだから、まだ分からんか」

「いや……。もう終わる」

「へっ??」

「吹雪！ イタリア！ 那珂ちゃん！」

「はいっ！」

「日本製の砲弾は使いづらいですう〜！」

「那っ珂ちゃんの対空迎撃、はっじまってるよー！」

龍驤の号令に吹雪と那珂は元気よく、イタリアは三式弾の扱いづらさに文句を言いつつとんでもない数の艦載機目がけ対空迎撃を開始。多くの艦載機が落ちたが、それでも艦爆・艦攻がとんでもない数の爆弾、魚雷攻撃を開始する。そしてそのターゲットは――

「ありや？ やっぱアタシ？」

重雷装艦の北上であった。それはそうだろう。戦艦だろうが空母だろうがワンパンで落とすのだから戦艦より最重要ターゲットである。

しかし、

「ま、当たらないけどねー」

重雷装艦にあるまじき速度で回避。あらかじめ搭載していた島風御用達の強化版新型高温高圧缶のお蔭である。

「んじや、適当にばら撒きますかねーっつとー！」

航空戦終了と同時に魚雷を投下。40門から放たれる酸素魚雷は文字通り一撃必殺の威力。演習用の弾頭とはいえ直撃すれば――

「あ、龍鳳ちゃんが当たった」

『なにこれええええええつ!!?』

突如、通信越しに大きな声があがった。龍鳳の声である。

謎大声が上がったのかというと――

『な、何か白くてネバネバしたのがあ…体中にひっついてるう…!』  
『おつとすまん。一つ言い忘れていた。尚、今回の演習は粘度の高い白いペイント入りの模擬弾だ。――当たったら遠方に待機されている青葉に写真撮られっから、両者全力でやるように』  
『はあっ!?!』

まさかの吉川提督の外道発言である。因みに、割と抜き打ちでこういう演習をやるところもあるのだが、大概エロ親父な提督がその時撮った写真を無断で売ったりとやらかしている所為か、最近では見なくなっていたりする弾頭である。

『因みに村上・有馬両名の了解は得ている』

『提督う!?!』

『…後でハリボーシユネツケン一機食いの刑ね…!!』

『龍鳳、轟沈判定により戦列より離脱!』

被弾したら男どもの餌になる――そう思った村上・有馬艦隊は更に攻撃を強めて行った。――それが罫だとも知らぬまま。